

奇譚クラス

1959年 9月号

「狙われた女給の手記」 目下 橋子
「Hと自称する女」 真崎 伸一
告白小説



9
月
号

奇譚クラブ

昭和三十四年九月号

9

奇蹟タラズ

昭和三十一年四月二十日發行
昭和三十一年四月二十日發行
昭和三十一年四月二十日發行

定價二百圓

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tensciaya

Osaka Japan



IBM 2805

限定版 特別号の第二弾。マニア瞠目の書、愈々発売!



四馬 孝緊縛画集

- 1 女体耐久テスト
- 2 女体は美しき玩具
- 3 素晴しき会食
- 4 人間燐台の実験
- 5 オシメカバーと大きな赤ン坊
- 6 物置小屋の怪
- 7 白いいけにえ
- 8 生理めの私刑

- 9 アクロバットの訓練
- 10 奴隷という責め
- 11 女学生の嫉妬
- 12 水責にあう美女
- 13 回転する女体
- 14 浴場の悦楽
- 15 女の悦(華かなリソチ)
- 16 女の御馳走
- 17 三姉女の逆恨み

- 18 淫虐な美容師
- 19 遠慮はいらねえぜ
- 20 狂気の復讐
- 21 女体の荷物
- 22 ヤキを入れてやる
- 23 トランク詰の裸女
- 24 電気責めテスト
- 25 吊し責めにあう美女

緊縛写真と緊縛画集

◇ 略号 「緊 縛」

◇ 各冊限定番号押捺 ◇

定価 五百円



素晴らしき写真集

- ▽ 序曲「手吊り」のポーズから (四葉)
- ▽ 第二楽章「手吊りと足吊り」 (四葉)
- ▽ 緊縛感のクローズアップ (四葉)
- ▽ 拘束女体の経過 (四葉)
- ▽ 股間 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ 間 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ 狂 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ 晒 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ 腰 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ 女 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ さ 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ ア 縛り 逆過 (四葉)
- ▽ どうでもして (六葉)

- ▽ 陣列された女体! (四葉)
- ▽ 忘れぬ豊満美! (四葉)
- ▽ 蛇 地 獄 (四葉)
- ▽ 女のふんどし (四葉)
- ▽ 女のサボータ (四葉)
- ▽ 吊り人形の哀歌 (五葉)
- ▽ 断然、これは凄いゾ! (四葉)
- ▽ 女囚第十四号罷り通る (二葉)

お申込は
大阪市阿倍野郵便局
私書箱第十四号
天 星 社 へ

☆ 懸賞愛読者原稿募集 ☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで(四百字詰)
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月掲載します。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千円以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻希望の方は返送料同封下さい。
- 九、発表に支障のある箇所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【創作】異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用費は本誌五ヶ月以上贈呈します。
- 【体験告白手記】読者皆様の偏りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用費には本誌三ヶ月以上贈呈します。
- 【映画、雑誌、通信】映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出稿は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二ヶ月乃至三ヶ月分贈呈します。
- 【私のイメージ】熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌二ヶ月分贈呈します。
- 【アイデア】将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に、採用の分には本誌四ヶ月分以上贈呈します。
- 【レポート】新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載前には本誌二ヶ月分贈呈します。
- 【読者通信】編集者、執筆者、投稿者等への通信、簡答の批評、希望、感想、思い、出稿、読者相互の呼び掛け、忠告或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りなどお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者宛教室は都合により自分の関中止めいたします。

○ 本誌月極購読料 ○

- 一月分 一冊 (送料共) 二百円
- 二月分 三冊 (送料共) 六百円
- 半年分 六冊 (送料共) 二千二百円
- 一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。購読送料は余部とちて負担いたします。故、送料のみお送り下さい。半年分御申込の方は送料として大手札郵便三枚、一年分御申込の方は送料として大手札郵便六枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第十二号
毎月一回一日発行
定価 二百円

九月 号
昭和三十四年八月二十日印刷
昭和三十四年九月一日発行
編集者 天 星 社
発行所 天 星 社
電話 天下茶屋 三六〇七番
大阪 市 東区 大馬路五〇〇四二番

御送金は、なるべく振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切手代用は八円切手か十円切手を御利用下さい。送り先は必ず格書ではっきりお書き願います。尚、郵用紙御入用の方は御申越次第お送りいたします。

縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!! 限定版「緊縛フォト・アラベスク」

各冊、限定番号押捺 特価 五百円 (送共)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルによる各種緊縛ポーズの中から選集いたしました。題して「緊縛フォト・アラベスク」。文字通り表紙から巻末に至るまで若き美人モデルの緊縛写真ばかりを網羅いたしました。可憐愛すべき緊縛フォトモデルバムとして、どうか一冊を皆様の座右にお備え下さい。

収録内容 二十六項目、写真七十七葉

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 一、鏡……………愛川 悦子 | 十五、鏡台と腰巻……………花坂 道子 |
| 二、銘花二輪……………花坂 道子 | 十六、腰巻と鏡台……………花坂 道子 |
| 三、鉄鎖……………大塚 啓子 | 十七、奇妙な休憩……………絹川 文代 |
| 四、諦観……………大塚 啓子 | 十八、田代悠子表情集(その二) |
| 五、庭園にて……………絹川 文代 | 十九、脱がされた高手小手……………愛川 悦子 |
| 六、謎の微笑……………田中 芳代 | 二十、亀甲縛り……………愛川 悦子 |
| 七、田代悠子表情集(その一) | 二十一、吊責折檻……………村井知可子 |
| 八、誇る脚線美……………田代 悠子 | 二十二、立木縛り……………村井知可子 |
| 九、この足どうかしら……………田代 悠子 | 二十三、豊 醇……………愛川 悦子 |
| 十、裏と表と……………愛川 悦子 | 二十四、乱れ髪三景……………大塚 啓子 |
| 十一、落陽の丘……………愛川 悦子 | 二十五、椅子と鎖……………愛川 悦子 |
| 十二、ボリウムの花園……………大塚 啓子 | 二十六、組上の美醜……………絹川 文代 |
| 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子 | |
| 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子 | |

△本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申込願います。V

臨時増刊 限定版 悦特 No 2 定価 三百円

「悦唐小説と緊縛写真」特集号第二集 (略号「悦特第二」)

巻頭の四馬孝画、緊縛絵画から始まって、百十六葉に亘る特写グラビヤ写真、本文の昭和二十八年度本誌掲載の傑作サド読物と全巻息もつかせぬ充実した、S一編倒の編集により二百頁を擁う妖気は、必ずや皆様の完全に圧倒することでしょう。

四馬孝緊縛画集……………

- | | |
|-------------------------------------|----------------------|
| ◎ 狂背負い……………補われ人 | ◎ 造形美術……………花坂道子 |
| ◎ 深夜の水浴……………椅子縛り | ◎ 美肌の拘束……………絹川文代 |
| ◎ 喰込むね……………水道責め | ◎ ロープ・ブラジャー……………愛川悦子 |
| ◎ あんよは上手……………舌打ちの果……………往年の好読物集…………… | |

悦唐姿態特選集……………

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| ◎ 逢瀬のポーズ……………絹川文代 | ◎ キヤメラ愛好会……………岡田 咲子 |
| ◎ しずかなる受縛……………花坂道子 | ◎ 被虐の愛情……………若林 啓子 |
| ◎ はかなき悶え……………田中芳代 | ◎ 責 苦……………竹谷 十三 |
| ◎ 美因第十四号……………絹川文代 | ◎ アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子 |
| ◎ 羞姿晒陽……………愛川悦子 | ◎ 変の字問答……………浮家 鷹三 |
| ◎ 悦びの一刻……………浜本喜美 | ◎ マダム紅鶴……………野村恵美子 |
| ◎ 綾なす白縄……………絹川文代 | ◎ 哀艶責め場絵断……………岩 広志 |
| ◎ 乱れさく哀花……………絹川文代 | ◎ 蜘蛛と蝶々……………飛田 良二 |
| ◎ 柔肌の喘ぎ……………平野笑子 | ◎ 由紀子のお仕置……………大川由紀子 |
| ◎ 荒縄と美貌……………絹川文代 | ◎ 聖画の誘惑……………近見 啓 |
| ◎ 未知の驚き……………岩井知子 | |
| ◎ 悦唐狂奏曲……………大塚啓子 | |



奇譚クラブ

復刊第四十八号
九月

目次

四馬李傑作集「雨に煙る庭園風景」……四馬 李・西

緊縛写真「はずれた脇息」……絹川 文代嬢

特種写真「山小屋にて」……絹川 文代嬢

滝れい子貴絵 初秋九月の巻……滝れい子・画

「お仕置場についた八百屋お七」

「貴姓にされた身三郎と縛られたお富」

緊縛画「ボクのペット」……北原純子・画

巻頭口絵

創作「愛する」……竹谷 十三 18

スクラップ・レポ……青山三枝吉 25

切腹研究夜話(九)「懸根」……中康 弘通 26

創作白 い 蟬……三条 卓史 28

アブ世界の引力……蘇川 力行 33

「新稿」ある夢想家の手帖から……沼 正三 34

掟虚美へのイメージ 痛ましき緊縛の女性達……水沢 雅美 40

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

「狙われた女給の手記」……日下 絹子 44

掟虚美記「僕にも一言」……舟山 旭一 60

愛好者の記録……とまき・かづひ 62

続・運命の少女(その二)……嵯峨 紀世 64

映画通信 今月の縛られた女優達……大河原珠樹 70

創作 猩 紅 匪(前篇)……菅 良太 72

現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正 80

新聞切抜通信「切腹レポート」に寄せて……須藤 律夫 82

創作「青火宴レポート」……蒼野 礼 84

馬化白書(K・Kスクラップより)……飯 良人 94

女装と私……原田 幾世 100

Hと自称する女……真崎 伸一 102

中絶お詫びのご挨拶……沼 正三 116

告白 自分をハダカにする(五)……松井 頼子 118

最近号難感……近藤 一 128

緊縛のアイデア「吊り手しぱり」について……林 千恵三 140

告白 ピーチボールの想い出……芳川 彰 142

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

裏切りの掟(乳房に火をつけるな・第六回)藤本 仙治 144

映画スナップ余話「演技の表情」……牧 高志 154

「創作」謎の緊縛フォト(その三)……久留木 栄 158

読者通信……164



臨時増刊号 サド特集号 第二集

定価三百五十円 (送共) 略号 (S特第二)

〔麗美巻頭口絵、四馬孝傑作画集〕 (二十四点)

- | | | |
|----------|-----------|---------|
| ☆密質倉庫 | ☆吊し責め | ☆鼻責めテスト |
| ☆悪魔のような女 | ☆乳房責め | ☆黒目鏡の女 |
| ☆春美の受難記 | ☆人間フープ | ☆アクロの訓練 |
| シリーズ四点 | ☆檻 禁 | ☆捕われた商品 |
| ☆新品第一号 | ☆奴隷船 | ☆犬の訓練 |
| ☆嫉妬の鬼 | ☆妙な吊責 | ☆女体鞭馬 |
| ☆地下室の苦行 | ☆雨中の引廻し | ☆役ながし |
| ☆苦悶 | ☆奈落のリハーサル | |

〔被縛女体特選集、グラビヤ写真〕 (百九葉)

- | | | | |
|--------|------|---------|------|
| ○絹布と絹肌 | 田中芳代 | ○仇姿黄八丈 | 絹川文代 |
| ○飾り人形 | 大塚啓子 | ○縄さばき | 西本喜美 |
| ○台上の賛 | 絹川文代 | ○挑発の笑み | 絹川文代 |
| ○若妻の秘美 | 花坂道子 | ○被 襲 | 花坂道子 |
| ○白い若鮎 | 田中芳代 | ○深海魚 | 田中芳代 |
| ○麗 囚 | 絹川文代 | ○哀れなる賓客 | 絹川文代 |
| ○三面鏡 | 愛川悦子 | ○豊 胸 | 愛川悦子 |

〔興趣尽きぬS的読物〕 書下し読物二篇

- 私の責画 責めの美人と皮革について……………四馬 孝
- 緊縛フオトと緊縛モデル夜話……………覆面子白頭巾
- 南村俊平戯画 猪大人の御乱行……………強制女体浣腸機

悦虐小説と緊縛写真 特集号

定価三百円 (送共) 略号 (悦特)

悦虐小説傑作集 S的作品のエッセンス

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 雌獣の手記……………(近見 啓) | 呪縛……………(辻村 隆) |
| 妻は縛らず……………(岡田 圭介) | 悦虐の旅役者……………(青山三枝吉) |
| 夕の朝顔……………(那須不二雄) | 長期刑……………(古川 裕子) |
| 続・囚衣……………(古川 裕子) | 私の思い出……………(岡田 咲子) |
| 私の主題……………(岡田 咲子) | 片耳伝奇……………(窪村 弘) |
| 色 狼……………(児島 光) | 縛られた妻以前……………(早川新二郎) |
| 女奴隷の手記……………(北山カオル) | 燐 光……………(久留木 栄) |
| 受難記……………(岡田 咲子) | 地獄絵行脚……………(長岡交一郎) |
| 怪奇曼陀羅教……………(藤 風比古) | 鉄格子の中に……………(小坂多美枝) |

グラビヤ緊縛写真 百十四葉の傑作

- | | | |
|-------------|-------|---------|
| 妖 精 (ニシフ) | 木洩れ陽 | 放 心 |
| 三ツ葉葵のプロファイル | 夢 路 | 間 課 成 敗 |
| 誘 拐 | 競 花 | 三 処 責 め |
| 羅 致 | 首 纏 | 黒 タ イ ツ |
| ブ レ イ | シユミーズ | 観 念 |

四馬孝画責画集口絵

- | | |
|--------------------|------------------|
| 白魚の悶え……………(磯 光) | 宙に踊る……………(妻は縛らず) |
| 苦悶の前奏……………(女奴隷の手記) | アクロバット……………(色 狼) |
| 鉄鎖のきしみ……………(続・囚衣) | 濡れる朱唇……………(長期刑) |
| 籠の白鳥……………(縛られた妻) | 土蔵の花……………(夕の朝顔) |

雨に煙る庭園風景

「さあ、起って歩くんだ。雨がその身体をきれいに洗ってくれるからな」濡れて縮んだ太縄は、ひしひしと身体をしめつけ、全身を包む雨足は一向に減る気配もなかった。



〔緊縛写真〕

はずれた脇息

△モデル 絹川文代▽





(特種写真)

山小屋にて

＜モデル 絹川文代＞





初 秋 九 月 の 巻

お仕置場についた八百屋お七



瀧 子 責 絵

賽巻にされた与三郎と縛られたお富



ボクのペット

ポチヤポチヤとした白くて美しい肌。水蜜桃のようなミズミズしさが、ブツクリと盛り上っている。この頬もこの耳たぶも、みんなボクのもの。君はボクの可愛いペットだ。



北原純子・画

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1959年9月号

(第十三巻 第十二号 通刊第百二十八号)



創作

愛する

竹谷十三

(一)

「では、行って参ります」

と妻の加代子は立ち上った。

「月曜日には奥様をお帰ししますわ……」

何時もの通り……」

と晴美夫人が艶やかな笑いを浮べて晃に言う。と、サッサとカウンターに行き金を払った。晴美の後からついて行く加代子の姿を晃は焼きつく様な視線で見送った。黒いスーツを着て、タイトのピッタリしたスカートの加代子は、胴が細く弱々しかった。階段を降りる時階段の上につけられた大きな鏡に、ボックス

からこちらを見て居る蒼白い夫の顔を見た。鏡を通して加代子は、ニッと笑って「元気で待って居てね。私の事は心配しなくていいの……」と目顔で挨拶した。明美夫人に呼ばれたらしく、加代子は、足早に降りて行ってしまった。

レストランのウェイトレス達は、時間はずれの手持ち無沙汰で、遠くの方からジロジロと晃の方を見て居た。晃は、鏡に映った妻の顔や姿を心に刻みつけて居た。始めての事でもなし、もう、何回も妻はこの仕事？に出掛けて行くのだが、その度に晃の胸は、何とも言えない苛立たしさと嫉妬に似た気持ちで苦し

められるのだ。加代子の居ない間の限らない淋しさも、彼の心を悩ました。

しかし、そんなに苦しむのに、この事を妻に始めさせたのは彼なのだ。始めは、いやがって納得しなかった加代子を、無理に説得してやらせたのは、他でもない晃なのだ。そして今でも、決して後悔はして居ない積りなのだ。絶対的に自分を愛してる加代子の事だから嫉妬する理由は毛程もないのだ。だが、加代子が出かける時、そして留守の間中、この世の中が卵の殻になった様に味けなく、不安な気持ちになる矛盾をどうする事も出来なかった。

晃は、久し振りに食べた豪華な食事に、バカに元気が出た感じだった。『葉葉ばかり食べていたからな……』と一人で苦笑した。『銀ブラでもして、幸子に菓子や本でも買って帰えるか……』とやっと立ち上った。会計は先刻明美がすまして呉れたので、ゆっくりと晃は階段に向って歩いた。そして加代子が立ち止って、彼に笑顔を見せた所まで来ると、自分も立ち止って誰も居ないボックスの方を眺めた。『大好きな加代子！僕は、世界中で一番愛しているのはお前なんだ！』と今一度胸の奥で叫んでから、階段を下り始めた。

晃は失業してから、もう六年にもなる。学生時代に胸をやった体で、戦争中から戦後にかけて、夢中で仕事をしたのが悪かったのだ。結婚後二年目に再発してしまった。サナトリウムに二年程入院して、少しはよくなつて家に帰って来たが、決して治りきつては居なかった。前に居た会社に頼んで出ては見たが、相当に体を使う仕事で、とても働けなかった。もっと楽な仕事と言っても、半病人の彼を備って呉れる様な所はなかった。一週間も一人前に仕事をするとか一月も熱が出て寝込んでしまうのでは、全く勤人の生活は出来なかった。と言って、特別な技術を持つわけではなく財産とてない彼は、時々、写真や封筒書、がり版のアルバイト仕事をする他に、何の収入の道もなかった。加代子は、病

人の夫をかかえ、献身的に働いた。彼も彼女も、頼るべき親類とてなかった。幼い頃から孤児として苦労して育った加代子は、晃より生活の苦労に対しては強かった。サナトリウムに入った夫に対して、出来得る限りの看護をし、当時は会社から来る月給を一銭たりとも無駄にせず、夫の体の回復のために使った。いろいろの内職もやった。加代子も、特別な才能も技術も持たなかった。美人とは言えないが、可愛らしい若々しい顔と素晴らしいスタイルを持った彼女は再び、昔やって居たバリの女給にもなつて見た。しかし、これは晃の反対で半年程でやめてしまった。金もない癖に生活は割にはでな晃は、耐乏生活等は全く出来なかった。二年前に幸子が生れた頃から、生活は益々苦しくなった。

そうした時、偶然、晃は幼な友達で淡い初恋の人、明美に出遇ったのだ。明美は、前より一段と美しく、そして金持になつて居た。明美の余りの美しさに、晃は以前の様に話も出来なかった。しかし、明美の方は昔と同じ様にザックパランな調子だった。年も一つしか違わないのでは、姉さんの様な感じがした。二時間も話をする間に、二人は以前の様に何も彼も話し合える仲になった。

明美も、苦労したらしかった。結婚に何回も失敗し、やっと気の合った夫には死なれ、今は未亡人だった。

「そう………そんなに困ってるの………何とかして上げたいわネエ………いい仕事ないかしら」

と明美は、元来傲慢な冷い人間なのだが時折、特に彼に対しては、優しい気持を示すのだった。

「仕事なんてないよ。第一、勤めは駄目なのだ………」

と晃は、吐き出す様に言った。

「あんた、何か書けないの………」

「書けないね………そんな事が出来るなら、いいんだが………」

「困ったわね………」

と明美は、半分同情し半分嘲笑した様な調子で、煙草の煙を真赤なルージュの美しい唇から彼の方に吹きかけた。その時、ふと何かを思い出したらしく、晴美は急に真面目になつて晃に囁いた。

「あんた………まだ………例の御趣味は治らないの？………」

と意味あり気に、彼の顔を凝視した。

「御趣味？………ああ………そうか………」

と彼は、我にもなく、顔の赤くなる思いがした。

「前より進んだ？」

「うん………」

「それで………奥さんは？理解者なの？」

「うん、………何故、そんな事を今更聞くんだい」

と晃は言った。「御趣味」と言うのは二人の間の暗号で、実は彼のサディズム的傾向を言うのだった。十数年も前、彼が十八で明美が十七才のあの頃、二人は恋をして居た。明美は、彼の妻になる考えでさえ居た。当時は生きて居た彼の母親も「明美さんを晃の嫁に迎えたいですね」と言っていて居た。明美の両親も暗にこれを認めて居た。だから、二人の交際も半ば公然なものだった。だが………こうした二人を結びつけなかったのは、結局、彼の「御趣味」の為だった。彼を愛しては居たが、彼の御趣味の理解者ではなかった。当時、晃は、明美と会う度に何かの理由をつけて明美を苛めた。勿論、若い二人の間では大した事ではなかったが、晃は明美の腕や肩をアザが出来る程に捻ったり、腕をねじり上げたりした。又、ある時は、「裸になって鞭で打たせろ」等と無理な注文を出したりした。明美は責められる楽しさ等は、どうしても理解出来なかった。こんな事



から二人は、よく喧嘩になった。それに戦争の進展状態も、二人を引き離してしまったのだ。

「そう——、いい理解者が出来て、幸福ね……」

と、一寸皮肉な調子で明美が言った。「一度奥様を紹介してよ。事によると、とても、いい仕事があるかもしれない……」

明美は、その日はなぞの様な言葉を残して別れたが、その後、何回か晃や加代子に会う様になった。そして遂にいい出した。

「どう？あんたが奥さんをいじめる代りに他人に奥さんをいじめさせたら。お礼は、相当に出すわよ………でも、奥さん

が承知するか、どうか疑問ね……」

「加代子は、僕がやらせると言ったら反対しないよ……」

と晃は自信をもって言った。

「へえ——、御馳走様ね……フフフ……」

じやあ先方にも話して見るわ……」

「で……その相手と言うのは……」

「それは、言えないの。あなた達の名も住所も秘密な様に、先方の人の名も住所も秘密よすべては、私が纏め役をするの……」

「……」

「心配？……ホホホ……大丈夫よ。その人はあんたの様にハンサムでもなし、年も若くないのよ」

「いや……そうした心配ではないんだ。どんな風にするのか、責めの内容やなにか……」

「だからお礼の受け渡しも、奥さんを連れて行くのも、私の役目。その人はあんたの御趣味と同じ……お金は有り余る程持つてるし、社会的に地位もある人だけど、気の毒な事にあんた以上の御趣味を持つてるのよ。普通の人じや駄目なのね。尤も、恋人も、お妾さんも別にあるんだけど、唯、責められて文句を言わない女が欲しいのよ。それも、一カ月に一度か、二度でいいの。お礼は、たんまり出させるわよ。あんた達の生活が、素晴らしくなる様に」

晃は、金もあるが、何か自分のサディズム

を満足させるものを感じた。二人の間で話が纏ったが、さて、妻の加代子に話すとなると晃も考えた。結婚してから、どんなに責められても文句一つ言わなかった妻ではあるが、さて、他人に責められるとなると、承知するかどうか疑問だった。結婚して、二、三日目で縛らせた加代子でもこれを承知させるのは手がいると思った。晃は、いろいろと考えた末、理屈で納得させるのは可能だと思った。自分に対する加代子の献身的な愛を笠に着て無理に頭の上から押しつける方が簡単だと考えた。一方、この事は大きな危険もあった。余りの事に呆れて、別れると言ひ出さない事もなかった。

遂にある晩、晃は勇気を起して、この話を加代子にした。加代子は、冗談と思ってか笑いながら聞いて居た。しかし、それが本当の話と知ると矢張り顔色を変えた。そして次第に黒い大きな瞳には涙が溜って来た。このまま話を続けて行くのは、晃としても出来なかった。「どうしても、お前が承知するまで、僕は許さんぞ！」と晃は、心を鬼にして怒った。何時もの様に加代子の体を高手小手に縛り上げると、今日は真剣に責め出した。口先だけの遊び事でない事は、加代子にも解って来た。どんなにされ、何を言われても、彼女は無言で夫の顔をうらめしそうに見ているのだ。その彼女の瞳は、彼の心を焼きつける様

に思えた。

「夫や子供のために、身を売る女も居るんだ。お前は唯、責められて来ればいいんだ。お前が僕を愛してるなら、当然出来る筈なんだ」彼は心を鬼にして叫んだ。同時に、こうして苦しめるのに、限らない満足感も出て来た。晃は今迄にした事もない様な責め方をした。大きな美しい乳房に、何度も何度も煙草の火を押つけた。それでも加代子は無言だった。遂には、晃の方が泣きそうになって来た。

「僕はお前を心から愛してるんだ。こんな事を言い出したのも、お前なればこそだ。お前の体が、責められてズタズタになっても、僕はお前を愛してるんだ。信じて貰えないかも知れないが、僕は自分の身よりお前を大切にしてるんだ。金のためばかりではないんだ。だが、こんな生活ではお前に、ブラウスの一つも買ってやれないんだ。僕だって、もう、一、二年したら働ける様になれるんだ。今度の事は、お前でなければ出来ない事なんだ。これは本当なのだ。金と太鼓で探しても居るものじゃないんだ。僕は、お前を絶対に愛し、信じる……お前も、僕を愛し、信じて呉れ……」晃は、もう、自分で何を言ってるか解らなかった。

「私……信じるわ……」

と加代子はかすかに言った。

「じや……やって呉れる？……」

「うん……」

と加代子は、うなずいた。後は二人共も、涙と感激でメチャメチャになって泣き合ったのだ。

(二)

こうして、この奇妙な仕事が始められたのだ。もう、何回目かなのだ。それでも、加代子にとっては、夫や子供と別れて、一日でも、二日でも居る事は淋しかった。第一回目は、堪えられない程の不安だったが、今ではそうした不安はなかった。責められる苦しさは、彼女には決して堪えられないものではなかった。彼女が紹介された男は二人あった。Rと言う中年と言うよりは老年に近い、デップリと肥った男と、今一人はSと言うまだ若い男だった。勿論、二人共、何の商売をして居る人か、社会的地位も名前も本当の所は加代子は知らないのだ。だが、数回の責めを通じて判った事は、二人の責め方も彼女を取り扱うやり方も、ハッキリと違って居る事だった。Kの方は、長い時間をかけ、ジワジワとそれも変った責め方をするし、Sの方は、火の出る様な激しさで責めた。責めとしては、Kの方がつらかったが、彼女は、若いSを嫌っていた。

あんなに晴れて居た天氣が、途中から変わって、小雨が汽車の窓を叩いて居た。「今日の

お相手はKさんかしら、Sかしら」と加代子は、心で思ったが、決して晴美に聞く自由はなかった。そういうことについて、事前には晴美は決して、一言も言わないのだ。二時間の道中で、もう二人共、世間話がつきた。前から、二人の間には共通の話題が少なかったのだ。

目的地である晴美の別荘の立っているA温泉に着いた。駅からハイヤーに乗った。別荘に着くまでは、晴美と加代子は、対等でない迄も、同じ人間なのだが、一度、別荘の玄関を入ると加代子は、女奴隷になってしまうのだった。この点、晴美は、ハッキリとして居た。ハイヤーが着いた。迎えに出た女中に、晴美はボストンバッグを渡しながら聞いた。

「お客様は？……そう、まだ……じゃあ、何時もの様に、この人を案内して……」

と言うなり晴美は、もう加代子の方さえ見ずに奥に入った。加代子は、小間使に連れられ、例の廊下の奥の小さな部屋に入った。「お風呂へどうぞ……」と言うと、女中は姿を消した。加代子は、勝手を知ってる風呂場へ行った。姿見に映る自分の体を、一種の哀愁をもって眺めた。大きく張り切った両の乳房、くびれて細い胴、色白でスベスベとした肌、スラッとした脚……この体が、帰る時は、見るも哀れな傷だらけなものになってしまうのだと思うと、矢張り悲しかった。

風呂から上った彼女は、小部屋で待った。責めの前には、一切、食べものを取らない事にしていた。何時間過ぎたろう。

扉が開いた。Sだった。加代子は、覚悟はしていたが矢張りドキッとし、呼吸が早くなった。大柄で筋肉の隆々としたSは、スポーツシャツ一つで、手に鎖を持って入って来た。顔は例の如く、黒いマスクを掛けていた。ここでは、一切の挨拶は無用だった。Sは、鎖についた手錠を加代子の細い手首にカチッと嵌めると、鎖を持って力一杯に引き、部屋から連れ出した。廊下は暗かった。

シーンと家中は、もの音一つもしないのだ。大股に歩くSに引かれ、加代子は走った。この別荘にある拷問室に連れて行かれるのだ。応接間を改造したのだろう。防音装置の完備したスタジオの様な部屋だった。

「入れ！」とSは、加代子を足蹴にした。スタジオの扉は閉った。スポットライトの様に部屋の中央の床だけに光が流れ四囲は暗かった。押されてへたへたと床に倒れた加代子は、マスクを掛けたKと晴美のいるのを知った。KとSから同時に責められるのは、今までに一度もなかった。加代子は、思わず体が震える様な気がした。Kと晴美は、椅子に掛けて左右にいるのだ。Sは手錠を取ると、いきなり加代子の髪の毛を掴み、引き立てた。「アッ……」と加代子は、小さく叫んだ。S



は乱暴に毛髪を掴んだまま、小柄な彼女を突き倒しては引き起した。これは、何時もSがする一種のウォーミング・アップだった。「許して……痛いわ……」と加代子は、もう泣き声になっていた。このスタジオの中で、加代子の許されてる言葉は、限られたものだった。さんさんSにこずき廻されてクタクタになった加代子は、天井から下げられた綱に両手を縛られ吊り下げられた。これからSの得意の鞭打ちが始まるのだ。Kは、鞭打ち等をした事はなかった。しかし、Kは心臓が余り丈夫でないし、力もないので自分から鞭打ちはしなかったが今、Sに鞭打たれる、くねくねとした女体には少なからず喜悦して眺め

ていた。晴美も、心から楽しそうに薄突いを浮べて次第に、加代子の肌にハッキリと現れる赤い鞭の跡を見ていた。ビシ！と激しい音と、「ウッ………」と痛さを堪える加代子の呻き。

「こん畜生！ これでもか！」

と力一杯に鞭を振るSの叫びだけが、スタジオ一杯に流れた。加代子の背からヒップにかけて、もう肌が破れ血がにじみ出ている処があった。

「ストップ」と晴美が声を掛けた。晴美は、プロレスの様にドクター・ストップを掛けたのだ。若く力のあるSも、もう肩で激しく息をついていた。両手を高く吊るされた加代子は、首をうなだれ………氣を失っていた。「下ろして……あんたは、無茶ね。注射を打つから……」

晴美は、Sを一寸睨んだ。Sは頭をかきながら………加代子の体を解き、床に横えた。晴美は、用意の注射器を持ち出すと、邪怪に加代子の腕にズブリと針を刺して注射をした。「ウ……ウ……ウン」と加代子は、やっと氣がついた。Kも立って来た。

「み……水を……水を下さい」

と加代子は、かすれた声でいった。

「水は、後でいやという程、飲まして上げるわよ。何さ、まだ、始めたばかりじゃないの！」

と晴美は鋭く叱った。

「すみません」

と加代子は細い声であやまった。

「今夜は、これから、いろいろのポーズで写真を取るのよ。Sさんも、無茶よ。写真が済んでならいいけど、モデルが動けなくなつては……」

と晴美は、鞭打ちの傷跡に、応急手当をしながらいった。

「すみません……もう、大丈夫です」

と加代子は、痛さを堪えてニッと笑った。

それから、二時間程、加代子は、いろいろの責めの姿をKとSのカメラに撮られた。そして最後には、水責めの場面になった。鉄のわら蒲団もないベッドに、固く縛りつけられ、水をいやという程飲まされた。加代子の腹部は臨月の様にふくれ、額には浴せられた水と汗で髪の毛がベトベトとつき、肩でせいせいと苦しそうに息をしていた。乳房の下を縛しめた細引は肉に喰入り、胸は激しく上下していた。三人は、この苦しがつてる加代子の姿を、この上もない楽しいものの様に眺めていた。勿論、カメラにこの姿もおさめられたのだ。

全身、傷だらけになり、もう精も根もつき果てて、かすかに呻り続ける加代子が、小部屋に返されたのは、明け方近くだった。傷には充分の手当がなされていたが、加代子は夢

中で呻りつづけた。

(三)

加代子は、予定より二日遅れて帰った。帰って来てからも、加代子は一週間程、病氣と称して床についてしまったのだ。さすがの加代子も、今度はこりこりした。もう誰が何んといつても、こんなことは御免だと思った。

晃は、親切に世話をして呉れた。明美夫人も、心配して見舞に来ては、何時もの様に、あの時の写真を何枚か置いて行つた。加代子は、何時もは、自分の責められる姿を見るのが大好きだったが、今度は写真を見ただけで、体中の痛みが思い出されてゾーっとした。

「もう、いやよ。どんなにあなたが頼んでも行かない事よ」

と加代子は、真剣な顔で何度も何度も夫にいった。

「うん、解ってるよ……」

と晃は、ニコニコしながら笑っていった。

「本当よ……冗談じゃないのよ……」

「冗談とは思ってないよ……だけど……傷がすっかり治ってごらん。又、責められなくなるから……」

「今度は、ならないわ……あんな苦しい目に会うのいや……」

加代子は、あの時の苦しみを思い出して、

可愛らしい顔を曇らせた。

若くて元気な加代子は、一カ月もすると、殆んど傷も痛みも思い出さなくなった。幸子を中心に、平和な家庭生活が続いた。晃は、臨時ではあるが、ある商店の外交員になって働き出した。平凡な家庭の妻であり、母である生活が続くにつれて加代子は時折、責められたという要求が湧き起つて来た。しかしそれは礼金目当としてでなく、夫からの愛の責め方としてだった。加代子は、自分の体が肥り出して来た様な気がした。加代子は、前にも使った事のある自虐用の道具を持ち出して来た。革バンドで胴を固く締めたり、サポーターで太腿を縛ったり、特別に小さい固いブラジャーをつけたりしてみた。だが、責められたいと思う要求は、日増しに強くなつて行つた。

外交員をしていた夫が、突然、高い熱を出して倒れてしまったのは、そうした時だった。加代子は、夢中で夫の看護をした。幸に、急性肺炎の方は治つたが、持病の方が再発してしまつた。外交員の職は、勿論、やめてしまつたので、生活はまた見る見る苦しくなつて来た。加代子は、編物やいろいろの内職をやつたが、そんな事では、この苦しさを喰いとめられなかった。

晃の病状は、思ったより軽く、二カ月程床についた切りでいる間に、熱も微熱程度にな

った。しかし加代子は、自分の洋服からハンドバッグに至るまで、すべて質屋に入れてしまっていた。晃は、妻の献身的な態度に、心から感謝していた。しかし、再び、あの晴美夫人の世話になれとは口に出さなかった。

加代子は、とうとう、ある日、自分から夫に話し出した。

「ねえ、晴美さんに、又、お願いしてみましようか……」

蒼白い夫の顔に、皮肉な笑いが浮んだ。

「その気があればいいがね。だけど、お前……」

「もう、いわないで……私……矢張、マゾヒストなの……お金のためだけではないわ……ほら……見て！」と加代子は、洗いざらしの

スクラップ・レポ

江戸家猫八が会う人ごとに「どう、あたし小ジワがなくなっただでしょ」

なにかと思ったら、オヘソにオリーブ油をぬりこんで若がえる療法をやっているんだそう。だ。「そのオリーブ油のね、上質のやつをあたしは手に入れられるんですよ。お世話しますよ。とくに、女の方にはお安く……」と、力をいれる。なぜ女だけに安いんだいときかれると、「これは、ご依頼の

ブラウスをパッと取った。胴に喰入る様に革バンドが強く締めてあり、豊かな胸にもギリギリと細引きが巻きつき、痛々しくくびれていた。晃は、ここ何カ月も見せた事のない輝きを瞳に浮べていった。

「自分でか……」

加代子は、無言でコックリをすると、ニッと笑った。

「明美夫人にハガキを出そうか？」

「ええ……どんなつらい事でもしますって！」

晃の微熱はなかなかとれなかった。もう、起きてはいたが、働くという事は出来なかった。

「あなたさえ、生きていて下されば、それで私は幸福なのよ。私、肌に傷のつかないこと

女性へあたしが直接お渡しする。そして、あとで今ごろ彼女は、どんな顔をして、おヘソをなでてるかと想像して楽しむ……」

とは、少々、おエッチな趣味。

(昭和34年3月20日付東京新聞朝刊)

蛇足を加えるならば、おエッチ、というのは、H——つまり、＼ヘンタイ＼のローマ字頭文字のこと。——この程度の＼エッチ＼趣味は、紳士と名のつく男性ならば、誰しも持ち合せているのではなからうか。

(青山三枝吉)

なら、どんな苦しい事でもする決心したの。だけど、肌だって、どうしても傷だらけになって来るでしょう。そうになったら、余りお礼も貰えなくなるわね」

「うん……」

「私の臍が、醜くなくても、いいわね……」

「……」

晃は、妻の顔を凝視した。

「いけない？」

「何故、そんな事をいうの？」

「だって……明美さんが、あんたの承認を得て呉れているのよ」

「で……君はどう思うの……」

「私、お礼のお金も大変多いでしょう。私はやってもいいと思うの。私の臍が醜くなっても、愛して下さるわね……」

「勿論だ！僕のためにして呉れるんだもの」

晃は、感謝して、加代子の手をしっかりと握った。

「幸子のためにも、生活の安定を得なくてはね。勿論、一回の拷問で、メチャメチャになる事はないわよ。だけど、何回もすればね……私、臍がだめになったら外交でも何でもするわ」

晃は、「反対」したい様な気持と「やれやれ」と思う気持で、心の中が混乱した。本人の加代子は、何か楽しみでもある様に、明るい顔でいるのだ。

『愛は、すべてを奪う』という言葉が、晃の胸にしみじみと浸み込んで行った。



切腹研究夜話

(九)

愁根

中 康 弘 通

(承前) Y子の追憶に就て、私は前掲の腰折れのほかに、掌の小説を幾つか試みた。

ここに引く「愁根」は、その一篇である。

愁 根

興信所の男を待たせてある応接室へ、弘は実験衣のまま入って行った。挨拶もそこそこに、男は鞆から出していた書類を上げた。

「二十年の六月に亡くなられています。」

ハッとして罫紙に注いだ弘の眼に、

二十年六月二十五日、公傷死

於——陸軍病院

黒インクの文字が、眼に痛いほど鮮やかであつた。

男が帰つたあと、直ぐ実験室へ戻る気にもなれず、弘は窓ぎわに寄つた。

早春の陽が中庭に明るく射し、草の緑が生き生きとしている。ふっとその青い香りが漂うような幻覚に、彼は眼を閉じた。

もう八年も昔のことであつた。

「昨日の、あれは何やの。お前なんか見たこともない、いう顔やったわ。」

窓口から、見習看護婦の信子は、軽く睨むような眼差しを向けた。

夜の医院の待合室には、弘のほかは小学生が二人、雑誌を読んでいる。

「昨日、……ああ、一寸、考えごとしたもんだから。」

手招かれて受付へ近づきながら口ごもる。

「何を考へてたの。誰のこと？」

少し声を低めて、少女は悪戯ッばい笑顔になつた。

「誰って……」

軽い肺浸潤で弘は、卒業間近い中学を休み安静と散歩と通院の日常であつた。今まで、みつめていた目標が急に遠くなり、心に大きな穴が空いた思ひであつた。その空虚に信子が忍び込んでいた。

昨日は通院しない日で、秋晴れの邸町をあてもなく歩き疲れ、やっと家近くまで帰つて来たとき、思いがけず信子が、珍しくセーターにスカートという姿で小走りに来た。看護服姿を見馴れているせいで、すれちがいざまに声をかけられるまで彼は気付かなかつた。

今日は会えない、と思ひ込んでいたから、無意識に見すごしたのかも知れなかつた。

少女というより少年の活発さを見せる信子の後姿を、むしろ羨む思ひで、弘は見送つたのであつた……

口ごもつたままの弘に、たたみかけて、

「どんな人が好き？」

胸を衝かれる言葉に弘は一層とまどつた。(貴女が……)といつて了いそうで、いつて

はならなかった。

激しい戦争のさ中に療養する身の、取り残された哀しみが、いつも彼の心に澱となって年令こそ一つ若くても、働いているだけに人馴れた信子の、軽くほぐれる口調には随いて行けず、頬の火熱るのが判った。

顔を赧らめて眼を逸らす弘の気配に、信子も又ふっと眼を逸らし、

「バカねえ」

口の中で呟いて、見る見る色白の頬から耳朶まで、紅を流したような染まり方であった……。

やがて一年余りののち、弘は地方の専門学校で応用化学を修めるために町を離れた。既に信子が日赤に志願して了っていたから、その町に未練も愛着も少かった。

戦争が終り、焼けた町も建て直ったが、信子の居ない町に帰る気もせず、弘はわざと就職も他の市に探した。そして、この春、二十七になった弘は、信子の所在を興信所に探させ、その結果が今日報告されたのであった。

あの八年前に二人がすれちがった道と同じように、若く青い草は眼の前に芽吹いているけれども、もう信子は居ない。草の青さが急に生々しい実感となつて、対照的に信子の死を彼に認めさせようとしているかに思えた。青草が毎年、春になれば芽吹くように、信子

を永久に見失ったことの傷みが弘の心にも根をおろし、また春が廻り来るたびに芽吹いては疼くのではないかと思つたとき、弘は、古い中国の詩人が使つた言葉を思い出すともなく思い出し、
「愁根」と、呟やいてみるのであった。

—— —

いま、眼を閉じてみても、はやY子の面影は余りさだかではない。しかし、どうかすると、街を歩いて、ふと彼女に似通つた面ざしの少女を見かけるとき、私の胸に浮かぶのはむかし日活に居た美川勝美という女優さんの「ジャック大福帳」での笑顔であり、（この写真、むかし「富士」か「講談倶楽部」かの新春附録で、四六倍判の演芸グラフに出ていました。お持ちの方はないでしょうか。）時とすると、少年時代に見た前田曙山氏「女腹切」の挿絵で、端然と切腹の座に直つた、れつ女の凛々しくもまた清々しくもある面ざしでもあるのだ。

そういう思い出があつたからでもあろうか私が本誌で最も感銘深く読ませて頂いたのは信太蓉子さん、不破和子さん、橘芳子さん、向井芙佐子さん、マニアの女性N子さんなど復刊前に手記や書信を寄せていた、心理的に一つの系列に属すると推測される人々であった。これらの人々が復刊後は筆を執らなく

なつたことは、何としても淋しいが、それだけに有意義な人生を送って居られることと思ふ。

丁度、この文章を書いているとき本誌七月号が届き、須藤律夫氏の文章を拝見した。ここに記されている類いの写真を、私も受取つたことがあつた。勿論、モデルさんのものは比較にはなるまい。しかし何れにせよ、こういう写真は論議の対象ではなく、御本人の心理的必然を人間の哀歓とのみは見すべし。が、傷ましいことに思ふのである。

須藤氏が更に引いて居られる女高生のエピソードは、可憐さ素直さに於て、その感性のみずみずしい表現には、明るく微笑ましいような感銘を禁じ得ないのであつた。

なお、先に青河寛次氏の「短歌は切腹の文学と申されます」という文章を引用したが、その典拠を探つていたところ、思いがけず手近かに発見した。斎藤茂吉翁の「赤光」再版のあとがきで、岩波文庫版に収められている。即ち、

おもうに短歌のやうな体の抒情詩を大っぴらにするといふことは、切腹面相を見せるやうなものであるかも知れない。というのである。

白 い 蟬



三糸卓史

作 画

ゴトゴトと、軽便鉄道が山の峽間を縫って小さなトンネルを潜り、四方を山に囲まれた小さな盆地に出た処が私の町である。

私の父は、その山の町の駅前で人力車夫をしていた。父とはいっても実の父ではなく、三年前に私と母とがこの町へ流れて来て、行

き処がなくて難儀をしていた時、ふと助けられて家に連れて行かれ、そのままずるずると居着いたもので、母の立場も父に対しては妻やら食客やら女中やら判らぬあいまいなものであった。勿論、籍などに入っている筈もなく、私も昨年、辛うじて小学校の五年へ入れ

てもらった時にも、鈴木という母方の姓を名乗っていた。

母と私がこの町へ来る以前の記憶といえば南の方の大きな町の材木問屋で炊事をしたり、洗濯をしたりしていた母の姿を憶えているだけである。

その母と私が、どんな事情で、こんな山の町へ来たのかは、少年の私には判らなかつたし、その事については母も堅く口を閉して話してはくれなかつた。

家は町から少し離れた山際の、百姓の農具小屋を改造した小さな藁葺で、多少、軒も傾きかけていた。

私は毎朝五時に起きて、学校へ行くまでの時間を牛乳配達をした。「殺菌全乳」と箱の横手に書いた手車を押して、雨の日も霜の朝も、町中を一軒々々配って廻った。

母は町の呉服屋や洗張り屋から、仕立物を請負って来ては毎日縫っていた。

だから、外目には貧しいながらも平和な家庭のように見えた。

私が配達をさせてもらっている牛乳店には私と同じ学年の太吉という子がいて、

「今夜一緒に宿題をしようや。遅うなったら泊ったらえけん」

と誘った。私は自分でいうのも変だが、成績は良かったので、いつも太吉を教える立場になっていた。太吉の両親も私が一緒に勉強するのは賛成で、泊った翌朝は、朝飯を食べさせてくれた。太吉の家からすぐ学校へ行くことが月に二、三度は、きまっていた。

ある日、今日も下校の途中、太吉に誘われて彼の家で勉強する事にし、駅前の溜り場へ夕食を届けに行った時、いつものように

「お父ッさん、今夜も寺田へ行くけん」

といつて、そのまま太吉の家へ廻った。

晩飯を御馳走になって、九時過ぎまで勉強した時、私は、ふと大事な用事を忘れていたのを思い出した。それは私が今日帰宅の途中、洗張り屋のおばさんから

「お母さんに頼んであるお召の着物を、明日のお昼までに届けてくれるようにいうてえな」

と頼まれていたのを、母に告げるのを、すっかり忘れていたのであった。

「太吉やん。わい、用事を忘れてたんでこれから帰る」

と断って、勉強道具をカバンに詰め込むと、私は急いで寺田の家を出た。

町並から外れて川沿いの道を行くと、宵月の下に水の涸れた河に架った板橋の欄干が黒

々と墨絵のように浮び上っていた。快よい晩春の夜風を受けながら、歌でも唄い出したいような軽やかな気分で、私の家の前まで帰った時、私は思わずハッとして入口の扉に掛けた手を離した。

家の中の様子が変なのである。

私は草履の音を忍ばせて、そっと裏の方へ廻った。裏の戸もぴたりと閉っていて、中から押し殺したような父の声が聞えて来た。

私は扉に耳を擦りつけるようにした。

「やい、てめえこんなにされてもまだ、うんといわねえのか」

酒に酔っている父の声である。

「あ、うッ」

と息をつめた様な呻きは母の声である。

——お母さんは、何を叱られているんだろ

う——

私は戸に手を掛けようとしてはその都度、慌てて手を引込めた。

「やいお絹、てめえは俺の嫌ア面しているか知れねえが、俺アそうは思っちゃアいねえ。てめえらが、今日生きていられるのも、俺らのお情のお蔭よ。え、おい。それに、この俺のいう事が訊けねというんなら、——これだぜ」

ビシ！と肉を打つような鈍い音に続いて「うッ、くッ」

と押しつぶされたような呻き声が上がった。

「おい、此处でそう酷うせいでもよいが。どうだい、お絹。行くだろ？」

私は、そういったもう一人の男の声に思わず、ぎくりとした。

——誰か、まだいる——

「なア長吉。お絹も承知らしいから、今夜は預って行くぜ」

「へえ、承知しやした。じやア俵を持って来やすから、うまく仕込んで下せえよ」

私が家の中の気配を覚って、物置の蔭に身体を伏せるのと殆んど同時に、裏の戸がガタリ、と音を立てて開いた。そして井腹掛にパツチ姿の父の長吉が、ぬっと顔を出した。

父は一寸、左右を一瞥してから家の横手へ廻り、其処に置いていた人力車を挽いて又、裏口へ戻って来た。

「へい親方」

そういつて梶棒を下すと、家の中から、丹前に白縮緬の兵児帯姿の、溜り場の徳蔵が出て来て、ゆったりと俵に乗った。徳蔵と入れ替りに家へ入った父は、今度は母の身体を押すようにして出て来た。

私は母の姿を一目見て、思わず「アッ」と声を立てそうになるのを必死で耐えた。

頭の髪は、ふだんの通り無雑作な櫛巻であったが、観念したように薄く眼を閉じた両の脇の下に豆絞りの手拭が固く母の口を覆い、左右の頬に食い入っていた。両手は後にキッ

チリと縛られているのであろう。肩から、ふわりと掛けた緋色の長襦袢のなまめかしい襟の間から、盛り上った胸を横に二巻き、鹿の子の腰紐が引緊めているのが痛々しい。下は桃色の腰布で、その母を父は向う脛で小突きながら俵の梶棒を跨がせた。

「親方、相乗りで窮屈でやしようが、ぐらつかねえように、しっかり握まえていておくなせえよ」

そういった父は、今度は母に向って

「何をぐずぐずしてるんだ。早よう上らんかい！」

と遮二無二、俵の上へ押し上げた。

「夜更けでも、人目がありやすから、幌を掛けますぜ」

と俵の後の黒い幌を、ばらりと前へひらき揚箱の中から別の幌を取り出して、俵の前を覆うた。その前幌が下りようとした瞬間、親方の膝に乗せられている母の上半体が大きく揺らいで、両肩から襦袢がずれ、夜目にも白い丸やかな上半体が眩しいように私の眼に灼きついていた。

「よいしょ」

という父の掛声と共に、黒い幌を掛けた人力車は動き出し、やがて霞んだような月光の町へ小さくなって行った。

私は物置の蔭から出て、そろりと家の中へ

入った。父は間もなく帰るのであろう。灯を小さくしたランプの光が鈍く部屋を照らしている。部屋の中程に踏み台が置いてあって、傍に台所の櫓古木が転がっている。上り框の鴨井から荷造用の長い綱が垂れ下って、古畳の上に渦を巻いている。その傍に薄い座蒲団をくるくると巻いて、中程を紐で括ったのが置いてある。父と親方とが、差し向いで酒を飲んでいたらしい箱膳の傍に、母の縫いかけの着物と針山がある。箱膳の隅に、母の真鍮の指抜がランプの灯にピカリと光っている。私は恐いものに追われるように再び、そつと家を出た。

——もうすぐ父は帰って来る。母は何処へ行ったろ———そう思いつつ私は、いつか裏山の庚申堂の前へ来ていた。

裏の戸へ耳をあてて聞いた父と親方との言葉、家から連れ出されて、俵の上へ押し上げられる時の母の姿態、部屋の中の様子。

先刻からの意外の出来事が、私の頭の中を走馬燈のように巡回し、不安と疑惑を深めた。

私は両手を頭の後に組んで、堂の縁側に、ごろりと横になった。

月が天心にかかっている。堂の前の松の梢が風で微かに揺れている。遠くの町も灯りが消えて、ひっそりと寝静まっている。

——母は今頃、どうしているだろう——

私は母の妖しい幻影を追いつながら、いつま

でも庚申堂の縁に、じっとしていた。

次の朝、私は家へは帰らずに直ぐ牛乳店へ行った。

「おい、一郎やん。今朝は何だか眠そうじゃアないか」

太吉の父は、私の勉強の夜更かしが過ぎたと思っているらしかった。

私は空き腹を抱えて牛乳を配り、学校へ行った。昼弁当の時間は校庭の楠の木蔭に寝そべっていた。腹がひどく空いて、ともすれば腹が鳴った。

三時頃、私が家へ帰った時にも母はいなかった。それでも家の中はきちんと片附いて、お櫃には今朝炊いたらしい飯があった。私が膳を出す間ももどかしく茶漬を掻き込んでいる処へ、表から母が風呂敷包みを抱えて帰って来た。

「あッ、お母さん」

私は思わず口の中でさういって、ほんと安堵の胸を撫でおろした。

——やっぱり帰っていたんだ——

さう思うと、まるで昨夜の出来事が、夢であつたかのように思われて来るのであった。

それから数日たったある夜——。私は夜中に、ふッと眼が覚めた。いつもは朝が早いので、一旦、眠ったら、めったに覚めない私が

その晩はどうした事か、ひよいと眼が覚めた。私の家は一間きりなので、私が寝るときには頭の上に古い枕屏風を立て廻す習慣になっていた。

コトリ、と膳の上へ盃を置く音がして、

「おい、何とかいわないか」

と、低い小さい父の声が出た。

「あの……この手を」

と微かな母の声に続いて

「お前の手はそれでいいんだ。酌をしてくれとはいわねえ」

「あの、もう少し弛めて……」

「なに、ゆるい？」

「いえ」

「よし、そんなら」

父が膝で立って、母の背後に廻った気配が感じられた。

私は眼をうつすらと開いたが、枕屏風の煤けた絵に遮ぎられて見えなかった。

「あなた、胸が……」

「ふん、親方はこんなに緊めたか。」

「ン、いいえ……あれ、膝の上の膳が」

「こら、膝を崩すなというのに」

「お願い、もう親方さんの所へはやらないで……」

「だからよ、親方がお前をどんなにしたかって訊いているんじゃないか」

「ああ、かんにんして……」



「いえ、おい、親方がもう一度お前をと望んでいるんだぜ。この間は手慰みに負けた約束で俺も半分は眼をつむっていたんだが、大分お前が気に入ったようだ。尤もお前がこうやっていては、満更でもねえからな」

しばらく話が途切れた。コトリと又、盃の音がする。母はどんな姿になっているのか、

ただ両手を縛られて、膝の上に箱膳の蓋を載せているのだという事だけは判った。

「おい、お前どうしても親方の処へ行くのはいやか」

「はい……もう」

「そのかわり、俺がどんな事をして文句はいわないな」

「……………」

「どうした。それもいやか」

「いいえ……あの」

「うん？」

「いつまでも、ここに置いて下さい……わたしは……」

「俺にどうされてもいいっていうんだな」

父の言葉に続く母の返事はなかった。言葉以外の仕草で反応を示したようだ。

「よし、お絹、ここでは気兼ねだ。庚申堂へ行こう。」

「あの、これを解いて……」

「何を？ ははは、そのままで行くんだ。誰も見る者はないやしないさ」

「でも、戸外は月夜でしょうに」

「月の光に肌を照らさせるのも、また風流なもんさ。しかも引廻しの格好でな」

ガチャリと、箱膳の蓋をする音がした。

「縄に摺古木に蠟燭にマッチ、それと針もあるな」

「しずかにして、……一郎が眼を覚めますから」

母のその言葉に、私は思わずギクンとして寝息を整えた。——やがて、ふッと灯りが消えた。ガタリと音を立てて裏の戸が開いた。私は音のせぬように頭を伏せて、枕屏風の破れた小さな穴に眼をあてた。冷飯草履を引っ掛けて、ついと背戸の月の光の中に立った母

は、肩から腋の下へ襷のように綱を掛けられて、後手に縛られた腰巻姿の半裸の格好であった。すると、すぐその後から、さまざまな道具を入れた包を肩に担いだ父が、のそりと出て後手で戸を閉めた。

私は素足のまま、ひたひたと山道を登っていった。

——今夜こそ、母がどんなにされているか——私は母に対する哀憐の情と共に、ひそかな好奇心さえ交えて息を弾ませていた。

丸太を横たえて土止めをした段々を注意深く一步一步踏みしめて登った。月が雲にかくれて急に暗くなり、ともすれば、つまずきそうになった。

ようやく庚申堂の傍まで来たが、堂の中は真暗で物音一つしなかった。私は用心深く音を立てぬように縁の上に這い上り、狐格子の穴から祠の中を覗いたが、気味悪い程し——んとして物の影もない。

——おや、どこへ行っただらう？

——私は小首をかしげた。確かに先刻「庚申堂へ行こう」と父がいった筈だが、と考へ込んでしまった。

——まさか夢では——と思っても見たが、夢ではない。私は現実に庚申堂の前に立っている。

私が不審を抱きつつ、何気なく庚申堂の裏

手へ廻った時、急に雲から離れた月の光がさっと流れた。

私が思わず「呀ッ！」と声を立てると同時にバシッ！ という肉を打つ音に交って「あうッ、あなたッ……」

と、母の苦痛に呻く声が聞えた。

堂の裏手の、大きな松の幹に、両手を掲げて抱えた手首から、綱は母の背を斜十字に交錯して両足首に巻きついている。その、白い蟬が止ったような母のなだらかな背に、父の右手の摺古木が飛んだのだ。

「おおッ、お前は一郎ッ」

咄嗟の間に、身を隠す事の出来なかった私の姿を見て、父もさすがに驚いたようであった。

「お前、何しにこんな処へ……」

と、思わず詰問する口調になったが、直ぐ眼の前の松の木を抱いて呻いている母の方を見ると、少し照れ臭そうに

「お前は、知っていたんだな？」

といった。そして

「お母さんは、こんなにして責められたいんだとよ。ええお絹、そうだろ」

と母の方を見た。

母は、櫛巻きの髪がぐれて、肩にばらばらと懸っているのを払うことも出来ず、肩で大きく呼吸をしながら、悲しそうな眼付で私を流し見た。

アブ世界の引力

藤川力行

本誌を通読していると、自分の心の奥に巢喰う異常な性向に、唾を吐きかけたいような自己嫌悪を感じ、やりきれない孤独感に襲われる、というような意味の、アブの血を呪う告白文に一再ならず出くわすことがある。

私もその一人であり、悩みは同じなのだ、と妙な安心を覚える。

不幸？にしてアブの血を持って生を受けたが故に、その欲するところが、社会常識に合致し得ない情けなさ。その希むところを吐露せば、必ずや世の人々の冷嘲を買い白眼視されるであろうと思う悲しさ。実に以て、唾でも吐きかけたくなる、ような因果なさだめである。

しかし、これは何もアブの世界に限ったことではあるまい。現在の社会組織の上からは、純然たる「悪」は勿論のことだが、他に「抑制」を必要とするもので、万人の耽溺したいと内心望んでいる事柄は、数限りのない程あるのだ。そう考えて、自らを

慰め、本誌をその昇華の場としている一人であるが、過去に、自己嫌悪のあまり幾度か本誌からすら離れようと試みたこともあった。しかしその都度、無意識に遅くしている妄想の激しさの増加を意識して驚いたのだ。そしてその一番安全な最良の鎮圧方法として、また本誌に舞い戻っているのが実情である。

意志が弱いと笑わば笑え。私は自己欺瞞の口実としてではなく、真から、これは意志とか理性だけの問題ではないと思う。私の場合、適当に妄想を描き活字によって、或いは絵によって発散せしめる場を持つ方が、理性によって隔離するよりも、遙かに明朗にして健全な社会人たり得ると思えるからだ。

総てのものは使いようである。素晴らしき科学の産物人工衛星も、目的によっては人類の最大の敵とも味方ともなる。

私はいくら努力してみても、一般社会に受け入れられないアブの引力から脱出できない身であるならば、本誌をその底護ロケットとして、社会人として差障りのないアブの軌道を、グルグル廻っていようと思う。……有益ならずとも無害な人工衛星のように。

「一郎や、わたしを見ないで。はやく、はやく帰って……」

そういうと、がっくりと頭を垂れて向うをむいた。父は

「折角の処へ一郎が来たんだが、ついでだ、もう少し続けよう」

というと、再び摺古木を振り上げて母の背に一撃を加えた。

「あウツ、あなたッ、もうやめて。こんな、子供の前で……」

母は急に全身を揺って藻掻いた。肉体的な苦痛よりも、我が子の前で悲しい姿態を演ずる精神的な苦痛が一層ひどかったらしい。

私はただ茫然として父と母の動作を見まもっていた。父は、松の幹を抱えて白い肢体をくねらせる母の動作を楽しむように、ゆっくりと一振り一振りに変化を加えた。

——母を責める憎い父——

そう思わねばならぬ筈の私が、どうしても憎むことができず、却ってそれを秘かに希うような得体の知れない奇妙な気持が、私の心の中に動いているのを、どうすることもできなかった。

月の光は愈々冴えて、真夜中の庚申堂のほとりに、不思議な雰囲気をかもし出して三つの影を刻みつけていた。



新稿

ある夢想家の手帖から

理念イデオロギーと行為タートとは性エロチックの分野に
おいては等質である

— キント —

沼

正

三

第一四章 白人崇拜

私は西洋と云うところを、そんな貴い麗い土地だとは知らなかつた。……私はもう支那の国には用はないのだ。南京の貴公子として世を終るより、お前の国の賤民となつて死にたい。

——谷崎潤一郎「人魚の嘆き」

さて、前章までに考察して来た白人に対する日本人の劣等感、特にマゾヒストの場合においては、どういう転帰をとるか？

マゾヒストは、対象たる女性をドミナとして理想化し、神格化する。この場合、極端な自己卑下の心理操作を行うのである。これが更に日本人一般として白人に対してもつ劣等感を結合したら——こ

こに生ずる心的傾斜が甚だ度合の大きなものとなることは今更、言うをまたないであろう。殊に種族的異別感が作用するから、神格化が容易になる。

「女神」として崇拜し易いのである。そして前々章に絮説した白色の皮膚の象徴性により、白人女性の肉体が崇拜の対象となる。理想のドミナとして（日本女性よりも）白人女性を仰ごうとする心境を白人女性崇拜と呼ぼう。

これは白人種崇拜に一般化される。日本人としての白人種への劣等感が、マゾヒストの場合には、（白人女性の肉体を觀念上、媒介して）、崇拜感にまで進化する。それは勿論、西洋文化への心酔を伴うであろうが、本質は「白い肉体の持主としての白人種への劣等感の肯定」である。これを「白人崇拜」と呼ぼう（第一章附記第

一参照)。

「夢喰う虫」以前の谷崎潤一郎は西洋趣味への惑溺を以て鳴るが、「独探」「人魚の嘆き」「白狐の湯」「アヴェ・マリア」「肉塊」「痴人の愛」等々の諸作品に明瞭な白人崇拜思想——白い女体への拝跪から西洋文物一般への心酔にまで達する——を看取しうるのである。佐藤春夫、小林秀雄、中村光夫……多くの人がこの文豪を論じて来たが、彼の白人崇拜をマゾヒズムとの関連において説いた人はない。中村光夫の「谷崎潤一郎論」は、谷崎文学の小児性を指摘した点、脱帽に値するが——ただ、それをマゾヒストの小児期退行心理と関連せしめるには至っていない——。西洋趣味については「谷崎の西洋に対する心酔は、彼自身の云う様に、その半生を貫いた激しい熱情であり、彼の芸術観そのものとも密接な関係を持っていますが、おそらく彼の抱いたすべての熱情と同様に、熱烈なわりに外面的であり……」とか「こういう風に扱われた『西洋』は、たんに彼の心の内部で皮相の影響しか及ぼさなかった……」とか、非常に外面的な皮相なものとしか見ていない。

そうではない。谷崎の場合は、マゾヒストとしての白人崇拜である。根源に「白い肌への劣等感」があり、それを合理化する為「西洋優越の肯定心理」が作用したと見るべきなのである。

「一体、西洋人がシャボンと云うものを発明したのは、日本人が糠袋を使うのと同じ様に自然な事だね。あの白い泡の立つものが白い肌の上を雪の様にとろけて流れて行くさまは、見ただけでもすがすがしい気がする。泡の色と肌の色とに何ともいえない親しみがあり、美しい調和がある。泡は肌に融け込むのを喜び、肌は泡に融かされるのを喜んでゐる。そこへ行くと日本人はそうは行かない。とてもこれだけの調和が取れない。どうかすると泡だらけの体が一層醜悪に見えたりする。黄色い肌の人間はやっぱり黄色い糠の方がいいのかも知れない。……」(アヴェ・マリア)

これはシャボンについての発想だが、谷崎の西洋文明観が「白色の肉体への拝跪」に根ざしていたことを示唆的に物語る一例と言えよう。谷崎がマゾヒストである以上、この白人崇拜心理は彼の本質から来ているので、決して外面的、皮相的と片付けてしまえるものではない。彼は後年、いわゆる日本趣味の作家になって、若き日の西洋趣味を清算した様に言われているし、作品の舞台や題材だけから見れば、その様にも思われるであろうが、例えば、昭和三十一年一月号の婦人公論に載った永井荷風との対談(「昔の女・今の女」)において、「好きな女のタイプ」として、荷風と口を揃えて、西洋人の様な女が良いと言っているのなどは、「白人女性への憧憬」が、この老マゾヒストの胸の奥底に今も秘められていることを悟らせる(附記第一)。外人と結婚し、バタ臭さに魅力のある女優、淡路恵子のファンであるという事実も、同じ様な解釈を許すかも知れない。——同じマゾヒストとして、私にはそれが分るのだが、それを見抜いた谷崎論はない。

然し、中村光夫氏にこれを責めるのは酷かも知れない。氏自身にマゾヒストとしての体験がない以上、谷崎の心理の洞察には、おのずから限界がある筈だし(附記第二)、仮に、この点に想倒して性心理学書を繙いたとしても、マゾヒストの白人崇拜なんてことは書いてないのである。けだし、西洋人学者には、こういう現象は資料的に全然未知であるし、日本人学者は向うの学説を鵜呑にするばかり、日本人マゾヒスト独特の心理には探求の眼を向けないので、性心理学界にはこの現象は知られていないからだ。

六年前、私が手帖旧稿(第二四項)で初めてこれを——告白を兼ねて——指摘した時には、引例としては、第九章の投書者の自伝の外には、角田平八氏「あなたの鞭の下に」(二八年一月号)(日本青年が神戸、六甲山で知り合った米人女性に誘われて行って乱暴され、縛られた上で玩弄物に仕込まれて、以後、定期的奉仕させらる

る様になるという話)を挙げ得たに止まったが、後、間もなく、天泥盛栄氏「被虐性愛者の手記」(二八年八・一〇・十一月号)(ソ連女士官らの捕虜となり、魔法で馬に化せられ、乗馬として使用される幻想)が出、暫らくして、又長谷川洋氏の次の文を得た。二九年四月自家用車運転中の米国婦人が日本のタクシー運転手と口論して、傷害を加え(加えられたのではないから注意)検挙された事件について本誌編集部に寄せられた感想である。

『これはお客が捨てていった新聞ですが、大阪では或いはこんな大きく取扱っていないかしらと思ってお送りする次第です。

征服者であるアメリカ人に日本人が手向いする等、とんでもない事だと僕は思います。僕の考えではこの人達のいうことはよく分りませんけれど、どうやら、先に殴ったのはアメリカ婦人だったらしいですね。でも僕だったら、殴られたって土下座して謝ってしまいますし、いえいえ第一、アメリカ人の車を追越すような失礼な真似は致しませんよ。

僕は学校の頃に、外人の男の子や女の子のドレイにされていた事もありますので、今でも外人を見ると、昔の兵隊さんで、二等兵が将校を見る以上の羨しさと、恐れと服従を感じます。

そして、それでいいのではないのでしょうか？ 顔付きから云っても、ヒフの色から云っても、とも角、白人が僕等より二段も三段も上等高級な人類である事は間違いありません。僕は終戦の時には、日本人全部が白人のドレイにされて、顔にナンバーの焼印でも捺され、全部手錠足枷をはめられて、追いつかれるんだと思つて覚悟していました。外人を崇拜する気持は、今でもかわりありません。

自由とか、独立とか申しますが、大きく見たらやはり日本は白人の支配下にあるんじゃないでしょうか？

この新聞に出ている日本側が、良いか悪いか、僕には判りませ

んよ。ただ、もし万一、僕がこれに関係している人間だったら是非を問わず、絶対服従の態度をとります。

皆さんなら、いかがなさいますか？

又、先頃、マゾ派の驍將黒田史郎氏は、私への通信で次の如く書かれた。承諾を得て引用させて戴く。

『日本人は猿の様に醜く、西洋人は色が白く彫りが深い聰明な相をしている。子供心にも、それを意識したのは、種々のニュース写真や映画でした。何々大使、何々全権という日本代表が向うで会談する場面など、こちらが恥かしくなる位、日本代表はみすばらしいのです。戦争中の写真でも、向うの捕虜の方が立派で、日本兵の方がずっと卑小に見えます。特に敗戦直後、マ元師と天皇が二人並んだ写真は実に印象的です。天皇はチップケで貧弱、マ元師は丈高く堂々、なんにも説明はいりません。もともと日本人は西洋人に勝てっこなかったんです。……あらゆる面から見ても、そこに感じられる日本人としての劣等感こそ白人崇拜の母体となつたものと思います。聰明な女と愚鈍な男、この取り合わせをあなたはどうか考えられますか。丈高く美しく気品ある白人女性の前に猿見たいな顔の貧相な日本男性、ただそれだけで立派に一つの構図が出来上っているのではないのでしょうか。……』

家畜化小説については後章(第一六章)で述べるが「第七天国」の夢想家麻生和夫氏(白人崇拜でないと自分ではいわれるが)の「大和民族の退化妄想にしても、真木不二夫氏の「黄色オラミ」にしても、白人崇拜観念なしには成立し得ない。

更に、近時、とやま・かずひこ氏も——氏の関心は極度に汚物に集中しており、正統マゾヒズムの全分野への理解は必ずしも期待し得ないと思われたにかかわらず——「マニアの記録」(六一項)(昭和三年一〇月号)において、同好の友人が米国婦人の靴の下に、わざと手を出して踏まれることを敢てしたというアブノーマルな行

為を述べ「吾々の崇敬する美しい白人女性が思い切り全体重をかけて踏んで下さった」ことを歓喜し、外人ハウスのボーイのトイレ奉仕の妄想にまで及んでおられる。(氏には今迄、白人崇拜的色彩の文字はなかったことから推し及ぼすと、本誌上の多くのマゾヒスト諸氏も、明言されぬ場合にも内心には、この傾向があると見て良いだろう。麻生保氏が外国の女王達に示される強い関心も、白人崇拜的な心理を感じしめる様である。)

これらは、私のいわゆる日本人マゾヒストの白人崇拜心理なる現象の充分な例証たりうると考えられる。

マゾヒズムの概念をセクシュアルなものに結合させて理解しようとする立場からは、この白人崇拜心理は、語の概念をはみ出した現象とも言える。然し自己卑下というマゾヒズムの本質的特徴から言えば、白人種に対して有色人種の感じる種族的劣等感はマゾヒズムと同質の、少くとも極めて近縁のものである。——これは私達有色人種だけが感じるマゾ心理であって、いわば、白人マゾヒストには味わい得ない深い境地に私達は到達できるのである。日本人に生れて良かった、と思う。——

第一章の初めに私は、第九章の投書青年が英人夫婦の隣人となつて、それ迄覚えなかった家畜化願望を感じるに至ったのは何故か? との問を提起した。今、その問いに答えることができる。マゾヒズム的自己卑下と白人崇拜との心理的同質性ないし近縁性から、自己卑下の願望中に本来含まれている家畜化の契機は白人との接触によつて容易に誘発される(前章の題辭を味読せられよ)。この青年は大学生だから白人への劣等感は強い方であつたろうし、紛れもないマゾヒトである。美しい金髪女性が犬を仕込む光景に「犬になりたい」気持を起したことも、考えて見れば、必然的とさえ言える様な気がするのだ。

附記第一 なお「谷崎潤一郎読本」(昭和三十一年三月「文芸」

増刊)の伊藤整、武田泰淳、三島由岐夫、十返肇との座談会において、次の様に言っている。

三島 つまり「オナミ」をお書きになったころの西洋人崇拜についていいですか、ああいうお気持ちはまだどこに残っているしやいますか。

谷崎 ああ、それはあります、ええ。

三島 殊に西洋の女に対する……?

谷崎 ええ、それはあります。

良い質問であるが「まだ残っているか」という問い方には、いわゆる西洋趣味清算説が、前提になっている。私をして言わしむれば、谷崎の理想のドミナは終始、白人女性だったに違いないので、残ってるなんてものではない筈だ。

附記第二 例えば「異端者の悲しみ」は、自分の心裡の畜生の性を自覚したマゾヒストの深刻な自己嫌悪や恥辱感から来る異端者意識を無視しては理解し得ないものであるが、佐藤春夫は「偽悪者潤一郎は自ら異端者を名乗っているが、その作にもその人中にも一向異端者の面影は乏しい」といい、中村光夫も「章三郎(主人公)の犯す悪徳は、ただ友人との交際で約束を守らぬとか、借金を返さぬとか……という程度の、人生の交通規則違反といった、些細な日常道徳への背反であり、これを『異端者』とか『悪魔』という大袈裟な言葉で呼ぶのは、むしろ滑稽な不調和を、現代の読者には感じさせます」といっている。二人ともマゾヒストの異端者意識に理解がない。「我ながら、己れの精神の病的なのを訝んで、自分はたしかに気違ひであると信ぜざるを得なかった」という主人公の独白をさえ、実生活のだからしない偽悪者のてれかくしに過ぎない、などと見ているのである。「饒太郎」ではクラフト・エビングへの言及さえあるのだが、……。

第一章 有色人種家畜観

憤慨しちまうのは、ゴリラや猿の檻を見て行くと、土人が全然同じ様に柵の中にそれぞれの郷土の小家を造つて貰い飼われていることだ。……土人は動物の成り上り、自分達は神様から成り下つた者、その間の雲泥の差が只程度の問題でなく、全然質を異にし越えられぬ溝があると云わん許りの仕打が憎らしい。……（北欧めぐり、ハンブルヒ）

——市河晴子『欧米の隅々』

有色人種の側に存する劣等感に対して白人種の側には優越感が存在する。それが有色人種「劣等人」観となるのだ。

「最高の能力と知識とを有する人間即ち最高の力を有する人間が、劣等人間を支配し、処置するのは、自然と神との命令である。動物が他の動物を餌食にする様に、人間が他の人間を奴隷にするのは、同じく自然の命令である。」（トーマス・R・ディユー）

「もしここに、しなければならぬ奴隷的な仕事があるならば、それを遂行するために奴隷的人間が必ずそこになければならない。」（ウイリアム・ハーバー）

これらは奴隷制時代の米国南部人の言説である。この「劣等人」黒奴には人格が認められない。それは、むしろ「獣畜」というに近い存在であった。——大体、異人種を獣畜視するのは西欧的伝統では珍らしいことでない。中世の領主達は外国人を擱えて一年間、領内におけば、これを自分の農奴と主張し得たが、この権利は「獵獸捕獲権」と称せられた。況や劣等な有色人種をや。

そんな古いことでは……というなら、近くナチス・ドイツは、ゲルマン民族至上主義を唱へ、アリアン族以外の人間を獣畜視した。アリアン族（北方人種）が初めて犁を發明した時、それを曳くべく

繋がれたのは劣等民族だったのであり、その後馬や牛がこれに代った。つまり「最初の家畜」はアリアン族に征服された劣等民族であった、とは、ヒトラーの教説である（旧第七九項「最初に犁を引いたもの」に詳説した）。されば「世界中でわれわれドイツ人だけが獸に対して正しい態度を知っているが（附記）、われわれはこうした人間獸に対しても正しい態度をとるであらう」（一九四三・一〇・三・ヒムラー演説。竹山道雄氏の文章による）。

もっとも、ナチスはドイツ人の集団發狂現象であつて、この種文献は正常なドイツ人の心理の説明に引用すべきでない、という意見があるかも知れない。然し、ナチス以前から、ハーゲンベック動物園で蜜地の原住民が動物として飼育されていた（題字参照。この記事は昭和六年）事実は何を物語るだろう。日本が抗議する迄はアイヌ人の檻もあったそうだ。ガーネットの「動物園に入った男」は虚構の戯作に過ぎぬが、世界一の動物園で有色人達が檻に飼われ、ドイツ人達がこれを畜類視して怪しまなかつたことは、現実なのだ。狂氣時代にナチス人種論が罷り通り得た基礎には、この現実——ドイツ人達の有色人種、畜類視——が存在したのだ。發狂した人間の喋ることは、ふだん抑圧していた無意識の願望であることが多いのである。

米国南部の黒人就學問題は次第に黒人に有利に展開している。徹底的な人種差別主義をとる南阿連邦（旧第一〇八項）は国連で非難されている。……然し、これらは、要するに人類の理性がそう命じているに過ぎない。理性は深層心理を変えることはできない。抑圧できるだけだ。白人が有色人に達して持つ肉体的精神的な優越感、そういう深層心理に根ざしているのである。黒人相手に白人女性が羞恥を忘れる現象を、彼女等の獸視意識から説明したエベルハルトの説（旧第一〇四項）も、この様な無意識的な畜類視を前提としてのみ納得できるものであらう。

無意識の願望は、発狂者の言辭以外にも、夢を分析して知ることができる。有色人種畜類観を展開するナチス理論を狂者に譬えるなら、次の小説は、平時の夢とも言えようか。

カルル・チャペク作、樹下節訳『山椒魚戦争』

現在は、三一新書に入っているから、入手は楽である。ポケット版の Bantam Books にも "War with the Newts" として収められている。

この作者チャペクは多才な人だが、^{ロボット}人造人間を扱った戯曲で特に有名だ。「山椒魚戦争」は晩年の傑作で、諷刺文学としては「ガリヴァー旅行記」にも匹敵するだろう。

偶然、インドネシア諸島のある入江に発見された一種の山椒魚——直立し、手で作業し、感受性に富み、話したり読んだりでき、つまり理性を備えている——の物語で、人間は初めこれを真珠採集に利用し、次に水中工事に使用し、その高い繁殖率を知ると安価な労働力として広く利用するに至る。資本家は山椒魚シンジケートを設立する。山椒魚は次第に人間の技術を身につけてゆき、最後に水中国家を設立して人類社会に反逆挑戦し、陸地を蚕食して入江にしまう……

こういう梗概である。終の部分は国際社会及びファシズム国家に対する批判になっているが、それ以前の部分は資本主義、殊に独占資本と労働問題を廻る縦横の批判となっている。そして、この安い労働力として商品化される山椒魚が、帝国主義が東洋の植民地に発見した有色人種をモデルにしていることは解説をまたずして明らかである。理性を備えた家畜たる山椒魚は、白人種の優越感が劣等人種にとらしめた夢の中の姿なのだ。そしてそれ故に、それは家畜化願望あるマゾヒストにとって、感情移入の対象となり得る存在なのである。

拔萃しよう。この入江に遊んだ金髪白哲のハリウッド女優の美に

うたれて山椒魚達が自発的に真珠を彼女の足許に捧げに現れる条りも面白いが、ブロンドの優越については既に十分述べたから、割愛し、ここでは、山椒魚飼育場の条りを紹介する。

山椒魚飼育場（英訳では Newt Farm）……これは数キロに及ぶガランとした海岸に過ぎません。そしてところどころに波型ブリキで屋根をふいた小屋がポツンポツンと立っているきりなのです。一つは監督の小屋、もう一つは獣医の小屋、そのほかのは番人の小屋です。引潮になってはじめて、海岸をいくつかのプールに分けている長い堤が（畧）見えます。一つは「卵」の入っている所、もう一つは班長級の山椒魚の入っている所といった具合です。それぞれの種類（沼注。この前に、班長級、重量級、作業集団、はんばもの、ローズもの、卵（仔）の各種について説明してあるのである）は別々に飼育され、訓練も別々に行われています。訓練は夜に行われます。

たそがれになると、山椒魚どもが、海底の穴の中から岸へ上つて来て、指導係のまわりにと集まります。最初の訓練は、^{トキシン・レックス}語学です。（畧）たとえば「掘る」といった言葉を言っけさせ、次にその意味を実地について教えます。おわると指導係は山椒魚を四列縦隊にならばせて、行進の諸訓練を行います。（畧）訓練がすんでから、山椒魚は、とうもろこしの粉と脂を主にした山椒魚ビスケットをもらいます。班長級と重量級には、このほかに肉があたえられます。怠けたり反抗したりした場合には、欠食の罰が加えられます。（畧）山椒魚は肉体的な痛みに対しては、あまり敏感ではありません。（畧）

積込みは夜行われます。飼育場の監督である高級船員と獣医が（畧）テーブルを前にして坐り、一方、番人と船の乗組員とは海に脱れようとする山椒魚の退路をたつ役目をひきうけます。次々に山椒魚がテーブルの所にやって来ます。そこで「適」「不適」

縛の女性達

水 沢 雅 美

がきめられるのです。それが済むと、発送さるべき山椒魚は、彼等を船まで運ぶ舢に這いこみます。(略)つまり、かねてから命令には直ちに従うように訓練されているわけです。(略)

どの輸送船にも牧師が乗り込んでいて、(略)毎晩、山椒魚にむかって、人間に対する尊敬を教え、山椒魚の幸福を父親の様にねがうほかに他意のない未来の主人への感謝、服従、受敬の義務について説教を行います(略)。

また最近、山椒魚の仔は、いわゆる山椒魚プール(英訳では Newt stable 畜舎)にさしむけるために、購入されています。つまりこのプールでは、敏捷なスポーツ用の山椒魚を、よりわけた上で訓練しているのです。さて、この山椒魚を貝殻形に作った平底船に三匹ずつ、つなぐのです。山椒魚をつないだ貝殻舟競争は目下、大流行で、パーム・ビーチ、ホノルル、キューバなどでは

一、看護婦

純白のボンネット、純白の制服のドレス、純白のナイロン・ストッキング、純白のハイヒール、純白の手套、すべて白づくめの中に可愛い、唇だけ、紅にルージュし、短くカットした黒髪、小柄ながらぱっちり大きく見ひらかれた円らかな目の少女の体に、無惨に喰い入る縄、縄、縄。

紅の優しい唇が押しあけられて真白な歯並に固く噛まされるナイロン・ストッキングの猿ぐつわ。手足を縛しめられた大きな眼に、ばいの涙をためた彼女、瀬川圭子のほっそり

アメリカ女性に一番好まれる娯楽となっています。そして「トリトン競走」(沼註。トリトンは神の子で半人半魚)だとか、「ヴィーナス競艇」(沼註。ボチチェリの「ヴィーナス誕生」で金髪裸女が貝殻に乗っているからだろう)だとか呼ばれています。装飾をほどとした軽い貝殻舟の上には、丸裸とたいしてかわらない豪華な水着をつけた競技者が、三匹一組の山椒魚につないだ絹の手綱を握りながら立っています。最後に、ヴィーナスの称号が賞として授けられるわけです。(略)

附記 ドイツ人は猛獣の調教に世界一巧みである。ハーゲンベック動物園のみでなく、世界的なサーカスの調教師は大抵ドイツ人である。ソ連のポリショイ・サーカスの団長ボリス・エーデルもドイツ系の人である。犬種の作出もドイツ人、イギリス人(いずれも北方人種)が一番うまい。

した左腕に、麻酔の注射針がぐっと突き刺された。やがて、ぐったりと全身の力を抜いた彼女はもどけたゼンマイのように床の上に投げ出された。

二、田舎の女教師

山の中の小学校に赴任してきた都会育ちのお嬢さんタイプの女教師。

美人で明朗で、それに親切だと評判の彼女は、分教場から本校への帰途、雨の山道で山窩に襲われる。傘ははねとばされ、レインコートまで剥かれて……。

大きなカラー・ダブルボタンに巾の広いベ

被虐美への イメージ

痛ましき緊

ルトのついた淡オレンジ色のワンピースドレス。短い袖からすらりと伸びた白い腕は、哀れにも後手に縄できつく縛り上げられ、たっ

ぷりと布地を使って拵がったドレスの裾からほっそりとしているが肉のついた長い脚が、六十ゲージのフルファッションをびったり穿



ぐったりと全身の
力を抜いた
彼女は

もどけた
ゼンマイの
よう

いて、オレンジのハイヒールの足もとも危く曳き立てられてゆく。

セシルカットの短い髪。淡グリーンノベレ一帽。ボツと興奮にほてった紅い頬、ルージュなしの唇が、かるく噛みしめられているのがかえって痛ましい。涙をじっと耐える二重瞼の大きな眼。

やがて猿ぐつわを噛まされて、可哀そうな捕われの女、山根麗子は深い密林の中へ引きずり込まれてゆく。後から蹴られ、棒で小突かれながら……。

土砂降りの雨に全身濡れねずみとなり、グツシヨリと髪も乱れ、そして、赤土に滑っては倒れ、倒れては引き起され、泥まみれのワンピース、千切れるボタン、胸もとが大きく乱れて開き、いつしかブラウスのボタンもとれて、ふっくらとしたブラジャーなしの右の乳房が白桃のようにのぞく。

ハイヒールはいつしか左足のが脱げてしまいい、泥だらけのストッキング、はだしになった左足の靴下は、ぬかるみの中でガーターが引き切れて膝のあたりまでずり落ち、右脚もシームラインは歪み、皺だけらになっている。猿ぐつわの下から洩れる鳴咽。

三、女子大生

エンジ色のジャケット、白いカラーと折返した白い袖口。ブリーツのスカートが拵がっ

ている下からのぞく肉づきのよい脚。

淡ブルーのボンネット、紅い眼鏡、ヘップバーンカットの髪を軽く前にバングしてる少し肥り気味の少女。濃いグレープの六十ゲージのフルファッションが、はりきった肌の脚をピタリとつややかに包んでいる。黒のサンダルハイヒール。

女子学生、津田淑子はナイロン黒手套の両手に手錠をうしろ手にはめられ、鎖でギリギリ縛られ、革のベルトの猿ぐつわをきっちり口に噛まされ、両脚も鎖でむごたらしく括られ、床に転されている。

四、ピアニスト母娘

瀟洒な黒のスーツ、タイトスカート、純白のブラウス、純白のネクタイに黒のナイロン長靴下にはっそりした脚を包み、踵の高い黒のパンプスを穿いた山野ひろ子女史は、四十を少し過ぎているが、残んの色香も十分の未亡人音楽家。

今、白手袋の両手に手錠をはめられ、うしろ手に、更に両脚、両腿とギリギリと縛り上げられる。軽くウエーヴした長い髪、美しい眸、音楽一途に生きてきた若々しいこの未亡人は、突然押し入ってきた怪漢のために誘拐されようとして、身体を自由を奪われているのだ。

母親である未亡人の眼の前には、今しも一



人娘、みどりが縛られようとしている。

純白の袖口を脇まで折り返えしたブラウス
紅いブローチ、紅とブリューのタータンチエ
ツクのショート・スカートからは可愛い丸
い膝小僧をのぞかせ、すらりとしたつややか

な足に白ソックスを穿いた女学生のみどりが怪漢のむくつけき手によって縛られてゆく。

「得啱知唔……」

やっと一声、涙にあふれた目で母親の姿を追う。猿ぐつわをはめられる娘を美しい母娘

は白ハンケチの猿ぐつわの下から無言でじっと見つめるのだった。

五、アルピニスト

燕嶽の谷峽いの岩蔭で縛り上げられようと

する二人のうら若い恋人。

オレンジのジャンパーの衿もとから紅とグレイのタータンチェックのブラウスをのぞかせ、紺のストラックス、上端に赤い縞の入った

言ひな捕われの

商品二個は

こうして

男達の

北月に



紺の毛のストッキングを膝下まで穿き、グリーンのソックスを重ね登山靴、紅いネッカチーフの女子大生、鈴木あき子。

同じ淡オレンジのジャンパー、グレイのストウエーター、紺ズボンに彼女と同じ色のストッキング、ソックス姿の大学生、山口康夫。

二人は麻のロープでがんじがらめにされ、猿ぐつわをはめられてしまうと、男達のリュックに別々に体を折り曲げて押し込められてしまう。

「うううう」

彼女の涙に一ぱいの目。康夫の口惜しげなそして彼女の姿を痛々しげに見つめる眼。哀れな捕われの『商品』二個は、こうして男達の背に軽々と負われて下山していった。果して二人は何処へ運ばれてゆくのであるうか。

六、令嬢貿易船

薄暗い船艙にギッシリと詰め込まれた多くの女達。或る者は柱に縛られ、或る者は床に押しこめがされている。

一体どこから、このような沢山の若い女を捕えてきたのだろうか。一緒にそれぞれ十人以上以上の美しさを具えた近代的な美人ばかりである。

涙、悶え、喘ぎ、呻き、泣き声。

母と娘、二人の恋人……。

何処へとも知れず闇から闇へと密売されてゆく捕われ人達。

――了――

本誌百号突破記念懸賞原稿入選作品

狙われた女給の手記

日、下 絹 子

(1)

まだ寝たりない重いまぶたを少し開けると、朝日がカーテンの隙間から斜めに射し込んで部屋の隅にまで光がとどいていました。まだ九時前だなと思っていると、管理人のおばさんがドアをノックして「電話ですよ」というので、ちよつと手で髪を直してからシュミーズの上にコートをひっかけ電話口に出ると、やっぱりお店のガイド・ボーイのケンちゃんだった。二人で映画を見ようと昨夜、約束しておいたのですが、こんなに早くから睡いのを起されると、プリプリおこりながら、昼から来るようにいつて電話を切り、玄関で牛乳を取って来て、またふとんにもぐり込みました。昨夜帰りに、

みんなदैいつものお好み焼の店で、おそばを食べたきりで、お腹が減ったので、ふとんの中で少し堅くなったパンを牛乳でお腹に流し込んでから、もう一眠りにかかりました。うと／＼夢を見ている様な、寝ていない様な、はっきりしない時間が過ぎて今度、目を覚すと、もう正午近くになっていました。

お茶碗にお米をすくって芳江さんのところに持っていくと、隣りのお熊さんが「これも一緒にお願いするわ」とタンスの引出しをあけて、お米をすくって出しました。

私の部屋の西隣り二つが、お熊さんと芳江の部屋になっています。二人とも私と同様、女給で、お店は「モンテカルロ」なのです。このアパートは炊事場が共同ですから、三人で交替に食事の当番を

きめています。お熊さんの本名は熊田照子といって、もう三十を幾つか出ている様子。口の悪い人は薩でお熊ババアといっています。ある商店主の二号になっていたのが大分以前にお払い箱になったことを、芳江さんが私に教えてくれました。だからタンスや鏡台、ソファまで豪華な調度品が部屋一ぱいに入れているのですが、中味までは整わなかったと見えて、タンスにお米を入れています。その芳江さんのことは、お熊さんの口から私に、みな伝えられています。実家がこの町にありながら、わざ／＼アパート暮らしをしていて、そのくせ時々家へも帰っているらしいのです。「家にうじ／＼弟妹がいて貧乏だから自分だけ楽になりたいんでしよう」と、お熊さんは彼女の悪口をいいますが芳江さんなんか、もっと着飾れば美人の部類にはいるのに、いつも地味な服装をしていますし、女一人のわずかな生活力で辛うじて現実にならないうるだけで、楽なんでもものではありません。誰でもいいことが来るのを願って、つらいのを辛抱しているのですから——。私がこのアパートに来るまでは、二人の仲は良かったらしいのですが、私が来てから以前ほど親しくないらしく、同じお店に勤めながら一緒に帰って来ないし、二人で私に蔭口のいいことをしています。私自身は若い芳江に競争意識はあっても憎むなんて感情はありませんでした。

お昼過ぎ、ケンちゃん長い髪をトンボに光らしてやって来ました。

「きようは一緒に映画に行けると思うと、ゆうべは寝られなかったよ」

「いうことがオーバーね」

二十歳にもならない、女性的な顔立ちのこの男に情婦があるなんて、とても思えないくらいです。いつだったか夜の町を歩いていると、タクシーを止めようとしているケンちゃんが目につき、その傍

にまだ少女の様な娘がくっついていてのを見かけたことがありました。彼が少しかわいい顔をしているので近寄る女がいるのでしようが、見かけだけはウブな若者に見えても、女に対する気兼ねのなさや遠慮のない図太さは三十男と変らない様です。

お茶を沸すにも一々炊事場に行かなければならないわずらわしさに、すぐ出かけることにしてドアの鍵を持って、

「さあ出かけるわよ」

と追立てると、突然私の首に腕をまきつけて来ました。

「誰かさんと間違えているんじゃない？」

とはげしくふりほどきました。

お店が引けてF子のお客に私たち数人がタクシーで送ってもらうことになり、お医者さんの薬の包みのように座席につくなって乗り込み、途中で一人降り二人降り、あとはF子と助手席のお客をのこして、それぞれの家に送ってもらいました。私が部屋に帰りつくと、さきに帰っていたらしいお熊さんが、キーキをもってこちらの部屋にやってきました。疲れているのに話し込まれては、やりきれないと思しながら、ついお菓子に手が出てしまいました。

「ふとん敷くから、どいてよ」

ペタリお尻をすえたお熊さんを追い立てようとしたが、聞こえない振りをしているので「おくまさん！」と耳許で大声を立てると「おう」と男の様な声を出して立ち上るや

「お熊とは何さ」

と床をのべている私の後から、背中をいやという程たたきました。アパートの人達がみんなお熊さんと呼び、本人もいやな顔をせずに返事をしているくせに、時々思い出した様に怒るのです。

次の日、朝からセットに出かけて帰って来たら、留守中に郵便が

来ていました。玄関で管理のおばさんから部厚い封筒を受取ると、珍らしく嫁いだ妹からのもので、上海時代の高女の名簿が出て来ました。最近、卒業生達の連絡が取れ出したことは、うす／＼聞いていましたが、もうこんな立派な名簿まで出来るようになったのかと、あらためてこの混乱した終戦の年から指を折ってかぞえて見ました。懐しい名前が並んでいる中で、齒の抜けたように私と同様、氏名だけで住所も何も白紙の人がかなりあります。戦争のため楽しい筈の青春がメチャ／＼になった私達世代にとって、狂った齒車にまき込まれた人がきつと多いことでしょう。ついあれこれ思いをめぐらして、暫らくは帰らない遠い乙女の感傷にふけてしまいました。その夜はどうも気が滅入って、いつもの様な陽気にはしゃぐことが出来ず、指名してくれた役所の課長だというFさんにかまされて困ってしまい、元気をつけようと、いくらお酒を呑んでも胸にたまるだけでした。見かねたケンちゃんやんがバーテンに頼んで睡眠剤を入れたジンフイズをのませてしまったので、Fさんはよだれを垂らして眠りこんでしまいました。両方からかつぐ様にして車にのせて送り出す始末で、「効きすぎたらしいわね」と、後でケン坊と二人で肩をすくめて笑いました。

ある日の午後、退屈しのぎにまん中のお熊さんの部屋に三人が寄ってトランプをしました。三人ともスリップ一つで足を投げだしたり、寝そべったまま、おせんべいをかじりながら、七ならべを何回もやって成績をノートして合計します。だれでも六や八を持つと、なかなか出さずにパスをするのですから、つながらない数をもった者はブツ／＼こぼします。殊にお熊さんが負けたときなど、その要所のカードをおさえていると、すぐつねりに来たり、ひっぱたくので、お熊さんが先に負けてカードを投出すと手の届かない所に逃げてから、私と芳江さんの二人切りの勝負をします。あとで私の押え

ていた礼でお熊さんの負けたことがわかると

「この人、大分意地が悪いよ」

と私の腕のあたりに手がのびて来ます。

「芳江だって、ここんところ、おさえてたじやないの」

「あんたがこれさえ早く出してくれたら、つながつたのに」

勝負は芳江さんが勝ったのに、芳江さんには何もしないで私の二の腕を、またつねるのです。それでいて自分がさきに上ってしまうと、

「うちが応援したげるから、しっかり」

と寝そべっている私を、びし／＼たたきます。

「何もってるの？ 悪い手ね。これ／＼、これを出すのよ」

私の手のうちを上からのぞきこみ、背中によりかかり乍らぶつので、私は坐り直してムツときつい顔をしました。それでお熊も鼻白んでしまい、一ぺんに座が白らけてしまいました。

芳江さんのいない時に二人だけでやったこともありました。お熊さんが前からコケシを沢山もっているのので、

「かわいいわね」

とほめたら

「好きなのがあったら持っておいきよ。」

と、いいます。

「せっかく集めているのに、もらったりしちや悪いわ」

と断っているのに、無理やりくれたことがあり、それから時々コケシの会とかいうのから送ってくる度に、少しづつもらっていました。お熊さんだって高いお金を出して買っているのですから、ただ貰っては悪いのでお金を払うというと、

「水臭いこというと、ぶつよ」

というので、そのままになっていました。その日も小包でいくらか送って来たのを、二人であれこれ批評しましたが、二つばかり上

げるといので貰ったあとで、ランプを取り出しました。二人だけでは、ちっとも面白くないだろうと思いましたが、コケシを貰ったお礼に、おつきあいしてしまいました。たった二人ですから作戦もなにもあったものではなく、すぐケリがついてしまいます。負けたらシッペという約束で私が勝ちましたので指でお熊さんの額を、はじこうとすると、

「顔は痛いから背中をどやしてよ」

と、いいます。私が、どんと背中を叩くと、お熊さんは大げさに顔をしかめて

「痛いよ。肋膜になるわ」

という。二度目も私が勝って、

「もう、よすわ」

といいますと、勝ってやめるのは、ずるいからもう一度と、ひつこく誘います。

「だって二人だけでは面白くないじゃないの」

「勝ったものが、もっと強くぶたないからよ。うちが勝ったら思い切り叩いたげる」

と張切ってカードを集めにかかりました。お熊さんを叩いたって少しも面白くはないし、私が叩かれるのは尚更いやですから、嫌々やっていると今度は私が負けてしまいました。

「さあ、覚悟はいい？」

後に廻ったお熊さんの動きに警戒しながら

「どうするの？」

というと、

「あんたの一番鈍感なところを叩いてあげる」

といいます。スッーと顔から血が引くのを感じながら、

「あたし帰るわ」

といってドアの方へ行こうとすると、お熊さんが先回りし、ドア



の前で手を払げて子供の様に通うせんぼをしていました。

「どいてよ」

「帰してはしかなかったら、あちらを向いて、お尻をお出し」

「馬鹿なこといわないで！」

その時、お熊さんが猛然と組みついて来たので私は驚いて胸を抱きかがみこむと、お熊さんの片手が私の首を巻きました。

「苦しい！」

私は、お熊さんの腕に噛みついたのです。

「痛っ！」

と飛び上ったお熊さんが、歯形のついた腕を撫でながら、

「ひどいことするのね」

と身をくねらせて痛みをこらえていました。私は「ホホホ……」と泣き笑いしてしまいました。

その後、芳江さんが胸を病んで入院してしまいました。見舞いに行かなくてはと思いつつ、時々芳江さんの部屋の前を通る度に思い出すだけで、そのままになっていました。ある日、病院に行つて来たらしいお熊さんが、

「お金がないのね。施療なんですって」

というので、病院の場所と病室の番号を聞いて出かけました。

同室の数人の病人の視線を浴びて、とまどいながら、やっと芳江さんを探し当てベッドの近くに腰掛をもって来て坐りました。もともと素顔のきれいな芳江さんの顔は、後頭部で無造作にたばねた髪とマッチして清潔に見え、瞳だけが濡れた様に光っていました。病室にある三つの花びんの花は、もうすっかり元気がなくなっていたので、もっと買ってくればよかったと思ひながら、持って来た花を等分に挿しかえました。

「元氣を出して早くよくなるのよ」

「ありがと、入院したら少し肥ったわ。でもまだ一、二年かかるらしいの。治ったらもう女給なんかやめるわ」

といていました。あまり病人に病気の事を聞いては悪いので、話題をかえようと思って、

「せっかく気の合うもの三人が仲良しになれたのに、一人欠けてつまらないわ。あなたがいなくなつて、お熊さんも淋しがってるわよ」というと、

「あの人、絹子さんが来るまで、うちをペットにしてたのよ。うちからあんたに乗りかえる積りなんでしょう」と笑っている。

「そうね、いやに親切すぎて気持が悪いわね。もういい男がよりつかないので女で間に合わせるのかしら」

と冗談をいったものの、またこんな話は病気に悪いのではないかと案じながら、看護婦さんが入つて来たのを汐に、

「また来るわね」

と約束して引揚げました。

二、三日すると、見知らぬ男が二、三人で芳江さんの部屋から荷物を運び出していました。一人の男が私に、

「これを妹があなたに差上げてくれというりました」

と常々、芳江さんが大切にしていた珠をじゅずみたにつないだ腕環の入ったケースを渡されました。小柄で、どことなく卑屈な感じのする男で、指にカマボコ型の大きな指輪をはめて、そのくせ靴は捨てても惜くないほど破れて、すり減っている。これがあのおとなしくて善良な芳江さんの兄さんとは、とても信じられないほどでした。

その夜、私は可哀そうな芳江さんのために涙を流しました。

芳江が入院してからは、三人の交替炊事もやめになり、お昼はい

つも外食する様になって、アパートには、ただ寝に帰るだけで、お熊さんとも隣同志でいながら、口をきく機会もほとんどなくなりました。私は少し暑くなった日中でも、さっさと出掛けるものですから、お熊さんには小憎らしく映っていたようでした。

その日、少しお店でお酒をのみすぎ頭が痛いので、アパートに帰ると洗面所へいって頭を冷していました。その時、後に人の気配がしてふり返るとお熊さんも、ちょうど帰った所でした。

「いまなの？」

「ええ、いま」

そのまま部屋に帰ってしばらくして、隣りからお熊さんが呼ぶので行って見ると、電熱器でうすく切ったパンをやいていました。

「食べない？」

「ありがとう。でも電熱使って大丈夫？またヒューズがとんだら、うるさいわよ」

という、

「ほかの部屋では一日中、じやん／＼電気を使ってるのに、うちやあなたのところは、ほんの一、二時間しか使わないでしよう。それでいて電気代は頭割りなんて不公平だわ。どの部屋にもメーターつけるべきよ。こんなときに使わなきゃ、引き合えないよ。さあ、靴下をおろして坐りなさいよ。バターもあるからさ」

というので、

「ええ、でも先に着がえてくるわ」

といって一旦、自分の部屋にかえりました。タオルのコンビネーションの寝巻に着替えると、もう動くのが嫌なほど、睡気と疲れが襲って来ました。そのまま蒲団に横になっていると、

「なあーに、もう寝たの」

と、お熊さんがはいつて来て鼻先にトーストをつき出すので、仕

方なしに手をのばして受取り、ムシャ／＼食べました。

「ちよっと、その寝巻、可愛いじゃないの。十代に見えるわよ」

「まさか」

とは、いったものの、こんな寝巻を着るとすぐ子供っぽく見えて面映い気がし、あわてて掛布団を肩のあたりまで引上げました。まだ母が生きている頃、私のお嫁入りの用意にと、貧しいなかからボツ／＼買い集めてくれた衣類のうち、いま残っているのは、つづらの底にしまっておくお召と、私自身で仕立て直したこの寝巻ぐらいのもので、古い思い出があるわけです。

「あなたは若く見えて得ね」

「そんなことないわ。お熊さんだって若く見えるわよ」

「そうだろうか」

「ホホホ」

お熊さんが急に深刻な顔付になったので、おかしくなって笑うと「なにを笑うんだね、この人は」

とおこられてしまいました。

「さあ、もう寝るわ」

という、お熊さんも大きなアクビをしたので、出て行くのかと思うと、私のそばに寄って来て、いきなり掛布団をはねのけ、

「よくもお熊なんていったわね」

と、かかって来ました。

「痛い！手が折れたら、どうするの」

ギリ／＼片腕をねじられ、悲鳴を上げながら

「そんなこといってやしないじゃないの」

という

「さっき、確かにいったわよ」

と、もう一方の手を取りに来ます。

「みんなが、そう呼んでるじゃないの。いまさら、そんなことをい



い出して怒る方が余程どうかしているわ」
お熊さんは後手に取られた私の手首に、しごきを巻きつけました。
「いい加減に冗談はよしてよ！」
私も本気になって怒りますと、
「おリンチよ。さあ、立って、立って。さっさと歩くのよ」

抱きかかえられるように廊下に出されそうになり、二、三度、ドアの所で踏ん張りましたが、ドンと双手で突き出されたとき、廊下の向うの端の方のドアが開く音がして、誰かが廊下に出たようでした。その気配に二人とも狼狽して、もつれる様に隣のお熊さんの部屋にはいってしまいました。お熊さんは口に手を当てシーツと制して、その足音をうかがっていましたが、その人は御不浄にでも立ったらしく、間もなく足音は遠ざかりました。私は入口に立って足音が消えると同じ時に、ドアに体当たりして外に出ようと思っていましたが、縄尻をもって引き戻したお熊は、ドアに鍵をかけて、窓にもすっかりカーテンを引いてしまいました。たとえ先程の人が私達の姿を見たにしても、隣同志の女給たちが何かしていると思うだけで、ドア一枚の内側で、奇怪な戯れが行われているとは想像も出来なかったことでしょう。

「とうとう、からめ捕ったわ。つつ立ってないでお坐りよ」

「こんなことして何が面白いの。帰らしてよ」

私が、いくら頼んでも、うまく行った計画にすっかり酔っている相手には、少しも通じないのです。部屋のまん中に縛られたまま少し膝をくずして坐わると、お熊さんは益々図に乗り、タオルで猿ぐつわをはめました。お熊さんは私の心が怒りではね上ったり、屈辱でのけぞるのを目の色で読みとりながら、一尺差しを取り出して縛り目にさし込み、ねじ上げて私を前のめりにさせて、背中あたりを軽くぶちながら、

「あんたは今夜は、うちのとりこよ」

というのです。畳の上を転がる様にして、お熊の手から逃れたと思うと、すぐに後から曳きもどされました。真赤な顔でウン／＼うめいていると、

「あんた好きよ」

と両腕で締木のように強く圧迫し続けました。

私は反射的に上体をはね返しましたが、すぐ髪を掴まれて引倒されました。まるでダルマさんのように倒されては跳ね起き、倒されては跳ね起きしているうち、心臓が破裂しそうに切迫し、頸が痛くなつて、口につめられた布切れが、無限に拉がるような幻覚となつて私を悩ませました。体をくの字にまげたまま、目だけに憎悪と怒りをこめて下から睨みつけてやると、お熊はちよつと、たじろいだ様子でしたが、すぐ氣を立て直した様に、指先に力をこめて脇腹のあたりの肋骨をグリ／＼つまみに来しました。

「キヤッ！」たったこの一撃から、私の全神経はお熊の指先にのみ、おびえねばなりませんでした。

「あれー、あれー」

声にならない悲鳴を上げて、自由の効かない体で逃げまわりました。

「どう観念した？ おとなしくしていたら、縄を解いたげるから。それとも、まだ暴れられる？」

引き寄せられてお熊の息が耳にかかりました。

翌朝、洗面を終わって帰って来ると、お熊が長いガウンをはおって出てくるとバツリ廊下で出合っていました。自然に下を向きたくなる気持に鞭打って顔を上げると、相手は昨夜のことなどケロリと忘れたように、ニコやかな顔でこちらを見ているのに、腹が立つやら、あきれやるやらで、何か声をかけたげなのを、ポンとそっぽを向いて通りすぎました。でもそれぐらいでは少しも、くやし

さがおさまらず、これからは、もう絶対に口もきくものかと決心しました。

「洗濯物、あつたら出してよ。一緒にやっただげるから」

といつて来たときも、

「いいわよ、もう結構よ」

と、すげなく断ってしまいました。

(2)

妹からの手紙の中で、引揚げ者に援護金が貰えるそうで、戸籍謄本を送るようにとありましたので、久しぶりにH市の叔父の家に行かなければならなくなりました。妹の籍は嫁ぎ先にはいつていますが、私のH市の市役所に頼まねばならないからです。

K電鉄のH駅で降りると、私がまだ叔父の家から毎日通っていた数年前とは大分、様子が変わっており、駅前の駐車場は大きくて立派になり、あの当時はなかった大きなパチンコ屋や、洋品店等が軒を並べているのを見て、以前ここには何があったんだったかなと思ひ出すのに一苦労でした。私は歩きながら町に残っている私の過去の姿を振り返っていました。そして当時、私達母子三人が引揚げてから、色々の辛苦を受けながら張りつめた気持で生きていた頃を、きのうのこの様に思い浮べることが出来ました。

叔父の家庭も、あの頃、結婚話のあった従弟にもう子供が出来、デパートに勤めていた上の妹もお嫁に行っていました。でもそれ以上に変っていたのは、一番下の従妹のまり子でした。昨年、高校を出て、しばらく家にいたのですが、駅前で喫茶店をやっている杉田という人から頼まれて、その店で働いているうちに、その杉田さんと恋をささやくようになってしまったらしいのです。叔母は、慌てふためいて本人を引き戻し、一時は大騒ぎだったらしいのです。

先方は三十すぎで妻子もあるのですから、結局、まり子が騙され

たのでしようが、本人は先方が妻子と別れて結婚するというのを、本気になって信じ込み、叔母が二人の仲を無理に裂いたと思って恨んでおり、私が行ったときには、人間が変わったように以前の快活さを失っていました。さすがに気丈な叔母も、我が子のことになると、すっかり頭を痛めてしまったらしく、前髪の所が真っ白に見えるほど白髪がふえていました。

あまり叔母が万事に干渉しすぎるからだ、私達母子にも冷たかった当時を思い出して、いい気味だとも思いましたが、気が弱くて何もかも叔母まかせで、陰で心配ばかりしている叔父を見ると、やはり気の毒でした。私の母と血がつながっているので性格も、そっくりなのです。叔父が私を片隅に呼んで、

「ほんとに先方は妻子と別れるんだらうか？」と聞きました。

「うそよ。向うは、まりちゃんの体だけが目的なのよ。杉田さんという人は、色魔なんだから」

私が、ここからサロンKに通っていたころ、杉田さんは今でこそ喫茶店や Grill やバーを経営していますが、当時は駅前でスタンドを開店していましたから、終電で帰る私と時々顔を合わすうちに、話したこともありましたが、自分のスタンドの女とあやしかったことも噂で知っていました。

「どうしたら、ええやろか」

「はっきり別れたらいいでしょ。先方から本人にそういわせなさいな」

「先方は、まり子にそのうちに結婚するといってるらしいんだが」
「だから、先方に掛け合って、はっきりして貰いなさいよ。まりちゃんには世間知らずだから、騙されているのに気がつかないんだわ」
さて先方に掛け合うとなると、叔父も叔母も尻込みしてしまいました。

「絹ちゃんほど苦労してると、こんなこともないんだけだな」
「ホホホ……、ほんとね。女たらし男たらしの真ん中で暮らしているんですもの。でも、私でよかったら掛け合って来てあげますよ」

先方の出方によっては、慰謝料でも取ってやろうかと勢込みましたが、時間が経つにつれて、いつもの私のむら気が出て、だんく熱がさめて来ました。

駅前の杉田さんの Grill に行つて、そこに働いているらしい中年の女の人に、

「このマスターいますか？」

とききますと、

「お宅、どちらさんですか？」

と、げんなりした顔で返してきました。

「ちよっと知り合いのものですけれど、マスターは？」

「いま喫茶の方ですけど、あなたはどなたですか？」

いなければいけないと早くいえばいいのに、まるで私と杉田さんの関係を嗅ぎ出そうとする様に、いじわるさと好奇心のかたまりの様な目で、ひつこくこちらの名前を聞くので、こんな人に尋ねなければよかったと後悔しながら、いよく嫌気がさすのを感じつつ、急いでその場を離れました。

「お久しぶりでございます。私、だれだか覚えていらっしゃる？」

「覚えていますとも。相変らず綺麗ですな。こちらに帰つとられるんですか」

「ええ、ちよっと用事があって叔父の家へ来ましたの」

喫茶店の隅の席で会ってもらって、やっと話の糸口をつかみましたが、これからの掛け合いを思うと、胸がドキ／＼して来ました。

きちんとネクタイを結んだ杉田さんは、あの当時よりは貫禄がついた様でした。

「実は、まりちゃんのことと伺ったのですが、家では心配していますのよ。杉田さんは、どういうお気持ちなんでしょう」

「別にどうということはありませんよ。お互に行きずりですよ」

「このままでは本人が可哀そうですから、はっきりケジメをつけてあげて下さい」

「もう、そのことははっきりいってありますよ。妻子のあることは始めから分っているんだし」

「でも、まりちゃんはまだねえですから、あなたにかかったら、赤ん坊の手をねじる様なものだわ。結局、騙されたようなものよ。少しは責任を取って下さるなきや」

「金ですか」

「誤解しないでよ。あたし、ゆすりに来たんじや、ありませんわ」

杉田は給仕に二人分の紅茶を持って来させてから、

「あなたも大分揉まれましたね。台詞が堂に入って来た。あの頃は虫も殺さない風でしたがね」

「ホホホ……」

杉田は完全に叔父達を見くびっている様でしたから、私のせっかくの掛合いも全く、のれんに腕押しでした。しかも、まりちゃんが杉田から、かなりのお金を貰っていたことを聞かされ、あまり叔母がケチ／＼しすぎるから、子供たちが必要もないお金にまで目がくらんでしまうのだらうと、あらためて叔父の家庭を思い浮べました。もうあきらめて帰ろうとすると、

「まあまあ、せっかく来てくれたんだから」

と引き止められました。そして、まり子がしゃべったらしく、私のことをなんでも知っているのに驚かされました。

「いま、店はどこ？」

「丸善の裏よ」

「あちらの方角は度々行くんですよ。一度是非よせてもらいます」

出口まで送られ、外に出てから杉田の気持がはっきりしたことだけでも、叔父に報告が出来ると思いました。

杉田がお店に来たのは、それから二、三日後の夜でした。材料の仕入れに来たついでだといっていました。それらしい持物もありません。

「まり子とは御指図通り、はっきり別れ話をつけましたよ」

「それはどうもありがとう」

お礼をいったものの、正直なところ私は、その時には、まりちゃんの事なんか、もう殆んど忘れかけていました。軽口をたたき合っ

てビールを飲んでいううちに、杉田は私の肩に腕を回して来て、その仕草が女を扱いなれている呼吸でしたが、手に力が入るたびに、

そつとふりほどくと、それ以上は何もしませんでした。彼は、いかにも私を張りに来るといった感じで、それから遠い所を毎晩のよう

にお店に姿を現しました。

「けさ、君の以前の旦那さんに会いましたよ」

「どこで？」

「駅前で、奥さんと坊ちゃんを連れて」

「へえー、そんなこと、どうだっていいじゃないの。あたしに関係ないことですわ。それより、もっと飲みましょーよ」

Fさんと踊って杉田のボックスに帰って来ると、

「あれが君の彼氏ですか？」

と聞きます。

「そう見えて？」

「何かしゃべってたじやないですか。楽しそうだったよ」

「楽しいなんてもんじやないわ。あゝ、誰もいない静かな所へ行っ

て暮して見たい」

少し酔いが出ると、私はつい本音を出してしまいました。

「今夜の君は大分酔ってるよ。送って上げましょうか」

「いいわよ。一人で帰ります」

「アパートどこ？」

「どこだっていいじゃないの」

その夜、杉田は看板までねばって、私が鳥籠のペチコートをはずし、着替えを終わって出てくるのを通りで待っていました。

「送って行っただけです。心配しなかったって何もありませんよ」というので、

「では、その辺をドライブしてよ」

といいますと、

「じゃ僕の店まで足をのばさない？ もう一ぺん送り帰して上げますよ」

私は行って見ることにしました。国道を八十軒ほどのスピードで走ると、ほてった顔に夜風が心地よく当りました。H市について見ると、もうお店の入口の豪華な硝子扉がしまって、カーテンが降りていました。二人で露地を通って裏口からはいり電気をつけると、人っ気のないバーの中は無気味な程、静まりかえっていました。

「今、カクテルを作って上げます」

「あたし、ジュースでいいわ」

「いや、うんと甘くしますよ」

杉田が器用な手付でシェーカーを振っていると、奥の二階から誰か降りて来る足音がして、

「だあれ？ マスターですか」

と若い女の声がありました。

「おー俺だ。来なくてもいいよ」

「そうですか、あとをお願いします」

カクテルを飲み終ると、

「店の女の子も泊っているから、あなたも今夜はここへ泊りなさいよ。僕は家の方へ帰るから」

というので、いくつも仕切った二階の部屋に案内されました。その時、突然、杉田が後から抱きすくめて来ました。

「騙したのね。卑怯もの！」

「往生際のわるいことをいうな。素人娘じゃあるまいし、今さら羞かしい柄でもないじゃないか」

私は血の出るほど唇をかみしめました。

「いいわ。そのかわり、あたしは、まりちゃんと違って高くつくわよ」

「オーケー。その方が話が早いや」

男の横顔に冷酷な魅力が浮びました。

次の夜、杉田が来たとき、ちょっと挨拶しただけで、私はすぐFさん達と何度も踊りました。杉田は平静を装いながら、イライラしているのが分りました。

「今までさんさん女を騙して来たんだから今度は、あたしがあの男をひきずり回してやる番だわ」

心の中で喝采を叫びながら、その夜は珍しく早く帰っていった男の後姿に、私は残酷な陶酔を感じていました。

アパートの手前でタクシーを捨て、急ぎ足で玄関をはいるとすると、ずっと横から黒い影が飛び出した。

「びっくりしたわ。杉田さんじゃないの」

「失敬々々、君の帰りを待ってたんだ。もう一度、その辺、付き合ってくれないかい」

「あたし疲れているのよ」

「じゃお茶でも一杯のませてくださいよ。すぐ帰るから」

怪しいもんだわ」と思いながらこんな場所で争って、アパート中

の評判になるのがいやなので部屋に通してしまいました。

「いい部屋じゃないか。手頃な広さだし」

杉田が煙草を一本くわえたので、私は無意識にマッチに手を出そうとして思い止まりました。彼は自分で火をつけると大きく吸い込んで、煙を私の顔に吹きかけました。

「さあ、もう帰ってよ」

「追い出しかい。電車もなくなったよ」

「タクシーを拾えばいいじゃないの」

「そう水臭く、するもんじやないよ」

杉田の腕が首に巻きついてきました。

首をふって逃げようとしても呼吸が苦しくなつて、だんだん顔が充血し真赤になつて、うんうん唸っていました。瞬間、私は平手で男の頬を激しく打ち、ひるんだ隙に咄嗟にうつ伏せになりました。

「変っているなあ、君は。僕はあの当時から君が好きだったんだよ。」

「好きだなんて、あなたがそんなこという資格があるの」

「そうだったな。それじゃドライに行くか」

男の手が肩にかかり、私は仰向けにひっくりかえされました。

「あれー」

私は悲鳴はあげましたが、本心は覚悟していました。

「便所はどこだ。ちよつと行ってくるから逃げたら承知せんぞ」



ズルズル部屋の隅にひきずられ、彼のネクタイで後手に縛られ、洋服ダンスの下ひき出しの環につながれました。くずした足を一本一本前に組み出され、足首をストッキングの上からブラジャの紐で一つに括られてしまいました。彼が出て行った次の瞬間、私は通りに面した窓や入口のドアから誰かが、こちらを覗いているような気がして、ハッとしました。勿論、窓にはカーテンが下り、ドア

はすっかりしまっていましたがお熊さんや、まりちゃんに見られている様な羞かしい錯覚に襲われました。私は、すっかり合わせた両膝で胸をかばうようにして、彼の帰ってくるのを待っていました。

「早くほめてよ」

部屋に帰って来た杉田に背中を向けて、不自由な両手の結びを後に差し出しましたが、彼は直ぐに解こうとせず、じっと見下ろした視線に私は顔をそむけ、不安で体の筋肉が硬直しました。杉田はズボンのバンドをはずしてビューツと空でなりました。一瞬、私は自分が打たれたかと思わす、肩をすくめました。

「もうゆるして——。ねえ、杉田さん……」

「ハハハ……、とうとう泣声を出したな。俺はな、君がH市から通っているところから惚れてたんだ。いや惚れてたなんていったら、また異議が出そうだからいい直そう。君に魅かれてたんだ。毎朝、ツンとすまして俺の店の前を通って行っただろう。いつか、あの女をうんと泣き叫ばせて見たいと思っていたんだ。まり子をかまったのも、まり子が君と縁つづきだというので興味があったんだ。いわば五年越しの思いが今、実ったわけだな。何もそんなにこわがることはないよ。俺は自分の女を大切にすること位は知ってる積りだから」

耳を、ふさごうにも両手の自由はきかず、体の隅々までギラギラ光る彼の視線にさらされ続けました。

「助けて！ 誰か来て」

環につないだ縄尻を解いて引き寄せられたとき、悲しい叫びを上げましたが、しめ切った室内から声の洩れる筈もなく、また聞えただけにしても、それは隣りのお熊さんくらいのものですから、お熊さんが来れば私の受難は、もっとひどくなっていたでしょう。私の助けを呼ぶ声も途中で力なく消えてしまいました。

「声を出すなら出したっていいよ。もっと大きな声を出して見ろ」

「声を立てないから許して。ねえ、許して。」

彼は私を、うっ伏せに引き倒しました。そして私は容赦なく振下される皮バンドの痛さに芋虫のように身を伸び縮みさせて、うめき声を挙げさせられました。

それから数日後、私が丁度、これからお店へ行こうとしているところへ杉田がやって来ました。最近、商売の方がうまく行かないという話を聞かされているうちに、もうお店の点呼の時刻もすぎたしまい、仕方なくお店の方は欠勤にして、その夜はそのまま杉田のバ―までタクシーで出かけました。途中で、

「あなたのお店へ行ったら、お客にしてくれるの？ それとも働かされるの？」

と尋ねますと、

「そんなことはどちらでもいいけれど、店の子に見つかるとうるさいから裏口を通って二階に上っててくれ」

といましたので、車を下りてお店にはいるや、スタンドの方にいった男をそのままにして、すぐ二階にかけ上りました。長い間、待たされ最初のうちは隅にあった椅子におとなしくかけていましたが、待ちくたびれて、ベッドに寝そべっていると、やっと杉田が上って来ましたので、あわてて起き上りました。男はベッドの上にあぐらをかいて煙草をふかしつつ、また商売の話をしました。

無尽会社の高利のお金を借りて手を拡げすぎ、掛け金がはらえなくなったので近いうち店舗を差押えられそうだというのです。

「じゃ、もうお別れね」

「金の切れ目が縁の切れ目か。君はそういう女だったのか」

「だって、はじめからそういつてあるじゃないの」

「O市に他人名儀でやっている店があるから、あれは残るよ。きっと、もう一度もり返すつもりだ。今さら君を離しはしないよ」

「さすがの悪党も今度は大分弱ってるわね。いい気味だわ」

私はニュッとストッキングの足をのばして男の肩にのせ、つま先で耳のあたりを軽く打ってやりました。

「お紅茶をどうぞ」

ちようどその時、下から店の女の人がお茶を持って上って来ました。

女が下に降りてしまうと、杉田は私を膝の上に抱き上げました。

「久しぶりで悲鳴を上げさせようか」

「お願いだから、もういじめないで」

私は身をよじって叫びました。

「グリルの方に風呂があるから、はいりに行かないか」

「でも誰か知ってる人に出合うといやだから、よすわ」

「そうだな。この町には君の知り合いは多いからな。俺の店でも、よく男たちが君の噂をしていたものだぜ。市場の方から夕方通っている女は誰だろうって」

「それであな、教えたの？」

「教えるもんか。俺の狙っていた女だもん」

「狙われて、とうとう捕まえられたってわけね」

「ところで君の妹はどうした。時々、夜おそく駅まで来ていたじゃないか」

「お嫁に行ったわ」

あの頃、私が終電で帰ってくるのを妹は、よく駅まで迎えに来てくれたものでした。

「それは惜しいことをした。あの子も、いいスタイルをしていたじゃないか」

「また、そんなことをいう」

私は鼻声を出し、上からのぞき込むようにして男の目を伺いました。

「今夜は妹の分まで叩いてやるから、楽しみにして待っていいで」

「もう別れるなんていわないから、そんなことなさないで」

私は身をよじって頼みました。杉田は、私が逃げ出すとも思っただか、後手にして手首だけネクタイでくくり、両足首も揃えてくくりつけて出て行ってしまいました。

再び杉田が上って来たとき、その持っている竹のムチと細ひもに、私は一べんに縮み上がりました。

「何でもいうこと聞くから、ひどいことしないで」

哀願の甲斐もなく、改めて後に合わされた両手首を縛り直され、鴨居から逆手に吊られました。後に立った杉田の動作が見えないので、向い合おうとしますが、意地悪く私が向きを変えるたびに、私の後について廻りました。

「あまり動くと、ひどく叩くぞ」

「動かないから、たたいたりしないで！」

私は羞しさに顔を火のようにはてらせながら哀願しました。しかし彼は、体を二つ折りして苦しんでいる私の顔を見ながら、

「いい恰好だ。ざまア見ろ」

と鞭の先でつつきました。そして、

「これをくわえろ」

と自分のソックスを脱いで私の口の所に、下からさし入れて来ました。スエタ様な臭いに思わず顔をそむけるとビシッと鞭がなりました。

「あれー」

焼火箸をあてられたような熱い痛み思わず悲鳴を上げて、よろめくと体の重みが両の手首にちぎれるようにかかりました。

杉田は私に靴下をくわえさせると、

「落したら、ひどいぞ」

といって下に行きました。

私は、ボーッと意識がかすんでくるたびに打たれた余韻と腕の引

きつるような痛みで、またよみがえりました。可哀そうなあたし、ポロポロ涙が床を濡しました。

また上って来た男は近寄って、私がいいつけ通りにしているのを確かめてから、

「いい声で泣いて見ろ」

といいながらピシリ、ピシリと存分に打ち据えました。私は最初のうちこそ歯をくいしばってこらえましたが、もう手首にくい込む縄の痛さもわすれて尺取虫のように上下に身をくねらし、一鞭ごとに長い長いうめき声が咽喉の奥から、ほとばしりました。ようやく縄を解かれると、

「ひどい方！」

苦行のあとの安らぎに似て、涙でくずれた顔を見られるのがはずかしく、男の膝をすべって、ガバツとベッドに伏せりました。

その夜おそく店の人達が帰ったあとで私は下へ呼びおろされ、スタンドの上に抱き上げられました。

「向うをむいて坐るんだ。両手を後にくんで、姿勢をくずすと、ほんとに縛るぞ」

両手首がひどく、すりむけているので縛られこそ、しませんでしたが、まっ赤にはれ上った鞭痕のほてりが下のスタンドの冷たさと対照的に、靴下を通して踵に哀しく伝わって来ました。男は私の真後ろのとまり木に坐っていました。

「どうも、まだ鞭が足りないようだな」

あらためて両手を高く背中に組み直されました。前に並んだ沢山の洋酒のビンが、私のかすんだ視線に悪魔の踊りのように迫って来ました。

それから二、三日は手首についた縄のあとが消えずに困りました。いつも手袋でかくしていることも出来ず、おなじみさんに聞かれて

「始めてつけた腕輪にかぶれたの、育ちがいいものですから」と冗談でごまかしておきました。

杉田はその後、一度来てすぐ帰ったことがありましたが、もうかなり秋も深まったある日、私はふだん着のまま畳の上にながたと寝そべて雑誌を読んでいると、ガタンとドアが鳴るので、先程回っていた洗濯屋の御用聞きだろうと顔をねじむけると、背広の襟を寒そうに立てた杉田が立っていました。

「商売の方はうまく、いってますの」

「まあ、ぼつぼつやね」

背広の肩にフケが落ち、頸にネルの布切れをマフラーがわりにまきつけた姿は、あわれでした。ミカンを数個取り出して「食べないか」と畳の上にならべ、私の雑誌を横取りして、ペラペラ頁をくっただけで、すぐほうり出しました。

「おい、ドアに鍵をかけてくれよ」

とポケットから細引を出して解きにかかりますので、私はすばやく手袋をはめると、

「なかなか、覚悟がいいじゃないか」といいます。

「覚悟なんかじやないわ。怪我させられたら、つまらないからよ」

「ついでに身体に座ぶとんでも当てたらどうだ」

「そんな積りなら、あたし、よすわ」

「何もしないよ。ただちよっと縛らせて、もらうだけさ」

以前、私を泣かせた傲慢さは消えて、杉田の態度は頼み込むような卑屈な物腰でした。

立上って両手を後に取られたまま、じっと動かないでいると、寒々とした気持が全身を包みました。

「もう、およしなさいよ」

「うん」

彼は手首にまきつけた細引を解くと、そのまま、まるめてポケットに入れました。

「これ、あなたにももらったお金よ。受取って」

「どういう意味だ」

「返すんじゃないのよ、借したげるのよ。いまのあなたは少しも恐

くないわ。あなたがもう一度立直って、もっとこわい人になって来て頂戴。その時には、あたし、縛られも、ぶたれもするわ。さようなら」

私は肩をおとした男の後姿を淋しく感じました。

—終—

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13種)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R 11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり (須川令子)
R 13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R 14	開股しはり (川辺砂登子)
R 15	猿くつわの魅力 (伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り (須川令子)
R 17	立木野外しはり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足湯椅子セメ (伊吹真佐子)
R 20	いたふり (春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しはり (萩千恵子)
R 22	強烈な椅子セメ (伊吹真佐子)
R 23	逆さ本吊りセメ (佐賀美智子)
R 24	後手吊りセメ (伊吹真佐子)
R 25	股間しはり後手 (同右)
R 26	逆エビ責め (中塚文子)
R 27	高小手しはり (伊吹真佐子)
R 28	変型足手しはり (加賀利江子)
R 29	松樹後手しはり (村田那美子)
R 30	くさりセメ (伊吹真佐子)
R 31	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R 33	股間タテしはり (中富綾子)
R 34	首縛股間しはり (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり (藤田節子)
R 37	仰向全裸悦責 (川端多奈子)
R 38	後手首縛シメ (加賀利江子)
R 39	乳房下しはり (村田那美子)
R 40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R 41	お灸セメ (春日、伊吹二嬢)
R 42	後手猿くつわ (萩千恵子)
R 43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R 44	コルセツト縛り (中塚文子)
R 45	股間しはり (同右)
R 46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R 47	後手しはり (加賀利江子)
R 48	御開帳 (萩千恵子)
R 49	くさりセメ (川端多奈子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R 52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R 53	開股椅子セメ正面 (花坂道子)
R 54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R 55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R 56	ヌードしはり (田中芳代)
R 57	本縄しはり (益田房子)
R 58	股間しはり (川辺砂登子)
R 59	落花狼藉の緊縛 (益田房子)
R 60	樹間のハリツケ (益田房子)
R 61	帆立舟のセメ (益田房子)

R 72	逆エビ責め (愛川悦子)
R 73	変型全裸股間縛 (花坂道子)
R 74	ヌード縛り (村田那美子)
R 75	全裸横臥緊縛 (萩千恵子)
R 76	ビクニツク (須川令子)
R 77	ハイヒール (村田那美子)
R 78	湖畔の宿にて (須川令子)
R 79	尻立逆しはり (大塚啓子)
R 80	目隠し開股縛り (田中芳代)
R 81	後手高小手 (愛川悦子)
R 82	乳房しはり (花坂道子)
R 83	開股ベッド縛り (愛川悦子)
R 84	全裸床柱縛り (萩千恵子)
R 85	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
R 86	ヌード股間縛り (大塚啓子)
R 87	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R 88	ガンジガラメ (愛川悦子)
R 89	臀部責め (中塚文子)
R 90	後手股間しはり (伊吹真佐子)
R 91	腹股丸出し猿轡 (坂口利子)
R 92	破れたシユミーズ (須川令子)
R 93	女学生のしはり (萩千恵子)
R 94	仰向開股しはり (村田那美子)
R 95	乳房くさりセメ (川辺砂登子)
R 96	野外バンド責め (村田那美子)
R 97	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R 98	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R 99	乳房搾りセメ (佐賀美智子)

禪 美 雜 記

僕にも
一言



舟 山 旭 一

偶然の機会からKKの存在を知って数年になる。同時にこのことは、僕の禪生活の歴史の経過を物語るものでもある。勿論KKの存在を知る以前から禪の持つ魅力に惹かれていた僕ではあったが、KKの読者通信に集まった禪愛好者諸兄の手記をみた瞬間に僕は、ひそかにブリーフ・パンツ類を処理してしまっただのだ。そして長い間の懸案ともいうべき――六尺禪を締める――ことを実行にうつしたのだった。

驚き呆れる家人の視線と、珍らしいものを見る様に、冷やかしか半分でみた友人達の好奇の目をはねかえしたものは、僕の他にも禪愛好家の同志がいるという安心感と近親感だった。……明治の昔ならいざ知らず、二十世紀も後半のパンツ全盛期の現代に、六尺禪を愛用するという逆コース的傾向を意識するたびに、時代錯誤めいたような恥かしさの伴う感傷に襲われ、浴場やプールなどで衆目の視線を浴びる瞬間、幾度となく初志を揺がえそうかとためらったこともあったが、そのたびに僕を勇気づけてくれたものは、禪のあの緊縛感と多くの同志がいるという安心感だった。そして一方、何故六尺禪が過去の遺物として現代から忘れられつつあるのかということ考えたのだ。

禪が男の下着として常用されていた古い世代に育った人々や、戦時中に軍隊生活などで

禪を着用しなければならなかった世代の男達も、六尺禪の爽快さ、越中禪の簡便さ、もって禪の合理性を忘れつつあるのが現代のありさまだから。……少くとも、戦後数年間は衣料事情により、成年男子の大多数は越中禪、もって禪を着用していたはずだった。そして一方、六尺禪について云えば、水泳とは切りはなせない関係にあつて、泳ぎを知ることには六尺禪の締め方を知るということだったのだ。いいかえれば、六尺禪の存在なしでは、日本に於いて水泳というものはありえなかったのだ。

それがわずか十年後の現代では、大都市においてプールはおろか、近郊の海水浴場ですら六尺禪一本の勇姿をみかけることはむづかしい。わずかに高校・大学の水泳選手の合宿練習においてのみ、それもほんのわずかばかりチラホラみかけられる程度なのだ。ましてや赤禪の強烈な男性美を発揮している者にいたっては、絶無に近い。水泳の場合ですらこのありさまなのだから、日常に六尺禪を愛用している者は、絶望的とさえ云えるだろう。

僕が常用しはじめてから、今日までの数年間に公衆浴場やプール、海水浴場の脱衣場で六尺禪姿をみかけたことは十指に足りない位だ。そしてその殆どが、当人にとっては誠にお気の毒とは思ふけれど、男としての魅力が消え去った老人達なのだから全く何とも云い

ようがない。しかし一方では、六尺禪をただ一つの男の下着として緊禪一番の生活を送ってきた古き良き時代のこれらの人々を羨ましく思うのだ。

いささかの疑問も羞恥も持たず、六尺禪を締め続けてきた明治、大正期にくらべて、特に終戦後の現在六尺禪を常用するために要するモロモロの抵抗に対して僕は憤りさえ感ずる。好奇の視線と珍奇なものをみつめたような露骨な質問の数々……中でも最も腹立しいものは「みつともないからやめたまえ」という忠告めいた愚劣きわまる発言だ。

一体禪姿の何処がみつともないというのか。僕にとって、こういうてあいの発言は或る時には腹立しささえ越えて、情けなささえ感ずる。男が男であることを誇示することが何故みつともなく恥かしいのだろう。緊禪は男の意志と決断を意味しているのだ。男が男として最も魅力ある姿が、禪一本の勇姿です。つくど立った時だということ、すでにマニア諸兄以外の方でも承知のはずなのだ。げんに男性美に対して最も敏感で、関心のある女性達の中では定評とさえなっている。

余談だが、昨夏以来僕に大きな関心を抱いている女性が数人いるが、いずれも口を揃えてはつきりと六尺禪姿に惹かれたと云っている位だ。しかも赤木綿の禪姿に「男らしい魅力を感じた」といっているのだ。

ここで「赤」という色彩について考えてみると、一般には女性の色として定義づけられているのが常識で、男性の色としての存在理由を探がしてみると赤禪として使った場合にのみ、「男らしい」と、いわれるのだ。その他の場合には、殆どが「男のくせに赤いものを身につけたがる」という軽蔑に変わるのだから考えてみると愉快なことではないか。

つまり、男が赤いものを身体につけて、男らしさを発揮出来るものは赤禪以外には存在し得ないという結論が出てくるからだ。赤禪の魅力については先に某週刊誌に、下着デザイナー鴨居羊子女史と江戸川乱歩氏の対談中にとりあげられていたから、今更繰り返すまでもないことで、すでに一つの定評と云うことが出来る。

話が横道にそれてしまったが、禪こそは、男を男として決定するたった一つの要素であると僕はあらためて断言したいのだ。緊禪一番というコトワザが、現在まだ使用されているのがそれであり、祭礼などにおいて、今なお六尺禪が立派な存在理由を持っていることがそれなのだから。

禪が祭の服装として着用されることについては他にも理由のあることであろうが、最も重要な意義として清浄と潔白と云うことが出来るだろう。そしてこのことは同時に男性の心情を単的に定義づけたといえるのではない

愛好者の記録

とやま・かづひこ

だろうか。その意味で禪こそは心身共に爽快で潔白な、そして常に怠惰をいましめるいわば「心締め」と云うことが出来るだろう。

禪の意義や魅力ウンヌンについては今更述べるまでもないことで、すでに発表済みの通りであるが、禪の三千年の美德が、単なる服装の変遷という理由で減じるようなものでないことを僕は断言すると共に、裸まつりとい

う形式で保存されていることを何よりもうれしく思うのだ。

そして一方、禪復活を声を大にして叫びたいのだ。僕と同じ若い世代に呼びかけて、一人でも多くの同志をふやすと共に、禪の味を忘れつつある人達に「だらしないぞ」と抗議を申し込みたい。「貴方達はみんな一度は禪を締めたことがあったはずだ」と云いたい

のだ。そして禪衰退の現代に育った世代にも、古い時代からの伝統と美德を、生涯守ろうとしている自覚に生きる同志が、全国に少数ではあるが、存在していることを知ってほしい。

KK読者通信によせられる愛禪家諸兄の力づよい発表にささえられながら、僕の発言を終えたいと思う。

——終——

一彦氏が存在することを知った。

発音は同一でも『戸山氏』と『とやま氏』は、全然別人であることを、誤解を避ける必要上、ここにハッキリさせておく。

(101) おみやげ

「おまちどうさま。ハイ、おみやげ」

久しぶりに電話で呼び出しをかけてきたA子は、一足先に喫茶店で待っていたかづひこの前に現れるや、ソツとテーブルの下から小さな紙包をよこした。

昼さがりの新宿の喫茶店H屋では、ウィークデーの加減か人かげも余りみられず、はた目からは、楽しげなランデブーとも映ったことであろう。

「じゃ、またネ」

しばらくして彼女は帰っていった。残ったかづひこは、渡された包をそっと開いてみ

わが憧れのもの、賛美してやまぬマゾの世界を探索しつつ、昨年二月号から一回も欠かさずノットしてきた小文が、編集長の深い御理解と御配慮によって本誌に発表の場をいただき、今日かなりの同好者の方々から共感の声を戴いていることは、かづひこのこの上なき光栄とするところである。

あることから、高名なベストセラー作家や一流雑誌の編集長まで、この小文を読んでいただくことを知って感激した。世の中は広く深く楽しい。このような偏奇の世界への理解者が多いことを知って、意をつくするのは、かづひこ一人ではないと思う。

ところで、東京に今一人、文筆家で『戸山

み。そこに、かづひこにとってはなによりのオミヤゲを認めて一瞬、眼を輝した。

しかし、どうも様子がおかしい。尚も手にとってよくよく見たら、なんとそれは、精巧に出来た蠟細工！。医学用の標本に使う模型だったのだ。

「ホホホ……」

さっそく電話で苦情を申し立てたら、彼女朗らかに笑いとばした。

きつと担がれて、キョトンとするかづひこの顔を思い浮かべての笑いであろう。

けれど、けれど……とかづひこは思ひなおす。たとえイミテーションでも、彼女の手から直接貰った、憧れのものの面影。

彼女はかづひこの希いを知ってくれていればこそイタズラである。かづひこはこの担がれ方に、いい知れぬ満足を感じた。

(102) 国際見本市

五月二十日、かづひこは社用で、東京港口で開かれている国際見本市を訪れた。

用を済ませたら昼どきになったので、特設食堂で昼食をとるべくはいったが、時間どきとて大混雑であった。

白人——たぶんアメリカ人だと思うが、男女二人連れが食事している隣りに空席をみつめて坐つたが、注文のビールは来てもオード

ブルはなかなか来ない。隣席の白人女性をそつと見るに仲々の美人。白人には無条件に淡いマゾ感を覚えるかづひこは、胸高鳴らして横眼で彼女をぬすみ視ていた。

お待かねのオードブルがきて、かづひこが喰べはじめた時、その白人達が席を立った。

後には、彼女の喰べ散らした皿が……。

トッサにかづひこは、その皿を引きよせていた。

美しい女主人の残飯で露命をつなぐドレイの幻想……。犬になり、強制されている想いにふけり乍ら、フオークを動かす。

うれしい白昼の一ときだった。

(103) 宣伝カー

S製薬会社で、四百万円を投じて宣伝カーを購入した。かづひこは仕事の関係上、よく出入するが、丁度、試運転のとき行き合わせ、好意的に箱根まで便乗させてくれた。

そのときの、そのカーのセールス氏の話。

この車にはその設備はないが、輸出用の大型バスにはトイレまでついており、汽車のようには運転中でも用の足せるように設備したのもあるという。

車体の下にタンクがあり、そこにだされたものが集められ、さしつかえのない場所で捨てるそうである。

「おんなの人には便利でしょうネ」セールス氏は、そういう。

もったいないことだ。高い費用と、うるさい工程を経て、わざわざ、そんな設備をせずとも、もっと手軽で有効な方法があるのに——とかづひこは独り空想しながら、車の揺動に身をまかせていたことだった。

(104) 叩かれ屋

「タカレヤ」と呼ぶ職業があるそうだ。

今はあまり見かけなくなったが、古い上方万才で、大きな扇子でむやみに相手方の頭を叩く……あれも一種のタカレヤだが、この水爆時代のそれは、そんなものではなく、ムシヤクシヤしてしようのない気持ちにおちいた人に、そのハケ口として、こともあろうに、自分の横ヅラや、からだを思う存分に叩かせて料金をとるといふ、モトデいらすの職業。

今のところ開業早々で、客も少いし、とくに女性のお客は皆無だが、サド趣味の好事家に好まれ、痛いのがえがマンすれば結構メシのタネにはなります。

と、これはかづひこのつくりごとではなく五月二十六日の夜、浅草の飲み屋で、そのタカレ屋のご本人から聞いた話。



世 紀 峨 嵯

＝ 創 作 ＝

続・運命の少女

(その二)

その後、半月も経ってから、英雄は待ちに待った船越からの、あの件についての連絡を受けることが出来た。

此の度の催しは映画会だということになったらしいが、それでも彼は英雄のために会員バッチを手に入れて来てくれた。

英雄は大喜びで家にとんで帰り、美佐子と共に、あれから以後どうしても捜し出せない志津江が、その会に誘拐されていることを願うような、また、そんなことのないように祈るような奇妙な気持で話し合うのだった。

待ち兼ねた当日。美佐子は誘いに来た船越に、涙を流さんばかりに、今後とも志津江捜査に協力してくれることを頼んで、出掛ける二人を送り出すのだった。英雄は、まだそう

だとは決っていないのに、何か身内がブルブル慄える様な気持で道を急いだ。彼にとってはまだ漠然とした予感だけではあるが、自分の秘密を犠牲にして協力してくれている船越に対して、感謝したい気持で一杯だった。

目指す会場について黒マスクをかけ、座を占めてから四辺を見まわすと、二十人程の人影が認められた。皆、無言である。英雄は、船越に合図されて、入口で渡された封筒の中身を出して見た。そして思わず跳び上る程の気持ちになった。予感的中したのだ。

それは、まぎれもなく志津江と、もう一人の若い女の、猿ぐつわを噛まされた美貌を、大きくクローズアップしたプロマイドであったのだ。

矢張りそうだ。今日の映画も、その中の主人公はきつと志津江ともう一人の女なのだろう。そう思うと、英雄は未だ始まらない裡から胸がわくわくして来るのだった。やがて、部屋の電灯が消され真暗になると、これから映写準備をするのか、しばらく間をおいた後『悶える女体』というタイトルがスクリーンに写し出された。そして、その後に現われた画面を一目見た英雄は、危ふく「アッ」と声を立てるところだった。そこには、探し求めている志津江が床の上で高手小手に縛しめられた身体をもちながら、頬もくびれるばかり固く嵌められた猿轡の下から苦痛の呻きを洩らしているであろうと思われる程、目を引きつらせ、あえいでいる姿が見られたのだ。英雄の胸は早鐘を打つようになり、顔は血が一時に上ったように火照った。そして、自然に荒くなる息遣いを押えるように息をつめながら、じつと画面を見つめた。そして、次々に変わる画面の中の責めが、これまで自分が加えた事のない凄まじいものである事を知ると志津江に対してこんなにもむごい仕打ちをする男達に激しい憤りを感じた。会場に居並ぶ二十人からの会員達の洩らすため息や激しい息遣いなど全然耳に入らなかった。唯、夢中そのものだった。やがて一本目が終り、更に二本目の『あえぎ泣く』が始まったが、これとも同様、唯憤怒の裡に終ってしまった。そ

して、他の会員達と共に階段を降りながらも後に心を残し、ともすれば立止り勝ちになるのを船越にせき立てられて玄関へ差しかかった英雄は、ふとそこに「次回は臨時ショーにつき一万円、七月二十八日定刻、会場前回と同じ」と記された貼紙に目をとめると、ショーとは志津江達を会員達の眼前に連れ出し、実際にその責め場を見せようと云うのだ。本人が目の前に現われる。これは何とか手を打てば確実に救い出す事が出来る。あと半月。あと半月待てばよいのだ。と考える事が出来急に胸の裡の暗雲がとり除かれたような晴れ々とした気持ちになると、今迄と打って変わった軽やかな足どりになり、会場を後にした。そして、船越と次回も共に出掛ける事を約して別れると、宙を飛ぶようにして帰宅し、勿論一刻も早く様子を知りたいと思い、寝にも就かず英雄の帰宅を待っていた美佐子に一部始終を告げ、互いに喜び合いながら、ショー当日、如何なる手を打って志津江を救出するかについて語り合った。警察の手を借りる事は最も易しい事だが、発見に協力してくれた船越に迷惑がかかりはしないかと考えるとそれもならず、ここで英雄達は思案に窮してしまった。そして、翌日も又その翌日も、その方法について色々思案を巡らせている裡に、目指す七月二十八日は一日と迫ってきた。その頃、地下室では、相変わらず志津江達へ

の責めが、一日おき位に続けられていた。昨日一日休養をとらせられた二人は、今日午後から再び責めが始められようとしていた。昼食後、例のように両手足を縛された儘布団の上に転がされていた二人は、口にしっかりと猿轡を嵌められると、何時もの事であり恐しさに馴れ、逆に責められる事に興味を抱きながら、何時もの部屋へ連れ出された。そして先ず志津江だけが日本髪のかつらをかぶせられ、腰巻を巻かれた。男達は志津江の縄尻をとり、後から小突きながら部屋の中央に引き出すと、

「今日は少しストーリーのある芝居があったものをやるんだが、よくその順序をおぼえて貰うぜ」

「なに、大した面倒な事はないんだ。俺達の云う通りにやりやいいんだから」

と云いながら

「先ずお前は、借金のかたに奉公させられているのを逃げ出したが捕まってしまった、その罰に責め折檻を受ける娘になる。それから珠子、お前は現代物で、密輸ボスの情婦なんだが、ふとした仏心から警察へ密告しようとして見付かり、ボスや子分達から私刑を受ける。そんな筋だ。まあ云われる通りやってりやそれでいいようなものだ」

「さあ、じゃあ始めようぜ。先に時代物だ」と云うと、志津江をその場に引き据え、そ

の罫りを男達がかこむと

「太いアマだ。おい、お志津。お前には大枚五十両という大金がかかってるんだ。それを返さねえうちは此の家から一步も外には出せねえってのに逃げ出そうなんて太いアマだ。」

「親分。どうしやす。」

「そうよなあ、二度と大それた考えを起さねえように少し痛めつけておけ」

と、親分役になった男が他の二人に向ってあごをしやくると、男達は

「へえ、合点でやす。おい聞いたか。大それた料見を起すから、しばらく痛い目に遭わねばならねえんだ」

と云いながら、志津江の縄尻を引き立上らせると、

「その梯子がいいな」

と、倒した梯子に、後手のまま志津江をうつ伏せにして背の手首を縛った余り縄を左右に分け両肩から梯子の棧に通し、更にそこで交叉させた後、両腕の上から背に廻して結ぶと、両足の膝を上体の方に縮めるようにして曲げ、棧にそれぞれ縛りつけ、尻がぐんと突き上がるような姿勢にすると、柳の小枝でそのつき上った双丘をピシリ、ピシリと鞭打ち始めた。何度もこれ迄に鞭打ちはされた志津江だったが、今の姿勢は息が詰まりそうに窮屈であり、鞭打たれる尻も突き立てられていて、柳の小枝の一鞭々々は奇妙に応えた。

何度も鞭打れ、みみず腫れが出来始める頃になると、流石の志津江も体を左右に振り、膝から下の両足をねじ曲げくねらせながら、狼轡の下から激しい呻き声を立てた。その様をじっと見つめていた親分役の男は

「おい、それはその位でいいだろう。次だ」

と命ずると、他の二人は

「へえ、合点でやす」

と答えながら、志津江を梯子から解き離すと、今度は両足を括り、後手の余り縄を腰に一巻きした後、その余り縄と手首のもう一本の余り縄を一本にして吊り環に結びつけ、足のつま先が床から一尺位の高さになる迄吊り上げると、足の下に火を点したろうそくを三本立てた。時が経つにつれてろうそくの炎からの熱さが足の裏を焦がすように感じ出すと、志津江はその熱さに呻きながら、両足を縮めては、吊られた為手首や胸や腕や腹に食い入る縄目の苦痛に耐えかねて伸ばし、伸ばしては焼けつくような炎の熱さに又縮めしていたが、遂には共に耐えられなくなり、激しいうなり声を立てながら両足を屈伸させ、上体をゆすぶるようにしてもがいていたが、余りの苦痛の為にやがて気を失い、だらりと垂れ下ったようになってしまった。男達はそれを見ると

「おっと、大事な玉だ。折檻はいいが死なしては大変だ。早く降せ」

と云いながら志津江を吊り縄から外し、足の裏を確かめると

「大丈夫なようだ。油薬でも塗っておけばいいさ」

と云いながら、隣室へ運び、ふとんの上に転がすと、志津江の余りにも無惨な責め方とその激しい苦しみ方とに正視出来ずにいた珠子に

「さあ、今度はお前だ」

と云いながら、男達は珠子の両脚を括って左右それぞれに結びつけた縄を、前から両肩を通し背の両手首に結びつけると、前屈みになった珠子を後から小突き、

「さあ、歩くん。天人お珠の姐御もこうなっちゃあ、哀れなもんさ」

と云いながら中央迄、前屈みの儘のよちよち歩きの姿勢で引き出すと、

「おい、お珠。おめえは昨日迄は姐御と子分達に巾を利かしていたが、仲間を裏切ってサツへ密告しようなんて真似をするからこうなるんだ。今日は仲間への見せしめだ。うんと泣いて貰うぜ。さあ、始めるんだ」

と命じた。男達は早速、珠子の両脚を括った縄を解くと、椅子の背当てを背負った形に椅子に縛りつけ、更に両足をも椅子の後脚に括りつけると、皮の鞭で珠子の肉付きのよいむっちり盛り上った両脚をピシリ、ピシリと打ち始めた。他と違い、両脚は痛みを余計感

ずると見え、珠子は一鞭毎に激しく呻き、顔をのけぞらせ、殆んど動かす事も出来ぬ程緊縛された身体をよじりながらもがいた。左右の脚には一筋、又一筋とみみず腫れが加わって行った。と、ボス役の男が

「鞭はその位にして次だ」

と云うと、男達は急いで珠子の緊縛の縄を解き椅子から離すと、彼女の両手両足を一緒に縛り、更に縄をかけるとその縄を吊り環に結び、狸縛りにされた珠子を宙吊りにし、二人の男は矢庭に羽根ぼうきで、吊ら

れてあいた珠子ののどやわきの下、そして脇腹と所構わずくすぐり始めた。その苦痛にあごを引き、身体を左右によじり、涙を流しながらけものほえるような呻き声を立てていた珠子も、やがてその苦痛に耐えられず氣を失って、ぶらりと下ってしまった。男達は急いで吊り環からその珠子を降ろし、両手足を縛った縄を解くと、ぐったりして無抵抗の珠子を再び後手に縛った上で隣室へ運び、志津江の横へ寝かせた。

こんな筋書の責めが一日おきに三回、同じ



ものを練習だと云ってさせられてから後、四日間はどうしたものか毎日布団の上で寝たり起きたりで過ごさせられたが、五日目になって、夕食後、男達は

「大ぶ長い間、楽をしたな。充分休養して体力もついただろう。今夜は前に三回も練習した筋書を本番でやって貰うからな。しかもお前達には始めての外の場所だな」

と云いながら、二人を改めてしっかりと縛り直し、猿轡も、口中に布切れを詰め込んだ上を押えるように肌色の布で口唇を割って首

の後で固く結んだ他に、志津江は手拭で、珠子は巾広いマスクでしっかりと覆うという念の入れ方をした後、志津江は最初誘拐された時と同じように大型トラックに身体を折り曲げ、無理矢理に押し込まれ蓋をされてしまった。珠子は、ナイロンの靴下をはかせられ、ハイヒールをはかせられた上、両脚を括られ、素肌にレインコートをはおらされて自動車に乗せられた。そして志津江の入っているトラックが自動車の後部の荷物入れに積み込まれると、自動車は倉庫を後にして暗くなった街へと走り込んで行った。トラックの中の志津江には外の様子は全然窺い知る事すら出来ず、唯、何処へ運ばれて行くのか考える事だけしか出来なかったが、珠子は左右を男達に挟まれてはいるが、何カ月振りかで見える街のネオン、雑踏に何時か忘れ去っていた懐かしさがこみ上げ、出来るものならば、自動車から飛び出し、逃げたいと思った。だが、悲しいかな両手は背に括られ、両脚迄括られていては、歩く事すらむづかしいことである。勿論、嚴重に噛まされた猿轡の為、声すらも立てられない我が身であっては、諦めるより仕方がなかった。

やがて、自動車は街外れの別荘らしい家の裏門をぐぐり勝手口の前で止まった。そして男達に抱えられるようにされた珠子と、トラックに押し込まれた儘の志津江とがその家

の中へ連れ込まれた。

その頃、英雄は此の別荘の表門にたった一人で差掛っていた。今日は七月二十八日、あの一万円のショーの行われる日である。英雄は此のショーを観んが為というよりも志津江を助け出さんが為に出掛けて来たのである。船越は、今日のショーを観られない事を口惜しがりながら、社命で福岡へ出張した為、英雄一人であった。それが英雄達の志津江救出のプラン決定を早める結果となった。というのは、英雄達は志津江救出の手段として警察の手を借りる事が最も確実であり、面倒のない事は知っていたが、その為に出席者の同僚である船越に類が及ぶのではないかと気兼ねし、出来得るならば、それ以外の方法で色々苦心したのだが仲々名案が浮かんで来ない。それで毎日悩み続けて来たのだが、船越が出張の為此のショーに顔を出さない事になった今はそんな気兼ねは要らないし、一挙に、志津江を誘拐して責め上げながら写真などを作っている連中を捕えた上、志津江を救出しようと、既に時間、場所などを警察に通報し、意気揚々と乗り込んで来たわけである。やがて、定刻間近、会場にあてられた二階の大広間には、前回同様、英雄も含めた二十名からの秘密会員が黒マスクのふん装で詰めかけていた。

同時刻、楽屋にあてられた会場の隣室では、はおって来たレンコートをとられ、パンティと長靴下だけの珠子が、マスクの代りにナイロンの靴下で口を覆われ、両足を括られて後手に縛った縄の余りをベッドの脚に繋がれていた。此の儘の姿で出番を待たされるのである。一方、志津江はトランクから出され、注射されて元気をとり戻された身体に、日本髪のかつらをかぶせられ、腰巻を巻かれて転がされていた。やがて自分達も時代劇のふん装を整え終った男達は腕時計を見ると、「さあ、時間だぜ。志津江から先きだ。今日は大勢のお客さんが居るんだ。余りじたばたするんじやねえぜ。じたばたしたって救げようなんてやつあねえんだからな」と云いながら、大勢の客と聞いて驚いたように目をみはり、立つのを渋る志津江の縄尻をぐいと引いて立たせると、ベッドの脚元の珠子に向い、「お前は志津江の一幕が終った後だから、その儘おとなしくして待っているんだぜ。薬は出る前にしてやるからな」と云うと、間のドアを開けて隣室に、身体を締め仲々歩こうとしない志津江を小突きながら入って行った。小突かれてよろよろとよろめきながら一歩踏み入れた志津江は一瞬、猿轡の下から「アッ」と声を挙げ、立ちすくんだ。真暗で自分だけまぶしくライトを当て

られ、その照り返しで僅かに薄黒く分る全部黒マスクをつけた二十人からの男達のギラギラ光る目、それが全部志津江の緊縛された姿を凝視している。これ迄はあの男達に見られるだけだった志津江にとって、これだけ多くの、而かも見知らぬ男達の目で見据えらるる恥辱に、志津江は身体を固くし、後から男達に小突かれても前に進めずに居た。

一方、此の有様を黒マスクの下からじっと見つめている英雄は、今連れ出された女が紛れもなく志津江であることに、しばらく振りで本人を目前にする懐かしさと、余りにも早く目の前に引き出された驚きと、だが今日は完全に志津江を救出出来るという安心感とから、むしろ、これからの責めを期待するようなおかしな気持であった。

やがて、会員達の前では、これ迄何回も練習させられた志津江の責めが始まった。梯子にうつぶせに縛りつけられての鞭打ちに、身動き出来ぬ身体をよじり、呻き泣き、更に失神一步前で梯子から解かれて宙吊りにされた上での、ろうそく責めになると、その熱さに両足を締め、更に身体を屈伸させながら暴れもがき、けものの吠えるような呻き声を洩らし、全身から油汗を流す志津江のあえぎ、救いを求めているような顔。それを激しい息遣いをしながら見つめている英雄も、流石に余りの物凄さにじっとして居れなくなった。然

し警官隊が突入して来るのにはまだ少し時間があり、自分一人でどうすることも出来ないのだと再認識すると、警官隊の突入時間を、自分が少しでもショーを見たい一念で、定刻より三十分も遅く始まるよう通報した自分の浅薄さを今更乍ら後悔した。

「志津江、許して呉れ。まさかお前が先だとは思わなかった。苦しいだろうな。然し、あと十分だ。我慢して呉れ。あと十分経てば救い出せる」

英雄は胸の中でこうつぶやき、志津江に詫びていた。だが、その志津江も余りにも激しい責め苦に耐えられず、遂に失神してぐったりとぶら下ってしまった。男達は口では「いいさまだ。少しはこたえただろう」などと云いながらもあわててその志津江を下すと、そのまま抱き上げながら隣室へ運び入れた。会場ではライトも消され、真暗闇になっても口一つきく者もなく、唯激しい息遣いのみが聞えていた。

隣室では、例のように志津江に注射を打って緊縛、猿轡のままベッドの上に横たえ素早く自分達のふん装を解いた男達は洋服に着換えると、今度は珠子の腕に注射した上、例のように両脚を括った縄を首から背の手首に結びつけた前屈みの姿勢にし、後から突き出した尻をつつ突きながら、

「さあ、お珠さんの出番だ。薬は今注射して

やった。だが、ちゃんとやらなけや、明日は知らんぞ。ええか」

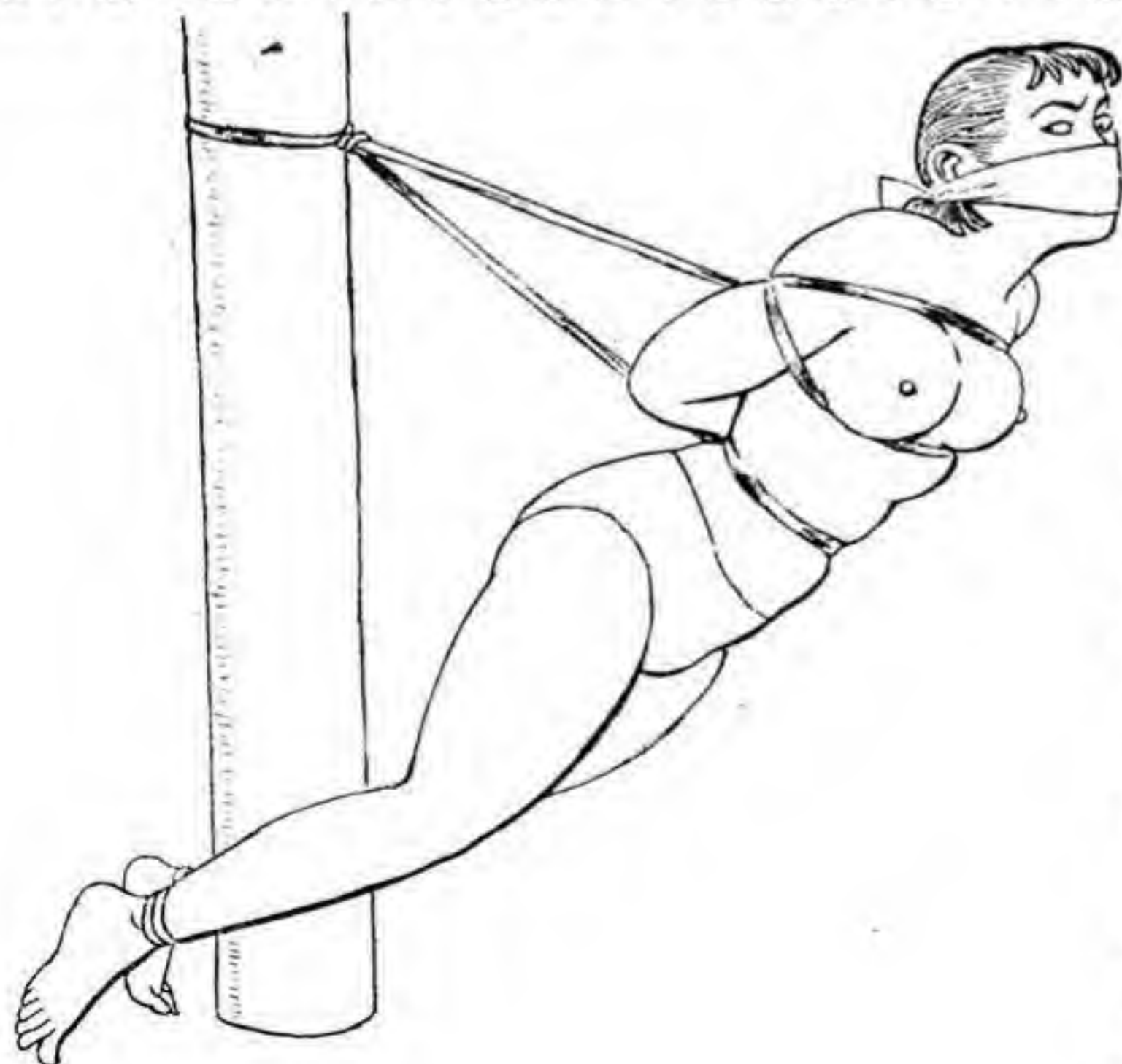
そんな事を云うと

「さあ、歩くんだ」

とせき立てながらドアを開けて会場へ押し入れた。勿論、珠子も志津江同様、会場内を一目見た瞬間、一声呻き、身体を縮め、歩こ

うとはしなかった。男達はその珠子のつき出た尻をつねりながら、中央の椅子へと引き出した。その有様を相変らずギラギラする眼で見つめる会員達の間の英雄は、そろそろ焦れ出して居た。そっと腕時計を見ると警察へ知らせた時刻はもう過ぎていく。どうしたのだろう。まさか、あれだけはっきり承知の旨を云った警部なのに急に予定を変更する訳もなし、一体どうしたのだろう。英雄は気が気でない。一その事、あの隣の部屋へ一人忍び込み、自分で志津江を救け出そうか。男達は此処でもう一人の女を責めるのに熱中している。志津江はきつと失神し

たままあ室に居る筈だ。そう思うと、英雄は意を決したようにそっと周囲を見廻わし、どの会員も今始められた珠子を椅子へ縛りつけての鞭打ちの光景に熱中している様子を見ると、そっと会場を脱け出し廊下づたいにあの室の前まで辿りついた。鍵穴から中を覗くと、居る！志津江がベッドにぐったりと横た



今月の縛られた女優達

大河原珠樹・記

わっている。今自ら志津江を救出出来る喜びと、此の冒険とで手がぶるぶる震え、心臓は早鐘を打つように鳴った。でも急がねばならぬ。あの男達が戻って来ない裡に連れ出さねば。英雄は、はやる心を静めながらノップをひねった。ドアは鍵を掛けてないとみえて軽

く開いた。足音を忍ばせながら室内に入った英雄は、壁越しに聞えた珠子の一際高い呻き声に「ハッ」と立ちすくんだが、次の瞬間、早く、志津江の縄など解いている余裕などない、その儘だ。と、ベッドに駆け寄ると志津江の耳に口を寄せ低い声で

「志津江。僕だ、英雄だ」

と呼びかけると、志津江の反応を確かめる暇もなく、いきなり緊縛の志津江を担ぎ上げると、開けた儘のドアから廊下に忍び出た。その途端、遠くからサイレンの音が聞えて来た。警官隊だ。やっと警官隊が突入して来る。英雄は、安どの胸をなで下ろしながら志津江を肩に担ぎ、会場とは反対側の廊下を走った。会場では、警官隊の突入を知ったのか大きなどよめきが起こり、廊下へとび出た会員達が先を争って逃がれようと階段の降り口でもみ合っていた。やがて、あの三人の男達も天井から吊り下げた猪縛りの珠子の縄を解こうと、暗闇の中であせっているところを捕縛され、同時に半死半生の珠子も救出された。勿論、勝手口へ降り立った英雄も志津江を担いでいた為、一応警官達に検束されたが、指揮して来た警部の声がかかりで許され、今は緊縛も猿轡も解き外された志津江と抱き合って嬉しさに泣き合っていた。

あれから一週間目。休養の為病院に收容されていた志津江もすっかり元氣を取り戻し、英雄の家に帰っていた。勿論、待ちあぐんでいた美佐子の喜び様は此の上もなかった事は云う迄もない。地下室での生活や責めについて色々訊ねる美佐子に、志津江は一つ細かにその時の様子を教え、それにいたわりの言葉を浴びせて呉れる美佐子に深く感謝しながら

▽孔雀城の花嫁 (東映) 美空ひばり

気位の高い將軍の姫君をこらしめ、まっとうな人の道を教えるために、山男の源太郎が城から姫を盗み出すが、やがて山の隠れ家を家臣達が発見したので、源太郎に情がうつり別れたがらない姫を無理に柱へつないでしまう。その縛りが、しごくザツとしたもので、太い縄を、ゆるくクルクルと三巻ばかりあてがっているだけ。それでジッとしているのが、可笑しなぐらいの不

出来。

▽女と海賊 (大映) 三田登喜子

冒頭のシーンで商船を襲った海賊どもが獲物と共に拐した女どもを自分達の船へ積み込む。その中に武家育ちの娘が激しく抵抗したため裸に剥がれコモで包まれ胸と腰のあたりをグルグル巻きの荷づくりされて小舟から甲板へ吊り上げられる。伊藤大輔監督らしいリアルな迫力のある場面をみせる。女嫌いの首領はこの女を激しく責める

が、ここらも迫力がある。

▽女と海賊 (大映) 京 マチ子

手代と駈落ち中に、間違つて海賊船に乗込んでしまったお糸が、舟艙に鎖でつながれる。後手首は見えないが、足首に木製のカセがはめてあるのは珍らしい。またそのあとで後手、猿ぐつわをされる場面もあるが、猿ぐつわが単に口を覆うだけでなく齒の間に噛ませてあるのも見事だ。

▽隠密変化 (新東宝) 若杉嘉津子

柳生十兵衛の愛人お秀が、疾風同人一味のために、十兵衛をおびき出す罠にと捕われる。後手にグルグルと太い縄で四巻ばかり猿ぐつわをされて拐かされ、牢にいれられ、折檻もうけるが、ここらはお定まりのシーン。

▽隠密変化 (新東宝) 無名女優大勢

お秀が拐かされる時に同じ店に働いている女達が、ごっそり全員(数名いるが)縄やしごきなどで縛られ座敷に転がされる。

▽お嬢吉三 (大映) 小野 道子

お嬢吉三を仇と狙う悪親分伝法院一味が吉三を慕う女芸人加代を捕えて番所へつき出してしまふ。番所の柱へ太い縄で四巻ばかり後手に縛られて座っているとところへ彼女の恋仇のお民が助けに来る。

▽風小僧第三部・嵐を呼ぶ凶剣 (東映) 山本 鳥古

野武士の首領の妹おゆう、実は風の小六の旧臣だが、小六の持つ白鳥珠を狙う悪老婆達が、小六達をおびきよせるために妖術で彼女をさらう。小六達がかけつけた時には、グルグル巻き(太い縄で丁度十巻)の彼女の元へ白刃が突きつけられる——といったところでこの巻が終る。

▽風小僧・野武士出撃 (東映) 市川恵美

風の小六の友達の玉虫が悪い人買い塩辛太夫につかまり下女として使われていた時あやまって水をひっくり返し主人の着物を穢したと中縄でグルグル巻きの後手に縛られて答打ちの折檻をされかける。

▽ふたり若獅子 (東映) 千原しのぶ

華道の師匠のお志津が、悪商人、相馬屋に追われている娘お律(内山栄子)をかくまっていたのがバレ、とり返される時に縛られる。細縄で四巻後手、手拭で猿ぐつわされ座敷に転がされている。

そのあと彼女の恋人、墨染新九郎をおびきたすための罠に相馬屋一味に再び縛られ田沼意知の屋敷にとじこめられる。今度は中縄で四巻ギッシリ縛られ座っている。彼女の縛りは久々の登場だが、やはり年期の入ったところはみられる。

も、あの当時の激しかった責めを思い出すと、つくずくと自分の運命が如何に変転しようとも、責めからは免れないように仕組まれているのだという事を悟るのだった。

そして、今となってはむしろ責められる事に喜びをさえ憶える自分に気付くと、もっともっと変った運命の中に立たせられ、色々責められる方が却って平和に暮すよりも生き甲斐があるのではなからうか、とさえ思うのだった。

案外、此の家で平凡な生活を送るのは長くはないかも知れない。又、いずれ運命の変転に遭遇して、激しい責め苦の中で、もだえ苦しみながら、いやむしろよろこびを感じながら暮すようになるのであろう。

そんな事を考えている志津だった。果して、運命は再び此の少女を、激しい責め苦の境遇に立たせるのだろうか。

—終—

附記 珠子は今、麻薬中毒から逃れる為病院に強制收容されている。あと半年も経てば正常に戻るだろう。その時は、船越が自分の家の女中として面倒をみる事に話がついている。



創作 猩紅匪

(前篇)

菅良太

喪神窟の虜

一、燃える翼

……荒尾中尉は長い昏睡から漸く意識を取り戻した。見ると自分の体は、いつか機翼から

一〇米程も先に投出されていた。最前まで乗っていた偵察機は、おびたしい黒煙を上げながら燃えている。本能的に彼は腰の軍用鞆の書類に手をやった。そして無事を確かめると、今度は「沖……沖伍長！」と叫びながら燃える機翼に近ずき、操縦席あたりを見たが、そこは最早、焰の海と化して、

沖操縦士の姿は見られなかった。荒尾中尉は猶、狂気のように叫びながら機翼の周囲を廻り、更には付近の樹間を沖伍長の姿を求めて走り廻ったが、一鳥一獣の声もきこえない山林は、遠く機翼の燃える無気味な音が聞えるのみであった。

荒尾中尉は、北支の山間に跋扈して日本軍の大陸作戦に障害をなす、執拗な匪賊の巢窟を偵察する任務を帯びて、部下の沖伍長と共に偵察機に塔乗し、既にこの地方の地形と、匪賊の根拠地と覚しき地点との偵察を果し一路、関東軍司令部に帰還するその途中であった。

霧のため操縦の方向を誤った機体は、霧の晴れた後も、山間の空を低空を続けていく中に、不覚にも匪賊の発見する処となり、高射砲の猛射を浴びた。翼をかわす暇もなく一翼を射抜かれて、無念の不時着を余儀なくされたのであったが、着陸の際に機体が巖角に触れたため、二人共、あっという間に操縦席から転落したのであった。

荒尾中尉は久しい間、自分と労苦を共にした沖伍長の若い凛々しい風貌を脳裡に浮べな

がら、どうしても彼を捜し出さずには置けないと思った。

彼は、猶も沖の名を連呼しながら、付近の森林帯を駆け巡った。しかし沖伍長の姿は見えず、その声は空しく山の裾を返すばかりであった。

その時である。「ひゅーん」と不気味な音を立てて銃弾が、彼の近くの樁の幹に炸裂した。荒尾中尉はキッと成って身構えをした。

機体の墜落から、彼の存在を付近に住む匪賊が探知したものらしい。瞬間、身の危険を感じた彼は、腰の書類鞆を雑木林の中にある樁の木の大きな空洞の中に手早く隠すと、腰の拳銃を抜き引金に指を掛けながら、猶犬のような俊敏さで辺りに気を配った。

前方の樁の木の蔭に、ちらりほらりと人影らしいものが見えたかと思うと又、一発、背後から彼の肩をかすめた。彼は、匪賊軍に完全に包囲された事を感じた。そして人数も二十三名を越えているのを、辺りの空気で察知した。匪賊達はまちまちの服装をしていたが手には一様に銃を擬していた。彼等は木立や岩を楯に構えながら、じりじりと包囲の輪をすぼめてきた。荒尾中尉の拳銃が激しい火を吹いた。それは丁度、彼から発した憤怒の火のようであった。彼の射撃は、候補生当時から聞えが高かった。しかも連戦に彼の腕は磨き上げられていたから、無駄弾はなかった。

見る見る三人、四人と敵は倒されて行った。

相手が剛の者と見るや匪賊達は一度姿を消したが、再び倍加した人数で迫って来た。今度は銃弾ではなく、長い尾のついた円形の手榴弾のようなものを投げて来た。パンパンと足下に炸裂するのを見ると、細かい砂を入れた「眼潰し弾」であった。

「うぬっ、卑怯なッ」と彼は瞬間、齒がみをしながら猶、拳銃を擬して辺りを睥睨した。

すると今度は、投げ縄が虚空に見事な弧を描きながら飛んで来て、彼の足元に掴みつこうとした。彼が、それを払い除けると、又一つ背後から蛇のように執拗に掴んで来た。「眼潰し弾」「投げ縄」「眼潰し弾」「投げ縄」……連続攻撃のため、流石の射撃の名手も足を掴まれて転倒し、全身を蜘蛛の糸にかかった胡蝶のように藻掻きながら深い網目の中に落込んでしまった。

二、猩 紅 匪

荒尾中尉を捕獲したのは「猩紅匪」と呼ばれて、善良な北支の住民を震駭させている兇悪な兵匪の団であった。

隊長は劉永福といって、匪賊中でも強大な兵力と、王侯のような権勢とを誇っている大立物で、平素、猩々緋に染めた毛皮の上衣をつけている事や、掠奪の際に、いつも猩々緋の旗を先頭に掲げて来るために、この「猩紅

匪」という呼称があった。八路軍と結託して日本軍の大陸での軍事政策に執拗な妨害を与えていた。

その本拠は、巨大な岩壁を砦にした山寨で「喪神窟」とよばれている古い寺院を利用していた。宋の太宗の時代、皇帝の寵愛を失った經玄という高僧が世を呪い、この山廟に籠って三千世界の鬼神を封じ込めた窟だと呼ばれていた。

見るからに怪奇な廟であるが、廟はこの匪団の本部として専ら使用されていた。更に附近の巨大な岩窟には高射砲、機関銃、銃、弾薬などが備えられて、配下の数は千名といわれているが、定かな数は分らない。

三、狙上の鯉

剝落してはいるが由緒ありげな朱の柱、亀裂は生じているが整然とした石畳、見るからに古廟の雰囲気を持つていながら、兵匪の住み荒した頽廢の姿は隠せなかった。喇摩仏を思わせる巨大で怪奇な面貌の女神が安置してあるが、仏具らしいものは取片付けられており、神殿はいつか匪団の本部にあてられているらしい。

頭目の劉永福は正面の椅子に悠然と腰を下ろしていた。浅黄の服の上に目の覚めるような猩々緋の毛皮を着た、もう六十に近い年配の男で、一見、匪賊の頭目といった精悍さよ

りも、利にたけた商人といった風貌を持っていた。荒尾中尉の軍服を、ずたずたに引裂いて調べている瘦せ型の口髭を生やした男は副頭目の元蒼竜で、野心と凄腕をもって副頭目の地位にのし上った男である。その他、猩紅匪団の主脳幹部らしい男達が十数人、居並んで捕獲した日本将校の取調べに当たっていた。

コの字型に並べられた椅子、卓の中央部にシャツとズボン下だけの惨めな姿で厳丈な木椅子に細引で雁字搦めに縛られているのは、荒尾中尉だった。悪びれた風なく、胸を張って泰然としていた。歳の頃は三十を越えたばかりで、長身で胸幅の広い逞ましい骨格を持った男で、やや太い眉の下に黒く澄んだ瞳が輝いていた。形のよい鼻梁、意志的に堅く閉じた唇は、執拗な取調べに頑強な沈黙を続けていた。

元蒼竜は上衣、袴下に何物も匿されていないと知るや、苛立しそうにそれを投げ捨てる

と、
「軍用書類を、どこかに隠している筈だが、その在り場所を白状しろ」

と鋭い声で問い詰めた。

「幾度、同じ事をいわせるのだ。俺は、そんな物は一切、知らん」

と荒尾中尉は面倒らしそうにいつて又、口を閉じた。短く刈り上げた口髭が、彼の軍人らしい風貌を一そう引緊めた。

「若い、仲々いい度胸だ。何だ階級は？」
劉は元に尋ねた。

「金条に星二つですから陸軍中尉でしょう。相当なしたたか者です」

と答える。すると傍から

「此奴のために味方は全部で八名やられました。拳銃の腕も大したものですよ。」

と幹部の一人がいった。劉は静かに

「強情を張らず素直に白状して、此所の仕事をせんか、大切に扱ってやるぞ」

と唇に微笑を浮かべていった。荒尾中尉は満面、朱を注いだようになって

「馬鹿、日本帝国軍人が匪賊の手下になれるか。武運拙く捕われた以上、もう生きて隊



には帰れん。潔よく処刑してくれ」

と言放った。

「まあ、そんなに死に急ぎせんでも、俺の方
に色々都合がある。どうしても白状せんと
なれば好まんが、体にきく事にするが、どう
じゃ」

と劉が相変らず落付いていった。

「うむ、面白い。拷問にかけるといふのだな。

俺も日本男児だ。帝国軍人だ。拷問ぐらいで
音を上げると思ふか」

と額に青筋を立てて怒鳴った。

「よし、その言葉を忘れるなッ。邱、拷問の
仕度をしろッ」

と傍にいた蒼竜の声に応じて三、四人の幹
部が、ぞろぞろと、その室を出て行く。荒尾
中尉は胸を張って大きく呼吸すると目を閉じ
た。それは、あたかも蛆上の鯉のように静か
で潔よい姿だった。

四、血 と 脂

巨大な阿修羅像を思わせる憤怒の女神像の
胸の辺りに、両手両足を充分に開いた姿で荒
尾中尉は逆吊りにされていた。全身が赭泥に
塗られた神像だけに吊られた彼の体は、くっ
きりと浮び上ったように見えた。赤裸に剥か
れた体に、一筋の輝が純白で眼が痛いような
潔よさを持っていた。

「ほう。仲々、いい躰をしとるぞ。均齊がよ

くとれている」

「それに筋肉がよく発達して、皮膚の光沢が
美しい。」

「胸毛が仲々、立派ですナ」

という囁きが洩れた程であった。

健康というより厳しい軍隊生活で鍛え上げ
た肌の美しさ、規律正しい秩序の中にいる
ものの、端正な輝きが溢れている体軀であっ
た。

劉から拷問を任せられた邱という中年の男
は、演技をする役者のように須弥壇の上に上
ると、長い皮の鞭を振りながら

「どうだ、若造。強情を張らねえで、頭目の
お情に縋ったらどうだ。ここは喪神窟という
名の通り、神も仏もない処だぞ。この女神様
は、貴様のような犠牲を欲しがっていらっし
やるんだ。若い男の血や脂を殊の外、御所望
なのだ。今俺の鞭で、その血と脂をしこたま
絞り上げてやるぞ。いいか、覚悟しろッ」

といいざま、鞭を振った。しばらくは、び

しりッ、びしり、という鞭の皮膚に炸裂する
音が続き、それが巨大な伽藍の中に訝した。

荒尾中尉は逆吊にされて鬱血した顔をのけ反
らして、この苦痛に耐えようとした。胸、腹、
太股と鞭の痕が縞を作った。およそ十鞭ほど
受けた頃、彼の胸の辺りから脂とも汗ともつ
かぬものが浮び上り、やがてそれが、ころこ
ろと珠のようになって逞しい胸毛に搦まりな

がら、喉の方に転がって行った。しかし荒尾
中尉の堅く閉じた唇からは、溜息ほどの呻き
声も洩れなかった。邱は鞭を投げ捨てると

「強情な野郎だ。今度は必ず音を上げさせて
みせる。」

といいながら、巨大な神像の肩にかけた縄
を解き放ったので、彼の逆吊にされた肉体は
鈍い音を立てて須弥壇の上に転落した。大き
く口を開いた女神は、この哀れな犠牲を哀れ
み蔑むように見下していた。

邱は一服すると、すぐ次の拷問に取り掛っ
た。二人の部下に、倒れている荒尾中尉の両
脚を大きく開かせると、深く胡坐を組ませ、
裸の辺りを細引で括り上げ、今度は引きし
てその細引の余りを首に掛けて締め上げた。
大の男が二人がかりで力一ぱい締め上げたの
で、流石の彼も「うーむッ」と呻き声を洩し
た。一度引いた血色が再び彼の体に蘇えって
来た。

「どうだ、少しはこたえたろう。これはお前
の国の海老責という拷問だ。今に体は海老の
ように曲り、真赤になるぞ」

といいながら、更に縄を掛け、まるで蒲団
包みのように括り上げた。

「そこで、もう一度緊上げろ」

と邱が下知すると、二人の部下は左右から
彼の肩に足を掛けて緊めた。

「ぐう……」

と奇声に似た呻き声を上げた。全身から湯玉のような脂汗が胸から腋から滴り、床板を濡らした。額には蚯蚓のような青筋が現れ、眼は血走った。苦痛のために歯を食いしばり、奥歯がぎしぎしと軋んだ。

「どうだ、苦しいか。書類の在りかを白状すれば、今すぐにも許してやるのだが」

と蒼竜は彼の顔を覗き込むようにしていった。荒尾中尉は苦痛で朦朧とした意識の中に二、三度、首を振った。蒼竜は、カッとなって「この野郎、この態になつて、まだ強情を張るのか」

と、首と脚の密着した辺りに帯剣の鞘を挿込むと、力任せにこじ上げた。「うむッ」と呻きながら荒尾中尉の体は荷物のように、ごろりと転がった姿は悲惨というより、むしろ滑稽なあり様であった。

五、豊 艶 齡

「まあ、何という格好でしょう。それに、あの苦しみようは、どうでしょう」

と突然、男ばかりの殺風景なこの会議室にあでやかな女の嬌声が起った。

「おお豊艶齡か。ここは、お前達の来る処ではない。あっちで待っていなさい。」

と劉が、やさしくいった。

よらないしたたか者ですね」

「そうだ。お前の親父は日本兵のために殺されたのだったなア」

「そうです。討伐軍のために捕えられて、日本刀の試し斬にされたという事です。罪もない百姓だった年寄りを……、だから私は日本兵と見ると、すぐ憎くなるのです」

といいながら、荒尾中尉の無残な海老責の姿を、さも気持よさそうに眺め入るのであった。

豊艶齡は二十七、八の、やや大柄な脂肪質の美人で、ぱっちりした大きな瞳と、笑うと見える糸切歯が特徴の緋桃のような女であった。娼家の女だったのを劉に目を掛けられ、幾人かいる愛妾の中で最も寵愛を受けている女である。青地に金で孔雀の刺繍をした派手な服を着て黒い扇を弄びながら淫虐的な瞳を目ばたきもせず、荒尾中尉の体の上に投げかけていた。

邱は、裏返された蜚のようなぶざまな荒尾中尉の体を引起すと、縄を解きにかかった。

「この海老責という拷問は、せいせい十分位で、それ以上は体が持ちません。今は体が真紅になって滝のような汗を流していますが、それが止むと蒼白になります。そうしたら事切れです」

と説明する。劉は

「そうだ。大切な捕虜を、そう簡単に殺して

は玉なしだ。」

と頷いた。縄は解かれたが荒尾中尉は、ぐったりとして動かない。解かれた縄は幾筋も床の上に散乱していた。

「吊責や海老責では平凡ですわ。もっと奇抜な拷問が見たいわ」

と艶齡は甘えるように劉に寄り添っていった。それは、毀の紂王に媚を送る姫妃の、なまめかしさだった。彼女は、この「喪神窟」で幾度も裏切者や脱走者の処刑や拷問に立会っているの、少しも恐れてはいない。そうした残虐を楽しんでいるかのようであった。すると、邱が下卑た顔に笑を浮かべて

「ヘッ、ヘッ、ヘッ。今度は、もう一寸変った責を、お目に掛けましょう」

と、二、三人をうながして又、部屋を出て行った。荒尾中尉は意識を回復したのか「うむ」と呻いて軀を動かした。

蒼竜は近づく、彼の頸筋を掴んで引起し「どうだ、大分痛めつけられて苦しかったろう。一つ気付けに酒でも飲まんか」

といって彼の唇に注ぎ込んだ。彼が歯を食いしばって拒んだので酒は床の上に流れた。

「此奴、どこまでも反抗しおる」と、頬を一つ殴り蹴倒した。

その頃、部屋には酒や肴が運ばれて女が五六名、入って来た。女達は裸で床の上に転がされている日本の捕虜を眺めて、哀れむよう



に又、嘲けるように笑い合った。

「とにかく今日は、偵察機を撃墜し日本の将校を生捕りにしたのだから目出度い。乾杯しよう」

と劉永福は、上気嫌でいった。そして杯を触れ合う音に伴って談笑の聲が、そこそこに起った。

陰惨な拷問の場は、一転して宴会場と化した。赤や青の女の衣装が蝶のよう飛び交い、華やかな雰囲気となるだけに、荒尾中尉の姿は一層、惨めで痛ましかった。

六、蠟燭跨ぎ

その時、邱の指図によって、二、三人の部下が一本の太柱を運んで来た。四米程の長さの柱で、その上に約五十本の献燈用の太く長い蠟燭が、一定の間隔を置いて立てられてあった。

「おい、邱。一体、何が

始るんだ。酒の余興でも、やるのか」

とひやかした程で、拷問の支度とは誰も思わない。

「まあ、黙って見ていて下さい。」

と笑いながら、その蠟燭の一つ、一つに火を点じた。焰は、ゆらゆらと揺れて辺りは、昼をあざむく明るさになった。邱は倒れている荒尾中尉を引き起こし、再び後手に縛り上げ、更に腰の囲りに縄をかけると、彼を抱き上げるようにして、その蠟燭を跨がせて、縄に結びつけた縄を手綱のように取り

「これが蠟燭跨ぎという刑罰です。蠟燭が長いために爪先で歩かないと、蠟燭の焰が脚に焼けつくので、嫌でも爪立ちで歩かなければなりません。ほら御覧じろ。あの通りです。」

見ると成程、荒尾中尉は全身の筋肉を硬直させて伸び上るように爪立ちになった。

「跨ぐだけでなく、向う迄歩くんだ。」

と邱は、鞭を振りながら手綱を引いたので彼は、よろよろと、よろめいた。

「うぬッ、日本男児を罵り者にするかッ」

と彼は、真赤になって怒鳴ったが、甲斐もなく一歩、一歩と歩を進めて行かねばならなかった。少しでもよろめくと脚が焼けるので彼はどこまでも真直ぐに歩かなければならなかった。額から汗が玉のように流れ、瞳の色が据っていた。人々は酒を酌みながら、この変わった趣向を手を打って嬉んだ。「もっと早

く歩かせろッ」叱咤したり「もう少しだ頑張れ」と声援するものもあった。それは刑罰というより、酒宴の余興といった方が近かった。かなり久しい時間をかけて、漸く五十本の蠟燭を跨ぎ終ると、邱は鞭を振って

「今度は還りだ」

と怒鳴った。牀全体を爪先で支える苦痛に荒尾中尉は全身の疲労と爪先の疼痛に爪先を下そうとすると、蠟燭の焰は、ジリジリと音をたてて彼の脚に焦げついた。人々は腹をかかえて笑ったり、中には、わざわざ近ずいて来て、彼の肩先を小突いたりする者もあった。豊艶齡は、この変った趣向に、すっかり満足したように、声を上げて笑い続けていた。漸く還りの蠟燭跨ぎが終った時、疲労し果てた荒尾中尉は一声呻くと、その場に昏倒してしまった。

「とうとう伸びやがった。意久地ない奴だ」

と邱が冷嘲する。すると劉は

「随分、責めたから奴も疲れたろう。少し休ませて介抱してやれ。豊艶齡、お前達の部屋に連れて行って、朝まで少しいたわってやれ」

といった。艶齡は女達を呼び集めて相談をしていたが、この命令を引受ける事になった。「しかし、艶齡よ。縄だけは、ゆるめるな。この男は仲々、剛気な奴だから一寸した縄はすぐ抜けてしまうから用心しろ」

と注意した。

「ぬかりはありませんよ」

と艶齡は笑って、失心した荒尾中尉を邱に負わせて、その部屋を出て行った。女たちもぞろぞろとその後に続いた。

その夜、深更まで彼等の宴は続いたが、その中でこの捕虜の処刑についての密議が交された。どこまでも責めて軍機を自白させようという副頭目説と、あの強情さでは、とても白状はしまいから、明日いさぎよく処刑しようという頭目説とが対立した。結局、頭目説に多くの賛成者があったので、今度は処刑の方法について討議が交された。すると幹部の一人が

「近頃、頻繁な日本軍の爆撃のために、われわれ団の名誉はかなり失墜して部落民の信望を失っているから、この際、部落民の前で処刑して我が団の威力を示してはどうか」

という提案があった。蒼竜は、この意見に賛成した。彼の意見は、あれ程の苦痛にもひるまない剛の者だが、羞恥には弱いらしい。日本軍人は死よりも名誉を重んじるから、公衆の面前で恥辱を加味した私刑を行ったら耐えられず、或いは白状するかも知れないといった。劉は、この意見を取り入れて、それでは明日、一日、鬼哭丘に晒台を設けて晒者にし、耐えかねて白状する機会を今一日、待つ事にし、もし白状しない暁は、翌朝、午前中

に青竜刀による決別の刑を行うという事に決定した。決別の刑というのは、中国に於いて清朝末期まで大逆の徒に行った公刑で、刑架に四肢を縛し、体の処々を削り取る惨刑で、別名五箇所斬りともよばれていた。

その刑の責任者には、副頭目の蒼竜と邱とが任せられることになった。

七、紅房夢

喪神窟の殺伐な一廓に、世にもなまめいた一室があった。それは劉永福が愛妾、豊艶齡のために作った室であるが、広い化粧部屋は女達の自由な使用を許していた。桃色の帳や螺細工の鏡台や朱塗りの寝台があり、調度のすべては、なまめいていた。

失心していた荒尾中尉は、ふと我にかえると、周囲の状態の異状さに、訝しく思った。檻房のかたい木床や藁の上でなく、何となく柔かい甘い香りの中に自分の身のあることに気がついた。

そして酒と煙草の匂いに混じって、脂粉の香りが辺りに漂っていた。美しい帳や衝立や調度類、これは決して匪賊の巢窟のものではない。

彼は、ある無気味さを感じて、とび起きようとした。すると、両手両足は嚴重に寝台の枠に縛りつけられていて、どうする事も出来ない。彼の体の上には薄い絹の薄団が掛けら

れてあった。

両手を縛してあるのは真紅の紐で、おそろく女達の腰紐か何かであろう。彼にとつては荒縄で括られて馬小屋の藁の上に転がされてゐるより一層、屈辱を感じたからである。

彼は夢をみているのかとも思った。昨夜の事を、幾度か思い出そうとしたが、連続的な拷問の疲労のため、それ等の事を脳裡の中でまとめ上げる事は出来なかった。

その時、不意に彼の顔の上に劉永福の赭顔が現れた。彼は、夜もすがら酒に浸けられたように、全身から熱柿のような匂いを放っていた。

「どうだ。昨夜は、ゆっくり休めたろう。紅い絹の褥の上で寝られるなんて、捕虜として破格の待遇だぞ。」

荒尾中尉は黙って目を睜って劉を睨みつけていたが、不意に涙が両眼から溢れて来て、左右のこめかみに伝った。

「何だ、泣きおるか。意久地なし奴が。口惜しいのか」

といいながら、長い煙管に火を点じて、ゆっくりと香りのよい煙草を、くゆらせながら「貴様が、どうあつても軍機を白状しないならば、今日は晒者にするぞ。部落中を引廻した上、はたものに掛けてやる。軍人は、おろか男子の面目が、どこにあるか。」

と憎々し気にいい放った。すると寝ていた

らしい豊艶齡が、しどけない寛衣姿で現われて、

「まあ、気がついたらしいわね。昨夜は暴れて大変でしたの。やっと皆で押えつけたのですけれど、大骨を折りましたわ」

と、あでやかに笑った。白粉を落した顔であるが、寝乱れた髪が妖艶だった。

彼は、カッとしたが、もはや運命のままに従うより他に方法はないと思つて観念した。

晒者にする程なら、処刑は免れるかも知れないという一縷の希望が湧いて来た。「死して虜囚の恥しめを受けず」という戦陣の訓を肝に銘じて体得していたが、その前に日本軍の

作戦に大きな利を得る自分の偵察書類を何とかして司令部まで届けたかった。それまでは死に勝る恥も耐え忍ばなくてはならぬと思う

と、あの雅木林の檜の木の中に置した書類が、彼の脳裡の中に浮んで来た。

彼は劉に

彼は劉に

「俺も男だ。どんな苦しい刑罰にも耐え忍んでみせる。好きなようにしてくれ」といい放った。

「まあ、憎らしい事をいうわね」と艶齡は美しい蛾のような眉を逆立てた。

劉も

「この青二才め、今に吠え面をかかせてやるぞ」と怒鳴った。その時、蒼竜と邱が部屋に入

って来て

「そろそろ、晒場の用意が出来ましたから、捕虜を連れて行きます」

と、寝台に仰臥している荒尾中尉の胸の辺りにかけてある絹の蒲団を手荒く引剥いた。

四肢を緊縛した真紅の紐がなまめかしく、彼は多くの人の視線の中で屈恥の悶えを続けるのだった。

(未完)

臨時増刊号「青い廃院」

今発売中 定価 二百円

二大長篇異色読切りサド小説と四馬孝の豪華口絵集！

弓沢俊二郎作・四馬孝画

永山久美雄作・杉原虹児画

「青い廃院」

「与那国奇談」

美貌の踊子と執念の男。全編にみなぎる妖しい悦虐の数々が、読者の心を揺るがす。

世にいう女護ヶ島。男性共有の奇風を廻って、緊縛と処刑に終始する一大ドラマ。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

二月号訂正

筆者は二月号の本欄で大江健三郎の見る前に跳べを引用したが、その中で大江健三郎が他の同系列の作家、例えば石原慎太郎の如く日本語の破壊的な使用者であるとした。併しこれは見る前に跳べに關しての私の所感であつて、彼の全作品については些か酷にすぎた様である。私は氏の週刊朝日に連載中の「無分別ざかり」を読むに及んで、所謂、美文調の古めかしい日本語でもなく、又徒らに流麗を旨とした一部翻訳家達の日本語でもなく、格調の正しい、そして同時に現代に訴える力を持った日本語を発見したからに他ならない。その内容はともかくとして、古来、老作家の副業とされているこの種の隨筆に至って氏は驚くべき程の速度と、適度の漢語風のニュアンスと、煽動的な構成とを示している。

その一部分には、新らしい詩語の萌芽さえも感じられるのである。筆者は尊敬と共感を以つて、この年少の作家の言葉に敬意を表し、前掲の一部分を訂正するものである。(原)

復刊第九十九項

出版物「サラ・ティン」

キャザリン・ガスキン著・福島正訳

白水社版 (Catherine Gaskin: Sara Dane)

私達は曾って、戦前から名画の呼び声高く而も戦後になって始めて公開され、深い印象をうけた「風と共に去りぬ」によって感動した。その女主人公スカーレット・オハラの名は、演ずるヴィヴィアン・リーの烈しい印象と共に世の男性に憎悪と羨望を交えた嘆声の対象となつたし、又女性達はバトラー船長と演ずるクラーク・ゲイブルに逞しい男性の一

側面をはっきりと感じ取り、又悲劇的なロマンティズムの代表者として登場するレスリー・ハワードの演ずるアシュレイに古典的な悲恋の理想的な映像を見出した筈である。

ここに紹介するサラ・ティンは、そのスカーレット・オハラより更に烈しく数奇な運命の持主である。女囚として動物同然の扱いをうけて英本国から、当時囚人の流刑地となつていたオーストラリアの土地に下り立った瞬間からこの物語は始まる。権謀術策により他を支配すること、男女を問わず征服すること、これがサラの其以後の生活の信条である。彼女は、より少い価値の物を与えて、数倍の価値のもの——それは金銭であれ、男の心であれ、利用の価値の貴いものである。——を他から奪う。その征服の道を進むサラの姿は、さながら、ドミナの征服の勇姿でなくて何で

あろう。私は意図されずして描かれたドミナの、この様に直接的な映像に接した事がない。英国の植民地政策とサディスティックな傾向は、遠くポーア戦役に見るまでもなく定評がある。そして、私達は、この様に具体的な形で女征服者の戦慄的な魅力を持った姿を提供された時、其等既成の知識の感動的な部分が極めて容易にサラ・ディンの書かれざる生活の空想と重なるのを感じるのである。オーストラリアでは英本国での狐狩りに模して人狩りが現実に行われていたという確実な論証もある。併せ考えて興味の尽きざる所以である。

復刊第百項

戯曲「第三帝国の恐怖と貧困」

ペルト・ブレヒト作・千田是也編

(白水社版ブレヒト選集第一巻)

(Berth Brecht)

ブレヒトは所謂、反ナチ作家である。メルやレマルクと同様に、彼の作品の中ではナチズムのみならず、ナチス政府やナチスに牛耳られていた国防軍、ナチスの提唱した善悪それぞれの施策等が、すべてKZ——即ち強制収容所での暴虐と同義に扱われている。特に近代劇の特質とされて省略され、要約された台詞と、無機質な匂いのする不思議な雰囲気、それから浪漫主義演劇の特質であった一切の反響、余韻を取り去った様な単純化された効果などが、ナチの制服、軍服、徽章など

の、すべてをフェティシス・ティークな対象として扱っている。それらは、丁度「令嬢ジュリイ」において、馬丁が主人の長靴に權威を感じ、圧迫されるのと同じ様に暴虐、——ここではサディス・ティーク即ち淫虐的といった方が適切だろう。——そのものが象徴される。軍隊用の重々しい長靴や、秘密警察——ゲシュタポ——の士官（その中には多くの女性も存在していた事は戦後に公表された）達の黒づくめの服装などが一般人にとって恰かも庶物崇拜の対象である様に描かれている。内容としては甚だ難解である。その上訳詞も生硬である様に思われるが、千田是也の良心的な監修が大過なく、まとめ上げていると考えてよいであろう。

復刊第百一項

新東宝映画「女間諜曉の挑戦」

小説倶楽部に連載された原作によって、一連の大陸ものシリーズとして作られた活劇物である。内容は勿論、大したものではない。支那事変中の裏話である。舞台は占領当時の北京、華北第一の都市、北京は、この作品の中で最も安手に再現される。恐らく、満州の片田舎にだってこの程度の街は、ざらにあるといった急造の北京である。地下室で密議する重慶側スパイ団、北京の街の中に山と積んで隠してある銃砲弾薬。——劇中この膨大な

武器が全部、物の十分位の間に郊外に運ばれてしまおうというスーパーマンそのものの御都合主義も散見するが、——といった、スパイに対する常識から判断しても全く解せないマタ・ハリ以前のスパイの間の駆け引きが、主要な部分を占めている。只、重慶側に晃彩という女スパイの女親分、日本側に高倉みゆき扮する三井と呼ばれる女スパイの幹部を配し、岸井という二枚目的な日本のスパイを両方で争った末に、何と重慶側の女スパイと岸井が結ばれて——二人共、射殺されるのではあるが——三井なる日本の女スパイは、寂しく日本に帰るという結末であるから、その脈絡のつきにくい筋を追かけるだけで大変で、映画としては全くの接続曲風の出来上りである。

ところで、この二人の女スパイが実に私達からは面白いのである。共に冷血残忍なスパイのことであるから、その魔性の表現が新東宝流にどぎつく稚拙に描かれているからである。特に、高倉みゆきが、丁度乗馬服フェティシスト藤山秀緒氏の様に、やたらと乗馬服を着込んで街をのし歩き、重慶側の密偵を馬で追い、犬を射つ様に殺してしまう部分などは興味を持たれるむきも多いであろう。映画としては前述の通り三流の出来、カメラも録音も良いとはいえないが、或る意味で刺戟の材料を求めるなら、この種の趣味のある方々には十分に満足して頂けると思う。敢えて本

欄に詳述した所以である。

復刊第百二項

出版物「人間—それ自らに背くもの」

ガブエル・マルエス著・小島威彦・共訳
信太正三

創文社刊 (Gabriel Marcel, Les

Hommes contre l'Humain.)

本項に哲学的な評論が登場するのは初めてである。(かつて、フランクウル教授の「夜と霧」が登場したことを除いては。それに「夜と霧」が心理学的な内容を主体としているのに反してここに挙げる作品は、むしろ哲学的な著作である) 私は本誌の様な雑誌に於いては適切でないと考えるので、この論文の内容について詳しく紹介したり、反論したりすることは省こうと思う。ただ、第三章以下に心理学の所謂「極限状態」に於ける人間とい

う見方とは全く異った観点から、ユダヤ人の虐待排斥を述べていることを指摘しておくにとどめる。そして、ナチスの暴虐が、単なる狂信的な暴力や宗教的な反感からでなく、実に、淫虐からよって起った事例の多いことを納得させてくれるということを書いておこう。本書は可成り高度の内容を持っている様に思われるが極度に独善的な部分をも含んでいる。著者は在日フランス人、訳文は良好である。

復刊第百三項

出版物「崩れゆく灰色の壁」

ヘリリエット・ローゼンベルグ女史著

講談社刊 (Henriette Rosenberg: The

Walls come Tumbling Down)

著者はナチス・ドイツの圧政下に生き、收

容所から脱出してオランダに逃げのびた。これはその手記を可成りドラマ・チックに脚色して書かれたと思われる回想録である。以前に本項に紹介した「オデット」——前、英首相ウインストン・チャーチルの姪が、特務機関員としてドイツの占領地区に潜入し、発見されて強制収容所に回され、ドロテア・ピンツ等の洗礼をうけながら遂に生還したその手記。英文——と同様な意味でここにあげておくが、オデットや「痛ましきダニエラ」——同じく以前、紹介した収容所ものの一つ——と異り、虐待の行為の烈しい描写はない。併し、女性による特殊な環境における絶対的な支配という点から考えて、複雑ではあるが紹介の価値のあるものと考え次第である。

新聞切抜通信

切腹のレポートに寄せて

須藤律夫・記

前月号に引き続いて今月も切腹記事の切抜をお伝えする。曾って本誌にも一寸触れた事があるが、筆者の物好きな季節的の分類によ

れば、どうもこうした出来事は所謂「陽気のよい頃」(三月—九月)に多いように思う。それかあらぬか四月から五月にかけて連続的

に切腹事件が起ったので、総て原文の儘抄録して見る事にした。勿論之は都下二、三の新聞に見られたものであるが、その中での詳細と思われるもの二例を採った。後者の場合、本来み仏に仕える身の一僧侶が、原水爆による再軍備に反対し、人類の平和を愛好するの余り、割腹し果てた事は強く感動させられるが、師は曾って(七年前)故山の僧堂に於ても切腹し、逆る血汐を以って血書を認めた事もある由。

殊に終焉の切腹は、長さ十五糎に渡り二筋に、古老に聞く簾腹であったなど、筆者は強く心を打たれるものがある。

日本刀で無理心中、空地で女給殺す

運転手が割腹、重体

(昭和三十四年五月三十日附内外タイムス所載)

トリスバーの女給に裏切られたタクシートの運転手が、女給を日本刀で切り殺し、自分も腹を刺して心中(未遂)をはかるという事件が三十日早朝、東京北区西ヶ原で起った。

同棲して巻上げ、

勤先かえて逃げ回る

三十日午前零時ごろ東京都北区西ヶ原一の五四トリスバー『グラナダ』に経営者本田宮江さん(四三)の女給佐藤はる子さん(二二)が北區田端六四一村上方に、訪ねて来た同区上中里二の一九明治交通タクシー運転手小川秀雄(二六)の同区田端町二の六九平和荘内に呼び出され、約二十メートル離れた都電霜降橋停留所近くの同一の五三菓子材料商斎藤幸一さん方隣り空地に連れ込まれ、いきなり刃渡り七十センチの日本刀で顔や腹などをメッタ切りにされ鮮血に染まって即死した。はる子さんの悲鳴でビックリした近所

の人が一一〇番で滝野川署に急報、同署員が駆けつけたところ小川は、はる子さんを切った刀で自分の首、腹などを刺したので同署員が近くの病院に收容したが助かる見込み。調べによると小川は明治交通に三十年十月から約四年間働いていたが同僚達の話では性格は明るく友達付き合いもよく、仕事も真面目だったといっている。はる子さんと知り合ったのは二、三ヶ月前だが一ヶ月前から同棲生活に入った。ところが最近のはる子さんが小川を嫌いだし勤め先を転々と変えて逃げ回っていた。そして『グラナダ』には十日前に来たばかりでマダムも本名さえ知らずジュンちゃんという愛称で呼んでいた。はる子さんは恋愛同棲期間を通じ小川から金品を相当入れあげさせていた模様であり、その挙句別れ話を持ち出された小川は真面目な性格だけに裏切られたショックが大きく、カッとなって無理心中を図ったものらしい。なお日本刀の出所も調べている。

行脚の雲水が公邸前で切腹

再軍備に反対

(昭和三十四年六月三日毎日新聞夕刊所載)
参院選挙の開票最中の三日午前十時四十五分ごろ、戦争と再軍備反対を唱えて全国行脚をつづけていた広島市基町八の、雲水、小林蘊徹さん(四二)が千代田区永田町の首相公

邸通用門前で短刀で自殺した。小林さんは『感謝戦争犠牲者、再軍備反対全国行脚』と書いたタスキをかけ、『第二次大戦後一億総サンゲを誓い平和憲法を制定したにもかかわらず現政府は戦争を準備している。戦争で死んだ幾多の霊に代り岸首相に死んで訴える』と記した公開状を読み上げ、出て来た同公邸警備詰所の麴町署中沢巡査部長に手渡して『首相に会わせろ』と申し入れた。同部長が一たん中に入ったあと刃渡り十三センチの短刀を取り出し、腹を真一文字に二筋、約十五センチ切り、さらに左頸部を切った。すぐ飯田町の警察病院に運ばれたが出血多量で同十一時十五分死亡した。

27年にも自殺図る

官邸前で切腹の坊さん

(昭和三十四年六月四日附読売新聞所載)
〔広島発〕戦争反対、原爆犠牲者をみよ、と三日朝東京都千代田区永田町の首相官邸前で切腹自殺した広島市基町、相生通り八の五僧釈蘊徹師(四二)本名小林藻生(しげお)は原水協広島支部の会員で、二十七年三月二十七日同市細工町にある大仏殿の中でも腹を切り、その血で戦争反対、原水爆禁止を祈願する血書を書き、さらに頸動脈も切り自殺を図ったことがあり、戦争反対と書いたケサをかけて数回全国行脚をした。平和運動に熱中の余り妻とも別れた。——完——

創

作

青火宴レポート

蒼 野 礼

青火館女主人、上条真砂が、芝生を敷きつめた広い庭の中央にある泉水の中に、上半身を剥かれて投込まれた頃から、青火会、月例夜会宴は、しだいに佳境にはいつてきた。

全身濡れ鼠になって妖声を放つ水中の美女へ、池の縁に群がった男性会員たちが、争って長い皮鞭を振う。

水銀灯に照しだされた青く澄んだ水の底を、人魚のように白い肢体をくねらして、真砂は遁げる。

呼吸の苦しさ、初夏の水の冷さに、長くくぐっていられるものではない。

「上がらしてえ！」

必死に匍い上ろうとする。そのずぶ濡れの肌に、容赦なく鞭の雨がふる。

「ああ…ああッ！」

緑石を両手で掴んで、胸をのけぞらすと、ざぶりとまた真砂の躰は沈んだ。妖美な眺めであった。

泉水をとり巻いている男たちの群から、川上道夫はそっと離れてテラスのベンチで憩った。足元に鞭を置くと、水に濡れた手をハンカチで丹念に拭き、おもむろにタバコを啜えた。白面の貴公子という美称が、まんざら気障でなくあてはまるような、ひどく垢ぬけて若々しく輝いた紳士である。

カクテル・ドレスを胸に抱えて、若い女が彼の傍に駆け込んできた。髪が乱れ、火のように荒い息を吐いている。

「よし子、どうした、もう、へたばったか」

川上は笑って彼女の頭を撫ぜた。花京台女子大学文学部二年生、貝崎美子。これが彼女の世間に通用している肩書である。然し、この夜会宴にある時の彼女は、青火を慕う一匹のマゾ蜚にすぎない。

「夜明けはまだ程遠いぜ。今頃からへたばってどうなるんだ」
むずと手を掴んで引寄せると、美子はおとなしくうなずいてみせ

た。眼をつぶって、胸を波打せている。

川上がドレスをのけさして見ると、美子の肌にはどこにも傷がない。初々しく締った肉置き、仔鹿のような可愛い肉体美の持主である。

青火会の男性会員に、一人だけ異邦人が交っている。張という華僑の男だが、この男は特異な虐技を持っている。さっきから彼の姿が見当たらないと思っていたが、なるほどそうかと、川上は思い当たった。

その張が、すらりとした長身を向うから運んできた。二十三基の水銀灯に、真昼のように皎々と明るんだ広大な芝生園で、あるいはかたまり、あるいは離れ、無数に演じられている責めの光景の中を、ゆったりとした歩調で縫い分けて来る。温雅とでも云いたい、柔和な貌である。

「降ルカト思ッタガ、イイ夜デ結構」

「ほんとうに」

そう答えて、川上は美子の背中をびしッと音をさせて一撃した。

「痛……」

「張さん、ほら返しますよ」

うめく美子を、川上はベンチから引き立てて、突き飛ばした。

美子を連れて張が去ると、川上は煙草を捨て、さて誰を責めよう？といった顔で、辺りを見回した。

邸内にしつらえられた特設バーに、じっと佇んでこちらを見ている、ピンクのドレスを着た外人のように姿の佳い女が、彼の眼を惹いた。眼が遇った瞬間、彼女は合図を送るようにシャンペングラスを一寸掲げて乾した。いかにも慣れた感じの、鮮かな飲み方だった。

大股に、彼女の方へ歩み寄って行く川上の背ろで、どっと笑声が爆ぜた。赤い六尺褌を締めさせられて、女二人が、相撲をとらせら

れたのだ。その後ろの芝生で、池から引き上げられた上条真砂が、二、三の男から、まだ執拗に責められていた。声もなく、ぐったり俯っているところを見ると、喪神しているらしい。

(これはいかん！)

川上は慌てて庭へ踵を返した。すると、ピンク色のドレスが、ふいに彼の横を駈抜けて、白い裸足で青芝の上を走った。

「お姉さま、お姉さま、しっかりなさい」

真砂を抱き起す美しい横顔を、川上は一寸気抜かれた面持で眺めた。真砂にこんな美しい妹がいようとは知らなかった。真砂の美貌は、男勝りの勝気な強い線があるが、この女の貌は、相似た輪廓の中に、不思議に甘い優しい線があった。

華奢な女の力では、意識のない人間の躰はたやすく扱えるものではない。石のように重くなっている。

「お……姉さまあー」

必死に抱えようとする女を、責め手は、姉の代りとはばかり鞭を浴びせた。ドレスがくりぬかれて、大きくのぞいている背が、ビシッとなる。

「む……」

「まあ、まあ」

と、川上は制止した。

「介抱しないと危いよ。相手を危険状態にするのは慎しもう。手当は充分許してやろう、な」

私が運んでやると、川上は細身の体格に似合ず、軽々と真砂の仮死体を両腕に抱き上げて、邸内に運び込んで行った。

邸の中には、ベッドを幾つも並べた一寸した医療室が用意してある。湿布薬からモルヒネまで、一通り備えられている。暗黒界に顔が利く張のルートで、モルヒネの他に、ヒロポンもヘロインも多量に購ってあるが、濫りに用いることは会の規約で禁じられている。

ついでに、ここで云っておくが、男女の不倫な行為は、固く禁律となつてゐる。純粹に、アブの愉快を慕う者だけの集いである——。ベッドの一つに川上が真砂を横たえ、彼女の妹は甲斐々々しく手当を施した。氣付けの注射を打ち鞭痕に湿布薬を当てる。

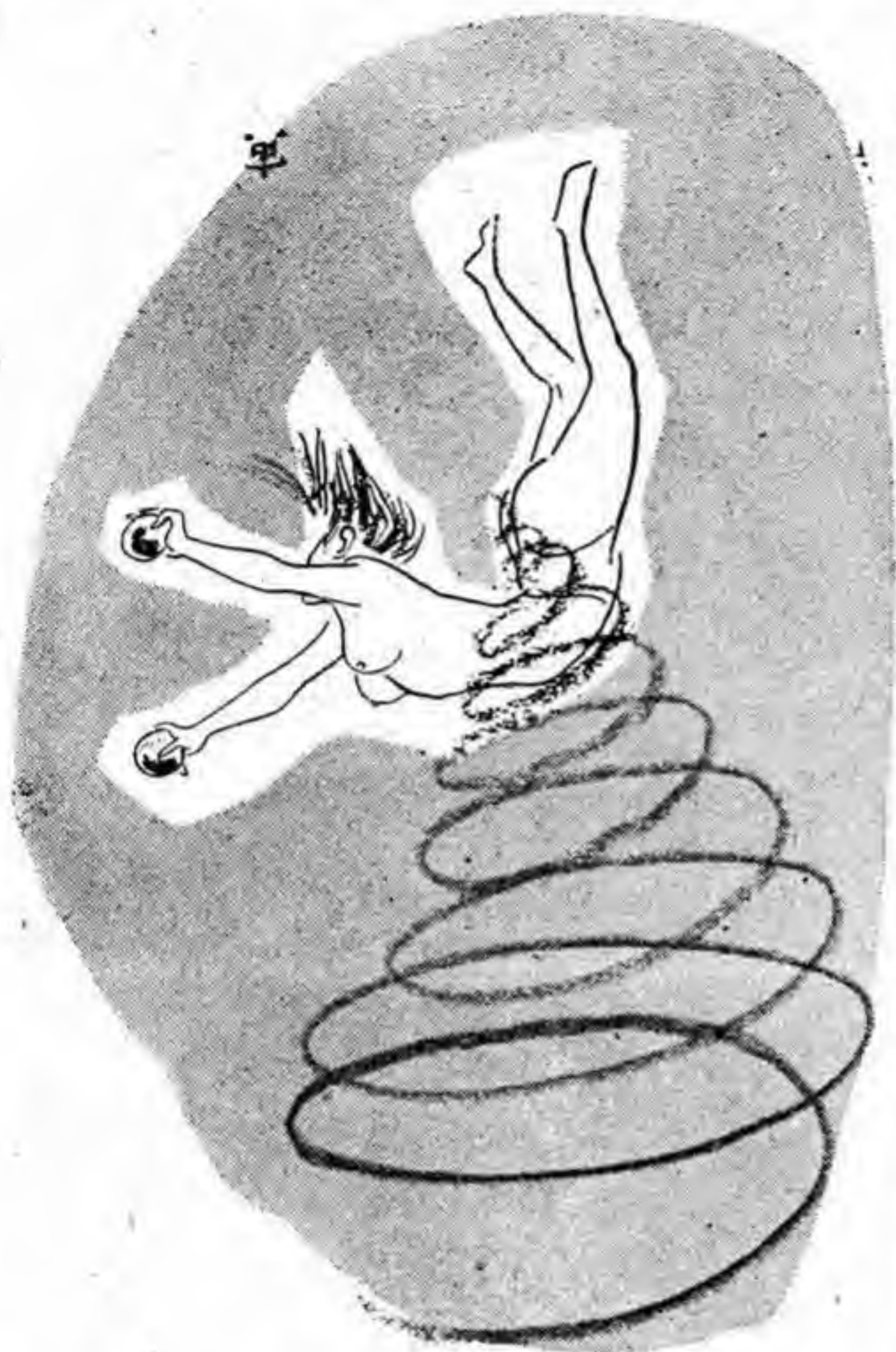
「うん……」

真砂が息を回した。

「動かないで、お姉さま」

「……ああ——滲みるわ……ううっ……」

と、その時真青な顔色で、ふらりと貝崎美子が、はいつて来た。



「川上さん……あたし、新しいマゾの境地、知ったわ。この境地、つかんで、うれしい……」

この女は、マゾの世界に新しい文学の塔を築こうとしているようだ、川上は想つた。青火のような、われわれの性の燃焼を、その炎の色の妖しい美しさを、彼女の才能は絢爛と描き得るかも知れない。

「か、かわ……川上さん……回復剤打って……お願い、打ってえ……」

がっしりと肩を押えつけている美貌の紳士を仰いで、口調の喘えぎに似ず、真砂は妙にとろめいた瞳の色を示した。媚びるような、羞らうような、黒いうるんだ眸子であった。

が、川上の心は、姉を手当している妹の、ピンクのドレスの曲線にうかがえるすばらしい肢体を、早く責めたい想いで一杯占められていた。すると、その彼の心を読んだのだらう、真砂は、

「三千代……もう大丈夫だわ……早く彼に！」
鞭を戴きなさいと云った。

上条三千代のすらりとした姿と並んで、川上は妖美を極める芝生の園へ降りて行った。鞭の唸り、美女の呻吟、悲鳴、人間馬の行進女相撲……愉快おう加被虐合致の飲宴は、倦むことを知らず多彩に延々とくり展げられていつている。

泉水のほとりに来て、川上は三千代にドレスを脱がせた。瞬時、顔を染めて、三千代はブラジャアに眼を落す。それもと命じかけて川上は思いいおした。
「それでいい。」

惚れ惚れと川上は眺めいった。ぐるっとビキニスタイルの美女のまわりを、ひとまわりした。

形よくびれ腰と云い、すんなり伸びた脚といい、けだし逸品と云うべきである。

薄絹のパンティが、ぴっちり引きしまって臀部の線があらわだった。

「いいからだしてるわ」

行きずりに、一人の女が声を投げて行った。その女の背にも、横に走る鞭痕が赤い。後手に括られて、相撲場の方へ引き立てられて行く。相撲場からは絶えず哄笑が挙っていた。

赤禪を締めた白い体が、烈しくぶっかかり合っている。負けた女は泉水に投込まれて、逆立を命じられたり、蛙の真似をさせられたりしている。水しぶきが、川上の足元まで飛んできた。三千代の脚も膝坊主のあたりから濡れていた。

「おい、ここにも一つくれ」

あちこちで女相撲が盛んになって、新たに禪が配給されだした。

「相撲とらせるの?」

三千代は訊く。姉に似た黒瞳勝ちのうるんだ眸が、ためらいの色を見せた。

「締め方を知ってるか」

六尺禪を突きだしていうと、三千代は、かすかに點頭した。案外思いきった動作で手早く禪を締めにかかった。指に力をこめて、キユッキユツと締め上げていく手ぎわが、仲々要領を得ていた。

「もっと強く、締めこむのだ」

「はい…」

キユッキユツと絹の擦れ合う音がする。脚を大きくひらき、美しい顔が力んで充血した。

「どお?」

肩越しに振返って川上の顔を窺う。

続のように白い肌理に、緋紅の色がきわだって鮮かに、かたく喰い込んでいる。白と赤の対照の美しさ!

「…」

川上は声を嚙んで、その妖しい男子扮装の女体の美しさに、魅せられた。

「…相撲の前に!」

鞭責めを加えたい衝動に川上は駆られた。水中の真砂を打ったときの湿りが残っている皮鞭を、ひゅーと空振りさせて、

「鞭を喰わしてやろう」

「ああー」

前のにめりに泳いで、どさっと美体が青芝の上に倒れる。

「いいか、姉同様にしてやるぞ」

「なにかに纏まらしてっ…」

「ふふ…ぜいたくいな」

もう一度、川上は鞭を素振りさせた。びゅっという唸りが、犬のように四つん匍った女体の背中の上で鳴る。三千代は全身の筋肉を縮める。

責めの辛さを、彼女は体験している。先月の例会の際に、三人の男性から、かわるがわる責められて、苦痛の極に達した。あときは夜明けまで責められたのだ。

「纏まらしてくれなければダメよ…」

そのときの体験から、三千代は重ねて乞う。

「柱を支えるか…木馬に乗るかしなければ…」

「いうなっ」

「ううっ…」

一撃で三千代の姿勢は、くずれた。白いハダにみるみる赤い筋が

浮く。

「立て」

なにを思ったか、彼は引き立たした。

「一発喰っただけで、もうそのザマか」

火のように熱い痛みが走る箇所を、後手で押えて、嗚咽を洩らす三千代の、綺麗にパーマのかかっている黒髪を川上は、ぐっと握りそのまま釣り上げて行った。

「痛いっ……」

三千代の足が爪先立つ。苦しげに歪む美貌が凄艶だった。

「責めて……もっと……」

頭髮の苦痛は、三千代の体内に、とろとろと青火を燃やしたようにだった。

「もっと、もっと鞭を下さい。」

と、喘えぎつつ願う。

「可愛いひとだ」

川上の顔に、ふいに微笑がにじんだ。(俺は、きっと彼女に結婚を申し込むことになるだろう) そんな想いが、チラと胸を掠めた。

「喉が乾いた」

一寸、休もうと川上はいった。

「……ああ」

歩きだして、三千代は自分のガニ股の歩行を羞らった。赤禪の緊縛から皮膚が擦れて、自然に歩くことができない。

特設リビングバーの坊主椅子に、真砂が若い男性と並んで掛けていた。

「ーやあ」

グレイの背広を瀟洒に着こなした若い紳士は、川上の顔に、にこっと笑い、その眼を三千代に移すと、

「……似ているな」

と、横の真砂へいった。それで初めて、スタンドに埋めていた顔を真砂は起した。流石に疲労の翳がある。まだ髪が濡れていて、白い額に乱れている。

「妹よ。知らなかったの……」

と彼へいって、

「三千代」

手招きしてよんだ。相変らず工合の悪い歩き方で、三千代は姉の傍へ行く。

「水をくれ」

中のボーイに川上はいった。

「川上さん今夜は盛会ですね」

「うむ」

コップを乾すと、川上はなにか話合っている姉妹の後に行つて、「おい」と三千代の禪を掴んで引き寄せた。びしやと、一つ肩口を張る。

「医務室に行つて、その鞭痕に薬を塗ってこい」

「はい……お姉さま手伝つてー」

「ええ」

うなずいて、椅子を降りようとする真砂を、横から男が冷たく阻止した。

「君はダメだよ。ここにい給え」

「それぼっちのモノ、自分で手当しろ」

川上は三千代にいった。黙つてうなずいて三千代は奥の医務室に消える。

「ウイスキー、ダブルで」

ボーイに注文で、川上は高い坊主椅子に腰かけて、真砂が責められるのを眺めた。

太い麻のロープで、ぐるぐる巻きに縛られ床に転がされて、背中

を踏みつけられている。

「明日雨になれば」

あの娘は紅いレインコート

私のハートと同じ色よ

おお

雨の日のパリはなんと素晴らしい

巴里の雨は恋の歌

やわらかい女の背中を、ぎゅっぎゅっと土足で踏みつけながら、
愉しげにグレイの背広はシャンソンを口誦む。

「ううっ」

真砂のうめき声が、メロディの間を縫って高く切なく流れる。白い大きな芋虫が、床の上で苦しく悶える。

「ああッ」

彼の躰が跳ねだした。背中の上で。足を揃えて、ピョンピョンと兎のようにリズムカルに跳躍する。彼の躰は、すばらしく軽快に跳ね踊るが、落下の圧力は、骨が碎けるような苦痛を女体に加える。

「痛ア…痛ア…痛ア…」

太い縄目が喰い込んで、ブラジャアの外れかかっている豊かな胸が、床板に押しつぶれ、歪みくねって、床の摩擦で赤く血を滲ませた。

先刻、手当てしたばかりの、鞭の痕も生々しい女体が、ふたたび苦悶におちいつてゆく。

「ううっ、ううっ」



しかし、真砂の半眼にひらいた眸には、とろけるような恍惚の色がある。とろとろと青火が燃えひろがっている妖しい瞳の色だ。

三千代が医務室からでてきた。川上の傍へ小走りに寄ってきて、

「お化粧、直して来ていい？」

と小刻みに躰をゆすって訊く、全身から香水が匂った。薬の臭いを消す心遣いを、川上は微笑ましく感じた。

ガニ股の走り方で化粧室へ向う三千代の後姿に、川上は哄笑を爆ぜさせた。

許されて、ふらふらと真砂が立上る。がっくりとスタンドの台に

凭れる。

「……」

なにか川上にいおうとするようだが、唇が顫える工合に動いただけで声にならない。

「医務室で少し休んだらどうだ？」

という、強く頸を振った。

「……いいの……このままの方が……いいの……」

若い責め手は、既に次の相手を求めて、凄絶な宴げの庭に消えている。泉水の中で十数人の女が水しぶきをあげて舞めき、水地獄の観を呈している。三千代が戻ってくると川上は、いきなり馬にならずして、背中に騎った。びしびしと後手で鞭を揮い、

「ハイドウドウ、しやんと進め」

可憐な人間馬は、よたよたした進み方で庭へ出ると、

「ああ」

と声を挙げた。

「ほう」

思わず、背中の騎手も驚きの声を洩らした。

向うの砂場に三つ、女の首が晒してある。

三人の女が、首まですっぽり埋められているのだが、恰度むくろ首をさらしているように、グロテスクな光景だった。県知事夫人の顔も、女流ピアニストの長い髪が垂れた顔も、芸者染弥の濃化粧の顔も、いちように、一種むずがゆい苦悶の表情を浮べている。その三つの女首を、四、五人の男性が突立って鑑賞しているが、その中に張の顔を認めると、

（うまい！）

川上は、彼の独創的で、責めのバラエティの豊かさに感嘆した。

「あの責めはな」

単に埋めていることだけではないと、川上は三千代に説明してき

かせた。

「……どんな気持がするでしょう」

紅くなって三千代はいう。

「はしつと川上はひと打ちして、

「おまえはおまえだ。あの空いている木馬まで、ソラ、ハイシドウ
ハイシドウ」

十七台の木馬がかたまって置かれてある一帯は、さまざまな責めの光景が展開されている。水着の上から打たれている女やスリッパ姿で針を刺されている女や、ささらになった青竹で打据えられている紅の腰巻の女は、濃艶をもって鳴る粹筋だ。

この街では、まず一番の芸者だろう。

染弥にしても美貌は名高いが、美代龍の年増美には、かなわないと云われている。

川上はこれまでに何度か彼女に座敷をかけ、一夜をアブの炎の裡に過す馴染だった。

「……今晚は、カーさん……」

三千代を木馬に乗せる川上へ、隣の木馬の上から、美代龍は挨拶した。苦痛にかすれた声だが、恍惚の余韻がある。胴体を縛りつけられている。

「しやべるな」

彼女の責め手が呻鳴った。

「……はい」

喘えいで美代龍は答えた。

「まず自分で叩いてみる」

川上は三千代に命じた。

「……鞭で？」

「自分の手で打つのだ」

「こう？」



白い掌が臀肉を鳴らした。

「そうだ。痛いかな？」

「…ええ」

「もっと痛いように叩け」

「はい」

白い手が交互に踊った。

「生ぬるい。力一杯叩け」

「は、はい…」

びしっびしっ、われとわが手で三千代はわが身を責めてゆく。初めての経験だった。

感情が異様に熱くなった。臀と掌がしだいに赤くなってゆく。

パシッ！

パシッ！

「ああー」

叫びが、紅唇から高く流れる。背がのけぞって、すんなりした脚が芝生を踏張り、中腰の姿勢になって、打続ける。

ピシッ！

川上の手から蛇のように鞭がくねった。

「うわあッ！」

どさっと、木馬の上に三千代は崩れた。

「そら！」

「うわあッ！」

「そら！」

「うわあ…ひいっ…」

悲鳴が、ひとときわ高く流れた。

まわりの女たちのうめきや叫びや慟哭の声々を縫って、三千代の声は、すざましくほとばしった。

「そら！」

川上の白面の美貌が、紅く染まって、夜叉の形相を帯びた。

「……ど、どうだ」

彼の呼吸も流石に喘えいでいる。袖口で、額の汗を押し拭いた。左の眼に汗が流れ込み、視野がぼやけて、木馬の生贄の姿が一寸おぼろに曇る。

「どうだ」と訊いたのは、失神を氣遣うためだ。氣を落さしたら厄介なので、このへんで二度目の手当をさせようか、と川上は思ったのだが、

「……だいたいようぶよ……もっと責めて……」

木馬の頸にしがみついて三千代は云う。

「……存分に打ってえ」

俺は、やはりこの女を妻に娶ろう。川上の胸には甘美な、そうして少年のように一途な想いが流れた。

「よし、つづけるぞ」

「はい」

「しっかりしがみついてろ」

「はい」

「そら！」

「ひえっ！」

三千代の口から、再び悲鳴が空氣をつんざいて、ほとぼしる。

「ああッ」

と隣りの木馬から美代龍の声も挙る。これは針責めに変わっていた。

「……もう許して……」

と声も絶え絶えになっているが、相手は笑ってとり合わない。

「三千代……」

やがて、川上は鞭を止めた。

「三千代！」

「……」

「おい」

駆寄ると、ぐったりとなって、蠟のように白い顔を木馬の頸に伏せている。額に、じっとりと生汗が滲んで、凄艶な仮死の顔であった。

「しっかりしろ」

手頸をつかんで、思わず川上は脈を診る氣になる。ひっそりと伏せている美貌がなにか可憐に映った。

「どうしたの？」

やっと許されたらしい美代龍が、傍へ寄ってきた。髪を振り乱し腰巻から白い脚をこぼして、横いざりにいざり寄り、

「氣絶だわ。こんなにひどくぶたれてるもの、誰だって氣絶するわよ。鞭ばかりで責めるから、だめなのよ。私のように竹で打れたらめったに氣絶なんかしないわ……」

「よいしょっと」

川上は、ぐんなりした三千代の躰を抱え上げた。

「君の云う通りだ。俺は氣絶するのは好まなかったのに」

医務室へ運ばれて行く途中で、三千代は幽かに正氣を返した。

「ああ……」

と、うめく。

「三千代、僕と結婚しよう……」

なにゆえの泪か、一滴、男の眼からすべる。

「夜が明けるわ……」

夢うつつの如く三千代は、つぶやいた。

東天が幽かに白んでいる。

「しっかりしろ。今、手当をしてやる」

「まあ！」

テラスから真砂が立上って来て、三千代の頭を抱えた。その真砂の躰から蠟の匂いがあるので、歩きながら川上が眼を凝らすと、胸

に一面蠟涙が、こびりついている。打たれたあとに熱い蠟涙を垂らされたらしい。

医務室のベッドに三千代をおろすと、川上はふいに吐気を覚えて胸苦しくなった。いささか疲労を感じた。あちこちのベッドで呻吟している、多くの白い人影が認められた。

会員中、唯一人の若い女医が、これは大胆なパンティ姿で、甲斐甲斐しく応急治療を施している。その彼女のむきだしの胸や腹も一面、無惨な紫斑がある。

「モルヒネ打ちましようか？ 三千代さん」

顔馴染らしい親しい口の利き方をした。

「一寸ひどいわねえ」

澄んだ眸が笑いに翳って、真砂と川上の顔を等分に眺めた。みずみずしい色気が、全体から匂った。

三千代を百点とすれば、この女は九十点ぐらいの価値があると想いながら、川上は、

「モルヒネはなるべくよした方がいい」

「そうですね」

女医は注射器を措いて、ピンセットでガーゼを摘み消毒液に浸した。

「少しシミるわよ」

「ううっ、むむっ…」

三千代の脚が墓のように悶える。

「ううっ…うう…か…かわかみ…さん」

……おねえさま…と真砂をも呼ぶ。

「コーヒーを飲ましてよろしいでしょうか？」

女医は、これははつきり川上に訊ねた。本人よりも、責め手の意向を訊す。彼女がパンティ一枚でいるのも責め手の命令からだろ

「よろしい」

と答えて、川上は室を出た。つづいて真砂が出る。

東天が淡い茜色を流していた。

「もうすぐ朝ね」

川上の横に佇んで真砂が云う。

「いつまでも夜が明けなければいいのに」

「…僕も、いつもそう思う」

低く川上は答えた。

「この夜よ、永遠なれとね…」

「カワカミサン、サイゴニコノヒト責メルヨ。ミヨリユウサン」

張が、美代龍を引き立てて、テラスの方へ芝生を横切って行く。

「張のあの責めにかかったら、どんなひとでも泣きだすわ…」

真砂は、そう云って、ふいに苦痛に襲われた様に手で胸を抑えて

しやがみ込み、

「…貴方に責められて、妹は今夜はきつとうれしかったでしょう」

「僕こそ堪能を知った」

誰かに抱えられて貝崎美子がやってくる。朝の色とともに、マゾ

螢の青い火が、炎えつくして消えてゆくのだ。

愴美漂よう終夜の宴げも、愈々終焉を迎えようとしている。

「ベルを押しましょう」

やがて、上条真砂は柱に指を伸ばした。

響き渡るベルの音に、多くの名残を惜しむ視線が感じられた。あ

ちこちで、別れの握手が交され、朗らかな笑声が湧き上った。

白みかけた東天に、一際、輝きの強い星が長く尾をひいて流れ

た。

K・K
スクラップより

馬 化 白 書



(最) (終) (回)

鞍 良 人

(十九) 女神の友達

僕はここで、乗馬に熱中する二人の婦人の言葉を本誌以外の領域から引用したいと思います。世代の若い方々の資料となると思うからです。二十年位も前の「婦人画報」に当時、年頃の娘さんだった斎藤かおる子の話が出ています。恐らくは今も、どこかに居ると思います。健在ならば丁度、乗杉貴代子と似た様な年輩でしようかしら。

学校時代、走る事の好きだった私。卒業以来、数多いお稽古のため、ゆっくり本を読む暇もないほど忙しい生活に入ってから、スポーツの持つ壮快感が忘れられず、少しの時間をさいて馬場へ通い初めました。生れつき動物が好きなためか、色々なスポーツの中で一番(註27)乗馬に興味を持って居ります。

初めの中は機械とちがって右の手綱を引いたとて決して右へ正確に廻ってくれませんが、いやがるものをむりに動かそうとすれば、かえって反抗して、あせればあせるほどどうしても思う様になりますでした。上の人があせらずに馬のくせにに応じてただまじだまし導いて行く時、どんな大きな馬でも少しの力さえ要らずに乗る人の意のままに動く所に、馬術の妙味があるのではない

でしようか。

又、精神的にも得るものがあるのではないかと思います。水道のつめたさが氷の様に感じだした此頃、太陽がまだ朝霧に包まれて薄い光を投げ、戸外には凍りつく様に冷えきった空気が充満して居る時、あたにかい床を抜け出る事は苦痛にすら感じるけれど、かじかんだ手に手綱を握り、霜の降りた馬場で一時間も馬をせめたあとの、汗ばんだ体に感じる軽い疲労の心よさ。昨夜まで頭のすみにこびりついて居たつまらない憂鬱なんかすっかり飛び去って、生れ変わった様にあらたな元氣を持って今日を送る事が出来る様な氣が致します。(日付は、僕の記録では一九三八年九月号の様に見えますが、内容からして一九三八年か九年の冬の頃——月ははっきりしない——らしいです)

他の一つは、間違いなく一九四〇年一月号に載ったもの。次に引く文で、幼い時から……以降は吉村福子の文に相違なく、その前の箇所も吉村福子の記事に連なる頁にある文です。その辺には数頁にわたって、福子の障碍飛びと思われるもの等、及びその他、女の子が一ぱい乗馬している写真が出ていました。

馬に乗っているときの氣持は颯爽たるも

のである。私たち女性はこの颯爽たる氣持を味わうことが少ない。乗馬をおすすめるのも、何よりもあの馬上にあって、大きく胸を張って呼吸するときの氣持を、女性に味わっていただきたいからである。勇壮は男性のものであるが、一つ位女性もそれを表現するものがあるが、一つ位女性もそれ親しむことによってそれが果される。

未熟な者が最初から乗馬すると、よく馬は乗り手を見ると云われている通り、それこそ馬の思いのままに翻弄されてしまう。兎に角、馬は生きものであり、低いながらも馬個有の意志があるから、この意志を完全に人間の意志に屈服させなければ決して馬を自由に御することはできない。

幼い時から動物が好きで、犬や猫を見たら可愛がらずにはいられたかった私が、欧米の女の人達の颯爽たる乗馬姿を映画や写真でみて、どんなに羨ましく心を湧き立たせた事でしょう。それがやっと叶えられて府経営の城北馬匹研究所で、初めて練習し得た時の喜びは、それこそ筆舌につくし難いものでした。

一度行つてすっかり熱中してしまい、最初の中は殆ど毎日の様に乗りに行っていました。

単なる機械を操作するのと違い、感情も

意志もある動物を、思いのまま制御するのはすから、それだけ面白味も又スリルも感じられて、今までしたあらゆるスポーツの中で一番(註27参照)興味深いものだと思っています。

初めて身近にみた時の馬は思ったより大きく、乗ると随分高いので驚きましたが、それもすぐ慣れ、又最初の中は馬房に入るのも、鞍を装するの、本当に怖かったのですが、そんな事にもすぐ慣れてしまつて、かえつて装鞍から馬の手入れまで、すっかり自分でやりたくなつてしまっています。

中で一番面白かったのは、綾瀬川堤の美しい並木路を、襲歩で追つた時でした。もう怖さなんか何処かへ吹飛んでしまい、唯爽快で、先頭に遅れまいと夢中で拍車を入れてしまいました(註28)。こんなことを書いて居りますと又堪らなく乗りたくなつてきます。そして何日かはあの北海道の広い高原で、牧場の駿馬に打跨り、水のほとり、木立の間を思いきり飛ばせながら小さい川や低い垣などは平気で飛越せる様になりたいと、心に描いては胸を躍らせています。(婦人画報一九四〇年一月号)

若き日の乗杉貴代子が、もし「婦人画報」の読者であつたならば、必ずやこの記事を見た筈です。

(二十) ジャンヌの末裔

(a) 満蒙の曠野

女性乗馬シーンばかりは、映画に於いても稀ではありません。麻生氏が指摘した様に、例えば、「花嫁立候補」(三十三年三月号八十頁)は乗馬に賭けて求婚しようとする娘達の話。「美しき不良少女」では、先に触れました(「映画の格闘」の項)様に、馬喰の娘、山猫由美が、ふんだんに馬を疾駆させます。山頂まで自動車と競争するところさえあります。「息子の結婚」でも、お嬢様スタイルの若尾文子が湖畔で乗馬遊びをしている姿がみられます。白いスラックスが脚の曲線をピタリと浮彫りにしていました。その他、遊びとして乗馬するのだけでもいくらかありました。満蒙の曠野を馬蹄に駆けめぐり、勇壮「戦雲アジアの女王」中にも(三十三年三月号八十頁)、金司令、芳子が内地に在るとき、美しき湖畔に乗馬練習をやるどころとか、病身なお馬を駆って停車場まで追いかける所など、ふんだんに勇ましいです。

はち切れんばかりの白き肉体を、水着一枚(註29)につつまだま、敢然と馬背に打跨がるのがエデンの海です(註30)。その豊かな肉体美に思わず息を呑んでしまうのです。騎馬に夢中になって、学校へ来ない少女を探し

に出掛けた青年教師、南条(鶴田浩二が演ずる)が、トンネル際でついに巴に出会う。一瞬停止した馬上から見下す水着姿の瞳!海中に乗り入れるシーン(註31)こそありませんでしたが、若杉慧の原作では、南条を尻馬に乗せたまま、校庭に乗り込む巴は、少くとも「絹ポプのブラウスにもんぺ草履ばき」ですのに、藤田泰子(註9参照)は水着一つで乗り込みました。ギャロップで疾駆するこの大胆な騎手に沿道軒を連らねて尽く、あれよあれよとただあっけにとられるばかり。

(b) 犬に喰われる

ミス日本(註32)といったコンテストでも、各地の代表が、誇り高く馬上で行進すればいいと思います。或はミス馬術選出コンクールでもよろしい。池田ふみ子という様な活発な女性がふんどし姿もスマートに騎るのもいいでしょう。或はミスバレーリーナで、樋口芳男(三十二年十一月百七十六頁読通)の逞しい婚約者(註4参照)が馬上豊かに行進してもよろしい。

一昨年の九月の新聞に「山中湖白書」なるものが高校補導教員の間でまともなものと云う記事がありました。曰く、「キャンプ場の青少年は心身共にあけっぱなしでマンボズボンにアロハシャツ、女の子も半ズボンか短いスカートで胸を出して男心をそそる姿(註33)

が大部分である。男女二人で馬に乗り、女の子が前で手綱を握り男の子が後から女の子の胸をおさえて行く姿など平気な風だった」とある(三十一年九月十六日付「朝日朝刊」)。

男心をそそって、何が悪い、と云うところでは、「シヨーツ禁止」に関して、優雅と似合うということすら区別出来ない不見識をいみじくも指摘された沼氏の御意見は全く僕の考えと一致していました。見事な体格の白人少女が、裸身紛いの軽装で平然とテニスを楽しむ姿に、食い入る様に見とれていた沼氏は、その羞恥心の欠如を讃え、「潑刺とした肢体美こそ女性の理想であるべきで、優雅など犬に喰わしてしまえば良い」と喝破しています(三十二年十月号百三十四頁「雑報一五七」)。「羞恥心」エデンの昔から人類の奔放に枷はめし、その病毒は抑えずより来たりし。大体、羞恥心の無いところに、大胆、もへったくれもないものです。

「ほんとうに今の若い娘といったら……」とおばあさんがあきれかえってしまふ(三十二年四月号三十一頁「禪とブリーフ」)恰好で、山野を自由に野性的に駆け廻りたいといっている池田ふみ子は、「女子がふんどしを着用してはならない」ということは全くないのです(三十一年九月号八十九頁)と主張いたします。

この魅力に富んだお嬢さんは、既に福岡の高校を卒業して、デパート(註6)に勤めているらしいのですが、ことによると、やっぱり松原三千代と同様ジャンゴ潰しのプレイが好きなのかも知れません。「三木恵子さま、あなたは薄いナイロンのパンティをはいてプレイをなさる由、書いていらっしやいますが、その場合、真赤なデシンの水泳褌などいかがでしょう。」(三十二年十月号百七十五頁読通)とすすめています。「真赤」だと口紅宛め(註7)が出来ないのではないかと思います。が。どうも、この「プレイ」なさる由、という、ごくさりげない書きぶりからは、彼女自身「プレイ」など、ごく日常あたり前の事としてか、思っている様子が察せられます。尤も誤解かも知れません。

以下いずれも高校在学中であつた彼女の手記から――

私達女性の身体の中で、最も特徴的であり魅力があるものは、お尻であると思ひます。その大きさといい、肉付きの良さといひ、とても男性の及ばぬ所です。だからこそ、私達女性の下穿きとしては褌が最適なのです。褌の魅力は、そのお尻が大きければ大きいだけ倍加し、とても男性の及ばぬ所となります。今までの女性が、海水着一枚着てもお尻がはみ出ていないかと後ばか

り気にして、両手でパンツを下に引っぱっている恰好は、実に卑屈な態度だと思ひます。お尻は女性の最大の魅力であり、女性はその美を誇示すべきです。私達十代の女性には、もうお尻を露出するのは当り前のことと思ひています。学校のダンスの時間には公然とその短い褌のようなキヤルマタで楽しく踊っています。お尻は足の一部だと思ひます。(三十二年七月号百三十五頁「褌とブリーフ」)

今迄の女性の方はあまり肉体をかくしすぎていました。しかし私たちは戦後はじめてブリーフというものを自分のものにしました。褌が女のものになるのは、もうすぐです(註34)。私たちはその尖端を進んでいるのです。(三十二年二月号百七十二頁読通)

多くの女の方は褌を着用されたことがないので、その爽快さがお分りにならないのです。褌一つ縫う位、時間は大して要しないでしょう。そのピッタリと締まる布の感覚は、とても筆舌につくすことは出来ません。わたしは、男の方よりむしろ女性の方が褌を着用した時の圧迫感が大きいのではないかと存じます。(三十年九月号八十九頁「褌マニアの女生徒」)

来年の夏は小さなブラジャーと三角褌だ

けで、海岸に出て泳ごうかななどと話し合っています。私は女が褌を着用することを、もう恥しいこととも何とも思ひていません。三角褌一つになつて野や山を自由に野性的に駆け廻りたいという欲望は、此頃とやかくいわれている太陽族や逆光線族などと違つて、余程健全であると思ひます。(三十年十二月号百六十七頁読通)

この秋には私たち(の)高校でも体育祭がありました。その時、私たちダンス部員はダンスの実技をやりました。私たちはその日一日中ダンスのユニホーム一つです。ごしました。私とお友達のA子さんのものは特に短く作つてもらいましたので、お尻が半分露出します。勿論、下には小さな三角褌をしめています。このような恰好で一日中、トラックやフィールドをかけまわりました。みんなびくびくしていました。が、このような姿で走りまわられるのは私たちの特権だという感じがして、一日中愉快でたまりませんでした。(三十二年二月号百七十二頁読通)

同じく若柳キミコの方にもグループの会合の日が設けられている様です。庭の日向で品評品をやっていた彼女等のフンドシ姿をフランス女が見たという。そしてキミコは書いています。

そのフランス人は、私たちの三角フンドシがデパートで市販されているものと決めているのです。彼女の感覚にとっては、三角フンドシは最早パンティやショーツと交りない女性の一般的下穿にすぎないのです。しかもそれは、より美しく魅力的であるに違いないのです。フンドシ——それは私たち女性が締めても、なんと爽快なものでしょう。私たちの三角フンドシグループでは、この夏の海で思い切ってお揃いのフンドシ姿で、跳ね回ってみましょうと計画しています。私たち女性だって、もうフンドシ姿になっていい時代が来ていると思います。(三十二年十月号百七十頁読通)

(C) 美しき盗賊

アメリカ系の映画では、戯れに乗馬をするところ等より、どうしても生活そのものとしての乗馬シーンが主となって来ることは止むを得ません。或はこういうのは僕の偏見かも知れませんが。現代アメリカ娘が馬遊び(ホースバックライディング)をすることぐらい、態々映画の題材としてまで持ち込むには足りない位、ごくありきたりのことなのかも知れません。「巴ちゃん」はマニラで子供の時から馬に騎ったから、抱いてもろうたりせんでもようのるわ」と云う様な件りが「エデンの海」の中にあります。

「アニーよ銃をとれ」(ベティ・ハットン主演)の超お転婆振りについては、春木氏が「映画に観た淡いマゾ」の中で指摘している通り(三十年十月号百二十八頁)ですが、それと大変似かよった所のある「カラミティ・ジーン」(ドリス・デイ主演)も、それこそやたら無茶苦茶に馬を乗り飛ばします(春木俊野「続・映画に観た淡いマゾ」(三十年十一月号百四十九頁)参照)。無茶苦茶に乗り飛ばす点からいえば「熱砂の女盗賊」もすごい。サディスティック王女が、非道な王と結婚したがっているのを、父が許しません。「この前、白馬を欲しがった時だって、なかなか許して下さいませんでした。私が、ちゃんと騎りこなすのをみてお父さんは安心なさったではありませんか」というと、「馬ならアバラ骨を蹴折った位で済みでしょうが、あの王となるとそんなことで済まぬ」と答えます。「ジャイアンツ」(註36)では、ラズ(女主人)が召使の止めるのも聞かず、無理矢理に禁断の馬、戦風号に打跨がる。怒濤の如くお腹を蹴りまくるその拍車のデカイ事!ガチ!ガチ!と火花も散らんばかり(註37)。とうとう戦風号はアバラ骨を折られ(註11)、ラズを切株めがけて振り落そうとしました。ところが、ラズは死亡しますが、我儘王女は落されもせずにピンピンしています。げに乗杉

貴代子はいう。「ジャイアンツ」では女主人が落馬して死んでしまいましたが、あんなことは先ず皆無に近いことでしょう。普通なら百パーセント蹴り得、打ち得の楽しい調教に終わります(三十二年十一月号六十六頁)。この王女が熱砂を疾駆する様が、ふんだんに出るし又、美しい女盗の群が馬を駆って行く様も甚だ壯観です。「馬を駆使する女盗賊たち。このシーンには、サド性の強い筆者も、馬になりたくなくなりました」(三十三年七月号百四十七頁、藤木仙治「緊縛映画速報とその雑感」)とある。

馬賊女盗のすさまじさは「四十人の女盗賊」でも見られます。あの映画では、サリイ・フォレストという踊りの上手な女優(アミアの役)が馬に騎る所が最も魅惑的でした。シンパッドの横ッ面を張りとはしてひらりと馬上の人となったかと思うと、キッと睨みつけるといった場面もあります。

(二十一) 馬達に捧ぐ

乗馬靴の女の子が馬場で馬に跨がったところを撮した写真が出来ましたからお送り致します。拍車が痛々しく見えるでしょう。

この外に、やはり馬場で馬に跨がった東宝女優、高倉みゆきの写真が「日本観光新聞」(三十二年十一月二十二日付)に出ています

たので、持って居ります。なんて見事に跨がったことでしょう！ああいい気持とばかり額に小手をかざした余裕ぶり。右手に握っている鞭の怖わそうなこと。「白魚のような手に握られる鞭は細く、長く、軟かく、みるからに痛そうなものが乗り手の馬にも、見物する男性の為にもよいでしょう」(三十三年五月号百六十二頁、乗杉「障碍への道」)とあります。そういう鞭なのでしょう。

年に一度、関東女子学生、馬術連盟なるものの主催する馬術試合が行われますが、そこへ行くと若さに溢れて潑刺とした馬のり姫達の姿が見られます。確かにノーブルな容姿の人が多い。その中に幾人かの美貌の姫を見出すことも可能でしょう。勇ましく責め立てて止むことを知らぬあの暴虐な姫君たちに、跨がられ通しのかわいそうな馬達のために僕はいつでも、解放の歌「イギリスの家畜」の一節を捧げたくなのです。

われわれの鼻から鼻環は消え、
われわれの背から馬具は去り、
くつばりと拍車は永久に錆び、
苛酷な鞭も鳴らなくなるぞ。

——ジョージ・オーウェル——

「動物農場」より

リングとは牛なんか用いる道具のことであるらしいですが、その外に土俵という意味

もあって、そのことは日本語となっていますから、誰でも知っています。そういうわけで「曲馬の演技場」もリングと云いますが、別にもう一つある意味をも含んでいるそうです。

本誌の読者通信中に於いて、僕は随分たくさん男の人々の渴望の声を見ました。中に傑作もあって、想い出す毎におかしくなります。妻を求める先生「東京、田沼醜男」氏などがそれで、望十代美人五尺三寸十三貫以上、

勝気派手残忍性不良少女可」とあります。

うまく見つかりましたでしょうか。麻生保氏が「時報」で紹介された十七才の高校生、瑠美子さん(三十二年八月号二十五頁)など如何でしょうか。この先生、妻としては五尺三寸以上とか望んで居られますのに、御自分分は五尺二寸十二貫だとあります。それでは「あわれ誠一郎」の轍を踏むことになり兼ねせん。五尺二寸といえは「下敷男」さんも、やはり同じ背丈ですね、その後、首尾よく「プレイ」が叶えられましたでしょうか。ついでに、突貫プレイの話を提供しておきましょう。まだ本誌に紹介されていませんから……。

福田定一なる人の連れが、アルサロで演ずる酔漢の特攻版とでもいうべきもの。

本番のアルサロ娘をねらって、からみついたまではよかったが、同僚の悲鳴をきいて駆けつけた数人の女給に押さえつけられ

床の上をころがりまわり、それでもまだ、マムシのようにしぶとく女性をねらうのである。しかも、くみしかれたその下から、私にむかって叫んだものだ。「あんたはんも、ヤンなはれ。やらの、損や。同じ金エ払うとるンやないか。これも勘定のうちやでエ。モトとらにやア……」(雑誌「太陽」三十二年十月号百二十四頁)

福田氏は、大阪人の「遊興哲学」なる題の下で、「この男のエゲツなさときたら、まったく凄愴なまでである」とか何とかいいながら、さもこの話を、大阪人が勘定高いことの見本として紹介するといった話し振りにこそなっている。しかし、問題が、同じ金エ払うとる、か否かというところにあるのでないことは明らかです。こうでもしなければ、容易に「これ」(——女の子に組敷かれること——)の実現が得られるでしょうか。

昨年の夏の頃、何の考えも無かった僕のところへ突然、ある女性の縁談が来しました。僕が当惑して、まだ先方の女性がどんな人柄かも知らないうちに、消えるともなくそのまま沙汰止みとなってしまいました。後で、ふと耳にした話では、その人は、高原やなんかで馬に騎るらしいのです。万一、その人との縁談が成立していたとしたならば、今頃はいつもその膝下に悶絶していなければならなかつ

たかも知れません。

でも、バアの女めぐみが、馬場好男を捨てるとき最後にいい残した言葉、「私の様なものでも女は女よ。女は自分の良人にはひどい事は出来ないものよ」(三十三年八月号百十五頁「マゾヒズム第四景」)は真実かも知れません。弱者をひどい目に遭わす事の好きな白木近子も書いています「現在、やや幸せな中産階級の主婦でございます。良人をはじめ周囲の者も、わたくしの心の奥にこんな性癖がかくされていようとは夢にも知らないこととしよう。良人に対してわたくしが絶対優位の立場になることはあり得ないからでございます」(三十年二月号二百五十九頁)。これらによって、夫のある松原三千代の発言(「叶えられない女性の希い」)の項参照、男の人の首か顔の上に馬乗りになって、云々が理解出来る様です。松原三千代は、夫にはそんなことが出来なかったのです。「男の方に出来たらどんなに素晴らしいだろうなんて考えているのよ。」と云っている戸破貞子も、すぐその次に「活発な様で案外内気な妾です。で結婚しても夫にそんな要求は出来そうにありません」と続けています(三十年三月号三百三頁読通)。(終り)

註27 よくも口をそろえて同じことを言うものです。

二十三才の女性です。……今では身長五

尺四寸二分、体重十六貫もあります。一人でお風呂に入っている時など、自分の脚の太さにつくずく呆れることも御座います。尤も、スポーツは大抵やりましたが、

就中、乗馬が一番好きです。今でも週二、三回、遠乗りします。……(三十二年六月号百七十二頁、服部みどり読通)

註28 馬こそいい迷惑だ!

註29 「海水着のまま跨がる時は」「特別の配慮が要る」と注意しています(三十三年九月号百十八頁、乗杉「裸馬との対談」)。鞍がない場合のこととしよう。鞍がないといえ、上野動物園の象の背中に海水着、ハイヒール履きの東映女優が三人跨がった写真がある。「サンケイグラフ」一九五四

年八月八日号、十四頁、十五頁。十四頁の

ものは、騎っている三人が、何か折り重った風なところ。十五頁にあるものは、同じ三人が、象上でいい気になって片手を上げている。

註30 松竹映画。二十五、六年の頃?であつたでしょうか。(三十一年四月号五十四頁三十二年十一月号百四十三頁参照)

註31 「モデルと写真家」という映画の中でフンドシ一貫で自転車を海中に乗り入れた女の子が、パツと脚を抜げる場面がある。

註32 六年前、ミス信州第三位になった矢部かず子(二十四才)は自信たっぷりという。……女性がすべて美しくあれば如何なる男をも奴隷にすることが出来ると断言致します。(三十二年十月号百七十六頁読通)

【告白】女装と私 原田幾世

私は世間一般の人からは奇癖といわれるだろう一つの習慣を持っています。それは私の女装です。今の世の中では、男が女性の姿をするのは悪いように考えられていますが、私は本当は服装は各人の自由にすべきだと思います。自分の好きな形の服装、

自分の好きな色の服装、そうして髪形も自分の気持ちに合わせて自由に選べば、勿論お金はかかりますが、生活は幸せとなり歎びも慰めも多くなります。

私は自分がなんとなく淋しい時に、その自分を忘却の彼方に追いやるため、独りひ

なが奴隷を踏みしき給え——(三十二年十月号百三十二頁、沼雜報一五三)

註33 ……これは戦後のことだが、山中湖畔

に会社の旅行があった時、素晴らしいアマゾンがいた。ブラジャーとショーツパンツのいでたち故、背中は殆んど丸出し、のびのびとした姿態は西洋人と間違える程で白面に鼻すじも通り、サングラスがまたよく似合った。この勇ましい女性が素足にサソリを踏んで、湖畔を悠々と馬に跨がって散歩していたのである。(三十二年十一月号八十頁「イタ・セクシユアリス」)

註34 げにこそ「女性の軽装化の波はサマジョイ。いまに銀座にもビキニスタイル美人が歩きだしかねない勢いだ。」(週刊女性三十三号八月二十四日号広告より)

註35 圧迫による快感は、Y・S子も乗馬鞍のところで述べています。「(十八) 伝統のかげに」の項参照。

註36 この物語には、ジョーダンと云う男子(牧場主の長男)が出ますが、彼は馬に乗せられても嫌がって泣くばかりでした。動物虐待を憎むこのジョーダンは、後、メキシコ女と結婚して、身をもって人類的偏見と闘うのです。

註37 これは観客が自分の額から火花が散る思いをさせられる様になっているから、いかに乗杉貴代子だっって見れば、自分が蹴りつけられた気がしたろうと思います。

そかに女装する習慣がついてしましました。そして鏡にうつした自分の女装の姿に興味を持ちます。(時には絶望しながらも)白粉ののびのよい時は、髪の毛がなかなかいうことをきかず、白粉のつきが悪く御化粧にてこずる時は案外髪に面白い癖が出てモダンな形が出来ます。自分を女性として美しくしたいという真剣な気持は、知らず知らずのうちに一種の精神集中をしています。そこで私は、いつとはなしに女性に移行しているのです。

私はいつも洋装です。下着から一切女性のもので身を包みます。胸をしめるブラジャー、腰をしめるコルセット、そして要所をふくらめます。パット。私の身体つきは女性らしく又心もすっかり女性化して全身が宙に浮く感じがいたします。それから小さな靴をはきます。そこで私は街に出ます。美しい夜です。スポーティな靴をはいた散歩姿の私は近所の人を避けて街の中へ出ます。これから孤独の航海が始まります。私は誰とも口をきくことも出来ず且つ女性という意識の脅迫を絶えず受けるのです。それは身を以て味うスリルの連続というところが出来ます。今迄とはすっかり違った視角から眺めた男と女の世界です。

女を見る男の瞳は宝石のように美しい。男性がこれ程美しいと思ったことはありませんでした。それに男性は女性に対しては親切です。薄暗闇で急に自転車が止って私

を乗せてやるというのです。私は驚いたふりをして逃げましたが、自分を女性として扱ってくれたことに内心得意な気持を抱くのでした。

然し又反面、女装して歩いていながら、自分が男性であるという意識がどうしても払いのける事が出来ず苦笑することがあります。こうして私は、身の痺れるようなスリルを味わいつつ女性であるという演技を続けながら散歩して、予定のコースを一巡して自分のアパートへ帰ってきますと、今迄心の中でもややもやしていた鬱積は霧のように消え去り、次の日の仕事は、うんとはかどるのです。若し皆様の中でも顔に自信のある方は一度試みられたら如何ですか。このような女装趣味は、本人にとつては極めて健全なものですし、社会的にも何ら害毒を流すような危険はいささかもありません。女性下着愛好者は全く罪はありません。いつか服装自由の社会が出来たら、もっともって沢山の男性が公然と女装を楽しむことが出来ると思います。そういう遠い未来のことはさておき、現在に於ても、女装趣味は実行容易で危険がなく、それでいてスリル満点を味わうことが出来ます。男性が美しい女性に変化するのですから、こんな素晴らしいことはありません。人生をエンジョイする絶好の手段といえます。花咲く月夜の道をゆく乙女一人、美しい絵ではありませんか。

H (エッチ)と自称する女

真 崎 伸

一

一

カウンターによりかかって、未練たらしく長い時間をかけて、一杯のハイボールをチビチビと舐めていた。薄暗い灯火にすかして見ると、コップの中の淡い琥珀色の液体も残り少い。しがない若い公務員の身では一夜の酒代もかなり痛い出費である。時計を見ると午後八時であった。ここに腰を据えてから三十分はたったいた。

チラッと秋子の方に眼をやった。彼女も気になっていたのであるうか。私の方にふと向けたよそよそしいその視線とパツタリと出会った。輪郭の整った白い美しい顔がいやに冷かった。その眼は相変らずつぶらで可愛い影をやどしていたが、まるで見ず知らずの人を見るように痴呆的で非情であった。私も黙って見詰めかえした。恐らく私の眼もはたから見れば彼女と同様に冷淡であったに違いな

い。しばらくじっとそうしていたが、やがて彼女はのろのろと顔を動かして私の視線をはずし、何気ない様子で笑顔をつくり、隣の席の中年男に何か話しかけた。親しそうなその仕草に私は軽い嫉妬を覚えたが、これでいいんだと一人心中で頷いて、薬でも飲むように顔をしかめて、残りのアルコールを飲みほし、後も見ずパー、白菊の扉を押し開け外に出た。

ひやりとした夜気が身体を押し包み、私は思わず外套の襟を立てた。この店は繁華街から少し離れた裏通りの静かな一劃にあるので、人通りはほとんどなかった。上を見上げると空は晴れ渡り星が一面にキラキラと冷く蒼白く輝いていた。私は心の奥底から孤独が込みあげてくるのを感じた。コツコツと響く靴音が尚一そう淋しい愁いをかきたてた。誰にも私の性情は理解して貰えそうになかった。その証拠に秋子でさえも私から離れ去って行ったではないか。最愛の

秋子でさえが……精神的でだけではなく二世を誓い、愛し、悦び合った秋子でさえもが。

急にポツカリと口を開けた心の亀裂の、眼のくらむような深さを意識し、重大さを今更の如く覚った。秋子のような女は二度と見つかるまい。この広い世間を探せば同傾向の女も居る事は居るだろう。だがそんな女は数える程しかない。仮令そんな女がいて、私と顔を合わす事があったとしても、自分の恥すべき傾向はひた隠しに隠し通すにきまっている。恋人の間であらうと、又、妻となつてさえも隠し通すにきまっている。私もきつと私の性癖を相手には示すまい。よく判っているのだ。自己の異常の恥すべきものである事がよく判っているのだ。判っていなかったら今頃は恐らく気が狂つて精神病院にでも入っているだろう。異常を意識すればする程、正常になりたいと言う願望も強まるものだ。なろう事なら全く正常でありたい。だがそう願えば願う程、異常の暗い泥沼へずるずると果しなくのめり込んで行くのである。そして自己嫌悪と罪悪感次第に発達し、全神経のすみずみまで押し包み、そのあげくの果は、己れと同じ傾向を有する恋人か、もしくは妻さえも、その嫌悪すべき傾向が故に突き放してしまうのだ。お互に異常な傾向を打ち明け理解し合つていても、いつしか胸に秘めた正常への願望が頭をもたげ、自分はこの人と別れさえすれば正常になれるのだと錯覚し、ついには永久の別離を決意する。丁度、秋子と私の仲がそうであつたのだ。あんなにも異常な行為に傾倒し、愛し、理解し合つて、永久に離れまいと固く固く誓つた秋子であつたのに、今はどうだろう。永久の別離を相互に宣告し、行きずりの人にすぎないと言つた酷薄な表情で見かわす悲惨な状況である。ふつふつとたぎる情熱に溺れ、揉まれた嵐のような一年の同棲生活が幻のように過ぎ去つた今は、お互に過去の傷に触れ合ふやうに死ぬやうな努力をしているのだ。再び結合する事は絶対に不可能であつた。一寸でも過去の傷に触れた

ら、相互の嫌悪感と劣等意識は狂気の如く荒れまくる事必定である。そして心の傷口を大きくするだけに過ぎないのだ。

それでも私は今も尚、執拗に秋子を愛し求めている。異常な感覚で秋子を愛し求めている。ただ正常でありたいと言う強烈な願望が、彼女を否定し去るのである。彼女もきつと同じ事を考えているに相違ない。私の事を考え、想い続けてくれているに違いない。それがせめてもの慰めであつた。

これでいいんだ、これでいいんだ。と何度も何度も馬鹿のように心の中で繰り返し繰り返し悲痛に叫びながら、うら淋しい通りばかりをえらんで、私はあてどもなくほつき歩いていった。

二

話は一年余り以前にさかのぼる。

私は元来、酒を飲むのが好きであつた。バーの高い腰かけに坐り、足をブラブラと宙ぶらりんにさせながら、チビリチビリと舐めるやうに飲むのが好きなのだ。勿論、上役や同僚と一緒にわいわいと来るのは嫌いだ。一人ぼっちでカクテルなどを舐めながら、ボンヤリと時を過すのであつた。孤独を楽しんでいるそんな私の姿は、多分、偏屈に見えたのだろう。金離れも良い方ではない。だから全然どこのバーへ行つても女給は寄りつかない。しかし、かえつてその方が気楽であつた。

もう年の瀬も押し迫つたある寒い夜。私はボーナス袋の入った快い、温い懷中を押えて、フラリと足のおもむくままに、バー・白菊の扉を押して中へ入り込んだ。この店は始めてであつたから、多少警戒の意味も含めてゆっくりと内部を見渡した。入口は小さいが中は思ひのほか広く、和服姿の女給が四人いた。そのうちの二人が声をそろえていらつしやいと言つたが、およそ愛嬌のない面持でじろじろと私を見詰めた。新来の客の良し悪しを評価する眼つきであつ

た。少し不快になったが、えいままよと真直にカウンターの前へ進んだ。手始めに難しいカクテルを注文したが、パーテンは割合なれた手つきで、即刻に拵えてくれた。味覚も思ったより良かったので安心してカウターによりかかって、いつもの調子で半ば放心状態になった。

そこへつかつかと、緑のウールの和服をスラリと着こなした一人の女給が歩み寄って来て、私の隣席へ腰をおろした。

「ねえ、ハイボールでいいから奢ってえ」

甘えるような声音が私の耳をくすぐった。瞬間的には厳しい顔つきを示した私も、甘美な声音の主のとりとした瞳を見て、我にもなく赤面して頷いた。

「ありがと」

嬉しそうに女給は礼を言った。

これが初対面の時の秋子であったのだ。第一印象としては大変明るく華やかで暗い陰など微塵も見られなかった。全くモダンで女給らしい女給だと私は思った。

「年は幾つだい？」

「失礼ね」

私は軽く一蹴された。

「じゃ名前は？」

「秋子よ。春夏秋冬の秋と子供の子よ。ふふふ、わりかしい名前でしょ」

「ふーん」

私はツンと澄ました秋子のプロフィールを見守りながら、三十才位かなと考えた。

「あんたが何を考えてるかあてましょか」

「うん」

「あたしの年でしょ。ほーら、当たったわね。ふふふ、あたし二十

九よ。もうあんたから見たらお婆ちゃんね」

ハイボールの酔がまわって来たのか、彼女は妙に仇っぽい、艶々と濡れたような黒眼勝の眼を、大げさにしかめて見せた。年の割にはあどけない可憐な所作が、ぐいぐいと私の心を引きつけた。何かほのぼのとした思慕に近い感情がほんのりと私の胸裏にのみがえて来た。幼時から恋情に近い気持を寄せ続けていて、最近嫁いでいた四つ年長の従姉妹をまさまざと思い出した。秋子はその従姉妹に感じは何となく似ているような氣した。私には妹はあったが姉がなかった。子供の頃、喧嘩して負けて泣いている子が姉に慰められているのを見るたびに、つくずくと姉が欲しいなあとと思った。だから姉に対する思慕の情を従姉妹に寄せていたのだ。全くプラトニックな慕情であったので、彼女が結婚した時も心から祝辞を述べる事が出来た。だが無性に佻しい思いに附きまといわれた事も確かであった。愛していたのかも知れなかった。

「何を考えてんのよ。深刻そうな顔してさ。ハハアン、振られちゃったのね。まあ、可哀そうに。元気出さないよ。可愛い顔してんのに陰気臭いと思ったら。ねえ、振られたんでしょ？。白状しちやえ」

秋子は二杯目のハイボールを注文してから言った。

「じゃんじゃん飲みましようよ。ここにこんな別嬪がいるじゃないのよお。あたしじゃダメかしら、ウッフン」

「よし、飲むぞ。じゃんじゃん飲むぞ」

秋子の巧みな誘いに私はいつの間にか意気込んで応じていた。徹底的に飲む決心をつけた。こんなに朗らかな気分になったのは始めてであった。秋子の持つ親しげな雰囲気は本能的に私を魅了したのである。

とりとめのない馬鹿話に興じて時がたつのも忘れ、お御輿をあげたのは十一時前であった。各種のカクテルやジンフイズやハイボ-

ルがしこたま胃袋におさまっていたので、完全に千鳥足であった。それでいて頭脳だけは奇妙に冴えていた。店を出て十歩と歩まぬうちに背中をポンと叩かれ、吃驚して後を振り向いた。秋子がほの白い笑顔を見せて立っていた。コートを着ていたので

「どこかへ行くの？」

と私は尋ねた。

「ウン、今夜はこれでお店、勘弁して貰って来たのよ。あんたみたいな妖精がいきなり現れたもんだから早仕舞よ。ねえ、どこかへ行きましょか」彼女の妖しく燃える双の瞳がすーつと寄って来たかと思つたとなん、唇に生あたたかい感触を感じて思わず一歩退いた。

「あら、初ね。ステキだわ。あたしあんたみたいなのが大好きよ」

三

知らず知らずの間に、私達は腕を組んで夜遅い師走の街通りを歩いてた。安っぽい地方の小都市らしいネオンがチカチカと輝いていた。平常ならもう暗くなっている街通りも、さすがに年の暮だけあって、まだまだ賑やかな人の群でごたごたしている。

私はふと古本屋の店頭で足を止めて覗き込んだ。月遅れの雑誌の間に馴染のK誌が顔を覗かしていた。酔がまわっていたせいか、欲しいなあと思いたったらもうたまらず、つかつかと中へ入ってそれを求めた。私はその雑誌を丁寧に外套の内ポケットに収めた。

「あんた、そんな本読むの？」



「読むさ、いつも読んでるのさ」

私はポツと頬を赤らめて答えながら、外套の上からしつかりと本を押えた。

「君も読むのかい？」

何気なく私は問い返した。

「ウン、あたしもちよいちよい読んでるわ。あたしってHなのよ」

「僕も同じかも知れないよ」

そう答えた私の語尾はかすかに震えを帯びていた。胸中に熱い塊がぐっと込み上って来た。チャンスなのだ。今こそ一生に二度と遭遇する事のない唯一で絶好のチャンスなのだ。ガタガタと喜びの緊張で全身が震えた。

「するとあたし達って同じなのね。同じなんだわ。もう独りぼっちじゃないんだわ。行きましようよ。一緒にどこまでも行きましようよ」

彼女は衣料品店へ入った。私は店先で彼女が買物をすませて出て来るのを待った。彼女は小さな買物包をぶら下げて出て来た。

「何買ったのだい？」

「後で見せてあげるわよ。あんたとあたしのもの。とっても綺麗なもの。きつとあんた喜ぶわよ。あんたって娘みたいにすべすべした肌してるのね」

私の手を握りしめて彼女はうかれた調子で謎のように囁いた。

繁華街のはずれの横町のそばにある温泉マークの旅館へどちらが誘うでもなく、私達は手に手を取って上り込んだ。一番上等の部屋を注文した。女中の案内で入ってみると案外調度の整った洋室であった。ピンクのカーテンの向側にフカフカした寝台が人待顔に横たわっていた。プラスチックのすっきりした小型ラジオが枕もとの台の上に置いてあった。私達は泊る事にきめた。女中がほかほかと湯気のたつコーヒを運んで来た。向い合って椅子に腰をかけふーふー言いながらコーヒを飲んだ。秋子もうまそうに飲んでいた。

「寝る前にお風呂に入りましよう」と言う彼女の提案で二人は湯殿へ入った。脱衣場で彼女は何の躊躇も見せず、するすると着物を脱いだ。真紅のお腰が白い肌に印象的であった。男の私の方がへどもどしてためらった。

「早く、お脱ぎなさいよ。恥しがる事なんかないわ」

私の野暮ったいメリヤスのシャツのボタンを外すの手伝ってくれ

る。

「あなたって、男の癖にまるで女のようにほっそりとした身体つきなのね。」

秋子の無邪気な批評が私の内なる劣等感を刺戟して、ピクリと眉を動かした。

「あら、怒ったの。ごめんね。でも、あたしってこんなの好きなのよ。筋骨隆々なんて思っただけでゾッとすんのよ。さあ、風邪引いちやつまらないからさっさと入りましよう」

温い湯がしみじみと身に沁み入り血液の循環がよくなってくると次第に冷静な気持がよみがえって来た。どうも今夜の自分の行動は奔放であり過ぎた。今になって引き退るわけには行かないが、適当に彼女をあしらって翌朝早く帰ろうと心に決めた。明日は休日ではないから勤めねばならない。

「又、深刻そうな顔してんのね。そんな顔、大嫌いよ。ねえ」

秋子は私の気持になど一向に頓着などなかった。

部屋へ戻ると、彼女は早速買物包を持ち出した。私の好奇の眼を見てとると、彼女は小首を傾けて悪戯児のようにクスリと笑いを洩した。

「これ、なんだかあててごらんささい。あたったらごほうびをあげるわよ」

私は答えなかった。どうせ手袋か、靴下か、シャツ類だろうと思っただが、中身をあててもくだらないと黙っていた。

「判んないのね。じゃ開けますよ。そうら、開けてびっくり玉手箱よ」

透明で薄いピンクの布をフンワリとひろげて見せた。それはナイロンの美しいネグリジエであった。ほかに二枚のピンク色のナイロンパンティが包の中から出て来た。

四

私はハッと息をつめてそれらを凝視した。普通の人間にとっては、単なる女の肌着の一種に過ぎない。だが肌着フェチズムのある私にとってそれらの布切は、この世で比類なき幻想を提供してくれるいきいきとした品物であった。ゴクリと生唾をのみ込んで、思わず手を伸した。ナイロンの柔かな手触りの気持よさは表現のしようがない。私は秋子が見ているのも氣にかけず、ひたすらに手触りを楽しみ、陶然とした。

「やっぱりあんたもHなのね。フェチズムがあるのね。あんたのフェチは肌着だけなの？。ほかに変な趣味はないでしょうね。」

真剣な面持で秋子は私を見守った。私は自分の軽はずみな行動に氣付いて、あわてて手を引っ込めた。

「肌着だけしか興味ないんだ。それとお尻が好きだから臀部フェチのけもあるのかな。だけどいつ見てもナイロンの下着ってきれいで艶かしいね」

「いやあね。いっそ下着と結婚しちやいなさいよ」

「なに！」

私は彼女の軽い侮りのこもった揶揄にきつと眉根を寄せた。

「ごめん、ごめん。悪気があった訳じゃないのよ。ちよいとからかっただけよ。そうむきにならないでよ。あたし達って隠していてもすぐ劣等感が剥き出しになっちゃうのね」

その最後の一言にはしみじみとした、経験者にしか判らない実感の情が、深く哀しく滲み込んでいた。異常者しか持たぬ異常な直感で、私達は行ずりの一夜に、引き合い求め合ったのだ。相互の醸し出す孤独感と劣等感がその存在を強く意識せしめたのだ。彼女の卒直で赤裸々なぐいぐいとたくまず肉迫してくる言葉と行為に、私は安堵と親密を感じ、ホッと吐息をついた。

「ところで君はHだっていうが、一体、どんな傾向があるんだい」

「さあ、あててごらんない」

「考えるのはいやだよ」

「じゃ教えてあげましょうか。あたしはレスボス患者なのよ。とっても変なレスボス患者よ。とっても変だとはいっても実際は普通の人とほんの少し、ほんのちよっぴり……ちよっぴりだけ変っている。私は思ってるんだけど。それでもやはりアブノーマルなんだわ。絶対にアブノーマルなんだわ。ほんのちよっぴりんだけど……あたしってダメ。ダメなのよ」

彼女は泣き出しそうに顔をしかめて告白を続けた。

「子供の頃から、あたしは男の人が大嫌いだったの。記憶にはないんだけど、赤ン坊の時も男の人が抱くとワーンと思ひ切り泣いたそうよ。だから小学校も女学校の時も男のお友達なんて一人もなかったし、欲しいとも思わなかった。綺麗で可愛い女の子と人眼のない場所向き合ってじっとしてるのが好きだった。一番楽しかった思い出は女学生時代よ。その頃は戦争が激しくってね。あたし達大和撫子は学校へ勉強に行かず、軍需工場へ働きに出て、勝つための増産に汗と油まみれになって頑張ったものよ。女工さんと一緒に働くの。女工さん達は皆寄宿舎に住んでいるでしょ。だからとっても同性愛が多いのよ。そんな仲間に入ったものだから、たびたび家には口実をもうけて泊りに行ったわ。愛子さんという素晴らしい人がいたの。勿論、あたしより年上だったからあたしが妹だったわ。だけど空襲で両親も二人の妹も死んでしまった一人ぼっちになったあたしは、工場をやめた後いつしか終戦後は売春婦に墮落しちゃったものよ。でもよ。敏感な男達はあたしにお前は冷い女だねといったものよ。でもあたしの異常な点には少しも氣付いてなかった。男って女の敵だと思ってた位よ。そのうち縄張りの事で男娼の一人と知り合いになったの。名前は……って仕方ないからいわないけど、その男に始め

て恋をしたのよ。女装した男が私の魂を陶醉の深淵へ始めて運び込んでくれたのよ。有頂点で、惚れて惚れて惚れぬいたわ。一年間だけ……たった一年間だけ……あたし達は一年目に別れたの。別れて一月後に彼は女装の姿で自殺したわ。それも新聞で知っただけ。何故別れたか判るでしょ。お互に愛し求め合いながらも、お互の異常な性癖がたまらなかったの。あたしも彼も自分達の異常を知れば知るほど、それと同じ位の強さで正常になりたいと願い続けてもいたのよ。求め合った後は満ち足りねばならぬのに、あたし達は自分達の醜悪さに自責と後悔を感じて胸を痛ませ、劣等感に切り刻いなま

れ続けたのよ。別れたくはなかったけど、正常人になるためには別れねばならなかった。結局、彼は絶望に敗れて現世から自己を抹殺しちまった。彼はそれで幸福だったでしょう。今度、この世に生を受けた時は、必ずノーマルに生れるのよと、私はそっと心の中で彼に囁いてあげたわ。

あたしは彼を失ってから、同性の人にも男性にも関心を失っている自分を発見した。女装した男だけが私の心をゆさぶるという習癖ができちまった。つまりまだレスボスの殻を身にくっ付けて彷徨している訳なのよ。

晴

もう、こんな話はよしましよね。

あたしはこういう女なのよ。けれどもあなたならあたしみたいな女でも心の奥底から愛してくれるでしょうね」

語り終った彼女は、濡れたようにしっとり光る両眼で私を見詰めていた。その眼はこの物語の真実を宿していた。私は彼女の真情を覚って確信を込めて頷いた。

「嬉しいっ！あたし、嬉しいの！」

彼女は歓喜でパッと頬をうす赤く染めていきなり私の首っ玉にかじりついた。二人はしっかりと抱擁した。

私は彼女の奇妙な要求に応じて、パンティとネグリジェをまとい、予想もつかぬ激情と醜怪さの中で一夜を明かしたのだった。



五

私は一途に彼女を求めた。彼女は私以上に私を求めた。劣等感を包まずさらけ出してしまつた以上、羞恥も自尊心もぬぐつたように消滅してしまつていた。彼女の過去がいかに汚辱に包まれておろうとも、いかに過失の連続であつたろうとも、そんな事は一向に構わなかつた。現在の彼女が私を愛してくれればよかつたのだ。現在の彼女が私の前に生きて動いていればよかつたのだ。そして現在のままで永遠に時が止まつてくれと祈つた。

私達は限らない充足と悦楽の余燼を楽しみ味わいつつ死んでも離れまじと固く約束し続けた。

これからの人生はもう独りじやないんだ。完全に理解し合える世に二人となき愛の対象を得たのだ。愛というものは何と甘美なものなんだろう、と思うと無上の幸福感がひしひしと湧き起つてきた。

「君は僕が夢にまで求め続けていた女性だよ。君を得てやつと落着けそうだ。僕は外形は男性だが、精神は女性的要素を多分に含んでいる異常人なんだ。両性的な人格を持っているんだ。だから昼間仕事や同僚との談笑中は、疑いもなく一個の男性として振舞っている。誰一人、真の僕の生態に気付いた者はいない。だが僕は全き男性ではないのだ。動を終えて帰り、自分の部屋にこもつた時、僕の抑制されていた衝動が頭をもたげ始めるのが常なんだ。僕は独りこっそり女の肌着を身につけて、自分を一人の女として扱い、一人芝居に耽るのだ。他人がそれを見たら、その醜態さに吃驚仰天するだろうと思うと、我ながら自身が浅ましく情なくなり、二度とやるまいと決心するのだが、どうしてもこの女装欲を断ち切れないんだ。こんな僕がどうして正常な女性と交際が求められようか。その癖、僕は感傷的に女性を愛したい気持ちにかられる事がよくあるんだ。デリケートでエレガントな女性同志の愛情を想像すると胸がわくわく

する。だがその愛情を享受するためには、僕自身が女でなければならぬ。僕はレスポスの傍観者でいたくない。そりや傍観者であっても、ある程度の快楽は味わえる。けれども、何としてでも僕は当事者になりたいんだ。自分でも嫌わしくなる程レスポスの優しさと美しさに憧れているんだ。その憧れの代償として、僕は女の肌着をまとい、はかない自己満足に耽溺していた。一生独身を守り、孤独な歪んだ行為のためにのみ生き続けようと思つていた。君のような女性は滅多におるまいと思つて断念していたのだが、神は不運な僕を憐れと思召されたのか、たまたま君と会わして下さつたのだ。君は外形は立派な女性だが、恐らく精神は男性的要素をより多く持ち合して生れて来たのだろう。女性的男性と男性的女性との取り合せが可能になるなんて事は非常に少い例だ。その事を思うと神を感謝せずにはいられない。そして僕は君を一生離さないよ。結婚しても必ず僕達はうまく、幸せにやつて行けるよ。ねえ、結婚してくれないか」

「あんたのお話、少し難しいわね。だってえ、男性的女性なんていわれても良くわかんないのだけど……大体見当はつくわ。あんたの欠けている処をあたしが補い、あたしの欠けている処をあんたが補うからうまくやつて行けるって仰言る訳ね」

「まあ、そんな処だろうな」

私の頭は全く冷静になつていた。冷静になると同時に、異常な欲望から解放されて、元の男性に身も心もたちかえるのだった。私は起き上つて、ネグリジェとパンティを手早く脱ぎ、普通の寝巻に着かえた。腹ばいになつて煙草に火を点じた。ゆっくりと肺いっぱい紫煙を吸い込んで彼女の返事を待った。

「あたし……あんたと一緒に暮せたら思い残す事なく死ねそうよ。一度でいいから一緒に暮してみたいなあ」

彼女はボンヤリと私を見ながら低い声でいった。淋しげな面持が

気になった。

「心配する事はない。結婚しようじゃないか。僕はいつだっていいんだ。なるべく早い方がいい。君を誰にも奪られたくないのだ。頼むからウンといっておくれよ」

「ウンという返事はあつた御用よ。だけどあたしがどんな女だか判るでしょ。あたしって汚れきった女なのよ。泥まみれの女なのよ。こんなあたしとの結婚をあんたは許しても、あんたの両親や親類の人々が許す筈がないわよ」

「なあんだ。つまらない事を気にしているんだな。君らしくないよ。そんな理由で僕は君を失いたくないんだ。いいからウンといっとくれよ」

「少しの間、考えさせてよ。あんたってせっかちね。今夜会ったばかりじゃないの。だのにもう結婚だなんて。そうね、二、三日のうちにあたしのアパートにお出でなさいよ。帰り際にあたしの名刺あげるから、それに住所が書いてある筈だわ。さあ、もう寝ましょ。あんたはあしたお勤めなんですよ。寝不足は身体に毒よ」

彼女は私の額にそっと優雅な口づけをしてから、くると背中を向けた。私は腕時計を引き寄せて見ると、午前三時であった。三時間ぐっすり眠れるぞと思うと、たまらない睡魔に襲れて、大きな欠伸をした。

六

三日後、私は朝早く起きて食事をとるとすぐ、家人には行先を告げず、家を出た。今日から年末の休暇に入つたので、朝から自由の身であった。それで思い立つと矢も楯もたまず真先に秋子のアパートを、訪問する事にきめたのである。アパートの所在は彼女から貰った名刺によると、郊外の新開地であり、バスに乗らねば相当時間要するので停留所へ向つた。

彼女のアパートは、一群の文化住宅の立ち並んだ小高い位置のほぼ中央に建っていた。薄べったいスマートな外観の建築で公営アパートを思わせるが、来てみると私設であった、管理人に来意を告げると、人の好きそうな彼は、わざわざ彼女の部屋の前まで私を案内してくれた。

「秋子さんは夜が遅いからまだ寝ているかも知れませんよ。どんな戸を叩く事ですね」

「有難う」

管理人が立去るやいなや、彼の言葉を受け入れて思い切り強く扉をノックした。意外に早く扉は内側から開けられ、眠そうな顔つきでナイトガウンを肩から引っかけた秋子が入口に立はだかった。

「なあんだ。あんたなのか。早いね。まあいいからお入りなさいよ。丁度目を覚ましたとこなのよ」

部屋はきっちりと整頓されて清潔な香りが漂っていた。職業に似合わず彼女は凡帳面な性格らしかった。入った処が六畳の間で中央に、カーテンがたれ下っていて、部屋を二つに仕切っていた。カーテンの向う側にはベッドが置いてあった。こちら側には真中に小さな卓子と戸棚とがポツンと置かれており、ほかには家具らしいものは見当らなかった。その横手の奥側には押入になっており、押入の手前の二畳の板の間が炊事場であった。独身者向きのこじんまりと整った部屋の構造である。

「居心地の良さそうな部屋だね。一人で住んでいるのも気楽でいいだろうな」

きよろきよろと周囲を見廻しながら私はいった。

「おすわりなさいな。コーヒでも入れるから待っててね」

秋子は押入から座布団を出して私にすすめ、炊事場へ入って行った。

「まさか僕がやってくるとは思わなかったかい」

私は大声で話しかけた。

「フフフ。きつと来るだろうっていう予感がしたから、実は先程から心待ちにしていたのよ。官庁は今日から、お休みでしょ。だから早速あんたがあたしの処へ来る事は判り切った事じゃない。あたしってうぬぼれ屋さんかしら……でもそうじゃない。ちよっぴり不安でもあったの。もしあんたが来なかったらこれで第一巻の終り……諦めるために泣き出しちやえと覚悟をきめていた位なのよ。これであたしホッとしたわ」

「僕だって君に素っ気なく門前払いを喰わされるのじゃないかと、内心ひやひやしなからやって来たんだ」

「それじゃおあいこね」

秋子はコロコロと咽を鳴らして嬉しそうに笑いながら、炊事場から出て来て、コーヒのコップを食膳の上に置いた。

「あんた、朝御飯すんだの？」

「時計の針を見てごらん」

「あら、もう十時前ね。でもいつもならあたしってまだグウグウと白河夜舟よ。十二時近くにもそもそ起きて、朝食兼昼食を食べるのよ。でも商売柄しようがないわね」

「健康に気をつける事だね。食生活が不規則だと、どうしても胃腸をこわすからな」

「あーら、旦那さんみたい口ぶりね」

私達は思わず顔を見合してプツと吹き出した。

「じゃ、失礼しちやって、あたし朝御飯頂くことにするわ」

秋子はトースターを持って来て食パンを焼き始めた。

こうして向い合って食膳をはさみ、いろいろと話合っている時は身心ともに爽快で氣持がすっきりと澄んでいた。誰が見たって幸福そうな恋人か、夫婦に見えるであろう。これでいいのだ、昼間は通常人らしく粧っていればいいのだ、自分だけの生活はまた問題が

別なんだと、私は不意に突き上ってきた暗い陰気な思いを無理矢理抑圧した。だがさて改まって求婚するとなると、どんな風に切り出せばいいのか、私は変に氣遅れがして戸惑った。

「どうしたの？」

秋子は孤色にコンガリと焼けたパンにバターを塗る手を止めて、氣難しげに惑っている私の顔を覗き込んだ。

「ウン、その、いいにくい事なんだが……僕の用件、判ってるだろう？。つまり」

「ああ、あたしと結婚する事なのね」

「そうなんだ」

「あたし、お断りするわ」

きっぱりとした口調で、じっと私を凝視しながらいい切った。

「えっ？」

私の驚きにお構いなく彼女は言葉を続けた。

「断るといっても正式な結婚はお断りするという意味よ。でも試験的に、しばらく同棲ならしてみてもいいと思うのよ。判るでしょ。何故ってあたし達、果してお互の異常な点に引かれ合ったのか、それともほんとの愛情で求め合ったのか、判然と区別がつかないですもの。ほんとに愛情があったら、異常などは克服して共に暮して行けると思うけど、愛情がなかったら案外早く破局がやって来るんじゃないかしら。あたしってHの癖に愛情を信じ愛情に飢えてんのよ。プラトニックな愛情でもセクシュアルな愛情でもいいの。あたし達を正常な方向へ導いてくれるのは愛情だけよ。あんたの心を疑う訳じゃないのよ。誤解しないでね。あんたの心に棲む異常な悪魔を疑うのよ。あんたが正常な精神にいる時は愛情があっても、異常な衝動にとりつかれている時はその愛情も保証しがたくなってくるかも知れないわ。それはあたしにだって当てはまる事なのよ。だからこゝでしばらくの間、出来たら一緒に暮らしましょうよ。その結果、先の

目鼻がついて一生、手に手をとって暮して行けると確信がついたならば、その時改めて結婚しましょうね」

彼女の言分は筋が通っているように思えた。これが一番安全で確実な方法であるような気がして来た。それにどちらにしても彼女と一緒に生活できるのであるから、深く思い迷う必要もなかった。

「じゃ正月の四日頃に、ここへ僕の身の廻りの品物を運び込むことにしよう。それで話はきまった。来年の初出勤はこのアパートからになるね」

「あたしの切実な心理が判ってくれたのね。ありがと……」

七

前記の如く奇異な経緯のもとに、私と秋子の妖しい同棲生活が、年が明けると同時に開始されたのであった。

私の怪異な性癖を知らない両親は、彼女との生活に真向から激しい非難と反対を唱えたが、私は強引に振り切って家を飛び出したのである。無論、私の勇気と決断力を彼女は讃嘆してくれたが、私にとっては無我夢中の行動であつたのだ。彼女の如き特異な女はそう多くいるものではない。この絶好の機会を逃せば、私は永遠に孤独となるに違いないと、焦慮していたからだつた。

最初の間、割合、月並な生活が続いた。夜、私が女の肌着をまわって寝る事以外は、ごくありきたりの夫婦の生活と少しも異なる点はなかった。私は従来通り朝七時半に部屋を出て役所へ出勤する。その頃、秋子はまだ、ぐうぐうと熟睡の真最中である。夕方はかっきり六時に帰宅する。それより二時間程前に彼女はバーへ出かけているから留守である。私は一人で味気なくボソボソと夕食をたべてから、さてこれから彼女の帰ってくる十一時頃まで、何をして時を過そうかと莫然と考えるが、これといって良い智恵も浮ばず、夕刊を読破し雑誌類に目を通し又、時たま気が向けばパチンコをやりに行

く位の事で、退屈を晴らすのが常であつた。

彼女は毎晩、酔払って帰って来た。だから私は彼女の為にコーヒと軽い食事を用意しておく。寝台のシーツなどもきちんとしておかないと御機嫌が悪くなる。相当な潔癖症だが悪い気質ではないので、せいぜい私は部屋の清掃に心がけた。

日曜日は彼女も店を休まして貰っていたので、午前中に部屋の掃除と洗濯をすまし、午後からは町へ遊びに出たり、映画見物をした。たまには最寄の観光地まで小遠足をした。私達は鴛鴦のようにいそいそとたえず寄りそって歩いた。心だっけいつも寄りそっていたものである。

私も彼女もお互に満足し切っていたのだつた。多少はHがかった愛情であつたにしろ、愛情である事においては少しも変る点はなかった訳だ。

こうして奇も変化もない生活が半年間続いた。だがそれは表面上の事であつて、実は私達の意識できぬ、深層意識に存在する欲望の方向はおもむろに転換し、その形態も変貌しつつあつたのだ。それを私達は無意識のうちに抑圧していたのだつた。そして、その欲望はとうとう蓄積する事をやめて爆発した。

ようやくじめじめした梅雨期が過ぎた、七月初めのある暑い夜であつた。私は一人で近くの映画館へ出かけた。三本立興業だつたので帰って来たのは十一時半頃であつた。秋子はとっくの昔に帰っていたらしく、スリッパ一枚のしどけない格好でビールを飲んでいたりかなり酔払っているらしかつた。

「やあ、遅くなつてごめんごめん。つい映画が面白かつたもので、おしまいまで見ちゃつたのさ」

「フン」

彼女は鼻を鳴らしただけで何もいわず、そっぽを向いたままでビールをぐいと男のような手つきであふつた。私はコチンと胸につか



えるものを感じてたじろいだ。

「どうしたのだい。何か店でいやな事でもあったのかい？」

「店でへまなんかするもんかい。やい、唐変木野郎。お前はどこで浮気をして来やがったのだ」

いきなり唐変木と来たものだから私は面喰らって啞然とした
「返事できないのかい。それならそれでいいのだ。白状してやるからな。映画を見て来たなんてのは真赤な嘘だろう。ほんとはあたしみたいな女に嫌気がさして来て、どこかでいい娘を探して、今頃までいちやついて来やがったのだろう。さあ、白状しな。どんな娘なんだい。さぞかし美人で可愛い娘なんだろう。黙ってちや判らねえよ」

べらべらと罵詈雑言を叩きつけてきたが、呂律はだいぶん怪しげであった。口では憎たらしげな事をまくしたてたが、顔は日頃の彼女と少しも変わらず、酔にポッと頬がうす赤く染って、かえって美しい位であった。眼だけがきらきらと異様に輝いていた。

「ほんとうに映画を見て来たただだよ。さあ、気を鎮めてもう寝なさい」

「寝なさいとはなんだ。この主人に向かって命令するとはなんだ」

「ごめんごめん」

「ここへ来てビールをついでくれ」

「はいはい」

私は下手に逆らわない事にきめた。愛しい彼女に従うのも悪い気はしなかった。私はビールを注ぎにそばへ寄った。

「ビールを注いだら今度はあんな裸になるのよ。さっさと着ているものを全部脱ぐんだよ。恥しい事なんかあるもんか」

ほんの少し腹が立ったが自制して、命令通り私は服を脱いだ。

「よろしい。おや、こうやって見ると男らしくない軀つきだね。じや、いつもの通りの格好をするんだよ」

男らしくないといわれたのでムツとして私は次の行動に移らなかった。

「おや、反抗するつもりなの。ふふふ、じやこうしよう。これを着るのよ」

秋子はスリップとパンティを私の面前に投げつけた。私は衝動的に手を伸べてそれらの肌着をつかんだ。カーッと倒錯の血が全身を駆けめぐった。私は我を忘れてパンティをはきスリップを頭からすっぽりとかぶった。急に男性的な一切のものが去勢された。私は完全に女になりきっていた。美しい肌着姿の女の幻想が走馬燈のように脳裏を走りめぐった。幻の中の女は凡て私自身にほかならなかった。私は秋子がいるのも忘れてウツトリと両眼を閉じた。

そんな私に猛然と秋子は襲いかかって来た。彼女は私の腕を捻り上げて、いつの間に持ち出したのか、しなやかなロープでぎりぎりと縛っていた。膝の上と足首も縛り上げると、身動きも出来ぬ私の身体を足でだしぬけに蹴飛ばした。

「ウッ！」

腰に痛みが走って思わず顔をしかめたが、縄の締め心地は思いのほか悪くはなかった。

「どう、縛られた感想は？ 痛いでしょ。痛いのがいやなら浮気した事を白状すんのよ」

秋子は勝手な事をいいながら、どっかりと私の顔の上に腰かけた。ぐっと思がつまって唸り声をあげながら、それと同時に生れて初めて味わった名状しがたい感情がどっどっあふれ出て来て、ぞくぞくする程の嬉しさに打ち震えた。

「明日の朝まで縄は解いてあげないわ。だけどその代りあたしが世話してあげる……あーあ、あたしの、あたしの、可愛い人……愛し

ているのよ。愛しているのよ。死ぬほど愛しているのよ。先程の下手なお芝居はこうなる為の苦肉の手段だったのよ。ごめんね。ごめんね……」

彼女は悩乱した言葉を譚語のように囁き、熱い息をはいた。

私は縛られた不自由な身をよじって彼女を見上げた。麗しい黒い双眸に、見る見る涙があふれ出し、真珠の粒のようにほろほろと豊かな頬を滑って落ちた。

たちまち襲いかかって来た、汗と涙の入り混った、接吻の嵐に包まれて、私は安らかに眸を閉じた。

八

淡い肌着フェチシズムと女子同性愛愛好の私の血液の中に、新たに被虐症の悪血が混入し通い始めたのは、否定しようのない事実であった。それと時を同じくして、秋子も加虐症の救い難い深い泥濘の中へずるずるとどこまでもずり落ちて行ったのである。

無限に続く征服の欲望と、無限に続く服従の欲望とが合致した時の激烈な感情の波にもまれて、私達はその一瞬をひたすらに享受したが、その波がおさまった時に、始めてその快感にも匹敵すべき程の凄まじい嫌悪と罪悪感に脅やかされた。フェチやレスボスはまだひねくれてはいるが軽い滑稽感や美的感覚もあって気が楽であったが、サジやマゾの世界は一種の恐れと懊憹感に包まれているように思えたので、何となく気が重く、何度となく縄や鞭を使用する事を諦めようと双方とも覚悟したのだが、結果はいつも無益な努力に終わった。禁欲感が強まれば強まる程、その強さの度合に応じて、禁を犯した時の歓喜も激しかったので、私達の悪習は果る事なく続くように思えた。死と破滅へ向って、一途に突進しているような気がした。

生活の様式もガラリと一変した。私は奴隷であり、秋子は女神で

あり女王であった。食事の支度も掃除も洗濯も家事一切は私の受持となった。夜は縛られ放してはっておかれる時もたびたびだった。

気に入らぬ事でもあるとすぐに彼女の癪癪は爆発した。その後の彼女の慰めがなかったら私は耐え切れずに別れていたのである。半年間もそのような状態が保たれたのは、ただ彼女に慰められる瞬間があったからに他ならない。自分が女として彼女から愛されていると錯覚する瞬間があったからに他ならない。まだ女の肌着をつけて縛られる事は許されていたので、私達はレスボスの残骸をわずかに止めてはいたのである。

然し遂に最後の破局がやって来た。それは秋子と初めて会った時のように寒いクリスマスの前夜であった。例の如く彼女は酔払って帰宅して来た。軽い夜食をテーブルの上に並べていた私に向って、アルコール臭い息をはきかけながら彼女はだしぬけに命令した。

「服をお脱ぎっ！」

私は近頃すっかり氣力を喪失していたので素直に従った。彼女はそんな私の腕の後へ捻じりぎしぎしいう程強く高手小手に縛り、丁寧に首縄までかけた。その上、膝を縛った縄を首に引っかけて締め上げたので、私は醜い姿態を丸くまるめたまま身動き一つできず横たわっていた。海老のような私を冷然たる眼差で見下していた秋子は、突然憎々しげにいった。

「ふっふっふ、いい格好ね。あんたって人はどこまでも墮落して行く人ね。いわれるままにどこまでも地獄の底にまで墮落して行く意久地なしなのね。あんたは自分というものを見失っても平気なの。男の癖にあいそがつきるわよ」

秋子は酔の力にまかせていってならぬ事を口走ったのだ。私は真底から怒気を感じて呻いた。長い間、忘れ去られていた劣等感がむくむくと頭を揚げ始めたのである。だが私は空しくもがくだけであつた。

「あーら、怒ったらしいわね。まだレジスタンスする元氣は残っているのね。頼もしいわあ……ほっほほほ。ではあたしはこれから出かけてくるからね。あたし、とっても珍しいペットを見せたげるって二、三人のお友達に約束しちゃったのよ。だからこれからお友達を呼びに行くの。おとなしく待ってなさいね。今夜はここでパーティーを開く事にするわ。とってもステキなパーティーになるでしょね。お利巧さんだから暴れたりしない事よ。それでは暴れようにも暴れられそうにもないわね。じゃあ、バイバイ」

彼女のいつている事はまんざら冗談でもなさそうであつた。彼女はそういい残して、さっさと部屋を出て鍵もかけずに立ち去った。

私はあらんかぎりの力を振り絞って縄を解こうと腕いた。のたうちまわってといたい処だが実際はわずかに位置を変える事ができただけであつた。縄は手首に腕に膝に首にぐいぐいと喰い入る一方であり、必死のあがきも無駄であつた。もうすぐ秋子は友達をつれて戻るだろう。それまでに解かねば私は羞恥と汚辱にまみれ果ててしまうのだ。永久に彼女のペットで過すか、それとも職も家族も捨てて遠くへ逃げるか。道は二つしかない。いや有る。自殺だ。死ぬば何もかもおしまいだが、何も判らなくなるという利点もある。私の胸裏を不意に秋子の第一の恋人で、自殺したという男娼の最後の姿がおぼろげに気味悪く横切った。

その時、ガタンと扉が押し開けられた。ギョッとして私はその方を見た。秋子が一人で戸口に立っていた。そのままの姿勢で彼女は凝然と私を見詰めた。彼女の目は夜露に濡れたかのようにしめっているんでいた。

「解いておくれよ」

私の哀願に答えて、彼女は後手で扉をしめてから、そろそろと私に近づき、膝まずいて私のいましめを手早く解き放した。

「有難う。友達はつれて来なかったのだね。よく我慢して自分の性

癖を抑えてくれたね。感謝するよ」

私は大急ぎで衣服を身につけ外套を着た。

「お別れね。これで永久にお別れなのね。あたし、それでもあんたを愛し続けるわ。あんたへの愛は心の小箱にそっと秘めておくわ。

時々、その小箱から想い出を取り出して、あんたとの一年間の生活を懐しむ事もあるでしょうね。特に初めてお会いした時の印象を……サヨウナラ」

彼女はへなへなと崩れ折れて、しやくりあげた。泣いてはいるが再び私の方を見る事はしなかった。振り向けば未練が生ずるのだ。

永久の異常な生活へ連なる未練が生ずるのだ。その魅力に打ち負かされまいとして、けなげに斗っているのだ。

私とて同じ事であった。異常性に取り囲まれた生活なんて真っ平なのだった。一時も早く異常性から脱却したかった。けれども精神的には彼女を愛していた。だが衝動が湧き起った時、二人の異常性は際限もなく広がり深まって行くにきまっている。精神的愛情と道徳観念は決してこれを許容しはしないであろう。お互に愛し合いな

がらもお互に軽蔑し合う生活なんてたまらない。私だって正常な妻を貰い正常な子を生み正常に暮して行く権利はある筈だ。秋子とだけはお互の為にやっぱり別れた方が倅せである事は決して間違いないか

った。うまく行くと思ったのは誤算であったのだ。然し、彼女と別離しただけで倒錯への一切の欲望を断ち切れるとは思ってもいなかった。別離の感動が薄らぎ出せば、たちまち又もや倒錯の甘美な世界へよろけ込むであろう。その癖、彼女とは暮して行けぬのだ。何という矛盾であろうか。倒錯者は永劫に孤愁の人生を放浪し続けねばならぬ宿命なのであるか。何者をも愛し得ず、永劫に自己愛へと回帰し続けねばならぬ宿命なのであるか。

ああ、人生に呪いあれ！
私は泣き崩れている彼女をそのままに、黙って部屋を出た。アパートから外に出るとピューピューと木枯が深夜の暗黒に吹きついていたので、ゾクツと一時に寒気を感じ、深々と外套の襟を立てた。一年ぶりに生家へ急ぐ私の足は惨めに重かった。(終)

中絶お詫びのご挨拶

沼

正三

突然、私的環境に変動を生じた為、「家畜人ヤプー」を再開後、僅かの経過で又もや中絶するに至ったことをお詫びします。

実は、もう少しの連載分の用意はあったのですが、汚物崇拜関係の描写について昔と同じ様な取締規準と信じて書き下した為、その

点、神経過敏な——奇クという貴重な存在の自衛本能の発現としてそのこと自体には敬意を表するにやぶさかではありません——

編集部から大幅な訂正を求められたのです
 (※) 削除されたまま発表するのは——女性の毎日の、毎月の液体を注射液としてテスト・アニマルのピグミーに注射すること、イース全白人女性の健康診断・受胎告知をしようという大切なアイデアですからね——どうしても残念ですし、さればとて、書き直すだけの余裕は今の処、全然ないのです。

(※) ヤプー再開後、手帖新稿後の私の文章で、続きの悪いところは、大抵編集部で削除したところと御承知下さい。例えば五月号八九頁上段のアンナ・テラスのことは、彼女がその時(前頁下段から)ストウラーを使用していた描写が先行していたことを知らぬと可笑しいでしょうし、六月号「ヤプー」のモロクモン鞭は酋長の肉体から切り取ったものと心得て読まぬと変でしょう。「手帖」の方でも、六月号一二八頁下段の……部や、一三一頁上段の省略部は、トイレ場面と考えて補充した上で、前後との脈絡を回復して下さい。その中、何とか余暇を見出して、書き直

し、更に書き継ぎたいと思っています。クラ達の一行は、黒色猊獣狩りに興じた後、虹の橋を渡って、富士山飼育場に降臨するでしょう。一方ドリスは二〇世紀球面に麟一郎の妹百合枝を誘拐に出かけるかも知れません。南海の竜宮城には、オットー姫(実は男性ですがスカートを穿いた内気な性格です)が浦島さんことウラジミール青年と素晴らしき饗宴の準備をしている様子。鈴をつけたヤプーの曳く三頭轎で南極大ヤプーナリーを訪ねれば、ここにはコラン博士が待っています。産仔機械と化した雌畜の蜂房、白人の下半身を象った自動マネキンによって再教育されるストウラー矯正所、……クララの見物中に、リンは脱走を試みます。そして彼は彼なりにイース世界を見聞するでしょう。ネグタールに酔う黒人酒場を、脱走畜を捉える恐ろしい罠りを……。やがて苛酷な処刑の数々。一週間の終りには、ウイリアムとの結婚の引出物にされるリンなのです。……目下の腹案は、丁度、今迄の連載分と同じ長さになる位あるのです。森本氏から不吉な中絶の予言をされたのは忘れませんが、奇クにして廃刊しない限り、きっと完成させるつもりです

から、待っていて下さい。(中絶といえは真木不二夫さん「黄色オラミ」を誕生させるのを忘れて、あべこべに「白い獣」をいじめてしまいましたね。ひどい。そういう、杉本氏の「犬の生態」も中絶しましたね。)

「手帖」の方は、たしか十八章まで送ってあります。これも、旧稿は数十章分書き改めであるのですが、再改稿の方は、当分余裕がなく、或いは十八章で一時中絶することになるかも知れません。然し、この方も、いずれ必ず継続させるつもりです。

「雑報」だけは、時々でも登場させて貰いたいつもりですが、これもどうなることか。本当に、暫く御無沙汰することになってしまいうで、私としても、遺憾千万ですが……。

では、親愛なる愛読者諸君——私の愛読者は絶対数からは少なかったかも知れませんが。然し読者通信での支持激励はいつも有り難く拝見していたことを申し添えます……to the happy few——暫くさようなら!

I've written this, drunken
with alcohol-mixed nectar.

告

白

自分をハダカにする (五)



— 松 井 籟 子 —

テレビの中からこの雑誌の読者達の多くが体にひびかせるシーンは大抵きまっているようだし、私がとりあげてみても、誰かの原稿と重なってしまうかもしれない。

けれど、テレビにこんな場面があったという紹介ではなしに、その場面から私自身がどんな感じを受けたかということはやっぱり書いてみたいことなので、あえてそれから書き出すことを許して頂きたいと思う。

この間、日曜日の昼間だというのに、サジスチックな場面がつづいて二つもあった。

一つは毎日テレビの「海と麻薬」というドラマ。

主人公の船員が麻薬の密輸をやっている船会社の社長にたてついて、リンチにあう場面だ。

薄暗い地下室のコンクリートの柱に縛られて、顔を血みどろにされて荒い息をついているのに、さらに頬をなぐられる。

しかし、テレビという考慮があったのか、胸と脚を縛られているだけで、着ているものも破れていないし、たいして悲惨な感じはしなかった。

どうもがっちりした体格の、見るからに頑丈そうな男が責められているのは、私にはサジズムの美しさが感じられないのだが、人によつてはよく思う人もいるかもしれない。

もし私なんかの書く小説なら、むしろその

船員を逃がして、女房のバーのマダムに扮した万代峰子を拷問するところだろう。

私はまだ映画でもテレビでも、万代峰子の縛られた姿を見たことはないけれど、中年の色香と、豊かな髪と、黒目がちの大きな目はきつと責められる美しさを、充分に出してくれただろうと思われる。

まして、関西随一といっているいい程、演技のしっかりした人だ。

縛られた上半身をテレビでアップにして、責め道具をうつさなくても、苦痛にゆがむ顔で、その拷問の激しさをあらわしてくれるだろう。若い女優さんには出ない別の味が出たろうにと、まるで私は自分が男性でもあるように、空想で万代峰子を責めさいなんでもみるのだった。

私には同性愛的傾向があるのだろうか。

私は曾て、本誌に女の同性愛の小説を書いたことがある。それももう五、六年前のことだと思うが、その小説を書いたヒントは新聞の三面記事だったが、私のイメージの中にはある美しい女流画家の面影があった。

耳たぶのすごく美しい人だった。

お酒に酔うと、その耳たぶが桜貝のような色につやつやと光ってきて、女の私でさえ見惚れる美しさだった。私はその人の耳たぶを口の中へふくんで、かるく噛んでみたいと思った。そして、その人だったら、耳たぶだけ

ではなく、愛撫してみたいようにも思われて、女の同性愛ということも、ありうるのだと感情の上で理解した。

私はその人を愛撫するかわりに、同性愛小説を書いたのだ。

それにしても、私は同性から愛撫されたいと思ったことはない。

それと同じように、同性の人に苛められたいとは思わない。しかし、苛めてならみたいような気がする。そして、たまたま自分の夢想の中で万代峰子を責める場面を考えてしまったのだ。

私の中には男性的なものが、女性的なものより多いのかもしれない。それを立証するように、私の方から世話をやいてあげる女友達よりも、女房のように私の世話をやいてくれる女友達の方が多い。しかし、それも、私がこんな告白を書いていると知ったら、おそれをなして逃げていくだろう。私は私が松井籟子であることを、身近な女友達にも告げていないのだから……。

何にしても、「海と麻薬」というドラマの責め場面は、それからのびた空想はべつとして、それ自体直接に、私の体にひびいてくるものはなかったのだ。

それが一時で終わったので、私は朝日放送テレビへ切りかえて、東京からの舞台中継をみた。

「浅妻舟」という芝居だが、町娘のおかつという女が、柳沢吉保のお部屋さま付の腰元として奉公にあがっているのだが、水戸侯から内偵を頼まれる。おかつは信義を重んじて、屋敷内のことを外へは洩らさなかったのだが老女の耳に、彼女が密偵だということを告げるものがあった、吉保に裁可をおおぐ。

吉保はおかつを見て、その美しさに惹かれ、体ごと自分の前に降参させてしまえばいいと考えるが、おかつがいうことをきかないので、腰元達におかつを縛らせてしまう。

後手に縛られて、転んで横倒しになったおかつの、裾の長い着物の美しさを幕がかくしてこの場は終ってしまうのだが、どんな理不尽なめにあわせても、誰ひとり彼女を助けるものもない屋敷の奥深い部屋で、玩具にされるそれからさきの舞台を、私は夢みてしまうのだった。

おかつには密偵という、責められてもいい条件がある。

それが水戸侯からまわされたものだと知っていても、多分吉保は知らない顔で「誰に頼まれたかいえ」と責めるだろう。

おかつは町娘だから、武家の娘よりは死というものをおそろしく思っている。それは芝居のせりふの中にもあった。生きたいという思いが強い。まして、内偵を頼まれるのも、おかつにしたら無理に押しつけられたことで

はあるし、死ぬのは恐いから、武士のいいつけにはじめから恐怖心をもって、蛇にみこまれた蛙のように、水戸屋敷へつれて行かれたり、又柳沢家へかえされたりしているのだ。だから、縛られて、吉保の前に転がされても、それを恥辱と思って舌をかみ切って死ぬようなことは出来ない。

町人の娘として、武士の勝手さをどんなに憤ってみても、その為に自ら命を落すのは、なお愚かなことだと思っている。

そんなおかつは吉保にとってこの上もないいい玩具だろう。

後手に縛ったまま、帯じめ一本はずしてもおかつは身悶えして抵抗する。

帯をとり、腰紐をとる。はだけた胸から白い肌が暗い灯の中に光るだろう。

身につけている紐を全部といてから、なげしの槍をとって、その白い胸を一つつきにするとかまえば、女は恐怖に息をはずませながら、じりじり、じりじりと、後へすすっていく。

わざと部屋一杯に追いかけてまわせば、女は本当に自分が殺されるのかと思いつながら、必死にあとずさりしていくだろう。白い肌に油汗がべつとりと浮かび、体を動かす度にちらちらとのぞく肌は、裸体よりも美しいのではないだろうか。

「誰に頼まれた？ 云え」

と問われ

「水戸さまに……」

と答えても

「この家の事をどのように告げた？ 云え」といわれれば、おかつは何にも云っていないから答えようもない。

「いろいろたずねられましたが、私はただ、存じませんとお答え申し上げたばかりでございます」

というだろう。しかし、それで許される筈もない。

「嘘を申すか、云え、云え」

と、槍の柄を後手に縛られた腕の間へ入れてこじあげられれば、

「ああっ！」

と身をそらして、おかつはそれに耐える。

紐をしめていない着物はその拍子に半分肩からぬげて、丸い肩と、胸があらわにさらされる。手を縛られているから、それをおおいようもなく、女は羞恥と苦痛に体中に紅をちらしたように赤くなる。

それもかまわず

「云わぬか」

となおも背をこづくと

「お許しを……」

と、きれぎれに哀訴する。

「では余のいうことをきくか？」

といえ、女はだまってうなずく。

「よし、それなら酒の相手をせい」と命じる。

おかつは縄をとりてもらえるつもりでいても、吉保はそのままで下僕をよぶ鈴をふるだろう。

「おめしでございますか」
腰元が出てくる。

おかつはあられもない姿を人に見られて、首をうなだれてじっとしている。

腰元はそれを見てみぬふりで、吉保のいいつけに従って酒の用意をする。

上半身すでにぬげてしまったおかつは、吉保のそばに後手のまま坐らせられる。

腰元達は目の前にどんなことがおころうと

無表情な顔をしていられるが、町娘のおかつにとっては、それは死にまさる恥しさだ。

それなのに

「そちものめ」

とおかつにいい、腰元に

「かつにもついでやれ」

と吉保は命じる。

おかつがじっとしていると

「盃をもたぬか」

と吉保の叱責がとぶ。

盃をもてといわれても、手が縛られているのにもちようもない。

「口でもて」

と吉保はいう。

おかつは膳ににじりよって、犬のように身を低くも、やっと盃をもちあげる。

「そちは水戸のイヌではないか。犬のように可愛がってやる」

吉保はいう。

おかつがそのみじめさにたまらなくなつて泣き伏しても、涙をふくすべもない。

泣きながら犬のように芸当をさせられる。

着物は後手の縄の所へかたまって、ずるずるとひきずっているだけで、おかつはすでに湯もじ一つの裸身になってしまう。

そして、さんざんに玩具にされたあげく、

その夜、吉保の為に女にされてしまうのだ。

舞台で演じてくれない所を、私は私の想像



の舞台で演じさせる。そしてその時、私は決して自分がおかつとして演じさせられるのではなく、彼女を苛める演出者としての自分しか感じないのだ。

私はやっぱりサジストなんだろうか。

若い美しい娘を苛めてみたくなるのは、若さに対する嫉妬だろうか。

そして、若い美しい男を苛めてみたいとも思う。それは私が女として、心の奥深く持っている男性への憎悪からだろうか。

私は何度か恋をし、何度か恋の為に傷付いているのに、私の恋の相手は浮気から浮気へうつりながら、表面的にはちっとも傷付いていない。地位も財産も失っていない男に比べて、私はただ愛の純粹さを望み、愛の喜びを克ち得ることに一生懸命で、有形のものはだんだんに失ってしまった。そして、私の望む純粹な愛情さえ得られなかった。それなのに、いまだに私は恋をしたら、相手の為に無理な散財をしてしまう。相手がそれを望みもしないのに、外国製の高価なライターの、意匠の面白さに惹かれると、恋する人に「いいでしょう」と手の平にのせて差し出してみたくなる。そして、私は私の宝石を売っても、そのライターの方がほしくなる。

それを贈って相手の機嫌をとろうというのでもない。とに角、私に好きな人が出来たら街を歩いていても、シヨンウインドーの男も

のしか目にうつらなくなるのだ。

たとえ呉服屋の前に立ち止っても、私は私の帯よりも、男ものの丹前地に目を走らせているのだ。私にお金があったら、筆箱を一つと棹買つて、男のための衣料品を作つてはしまつておくだろう。贈物にしくてもいいのだ。ただ自分のものより、好きな人のものを作ることに喜びを感じるだけなのだ。

いわば男が女道楽で家財を蕩尽するように私は恋をするとお金を使つてしまう。そしてその恋に飽き、又別な恋をしてお金を使いだんだん貧乏になっていく。それなのに、私の過去の恋人達は現在貧乏している人は一人もいない。結果的にみると、私が恋の喜びに酔っている間、上手に利用されたことになるらしい。

そこで私は時々男がみんな憎らしくなる。そして、男を上手に利用することを知っている伶俐な女たちが憎らしくなる。私は男も女も、めちやめちやに傷つけてやりたくなる。そんな時、私はサジストになるのだ。

そして、自分の馬鹿さが、自分自身癪にさわつて、自虐自愛というサジマゾ一緒にしたアブノーマルな血が湧き立ってくるのだ。

テレビの「捕縄術」は、最近又やっていたが、誰か他の人が書くだろうから、私は割愛

しよう。

それより、ジャニーズシヤラ・バレエ団の「高電圧」というバレエの方が印象的だった。

黒いタイトの魔女の、均斎のとれた体は実に美しかったが、その魔女に電流を通じられ、魔力を与えられる青年もいい体をしていた。

青年は上半身裸体で、広い胸に胸毛がちぢれていたが、下半身は普通のズボンをはいている。

その青年がもたえながら、魔女の動く通りに動くのだ。音楽にのつて二人の踊りがつき、時々音楽がやんでおかしい声がきこえ、又音楽になるのもモダンバレエらしかった。

そして青年は魔女のとりこのように、自分の意志では自分を動かすことが出来なくて、おなかをピクピク痙攣させながら、魔女から電流を通じられる。

それから他の男達が出て来て群舞になるのだが、魔女が青年をあやつる姿に、私は体にひびく美しさを感じた。サジズムの美しさだ。

よく歌舞伎なんかでも、妖術を使ったり、幽霊なんか相手を指のさきできりきり舞いさせるシーンがあるが、歌舞伎は重い衣裳をつけているから、肉体の躍動する美しさはない。

それがこのバレエでは、魔女も体の線をそのままあらわしたタイト姿だし、青年も上半身裸体なのだから、肉と肉がぶつかり合うよ

うな迫力がある。

青年が苦悶を表現すれば、体も表情もリアルに訴えかけてくる。そして魔女の柔軟な肢体はいかにも魔力をもった女性のように、軽やかに青年をとりこにして翻弄するのだ。

私は息もつけずにみつめていた。

やがて青年が街の娘に恋をして、娘と青年を中心にした踊りになり、娘が青年に抱きつく、娘に電流が通じて娘は死んでしまう。

その娘の死ぬシーンも、ビリビリと手足を動かして息がたえる振付が、バレエとしての美しさの中で残酷な味を出していた。

すると青年は我にかえり、他の人達と共に魔女をやっつける踊りになる。

魔女をとらえると、魔女の手を後手にとつて、群舞の上へさかさまに押し倒して、のどをしめてしまうのだ。

魔女の顔が苦悶にゆがみながら真逆さまに客席を向いて、幕がおりる。

私は近頃になく夢中になった。

私は自分が縄というものに憑かれているような気がしていたのだが、縄がなくてもアブノーマルな刺激を感じることを知った。

そしてこのバレエ団が芸術的香気のある舞台を展開してくれただけに、その刺激の中には芸術的な快い感銘もあり、何かしらん、安心して酔っていられた。

私は美というものにすごく賛沢なのだ。

だから、サジズムもマゾヒズムも美をはな

れたものは厭なのだ。

昔の役者が夫婦喧嘩をしていて、その形が悪いとどなったという話があるが、私はどんな場合でも自分が美しくありたいし、相手を美しく思いたい。

縄も責め道具もその美しさを助けるものであって、こわすものでは厭なのだ。

だから、せむしのみにくい男に苛められていような絵はあまり好きではないし、ノールダムのせむし男が、仕置台に縛りつけられていても、アブ的刺戟は感じないのだ。

むしろ相手が人間ではなくて本当のゴリラなら、美しさはなくても、醜さというものは違ふと思うので、それはそれで別の感じがある。

ただマゾヒズムの中には、相手の醜悪さによけい満足を与えてくれるものがあると思っている人もあるらしいので、私はそれを好かないというだけだ。

サジストをもって任じているある人が、縛られた女の絵をよく集めていたが、大抵責める男が、好色そうな猥々親爺だったり、不具者だったりするのが気に入らないといって、美男が美女を責めている絵をわざわざ書かせたという話をきいたことがある。

人それぞれの好みだろうが、悦虐の世界にもそうした好き嫌いがあるのは面白いこと

だ。

だから私はテレビの場面で悪人が縛られても、悪人をやる人は大抵むくつけき男が多いから、むしろ同性でも、美しい女が縛られる方が好きなのだ。

男でもこの間「鳴門秘帖」で若い隠密の俵一八郎をやった人が縛られて鞭打たれるシーンがあったが、私は前からこの役者が一寸好きだったの、そのシーンがすぐすんでしまったのを惜しく思った程だった。

こんな風に美しさに対して注文をつけていると、前に私の求める人はそんなに美しくなくても清潔な感じのする人ならいいと書いたのが嘘のようになってしまふが、男の美しさというのにもいろいろあると思うのだ。

天下の美男で通っている長谷川一夫のようなどとのった顔立ちの人よりは、宇野重吉のような別のニュアンスをもった人を美しく思うのだから、私がもしメンクイだとしてもたいたことではない。

津川雅彦を美しいと思うけれど「惜春鳥」に出た五人の青年の中でも現実に誰かを好きになってもいい立場にいたら、私は小坂一也をとる。

そのくせ「野獣死すべし」をみると、次々に冷静に殺人をやっていく非情な学生に扮した仲代達矢の、虚無的な情熱というべき瞳の色に惹かれた。女を女とも思わない瞳に射す

くめられながら、玩具にされるマゾ的快感を想像してしまう。

いわば氣が多いのかもしれない。

よく嫌われても嫌われても異性を追いかける人がある。嫌いぬく女を金の前に屈伏させるような男は小説なんかにもよく出てくるし間貫一を追いかけまわす赤檜満枝は昭和の現代にもありそうな存在だ。

それは征服慾であるかもしれないが、精神的マゾヒズムも潜在しているのではないだろうか。

私には男性の心理は解らないが、私が愛する人に苛められたという思いがあるように女は愛情を基盤としてなら精神的マゾヒズムに耐えられるものをもって思ふのだと思う。

義太夫でやる「艶容女舞衣」のお園にしてもそうだ。夫婦になっても一度として妻らしく愛撫してもらえず、夫は三勝という他に愛している女がいて、子供まで出来ている仲なのに、嫉妬もせずじっとこらえているのは貞女の鑑のようにいわれるが、お園の精神的マゾヒズムなのではないだろうか。「お氣に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻ゆえ、添伏しは叶わずともお傍にいたいと辛抱して……」というお園のくどきは女の愛情と、その愛情ゆえにじっとこらえる感情をよくあらわしている。半七が冷たければ冷たい程、お

園はその冷たさを体全体でうけとめて、愛の焰を燃えたたせるのだと思う。

それは丁度、肉体的に苦痛を与えられながら、その苦痛が情感を刺戟するのに似ていると思うのだ。

お園には半七を何とかして自分のものにしようという征服慾はない。夫の夜泊り日泊りを耐えながら舅姑につかえることは精神的苦痛を無形の縄や鞭として喜ぶ思いがなければ出来ることではないだろう。そして更に自分で自分をいじめつけて、「去年の秋のわずらいに、いっそ死んで了うたら……」となげくのも実に自虐的だ。人形遣いのふりでも、このくどきの所は、自分の手で自分の腕をたたくようなしぐさがついている。

観客はお園のくどきに涙を流しながら、その美しさに感銘をうけるが、その美しさは愛情の美しさだけではなく、マゾヒズムの美しさがあるのだということにはあまり気がつかないようだ。

この「酒屋」は竹本三郎兵衛の作だが、三郎兵衛という人は大体が人形遣いで近松半二のものをよく手がけたというから、もしかしたらこの作には半二の息もかかっていたかもしれない。

そして私は近松門左衛門の中にサジズムの匂いをかぐように、近松半二の中にはマゾヒズムの匂いが漂っているように思われてなら

ないのだ。

勿論、サジズムとかマゾヒズムというような、アブノーマルなものではなくても、当時の浄瑠璃は封建的な義理人情の世界をえがいたものが多いから、自然、殺人とか切腹とかいうものが随所に扱われるのだが、浄瑠璃の作者達が案外たのしんで書いているような感じがうけとれるので、私は作者の中にひそんでいるアブノーマルなものを、つい探ってみたくなるのだ。

或いは封建社会へのレジスタンスが、心中というような形をかりたともいえるのだろうが、私は近松の中に単にレジスタンスだけではないサジズム乃至マゾヒズムの美しさに対する夢を感じる。そのことは別の雑誌に書いたことがあるのでここでははぶくが、近松半二は近松門左衛門よりあとの人だが、門左衛門を敬慕していて、近松という名を名のったという。その中には、門左衛門のサジズムを快く思うマゾヒズムがひそんでいて、門左衛門に傾倒したと思うのは私のひがめか――。

たとえば半二の作の「妹背山婦女庭訓」で酒商売の杉屋の娘お三輪が、恋人の求女のあとを追って入鹿の御殿へ来て、女官達になぶられる所がある。

求女は仮の名で、実は入鹿をほろぼす側の藤原淡海なのだが、入鹿の妹の橘姫とも恋仲になっている。女官達は求女の本身を知らな

いから、お三輪がおはしたをつかまえてここへ男が来なかったかとときくと、お姫様の恋男が来て、今宵にも祝言するとううわさだと教える。

それだけでもお三輪の心は嫉妬でにえたぎるのに、勝手を知らない長廊下でうろろしている、大勢の女官が出て来て、祝言の時に酌をする役をやらせようといつて、長柄の銚子の持ちかたを稽古させる。

お三輪は求女に会いたいばかりに、女官のいうままに、酒をつぐ稽古をする、持ち方が悪いとか、つき方が悪いとか、いちいち叱られ、お祝儀の唄をうたえといつて無理に唄わされる。恋人の祝言の祝い歌を歌うということ、精神的加虐であり、お三輪は思わす泣き出すと、女官達が無理に正面をむかして扇のさきで胸をこづきながら唄わせるのだ。

歌舞伎でやると、縄はかけないが、舞台の真中に正座させられて、うなだれている顔を扇子でおしあげられ、両方から女官にさはまれて、下を向けないように扇子でつかい棒をされながら、泣き泣き唄うシーンは実に被虐的だ。

その上、色直しの唄を唄えといつて、馬子唄しか知らないというと、片肌ぬがせて、鉢

花がしおれないように、

大池から
れをくんできて、



巻きをしめ、みんなではやしたてて馬子唄をうたわせるのだ。当時の娘にしたら、衆人の中でスリッパ一枚ではやされるような恥しさだったろう。

そして、さんざんなぶって笑う者にして、女官達は奥へ入って行こうとするので、お三輪はその袖にすがって、一目求女に会わせて

くれと頼むのだが、邪慳にふりはらわれる。義太夫の文句では「耳を引くやら、脇明より手をさし入れてこそぐるやら、つめりつたたいつ突倒し……」と書かれている。

お三輪はくたくたになるまで女官達のながさみ者にされるのだ。縄や鞭を使わなくても充分なアブシーンである。

そして、この場合、作者はお三輪を苛めることをたのしんだのか、苛められることをたのしんだのか私の関心をそそることなのだが、苛める側の人数が多くて、いわば集団加虐に対して、若い娘がひとりでそれを次々に受けた構成から、私は作家のマゾヒズムをかくわけなのだ。

同じ半二の作に「新版歌祭文」があるが、野崎村のお光は義太夫節をあまり聞かない人でもよく知っていると思う。

ここでもお園のような、自分をすてて恋人を思う没我の女心がえがかれているが、これも精神的マゾヒズムの一つではないだろうか。

ただ自分を犠牲にする愛情に心をうたれるから、お染久松を見送るお光の姿に涙を流すが、あの苦痛を耐えることは女でなければ出来ないことだろうし、女の方が男性より肉体的苦痛に耐えられるように生れついているので、精神的苦痛にも耐えられるのかもしれない。

男だったら恋をゆずっても、三度笠をかぶって旅に出てしまったり、場末の酒場で商売女を相手に盃を傾けて失意の涙を流すのがオチで、とても、お園やお光のような、内攻的な耐え方は出来ないようだ。

曾て特高の拷問に男性より女性が強かったというように、女性の方がマゾヒストが多い

ことが、古来、こうした精神面にもあらわれているのだと思われてならない。

しかし、どんな被虐でも、根底に流れる愛情がそれをささえているのであって、単に被虐を喜べるかどうかということが私には解らないのだ。

特高の拷問に耐えることは、責める人には何の愛情をもたなくても、自分の主義に対する愛情があったらうし、主君の為というような封建時代の考え方の中にも、それはそれなりの愛情がうかがえる。

私自身、人から頭を押さえられるのは好きではなく、野人をもって任じているのだが、恋をした場合は、相手の男が冷たくても、お園的うけとめ方も出来るのだ。冷たい視線で射るように見られながら、尚心を燃すことだってある。その冷たさに反撥して、後を向けてしまえる時はまだ惚れ方が浅い時だ、本当に打ちこんだら、相手が愛してくれてもくれなくても、自分一人で一生懸命愛していられるし、それでこそ私のマゾヒズムも昇華出来るのだと思っている。

しかしそれは肉体的苦痛以上につらいことのように思われるので、精神的に苛めるかわりに、肉体そのものを苛めてもらいたいと思うのだ。

もし、精神と肉体と両方の面で苛められるようなことになったら、とても辛抱は出来ない

いのではないだろうか。

たとえば、昼間はとてもやさしい夫が、夜は人が変わったように妻を縛って鞭打つこともあるだろう。

又、昼間は物をきいても返事もしないような冷たさで、動物のようにこき使われ、人前でしのまれても、夜はお姫様につかえる下僕のようにやさしくされることもあるだろう。

よく男のマゾヒストに案外太った大きな人がいて、華奢で、やさしい女に苛められたいと思っている人がいる。

私はそれと反対に、金魚が死んでも涙ぐむようなやさしい男に、苛められてみたいと思うのだ。そしてそういう私自身が、本当に金魚が死んでも胸のあたりがキューッと痛くなるようなセンチメンタリズムをもっているのに、縛ったり、打ったりという殺伐な小説を書いているのだ。何かしらん、どこかで神経がどうかなっているような気がする。

しかし、アブノーマルなものというと、妙に隠花植物的に暗いじめじめしたものが多いのだが、もっと明るい陽の下にだって、マゾヒズムの感情はたゆたっていると思うのだ。それは絢爛とした歌舞伎の舞台にあるアブノーマルな美しさに似て、もっと近代的に、たとえばチャタレー夫人の恋人のように、おらかなものがあってもいいように思う。

私はまだ若い頃、会津駒ヶ嶽へ登ったことがあった。

遠くから見ると、緑色の山の所々に残雪が光って、くずまんじゅうのようなやわらかさを持った山だが、頂上は草地で高山植物が咲き乱れ、キヤラメルの商標のエンゼルがとび出してきそうだった。

標高は相当高いのだが、頂上にはあまり岩がなく、女性的な山だ。

その頂上に旗でも立てるのか、一本の棒が立っていた。

私はその棒にもたれて、ふと、手を後手に組んでみた。

緑色の稜線が目の下につづき、鏡のような大池が光っている。さわやかな夏の風は、初夏の匂いを漂わして、空気が澄んで実においしい。

そんな明るい景色の中で、私は誰かがこのままぐるぐるまきにその棒へ縛りつけてくれないかなと夢想していた。

つれば大池のほとりで昼寝をしている。山賊もあらわれそうもない。

私はひとりで後手に組んだ腕を、棒にそってあげてみたり、さげてみたりしていた。

何となく空に輝いている太陽に面はゆいような気がしたが、私は山の神々に捧げられた生贄なのだと自分で思い、のどをぐっとのばして、顔を仰向けて、後手に組んだ手を背中

をすべりあげて上へのぼし、肩に波打っている自分の髪を引っ張ってみた。

のどがひりひりする程後へ引かないと、髪を引くことが出来ない。のどを少しゆるめると後手にまわした腕が引張られて、腕のつけ根も、二の腕もメリメリとこわれてきそうない気がする。

私は誰かその仰向けにのびたの上へ、虫でものせてくれないかなと考えていた。

その頂上から北の方へ行くと、さんしよう魚がとれる沢があるといって、山道ですれ違った人夫が、朝とってきたというさんしよう魚をみせてくれたが、私は自分で自分をお仕置きするように棒の前に立ちながら、さんしよう魚のグロテスクな姿を浮かべていた。

そして、出来れば着ているものをはぎとって、裸身で山上の棒に縛りつけられ、輝かしい太陽を浴びながら、グロテスクな魚を体のあちこちへ、縄にはさんでくりつけられたいと思った。魚の冷たさが、肌にとんだ風に気味悪く感じるかと、目をつぶって味わってみたい。

こういう時には鞭や責め道具はいらない。その辺に咲いているみやましくなげのバラのような花や、白いこばいけいそう、黄色いおしべが美しいちんぐるまなどの花々を、縛られた体中に飾ってほしい。花がしおれないように、大池から水をくんできて、裸身へ

したたらせてくれてもいい。

そして、太陽が沈んで、月が昇るまで、私は身動き出来ない苦痛を、花の香りにむせびながら、耐えていよう。

そんな明るい美しいマゾヒズムを夢みながら、最近どんな山でも登山者でこったがえしているのを惜しく思うのである。

編集部 短 信

▽毎号欠かさず登場の楨村奏氏、異色ある原稿は数篇、手許まで載っているが、今月号と来月号とは、菅良太氏「猩紅匪」と選手交替、楨村氏には夏休みをして戴こうと、編集部の意見一致。ファン並に楨村氏、乞御諒承。

▽紙数の都合で、しばらく休載願っていた原忠正氏の「マゾヒズム芸術時評」、本号より再登場はよいが、馬場好夫氏の「マゾヒズム百景」長らくの間送稿なく「御病気では？」と担当者心配顔。

▽御無理をお願いした、沼正三氏の「ヤブ」担当者。氏よりの送稿に張切ったが、「中絶お詫びのご挨拶」（別掲）にガッカリ。

最近号 雑感

近藤

一

悦特第二集は誠に楽しい臨時増刊号でした。しかも第一の特色であるグラビヤ・フォトが、絹川文代さんにポイントを置いているということは嬉しい極みです。圧巻は「美囚第十四号」と「荒縄と美貌」の諸点だと私は信じます。巻頭の「逢瀬のポーズ」十二葉は、絹川さんのレパートリーを更に広げた作品で黄八丈について浴衣の美しさを示してくれたものでした。襟足の清潔さと肩の辺りの量感のある柔らかみが、近代的な和装の美を表現しています。彼女は決して撫で肩ではありません。かえって強度の怒り肩だと思えますが、一頃に較べ顔の輪廓や全体の感じが、ずっと丸味を帯び、正しく女盛りを誇示しているという処です。次の「美囚第十四号」の二十葉は完全に私を魅了してくれました。彼女の比較的長い髪が丁度、昔の女性の髪を入牢のため切り取ったら、こうもあろうかと思わせる程度なので実感も一入なのです。鎖のついた鉄輪をつけられた足首が、また抜群の脚線美ですし、奔放なポーズや虐げられた姿態が、

美貌なモデルだけに、ドキリとするほど惨たらしい感じでした。牢内のリンチを思わせ、ヒロインの悩乱を視て、ストーリーが湧いてきそうです。「綾なす白縄」は恰もファッション・ショウの如く、「乱れ咲く哀花」の三葉はエキゾティックです。モザイクの床、シックな家具調度、彼女の情熱的な被縛ポーズが、特異なスリップと、妖しい女体のくねりて浮き立っています。そして「荒縄と美貌」です。彼女の美貌はK・Kモデル中に屈指のものであることは大方の認めておられる処と思いますが、それにしても、これほどに素敵な彼女の作品も珍しいでしょう。あの白い柔肌を荒縄でギリギリ締め上げられて喘いでいるのです。胸に二巻きした厳しい高手小手の縛しめで、柔らかみを増した肢体が全くくびれてしまふまで荒縄が喰込んでいます。腿と足首までをギュウギュウ縛り合わされた痛々しさ。その上、喉を三巻した荒縄で首を手摺り(の)に縛りつけられ、充血しきったような苦しそうな顔。或は竹でこじられ、或は足で踏み躪

られ、猿轡を噛まれた上に無残に磔けられ、縄目に棒を押し込んで捻じ上げられ、十二葉に亘って彼女の苦悶は息も絶えだえの有様です。私は満足ですが絹川さんは、さぞ大変だったろうと、お気の毒に存じます。然し今後とも、この調子を持続して下さるよう、お願いしておきます。最後が「艶肌の拘束」ですが、流石に絹川さんのフォトは洋装となると、明るい雰囲気と誌面に撒き散らして嬉しい限りです。唯、彼女は殊に上体が逞しく脚線がすらっとしているので、相対的にヒップのヴオリュームが乏しく見えますから、この点は着衣で工夫しなければいけないと思います。特に右下の一葉は佳品だと思います。

絹川さんの諸作品に競う他のモデル諸嬢の艶姿もまた素敵でした。「しずかなる受縄」の花坂嬢は、おっとりした上品な和装で従順を表わし、「はかなき悶え」の田中嬢は、ピチピチ躍動する反抗を示しています。「羞姿晒陽」の愛川嬢は、大自然に見劣りのしない強烈な緊縛を受けて臆する色もありません。浜本、三木両嬢の「悦びの一刻」のピッタリ呼吸の合った美しさは、既に定評のある処です。殊に縛られ役の、清潔そのものの伸びやかな肢体は、エレガントな肌着とマッチして惚れくする程です。「柔肌の喘ぎ」の平野笑子嬢の顔が見えないのは残念ですが、ピチピチした裸身は今後、大いに活躍するでしよ

う。「未知の驚き」の岩井知子嬢は瞳の円らかな処、瘦せている処など、ファッション界の松田和子さんによく似ています。こういうモデルには、それなりに活用すべきテーマがある筈です。大塚嬢の「悦虐狂奏曲」九葉は、全体のヴォリュームやヒップの張りは第一です。両手首での吊りは変った狙いですが、彼女の場合はウエストを括り上げないと失敗ではありませんか。「造形美術」の花坂嬢は、女体の哀れさの極致でしょうし、「ロープ・ブラジャー」の愛川嬢は、こういうフォトでは流石に活き活きとして得難いヴォリュームを誇っています。

目次のカットと四十一頁の扉のカットにもそれぞれ楽しいストーリーが出来そうです。四馬氏の画集も色々変ったアイディアを見せて好調のようですが、私は「喰込む縄」が一番よかったです。どこか絹川嬢に似た女体に好感が持てるせいかも知れません。読物も揃って好適でした。キワドイ箇所は適当にアレンジされており、旧号で好評を窺ったものばかり。古川裕子さんの「凌辱の幻想と期待」のような大反響を呼んだものから、泉辰之助氏「妓の影」、若林啓子さんの「被虐の愛情」などのように、しみじみと情感の漂うもの。その他、十一篇の文章が揃って忘れ難いもので、装いも新たに登場したことは本当に嬉しいことだと思います。

又、七月号で特に欲ばしきことは、北原純子さんが誌上にその麗筆を再び現わして下さったことで、以前とは大いに異なった逞しく、烈しい力を籠めて美女の斗争を描いておられることに心から感歎しております。一層の御活躍が期待されます。シリーズになった松井頼子さんの「自分をハダカにする」と、藤山秀緒さんの「或る女のカルテ」の二篇が実に鮮烈な印象を残しています。松井さんの冷厳な自己観察に晒された悦虐のポーズは、私の胸深く浸みとおって切ない痛みを、もたらすのです。藤山さんの倒錯の呻きには、血なまぐさい女の匂いがムンムンしていて私の心を捉えて離さないのです。共に忘れ得ぬ記事であるのは、やはり真実の持つ強さ故でしょうか。今後共、健筆を振って欲しいものです。久留木氏の創作「謎の緊縛フォト」は続篇待ちという処。蒼野祈氏「湖畔の裸女」の雰囲気都会的なものとすれば、三条卓史氏「満月の島」は純粹に漁村の磯の香りをたたえています。蒼野氏、独得のヒップ責めが色を薄めた感じで、やや物足りませんでした。牧高志氏の緊縛映画スナップシリーズ、海野築朗氏のレーゼ・シナリオ、そして藤木仙治氏の「乳房に火をつけるな」といったKK特有の連載記事は今月も愉しく読ませて頂きました。グラヴィアでは特写フォトの「雁字搦目」が稍暗い感じですが、七葉とも佳作です。大

塚嬢の「赤と白」も静かな情感が漂っていますが、どうも彼女の作品がマンネリ傾向なのは企画が悪いのか、それとも彼女の演技力の限界なのでしょう。絹川嬢の「ハイヒール」はいけません。畳にハイヒールが、そぐわないばかりでなく、モデルの体の線が妙に崩れた感じに見えます。私の好きな絹川嬢のイメージが破壊されてしまいました。読者通信一七二頁で南方純氏から、お褒めの言葉を頂いたようですが、お恥ずかしい限りです。唯、私は自らの人生を愉しむため、私自身の問題としてKKを心から愛し、盛り立てて行きたいとのみ念じております。私は救いのないものを書こうとは思いませんでした。救いとはヒロインの生死に拘らず、また残酷な責め方か否かではなく、心の安らぎの有無だと思います。このことはKKの愛読者の方々には充分理解して頂けると幸いです。

最後にお礼を一言申し上げたいと思います。私の文に都合、二十頁余りもの誌面を頂いて読者の方々に接し得ましたことを心からお礼申し上げます。これからも私の信念に従って精進を続けるつもりですが、マンネリズムを避けるため常に新鮮な御意見を伺いたく女性の読者の皆様からアイディアなど開陳して頂ければと希望しております。

アブチック・ストーリー

「アパートの住人達」

平

源次

近所の人達は、新しく出来たその豪華なアパートを、羨望とねたみの交った眼でみつめていた。家賃一万八千円。ため息の出るのも無理はない。一体どんな人間が中に住み、そしてどんな生活が中で営まれているのだろうか。

夕方四時半、アパートの住人が向うから帰ってくる。好奇心をはせる人々に代って、ひとつ中をのぞくことにしよう。

まっ先に帰って来たのは若い女性、といっても二十七、八かな。いや派手に化粧してるところをみると、実際はもっと年を食ってるのかもしれない。ともかく背は、すんなりと高

いし、化粧が少しばかり、けばけばしいのを除くと、全く申分ない。そうそう彼女の亭主は病気で寝てるとか言ったつけない。

大柄な彼女に続いて、これは又こじんまりとしたタイプの奥さんだ。五尺そこそこでタイピストとか言う話だったが、彼女の亭主は確か同じ会社の重役だとか。すると、おめかけさんなのかな。そんなことでどうでもいいが、あんな可愛い奥さんを持つてる亭主は何と幸福な奴なんだろう。

ぼっちやりしたその若奥さんに続いて帰って来た人。これは初々しい娘さんだ。二十ちよっとてとこかな。少しひ弱な感じの女性だ

が何と言っても美人型だ。中肉中背、ワンピースの良く似合う清楚な女性だ。身だしなみがよろしい。やはり金持のせいだろう。

今度のは、いやに年増な女だ。堂々とした押し出しは栄養満点といった体格だ。こんな女性を奥さんに持ったら、亭主たるもの圧倒されてしまうんじゃないかな。年は三十五、六だろうか。

最後は、これは可愛らしいお嬢さんだ。中学三年かな。それとも高校に入ってるのかもしれない。小柄な愛らしいリボンをつけてる。未だ女とは言えそうもないね。オヤ、何か包みを大切そうにかかえているぞ。こわさない



ように持つてゐるようだが、近所の人の顔を見ると恥かしそうな顔をするのは、どうしてだろう。お使いの帰りらしいなあ。

第一景

アパートの一室。隅のベッドには三十五、六の男が横になって夕刊を読んでいる。病身のせいかな年よりふけてみえる。

早苗「今帰ったわ。お食事済みまして？」

一夫「いや、まだなんだ。御苦労さん。一緒に食べようと思つてね」

早苗「じゃ、これから私すぐに用意しますわね」

早苗という二十七、八の派手な洋装の女性は、すばやく着換えると台所の方へ行こうとする。一夫、呼びとめる。

一夫「おい。食事はまだいいから、それよりあっちの

方の用意してくれよ」

早苗「まあ。体に毒ですわ」

早苗、あきれた様にふり返る。

早苗「仕様のない人ね」

一夫は起きあがって寝巻を脱ぐ。

早苗「誰かにみられたら大変ですものね。ね、そしたら私が悪者にされちゃいますもの」

早苗はカーテンを引く。

早苗「今夜は何号のを使います？」

一夫「ウ、ウン。三号のでもうつかないかな。少し痛いけど」

言いながら一夫、眼を細める。

早苗、次の間から肉の厚い巾の広い鞭を手に入ってくる。微笑している。一夫の体は一瞬、ぶるるとけいれんする。

早苗「知らないわよ。体がメチャクチャになったって」

一夫「大丈夫だ。早くしろよ」

早苗「じゃ、始めますわ。痛くても我慢してね。うめき声なんか出されると、私が困りますからね」

一夫「足の方は、しっかり縛っておいてくれよ」

早苗「はい、はい」

早苗、側にあつたヒモで一夫の両足首をしっかりゆわえる。そして余ったヒモでベッドの片足に固定さす。

早苗「手でちゃんとベッドの隅を押えてて下

さいね。足の方は大丈夫ですから」

一寸の間、一夫は顔を伏せる。

早苗「あなた、始めますわよ」

ピシッ！

空気を裂く様な音と共に、鞭が細身の一夫の背中に振り下される。ズキンと骨の深奥にまでこたえる苦痛が一夫の上半身をのけぞらせる。が、次の瞬間には元の姿勢にかえって第二の鞭を待っている。早苗は痛々しげに眼をそらす。

一夫「ウウウ、、、」

早苗、構わず第二の鞭を、鮮かな鞭跡の少し下のあたりを狙って振り下す。

ピシッ！

先刻の時よりも勢いよく一夫の体が曲る。彼の背中には広い鞭のあとが二条、赤味を帯びて走っている。既に彼の額からは油汗がにじんでいる。が、その表情は何か夢みる風のうっとりしたものである。

早苗「今夜はこの位になさって、ね」

一夫（うめきながら）「いいからはやく」

早苗、又鞭を振りあげて打ちすすめる。

ピシッ！

一夫、今度は体を横にねじる様にして耐えている。背中から流れでる汗が、赤くはれあがった鞭跡を激しく刺激する。苦痛でゆがむ一夫の顔。しかし、その表情は依然、夢みるが如き境地に浸っている。

早苗「もうこれでいいでしょう。あなた」

一夫「バ、バカ。早くしろ」

早苗「だって……………」

早苗、痛々しい迄にむくれ出ている一夫の背中と、無気味な程の体のけいれんをみて躊躇する。

一夫「嫌なら、お前を鞭で……、ひ……ひっぱたいてやるぞ」

早苗、その言葉に驚いて鞭を握りしめる。太い鞭が又、空を切る。

ピシッ！

一夫「ウ、、、、うゝゝゝ」

結びつけられている両足首が、ひきつる様に伸ばされる。ベッドの足に固定されている細引が、ピーンと張りつめて今にも切れそうな程である。一夫は激しく肩で大きく呼吸している。早苗、続けて鞭を取る時、ドアをノックする音。早苗、ぴくっと体を伸ばすと、早苗「あなた、誰か来たわ。一寸待って下さいね」

急いで一夫に毛布をかけ、鞭をベッドの下に投げすてる。そしてハンカチで、せわしげに額の汗を拭う。

早苗、内から静かにドアの鍵をはずし、開ける。

早苗「まあ、奥様でしたか。誰かと思いましたが。で、何か？」

さっきの小柄な可愛い奥さんである。

房江「今時分あがって、本当に申し訳ないんですけど、あの御線香ございましたら……」

早苗「線香？」

房江、顔をあからめてうつむく。

房江「ええ、夫の父の三周忌でしたの。あたし、うっかりしてまして」

早苗「ああそうですの。確かありましたわ。一寸待って下さいね」

早苗、中へ姿を消す。房江、あたりをきよろきよろしながら落着かぬ様子。

早苗、出てくる。

早苗「これ位でよろしいかしら」

房江「ええ結構ですわ。どうも済みません」

早苗「いいえ、構いませんとも。どうぞ何時でも。ホ、、、、、」

房江「ホホ、、、、、。お邪魔しました」

二人、軽く挨拶をかわして別れる。

第二景

房江、室内に入ると、そっと鍵をかけ、夫の様子をうかがう。ここも二人暮らし。

三造「借りてきたかい」

夫の声に房江、おびえながら

房江「ハ、ハイ」

三造「何をぐずぐずしてるんだ。帰って来たら、さっさと中へ入りなさい」

房江、部屋の中へ入ってゆく。

三造「さ、それをこっちに出して」

三造の横にはモグサが置いてある。これは一体どうした訳だろう。

三造「何と言って借りて来たんだ。まさかお仕置されるんですから線香貸してくれと言ったんじやないだろう」

中年男の三造、にやにや笑って房江の顔をのぞく。

房江「そんなこと言えるわけありませんわ。あなたのお父様の三周忌にしましたの。それでも恥かしかったわ……」

うつむく房江の恥らいと怖れをみて、三造の眼が異様に光る。

三造「ともかく俺に内緒で、どここの馬の骨とも知れん奴と変な所へ行ったりして、絶対に許さんぞ」

房江「変な所だなんて、ただコーヒー店へ行っただけなんです。本当に……」

三造「そんなことどうでもいい。お前が俺に黙って出て行くのがいかんと言うんだぞ。お前が不自由なく暮していけるのは誰のおかげだと思う。ええ」

房江「……………」

三造「わかったら、早く観念して用意をなさい。早く」

房江の顔、まっ赤にはって下をむく。

三造、今度は不気味な程やさしく、

三造「ね、早くしなさい」

ハッと我にかえって房江は、あわてて帯を解きはじめる。夫のこのやさしい声の背後の恐ろしさを知っているからだ。

帯が解かれ、肩脱ぎに衿を抜げる。薄い肌着がみえてくる。房江の動作の速度は落ち、その毎に三造の方を哀願する様にみつめる。三造は厳しく睨みつけている。

三造「じや、そろそろ始めるかな。そこに横になって」

房江、言われた通りに、敷布トンの上に腹ばいになる。三造、うむを言わず、両手両足を結ぶ。

自由を失った房江を無雑作にひっくり返すと、房江はもう自分の力では起き上れない。

三造「苦しくても声は出すなよ」

モグサをとると、残酷の笑いを浮べて房江の胸に据える。

三造「さあ、火をつけるぜ。動いたりしてモグサを落したら、倍にするんだから、おとなしくしてるんだぞ」

房江、コックリうなずく。これから起る苦しさに耐えようと、ギョツと歯をくいしばる。三造の手はかすかにふるえながら、その一つに点火する。

しばらくの間、無気味な沈黙。

と、房江かすかに体を横にくねらす。

房江「ムッ、ムッ………」

三造「始めたばかりなのになんだい、苦しうな顔して。お仕置なんだから少しは苦しいよ」

三造、言い聞かせる様に房江をにらむ。房江、又コックリする。

三造「今度はさっきよりちよっと熱いよ」
歯を食いしばる房江。

間、

房江「あっ、つつ……」

両足は三造に押えられて、上半身をのぞけらす。三造の力で床に押えつけられる。

三造「我慢しなさい。これ位」

房江「だって……ウ、ハ、ハ、ハ」

三造「未だこれからだぜ、本当に君が泣くのは」

三造、モグサを大きく丸めて示す。房江の眼に絶望のあきらめと、苦痛を予測する悲しみが浮ぶ。

房江「そ、それは……一寸待って」

三造「待ったって同じだよ。お仕置なんだからね」

三造、火をつける。胸のモグサから煙を出しながら、火は次第にモグサを黒い灰に変えてゆく。三造、ごくり、とつばをのむ。

三造「もうすぐあつくなるぞ。歯をかみしめて我慢するんだ」

三造、房江の体を押えつける。

房江「あっ、あっ、あちち……」

房江、顔をゆがめながら、それでも声だけはたてまいと、必死の努力をしている。

ややあって、房江のけいれん、ようやく治って、二人眼が合う。

三造「よし、じや今度が最後だ。おとなしくしてるんだよ。」

房江「あっ、もうかんにんして……あなた」

三造の手にあった大きなモグサは、房江の哀願を無視して、また胸の上のにつけられた。

房江「あなた、かんにんして下さい。もう私とても……」

三造「おとなしくするんだよ。ね、お前がどんなに泣いてもわめいても、やることはちやっとやるんだからね」

三造の言葉に房江、がっくりうなだれる。

眼には既に大粒の涙がたまって、三造に最後の哀願をしかける。三造、満足気にそれを見るが、勿論黙殺。ついと手をのびし点火。

又、沈黙。三造、眼をギラギラさせて膝をのりだす。房江、眼をつぶって耐えようとする。

三造「もうすぐだ。今度のは本当にあついぞ。

いいかい房江、その代りこのお仕置をおとなしく済ませたら、もう終りだからね」

房江（眼をつぶったまま）「ハイ」

が、返事を終えないうちに、房江の上半身が殆んど垂直にのけぞる。落ちそうになるモグサ。

房江「ヒイ、ヒイ、ヒイ、」

三造（冷徹に）「もういっぺんやりなおしてもらいたいのか。何ならもう一つすえてもいい」

房江「いやいや、いやよ。私、が、がまんします……あつ、あつ、ウ、ウ、」

体を右に、左に曲げる房江はそれでもモグサだけは落すまいと死物狂い。

房江「あついわ、あついわ」
房江、もう泣いている。べつとりかいた汗を手拭で拭ってやる三造。

房江「ウウウ……」
もえ切る最後の瞬時、房江は自分に言い聞かす様に首をまげて左右に振る。ハアハア息を切らしている房江。

三造「あつかったかい」
房江「はい」
三造「もう二度と変な所へ行ったりしちやだめだよ」

房江「ハイ」
この時、ドアをたたたく音。
三造「ハイハイ。（小声で）何だろ今頃」



第三景

三造、房江を急いで解き放し、眼で、お前、出てみる、と命令する。房江、あわてて起き上り、着物に袖を通す。服装を整えてからも、胸を軽く押えては、痛そうな顔。眼を何度もこすりこすりして出てゆく。

房江「どなた、あら年子さん。何か？」

外にいたのは三番目に帰ってきた二十位のお嬢さん。弱々しい感じの少女。澄んだ眼が美しい。

年子「済みません。急にこんなことして。あの、お宅に細引ないでしょうか。長いのがいいんですけど」

房江「あると思いますけど、何にお使いになるの？」

年子「トランク送るんですけど、細引の長さわからないんです。どのぐらい買ったらいいか。明日、間違いないお返ししますから」

房江「ああそう。一寸待っててね」

すぐに引返して来た房江。手には丈夫な細引を数米、持っている。

年子「済みません本当に。じゃ必ず明日お返しします」

房江「あら、何時でもいいのよ。じゃ」
年子去る。

年子の入っていった部屋の中には、母親らしい年とった女性と、その夫。厳しい眼で年子をみつめる。年子、立ちすくんでいる。

登「よし子、用意させなさい」

年子「お父さん、ごめんなさい。もう決して二度としませんから」

よし子「駄目ですよ。お前は私達を馬鹿にしてるんだから。今夜は思いきり痛い目にあわせなさい。さ、着物を脱ぐんですよ」

年子「だって、お母さん」

澄「口答えするな」

よし子「本当に生意気だよ、この娘は」

年子、うつ伏せに泣きます。

登「よし子、何をぐずぐずしてるんだ」

よし子「嫌なら、私が脱がしてあげるよ」

よし子、無残にも年子の着物を乱雑に剥いでゆく。年子、わずかに抵抗するが、あきらめてまかせろ。年子は肌着だけにされて座敷の中央に投げ出される。それをみつめる四つの眼。天井からは螢光燈の光りが、まぶしい迄に輝いている。肩をひくひくしながら、泣いている年子。

登「これだけの長さがあれば、充分に縛られるね」

よし子「さるぐつわもはめときましようか」

登「うん」

よし子、ハンカチと手拭を持ってくる。

よし子「口を開けてごらん」

年子、観念して口を開く。よし子、そこにハンカチをぎゅうぎゅう押し込む。年子、頭を左右に振るが、登、後からその頭をしっかりと押えつける。よし子、更に手拭で口をゆわえつけ、登の方を見てにっこりする。年子、思わず身をふるわす。

登、ひもの先端を、よし子に持たせ、脚から腹部をぐるぐるまいて、ふくよかな胸の上をキリリと締める。年子、眼を閉じたまま、かすかにうめく。

澄「よし子、引いてみる」

よし子、ぐいと引く。

年子「ウ、、、、、」

登とよし子、顔を見合わせて残酷な笑を浮かべる。

年子「ウ、、、、、」

登「よし子、その紐を柱に結びつけときなさい」

よし子、言われた通りにする。年子恐怖の眼でみながら、かすかに体をねじる。

登「この紐を引っぱるとけ」

よし子、言われた通りに静かに、じわじわ引っぱる。年子の体はそれにあわせて小刻みに、けいれんする。苦悶にゆがむ年子の表情。

登、何処からか一本の六尺棒を持ってくる。その六尺棒を年子の体の上に乗つける。

登「よし子、少しゆるめる」

よし子、ゆるめる。登、棒の両端を握りぐ

「ム、ム、ム、ム、ム」

澄「さあ、最後に特別痛いヤツを一つ」

年子「キイイ……」

二人、どきつと顔を見合わせる。よし子、

している年子。

「ありませんか、何か……」

ありませんでしたの」

よし子「いいえ、別にホ、ホ、ホ、」

しようかしら」

数江「ええ、一寸……」

「どうしてそんなものを？」

私、嫌なんですけど」

を消して。一寸待ってて下さいね」

二本持って出てくる。

よし子「これでよろしいの？ 奥さん」

「しませんから」

んなことならなくても」

おそく、

「本邦」

数江「おやすみなさい」

第四景

ない戸外から急に入ると何もみえないのか、

闇から低い声。

「数江、さっさと中へ入れ」

いらいらして待っている。

数江「借りて来ましたわ」

彼女もそう言ってローソクを夫に渡す。

い。はやく」

数江「はい」

ちちちち……。

「……って言いましたのよ。フ、フ、フ……」

んだし」

「いんですもの」

いさ。何と言ってもラッキーだね」

明夫、ローソクに点火して数江の方へにじ

り寄る。はっ、と本能的に身をひく数江。だが同時に、うっとりしなから、夫の責めを期待しているその眼。明夫「ぼつぼつ始めるとするか。おとなしくしてろよ」

数江、うなずく。

明夫、仰臥した数江の胸から腹部にかけてローソクのしずくをぼとりと落す。数江、眼を細める。何時の間にか豆電燈さえ消えて、部屋の中は大きくゆれて数江の白いハダに迫るローソクの灯だけ。高い所から、しずくだけをぼつりぼつり垂していた明夫は、ローソクを次第に下にさげ始めた。

明夫「だんだん熱くなるよ」

数江「あんまり熱くしちゃいやよ」

明夫「そんなこと言うと、なおさら熱くしてやりたくなる」

明夫、ローソクの火を肌すれすれ迄おろす。ローソクのしずくと火が数江の肌をじーんと刺激する。数江、かすかに体を動かす。火は更に胸の方へ。

数江「あち、あち、ち……あつい」
明夫「これから本当にあつくなるんだぜ」

流石に我慢しかねて数江、手で明



夫のローソク持つ手を押え、押し返そうとする。

と、明夫は激しく平手打。

数江「あっ」

闇の中で、明夫自身も驚く程の激しい音をたてた平手打。数江の左頬はそれとわかる様に真赤。

明夫「おとなしくしてないと、もう一発お見舞いするぜ」

明夫、右手の甲で、数江の右頬を軽くびしやびしややりながら残酷に笑う。数江、諦めて静かになる。

豊満な白い胸にローソクを又近づける。闇の中で数江の苦しげな息づかい。明夫の額には汗。眼はギラギラ光る。

明夫「動くな。じっとしとれ」

数江「だって、あんまり、あ、あ……」

明夫、数江の体をしっかり押えつける。

数江「あちち……」

今迄にない激しい叫び声。びっくりして明夫、手をひくが、それと同時に怒りが爆発してしたたかの平手打、一つ、二つ、三つとつづく。

数江「かんにんして」

明夫「よそに聞えたらどうするつも

りだ。馬鹿な奴だ」

又、平手打。数江、泣き始める。

明夫「さるぐつわをはめてやるか」

数江「いやいや。そんなことされたら、あなた、どんなことするかわかんないわ」

明夫「じゃ、さっきみたいない大きな声だすんじゃないよ。わかったね」

数江、心配そうにうなづく。

二人共、汗はびっしより。明夫、数江の顔色をのぞきながら、ローソクを近づけたり、遠ざけたり、その度に数江の顔は様々の変化を示す。

明夫「最後だから少し熱くても我慢するんだぜ」

数江、明夫を不安気にみつめて、おそろおそろ、うなづく。明夫は数江の胸すれすれに火を近づけ、熱い溶蠟をたらす。身をよじって耐えようとする数江。

数江「もうよして、かんにんして……」

明夫「ほんのあっという間だよ。もう一ぺん我慢してろよ」

明夫は、又もやローソクの火を近づける。

数江「アツツツ……。かんにんしてよ」

と、この時かすかにドアをノックする音。

明夫、いまいましように中断する。急いで

服装を正す数江。

又ノックする音。

数江「ハイ、ただいま」

しばらくして数江、戸を開ける。

数江「まあ、町子ちゃんね。どうしたの一体」

町子「あの、おばさんと共に、この間の粉石けんあります？」

町子、恥かし気にうつむく。

数江「ええ、まだ残ってるわよ。薬用石けんのことでしよう」

町子「ええ」

数江「一寸待っててね。今、私、持って来てあげるわ」

数江、中へ入ってゴソゴソやっている。その間、しばらく間。

数江「この位でいいの」

数江、そう言いながらニヤニヤ笑って、町子を見ている。

町子「ええ、今度買った時、お返しします。

おばさん、どうもありがとう」

数江「そんなこと、どうでもいいわよ。おやすみなさい」

町子「おやすみなさい」

数江、部屋の中へ消える。

第五景

町子、部屋へ入ると後手でドアを閉めて、鍵をかける。中には母親らしい四十二、三の女と町子の姉らしい人物が何やらゴソゴソ動

かしている。部屋の中央にはフトンが数かれ、真白いシーツが眼に入る。

十四子「町子、お借りしてきたのね」

町子、うなづく。

十四子「何をぐずぐずしてるの。こっちに早く入りなさい。波江、早く用意して」

波江「はい。町子ちゃん、どれ」

波江、町子から薬用石けんを受けとると、用意してあった、ぬるま湯にとかす。側にはイルリガートルと脱脂綿。町子、もじもじして尻をみする。

十四子「馬鹿だね、この子は。イルリガートルだけ買ってきても、肝心のお薬を買ってこなきやしょうがないじゃないの」

波江「お母さん、出来たわ。少し多すぎるかしらね」

十四子「そんなことないでしょ。さあ、町子用意なさい」

町子、泣べそをかきながら、それでも横になる。

十四子「泣くもんじゃありません。子供じやあるまいし」

町子「だって……」

波江と十四子、そんな町子に構わず浣腸の用意をすすめる。

十四子「口をあけて、おなかに力を入れちゃ駄目よ」

町子、言われた通りにする。波江、町子の

脚を押えている。

間。

十四子「動いちや駄目よ。少しぐらい気持が悪くても我慢してなさい」

波江「本当に浣腸って、される方はいやなものだから……」

十四子「だって、浣腸かけなきゃ、三日もお通じがないんだもの、この子ったら」

町子「ウウン、まだなの」

十四子「もうすこしですよ」

だが薬液は半分ぐらい残っている間。

十四子「さあ、済んだよ。よく我慢したわね。この間まではよく泣いたけど」

町子、恥かしそうに顔をそらす。

十四子「十分間位こらえていなさい。薬がよくしみ込む様に」

波江、町子の上に毛布をかけてやる。

町子「おなかやすこし痛むわ」

十四子「えらかったわね。腸を刺激するから少し位痛むけど、何んともないのよ。」

波江、静かに町子の汗を拭いてやる。その時、ドアを誰かたたく。町子、まっ赤になって二人をみる。

町子「はやく、道具しまつて」

二人笑う。

十四子「何です町子、何も恥かしがることないじゃないの。波江、出てごらんなさい」

波江、出てゆく。

波江の声だけが中に聞えてくる。

波江「あら早苗さん。えっ、食塩ですって。ありますわ。どうぞどうぞ、御遠慮なく、いくらでも。ハイ、じゃ、おやすみなさい」

波江、戸を閉め入ってくる。

波江「変ね、今頃何に使うのかしら」

豪華なこのアパートから、今日も朝早く大勢の人が出てくる。近所の人達は今朝も羨望

の眼でみている。派手な化粧の若い女性。こ

じんまりとした。二十ちよっとのお嬢さんもいるし、栄養満点の年増女。それに可愛い嬢さんもいるぞ。皆、上品で美しい。あの人達の生活は一体どんなものだろう。

近所の人達は、いつもそう言いあって、ため息をついているのだ。

きつと、きつと素晴らしいんだろうなあ。お上品な住人たち、全く羨ましいと皆、口々にそう言っているのだが……。(完)

マニアの独り言

S・S 生

私の隣家の娘さんはバレリーナーである。尤も、まだ大舞台に立ったことはなく、もっぱらキヤバレーのシヨウ専門だそうだがバレリーナーには違いない。この娘さん、まだ十九だが、職業柄仲々洗練された美しさがある。とても年にはみえないアクトでもあるが、気立は優しい。この娘さん、元来は女優志望の由なので、心安さだてらにからかい半分の気持で、家内との雑談中に割りこんでみた。

「女優になれば嫌な事もせにやならんよ」「そうネ」

「役によって縛られたり、叩かれたり……」「けどお芝居だもの。有名な女優さんは、殆んど括られてるモン、そんなことは平気だけど、ただ……」

「ただ？」

「ラブシーンで抱き合ったり、キッスシーンなんかはいやだワ。皆の見てる前で恥しくって……。」

この娘さん、職業にも、年代にも似合ぬこと?をいつて私をおどろかした。

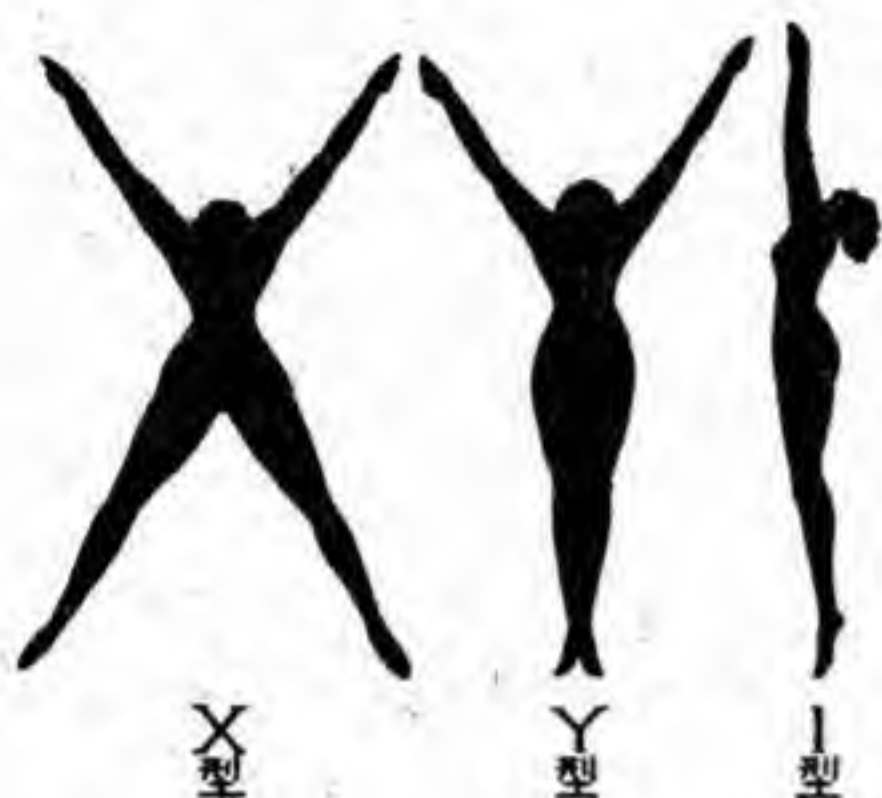
抱擁やキッスは羞しいが、縛られた姿をみられたり、撮られたりするのには平気だ、という十九の娘さんの心理が本当のことと、それを妙に勘ぐる私の方がどうにかしているんだ。と、後で一人苦笑したものだ。

緊縛のアイデア

『吊り手しばり』

について

林 千恵三



毎号、楽しい写真を豊富に見せていただいて喜んでおります。さて、口絵の写真について、私の希望を是非一度、実現させて下さいませんか。それは『吊り手しばり』の特集を出していただくことです。

日本では縛るというと、大抵「後手」ですが、西洋ではギリシャ神話のヘラ女神をはじめとして「吊し手」が多い。日本でも現代物の映画の拷問場面には「吊し手」がよく出ますが、「吊し手」は縄のかかっている所が、手首と足首位で、全く自由を奪われ、あらゆる攻撃を防ぎようもない、あわれさは、被征服者として、女の

姿の最上の美しさであると思います。

殊に、両手を頭上に高々と吊り上げられた場合の、ひきつった様な乳房、皮膚もさけんばかりに、のびきった腋の下の魅惑は格別です。背面から見ても、肩のくびれ、腰の線、括られた足首、爪先立って見える足の裏、それに背中に答のあとを口紅を使って二、三本引いてあればたまらない魅力を感じます。どうぞお願いですから最近号に四頁位に亘って「吊し手」特集を出して、いろいろな型をグラビアで見せて下さい。

次に縛り方などについての、いろいろな希望を述べてみます。

(一) 先ず「吊し手」といっても――。

I型、Y型、X型、と、その変型があるわけですが、I型ならI型だけの特集でも結構です。

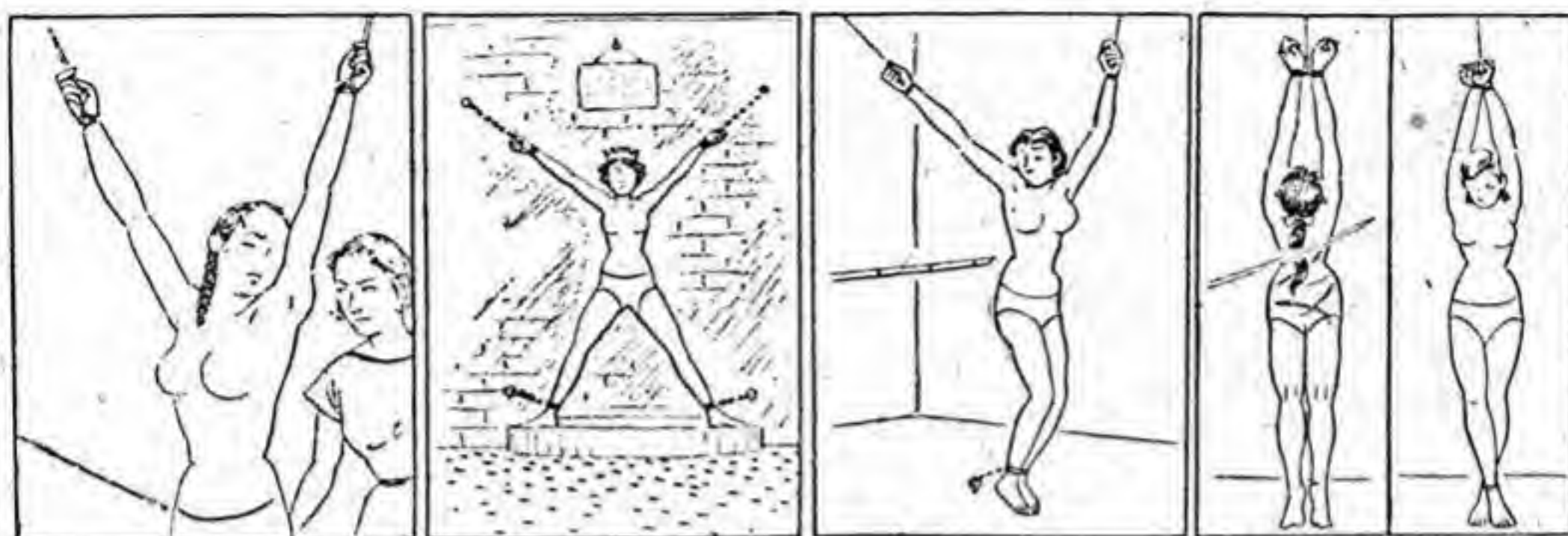
(二) 縛り方、これが一番大切な点です。

○縄は細引のような、いかにもよく締めまりそうなもので、使い古した様に色の黒ずんだのが白い肌との対比がはっきりしていてよい。

○革ベルトならやや細めのものが望ましい。

○鎖を使うなら鉄輪を手首にはめるのが面白い。これは写真を撮るためだけに厚紙で作って黒く着色しても、又革製のを用いても、かなり感じは出るでしょう。

○縛られるときの手首は、掌を向い合せでも甲の方を重ね合せでもよいが、縄は二巻か三巻、両手首を別別にきっちり括っていることが肝要



(第四頁)

(第三頁)

(第二頁)

(第一頁)

である。私の実験では、両手首を揃えてS字型にゆるく三巻しぼり、そのあとで、S字型の交叉部をたてに二巻しぼる。こうすると手首が縄の中でまわされる位ゆるくてもずるけることなく、モデルの手首から先がしびれてしまうような危険もなく、長時間ポーズをつけたりするのに便利です。

○足首もしぼった方がよい。縄尻を床に固定するのもよく、鉄輪をはめて鎖でつなぐのもよい。

○吊す縄は一本でも二本でもよいが、ある程度画面に長く見える方が好ましい。

○手で吊り縄を握ってもよし、縄が甲の方にまわって握れないのもよい。

○とにかく、どう暴れても逃れられないというきびしい感じの縛り方でないと駄目。例えば手首を二本まとめ縛ったのや、縄が掌のあたりですれてしまったのなどは、いくら、ぐるぐると沢山巻いてあっても駄目です。

(三) モデルについて、

○身体全体均整のとれた、やや締った感じの大柄、いわゆるキングサイズ。

○娘型も当然としていいけれど、三十から四十にかけてのマダム型も是非ほしいところ。

○容貌は勿論美しいに越したことはない。私の好みからいえば、絹川文代、益田房子、花坂道子などのような細面を選びたい。

○髪型も右の三人のはよい。

○どのアングルから撮っても顔が七分以上見え

るように、顔の表情、観念、苦痛、陶醉そのいずれにしても表情が大切です。

○丸顔にパーマネントのモジャモジャ頭はいただけません。

○さるぐつわはない方がよい。若し強いてかけるなら、細いものを口にくわえさせる程度にしておくこと。口全部から鼻まで蔽ったものは顔の表情を味えなくなってしまう。

(四) 背景

○背景は、板敷の洋間か、出来れば物置小屋、倉庫、工場など、ドライな感じの所。又、森の中なので木の枝に吊るならば、人体を白く浮かび上らすためにバックに暗い茂みなんかを選ぶと効果的である。

○日本間は不可、畳にせよ、襖にせよ、壁にせよ、質感が弱々しくて人体の柔らかみを強調するのに不適当である。それに日本間では吊る場所が天井にないし、鴨居では高く吊られた感じが出ない。

○森の中でも、木の間を洩れる陽が、人体にまだらな斑を作ると折角の体の線を損うのでむしろ曇った日の方がよい。快晴の日は、とかく、硬調なコントラストの強い写真になってしまうから注意を要する。

(五) 服装

○前面はパンティだけ、背面は全裸がよい。

○パンティは出来るだけ幅の狭いもの、色は黒又は白。腰のところで結んでも結ばなくてもよ

いが、模様のある布は不可、乳房は必ず出すこと。

○海水着ならまだしも、日本服は体の線が出ないからいけません。

(六) 構成

口絵四頁分として構成してみました。

○第一頁は、正面と背面の二枚の写真を並列させます。正面の写真は顔を前にたおして、うつむいている。背面は思いきりのけぞって背中に鞭のあと、鞭を当てた瞬間をキャッチしたのも面白い。

○第二頁はY字型とする。

少し吊り縄をゆるくして、身体をくねらせ脇腹を狙って突き出した竹槍をのがれようとものがく姿勢。

○第三頁は『皇妃受刑』と題したX型。

革命によって民衆の前に晒されて受刑されようとする皇妃。顔は美智子さん型で、齢は三十から四十台。気品を失わない毅然とした態度ながら苦痛の表情。背景はレンガを積み重ねた壁、くさりで両手、両足を大の字にひろげて固定され、頭上の罪状の札には

「人民の名によって処刑、晒し三日、そのあと牛裂き」と書かれてある。

○第四頁はクローズ・アップ。

手首をしめる縄、ぴんと伸ばした手、緊張しきった腋の下、乳房などをはっきりと描写すること。答を持った責め手（これは中年の婦人を配する）。

このクローズ・アップは十分間位吊ったままでモデルに我慢して貰い。自然にあらわれる苦痛の表情をキャッチしてほしい。

(以上)

告白

ビーチボールの思い出

芳川 彰

昨年の九月号に発表された、佐田春雄氏の「ビーチボールの魅力」に初まり、同氏のビーチボールに就いての文章を拝読致しまして、同様にビーチボールを吾ながら愛

っている、自嘲を覚えつつも、秘かに長年愛玩しつづけて来た私は、大袈裟な云い方かも知れませんが、孤独の底から救われた、ような喜びで一杯です。それでこの飲

びの一端を表現するつもりで、愚文を綴ってみました。

x x x

私がビーチボールに執着を覚える様になったのは、別段これと云うハッキリした動機はありませんが、小学校五、六年生の頃と思います。当時、私共の小学校では既に男女共学で、夏の海辺に臨海教育に行った時に、女生

徒達が大きなビーチボールを持って行って投げ合っている中へ、吾々男生徒がいたずら半分に割込んで横取りしたのですが、その頃から私の心を捕えた様でした。

燦々と照る日光の下で、青い海原を背景にして、ピチピチした若鮎の如き少女の手から手へ投げ渡される五色の弾みは、確かに健康と若さを象徴する光景でしょう。

然し、そうした健康の象徴ともいえるビーチボールも、私が乏しい小遣いの中から買求めて楽しむ様になってからは、余り健康的な対象ではなくなっていました。

佐田氏や、羽村京子さんは空気ポンプの代用として御使用の様ですが、私はそうした利用法も知らず、唯、張り切ったボール

の弾力を楽しむだけでした。そして、夏毎に方々の海水浴場を訪ねて廻り、大きなビーチボールで遊ぶ乙女達の姿を見て胸をときめかすのが例となって居りましたが、当時の世相からその仲間入りをするとか、ガールフレンドを作って海に遊ぶなど云うことは、想像も出来ませんでした。

けれども、その頃はまだ幸いなことに、至る処で種々の大きさ、色とりどりのボールが山と積まれて売られておりましたし、浜辺でも、それこそ四方八方から飛んでくる程で、ビーチボールの流行期とも云えたでしょう。全盛時代だったといえはおかしいかも知れませんが、今、思い出すと私にとってその頃（昭和十年頃）は、全くそう云う感じで、大変懐しく思えます。と云うのは、その直後（昭和十二年八月）に支那事変の勃発があり例の物資統制令が敷かれて、重要軍需資材の筆頭としてイの一番にゴムが槍玉に上って統制となり、当然ビーチボール等の不急品はみるみる内に姿を消し以来二十年近くも店頭に見えなかったからで、私が如何に努力しても、大型は勿論、極く小さなゴムマリと雖も入手は不可能になりました。それからの私は手持ちの三、四箇のビーチボールを虎の子の様に大切に修理しながら、激しさを加える軍事教

練の合間を盗んでは楽しみを味って居りましたが、遂にその修理もきかぬ様になってしまいました。

大平洋戦争の始まる頃から、軍籍に投じた私は南海の島々を転戦中、南方の暑気になやまされ、寝苦しい夜等、同僚がダツチワイフの話をしていました、私はその話の最中に古い恋人を思い出すように、ビーチボールの弾力をマザマザと想起して、居てもたつていられない様な恋しさを感じたことを今でも忘れられません。

終戦——捕虜——そして帰国、然し懐しの故国は荒廢の極み、加えて我々元職業軍人の復員は、巷の人から冷嘲と白眼を以て迎えられました。味気ない日々の明け暮れの中に、再び私に遊びを与えてくれたのは、やはりビーチボールでした。終戦直後の混乱も漸くにして治まりかけ、人心が光明を見出しかけたのは昭和二十三年頃でしたらうか。どうやら心の余裕も出来かけて来た私が、銀座を漫步中、露店の軒に吊られている、赤、青、緑の三色ビーチボールを発見したときの嬉しさ。仲を割かれていた恋人が再会した想いでした「看板だから売らない」というのをネバリにネバって、遂に当時としては相当の大金を出し無理に譲って貰いましたが今思うとおかしい程宇頂天になった事を忘れられません。

それから、ほっほつ露天などで見られるようになってきましたが、デパートなどで公然と売られるようになったのは、朝鮮事変の始まった昭和二十五年頃だったと思います。お陰で、現在は私の部屋は、色とりどりのビーチボールで一杯にするのが出来ました。二十五吋という超特大のものすら手に入れました。私はその間に結婚しましたが、それでもまだビーチボールの魅力を忘れることが出来ません。相も変らずそのトリコになっていますが、これは一体どういう心理なのか、自分でも不思議に思いますが、どうも分らないのです。

ビーチボールにつかれた男の空想は、何時の日か昔日のフラフープのように、ビーチボールが、全国に氾濫する時の来ることを希う一事だけです。

ところで、最近、ゴムに代ってビニール製のボールが、氾濫といってよい程の勢いで市中に出廻って来ていますが、これは、私にとっては淋しい現象です。重量感でも、弾力性でも、較べものになりません。然し、輸入に頼るゴムより、国産資材のビニールの方が伸びてくるのは当然でしょうし、残念ながら、とって代られることは確実と思われます。それだけに余計、ゴム製のものに愛惜を覚えるのです。

乳房に火をつけるな・第六回

裏切りの掟

藤木仙治

本誌百号突破記念

懸賞募集原稿入選作品

裏切りマダム

小涌谷から早雲山へぬける山峡の道路を、一台の高級車が突っ走っていた。

ハンドルを握っているのは高桃華——横浜月光町の中華料理店竜一樓のマダムであり、麻薬ボス王竜元の情婦でもある濃艶な女だ。その運転台の隣りには、北条哲夫が坐っている。

「——マダム」

と、タバコをくゆらせながら、哲夫がいった。

「なアに？」

桃華は、ほそく剃りあげた眉を、チラリとあげ、まっ赤な唇に微笑をのせてこたえた。

「こんな二人きりのところを、王の旦那に見つかったら、とんでもないことに、なりはしませんかね」

ちよっと内緒の話があるからとささやかれて、哲夫は軽い気持でこの車に乗ったのだ。

ところが、横浜をでた車は、大船、藤沢、国府津、小田原とすっ飛び、箱根にさしかかって早、雲山をめざしている。

「実をいうとね、あんだとあたしが、こうして素敵なドライブを楽しんでいること、王のやつは知っているのよ」

小鼻のあたりに、皮肉な笑いをうかべて、桃華がいった。

「ほほう……」

「そこに私のハンドバッグが置いてある。なかをあけてごらん」
形のいい顎のさきで、桃華は自分の腰のわきにあるバッグを示した。

「なにがはいっているんです？」

哲夫はタバコを口にくわえたまま、そのバッグに眼もやらずにきいた。

「オーストリア生れの、可愛いお嬢さんよ」

「なるほど。そんな小さなバッグにはいつているところを見ると、超小型拳銃リリップトというシロモノですね」

「人影のない箱根の山の中で、あたしがあなたに抱きつく。キスをする。と同時に、あたしの手に握られたその小型拳銃の弾丸が、あなたの心臓にとびこむっていうわけなんだけど……」

「おっかねえキスだ」

哲夫は、肩をすくめた。

「じようだんじやないのよ、哲夫。これは、王竜元の命令なの」

「……………」

意外な桃華の言葉に、哲夫の顔がこわばった。

「ボスが？——なぜ、おれを？」

眉を寄せ、信じられないという声で、哲夫はいった。

三年前、星島大五郎のために、海のなかへ叩きこまれた哲夫を、船から救いあげてくれたのが王竜元だった。それから今日まで、哲夫は王のために、その片腕となって捨て身で働いてきたはずだ。

「女よ。オンナが原因なのよ」

と、桃華がいった。

「女？」

「あなたが連れてきた、あの美佐とかいう女を、ひと目みたときから、王のやつ、まいっちゃったのよ。そうよ、たしかに王ごのみの女よ、あの美佐って女は……」

「……………」

哲夫の唇から、タバコが落ちた。

「それから、ゆうべ連れてきた、あなたの妹の真紀子——。あの娘にも気があるらしいのよ。たいした男よ、あいつは——」

桃華の口調には、強い嫉妬がふくまれている。赤い唇がヒクヒクとふるえた。

「真紀子まで？——まさか……」

芝浦下水処理場裏の空地で、星島組と対決し、大五郎の娘千絵子と、哲夫の妹真紀子を命がけで交換したのは昨夜であった。

哲夫はそのまま真紀子を、横浜の竜一樓まで連れてきたのである。こんな暗黒街の外に生きている妹を、王竜元などにひきあわせたくはなかった。しかし、ほかに行くあてもない身であっては、ひとまずこうするよりほかはなかったのだ。

「王には、もうあなたが邪魔なのよ。あなたよりも、あの美佐のほうがだいじなのよ。わかった？」

「それで……それでマダムにいいつけて、おれをこんなところに連れてだして殺そうっていう手筈だったのか……」

呆然として、哲夫はつぶやいた。

憤怒や怖れよりも、人の心の信じがたさに、哲夫は全身がためたくなった。救いようのない絶望感に、頭のうしろが、すうっと冷えていった。

「嘘じやないわよ。ゆうべ、あなたが芝浦で星島組とパンパン射ちあっていた頃、横浜のあの店の奥じや、王のやつが、わけもなく美佐を痛めつけ、なぶり責めにしていたのよ」

「……………」

哲夫は、もう無言だった。

びしびしと音たてて小石や砂利を踏みしだきながら、車は、冠岳の中腹を切りひらいた険しい山道をたどっていた。

（竜一樓に置いてある美佐と真紀子の身体があぶない……）
我にかえって、哲夫はそう思った。

だが、いまここで、いくらジタバタしても無駄であった。

「——フフフ……。ねえ、哲夫、あたしが、なぜこんな秘密を、あなたにしゃべってしまったか、そのわけがわかる？……」

桃華の微笑に、ふと真剣なひびきがこもった。

「……………」

哲夫は無言のまま、窓ガラスをとおして、空虚な眼で、前方の景色をみつめている。

「あたし、哲夫が好きなのよ。ずうっと前から、あんたが好きだったの」

桃華の体臭が、どっと哲夫におおいかぶさった。

「おっと。左側は断崖絶壁だ。ハンドルはしっかり頼みますよ。こんなところで、マダムと心中はいやだよ」

「哲夫。あたし、あんたのためなら、王を裏切ってもいいの。あたし、あの男のあくどさには、もうとてもガマンできないのよ……」

「……………」

「四年や五年、遊んでたべていけるだけの宝石は持っているわ。このまま、一緒に逃げて——。ね、哲夫」

桃華の言葉が、熱のこもった息とともに、哲夫にせまった。

「美佐と真紀子を王のところに置きっぱなしにして、マダムと駈落ちはできねえよ」

「あんたさえその気になってくれたら、二人は、あたしが——なんとかするわ。きっと助けだしてみせるわ」

この車は、やがて早雲山の、雲海荘ホテルに着くのだ。

逃走寸前

その翌日の夕刻——。

横浜月光町、竜一樓の裏手に、箱根の埃を白く浴びた桃華の車が、疲れたようにとまった。

車からおりたのは、むろん、桃華一人である。

「おかえんなさい、マダム——」

と、迎えにでた金次に、白いレースの手袋をはずしながら、桃華はきいた。

「旦那は？」

「へい。あの、東京に急用ができたといって、ついでしたが、お出掛けになりました。お帰りは今夜遅くなるそうです……」

へへ……と、桃華の顔を下から見あげ、意味ありげな追従笑いをする金次である。

(しめた——)

と、桃華は思った。彼女はそのまま、れいの奥の密室に足を運ぶのだ。

そこには——。隅の柱に、美佐と真紀子が、うしろ手に縛られて、つながれているのだ。

残忍苛酷な星島大五郎の責めから、やっとのことで救いだされた真紀子であった。

兄の哲夫は、やっぱり生きていた。三年ぶりで、兄妹は思いもかけず再会出来たのだ。

だが、この横浜の中華料理店へつれてこられると、真紀子の胸に、ふたたび不安の黒雲がひろがった。兄の身のまわりに、不気味な犯罪の匂いがたちこめているのだ。

そして昨日——。

兄の哲夫が、シナ服の女に誘われて外に出掛けると、王竜元の態度が豹変した。

いきなり真紀子にとびかかると、ニンク臭い息で抱きしめた。

「あれえッ」とさけんで抵抗すると、王竜元は、はげしい力で真紀子をなぐり倒し、その両手を縛りあげて監禁したのである。

真紀子には、自分の運命が、なにがなんだかわからないのだ。わかるのは、一度去った危機が、ふたたび自分に襲いかかったということだけであった——。

桃華の入ってくる姿をみると、美佐と真紀子はギクリとしておののいた。



「心配しなくていいの。あたしは、あんなたちの味方になったのよ。いま、すぐに助けてあげるわ」

桃華は、元気づけるように二人に声をかけた。そして、掌のなかに隠していた飛び出しナイフの刃を、カチリとおこした。

「ひえッ」

美佐が、おびえた声をあげる。無理もない。つい一昨日の夜は、このシナ服の女のために、いいようのない苦しみを味あわせられたのだ。

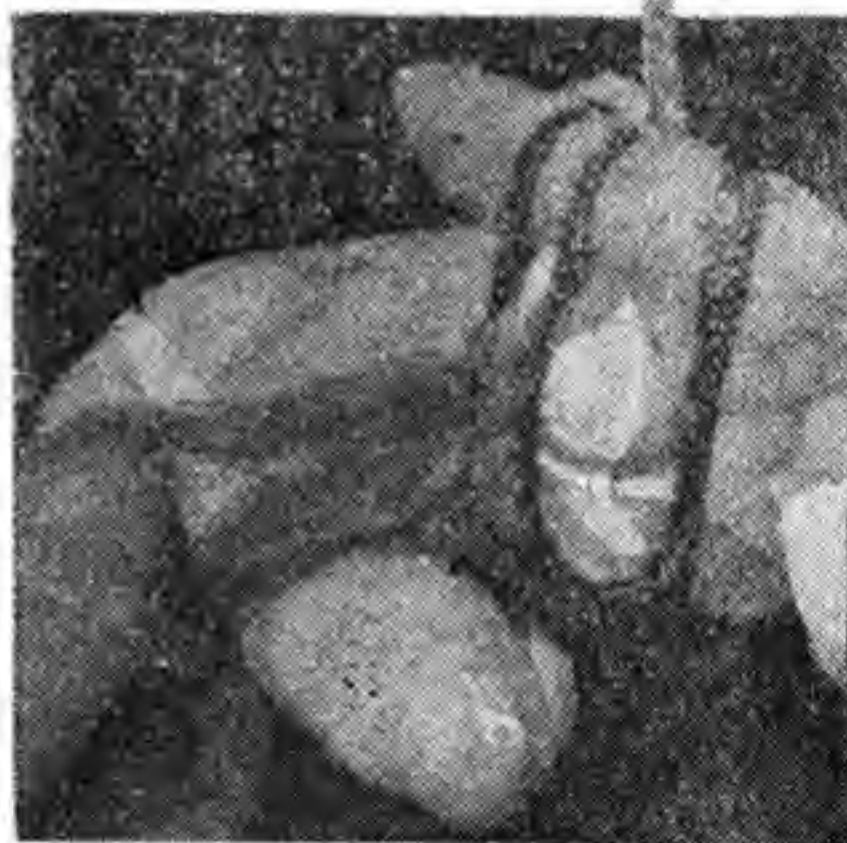
「フフフ……。おどろかなくてもいいのよ。あたしも、ほんとには、あんなだけは助けたくないんだけどね、これも哲夫との約束さ。しかたがない」

哲夫は美佐に惚れている。だから、美佐を助けたくない気持が、桃華にあるのだ。

しかし、桃華は美佐の縄を切りほじいた。

つづいて、真紀子を縛った縄も――。

「あなたは、あの、どなた？ 兄さんのお友だち？」



おびえながら、真紀子が桃華にきいた。

「いま説明しているひまはないのよ。とにかく、ここから逃げることが先よ。さ、早く外に出て、あたしの車に乗るんだよ！」

桃華にはげまされ、美佐と真紀子はよろよろと立ちあがった。この女が敵にしる味方にしろ、この恐怖の密室から逃れることは、二人にとって異存のないことだ。

「さ、早く！」

桃華は、密室のドアをあけると、真紀子を先に、それから美佐を押しだした。

と――そのとき。

「あッ！……」

三人の女は、慄然としてその場に立ちすくんだ。

ドアをでた廊下の中央に、どっしりと立ちはだかった、王竜元の姿があるのだ。

その背後には、うす笑いをうかべた金次が、猫のように背をまるめて従っている。

「ふふふ……。どうせこんなことだろうと思った。おい、桃華。おれを裏切るとは、お前もいい度胸の女だな」

王竜元が、ゆったりとした口調でいった。

「あ、あんな！……」

それから先は、声にならなかった。桃華の顔から、みるみるうちに血の気が失せていった。眼は恐怖に大きくひらき、赤い唇はワナワナとふるえていた。

「ふふふ……。お前がうまく哲夫を殺せるかどうか、昨日、金次のやつにお前のあとをつけさせたのだ。——おどろいたよ。やつを殺すどころか、早雲山のホテルで、たいそう熱いところを見せてくれたそうだな……」

一語一語をゆっくりと、しかし突き刺すように王竜元はいった。

（そうか。そうだったのか。ちくしょう！）

さっき、桃華が帰ってきたとき、王竜元が東京に出掛けて留守だといったのも、金次の嘘だったのだ。

（うまうまと謀られたんだ……）

絶望と、これからおこるリンチの恐怖に、桃華は眼の前がまっくらになった。

肉に鳴る鞭

ビリリッ！……

桃華の身にまとったシナ服が、大きく裂けた。金糸銀糸に縫いとられた、きらびやかな牡丹の模様が、無残なナイフの刃に、するどい悲鳴をあげて切り裂かれていく。

ナイフを握って舌なめずりをしているのは、金次であった。

「やめてッ、やめて、金次！」

桃華は、床の上に這いつくばり、のたうちまわりながらさけぶ。

「へへへ……。いくらマダムがわめいても、こんどばかりは、旦那の命令なんですね。どうか、かんべんしておくんさいよ」

金次は、ヨダレを流さんばかりにして、よろこんでいるのだ。

いままでは、手先を触れることもゆるされなかった桃華の躰である。それが、今夜こそは、こうして服をナイフで切り裂き、思うぞんぶん責めあげることゝゆるされたのだ。

美佐と真紀子は、ふたたび、この密室のものと柱に縛りつけられていた。縄から解き放たれ、四肢の自由を得たのは、ほんのわずか

の間だけであった。

しかも、自分たちを助けてくれようとした桃華が、これからおそろしいリンチにうめく姿を、凝視するように命令されていた。

「さあ、手を休めずにやれ——」

顔はいつもと変わらず、柔和な紳士ともみえる王竜元が、その煮えくりかえった腹のなかの憤怒を、いま桃華の身体におちまけようというのだ。

「あれッ！」

金次の執拗なナイフに追われ、桃華はこの暗くつめたい部屋のなかを、犬のように這いまわり、ころがって逃げまわるのだ。

しかし、しよせんは無駄であった。逃げられる筈はない。やがては追いつめられて、この暗黒社会の掟である、激しい私刑を受けねばならないのだ。

ベリベリッ！……

きしむような音とともに、ついに桃華のシナ服は大きくひきむかれ、黒いスリッパ一枚の姿にされた。

黒い薄衣をまとった、巨大な桃色のハダカうさぎである。みごとに熟れきった女体であった。みずみずしい柔肌を眼の前にして、金次の胸が、思わずドキン、と高鳴った。

（な、なんてえ、きれいな肌の色をしていやがるんだろう……）

カタギの人間には、とても真似のできない、ぜいたくの限りをつくして磨きあげた肌目なのである。

そのふっくらと匂うような女体が、いま迫りくる私刑の恐怖に、見栄も恥もなく慄えているのだ。

「金次。なにをボウッとしているんだ。早く縛りあげろ」

王竜元が命令した。彼にとっては、この桃華の美肌も珍らしくはないのだ。

「へい」

金次は、とびあがってこたえた。

「あ、あ、ああ……」

桃華には、もう抵抗する気力はなくなっていた。金次の手が、その桃華の腕をつかみ、ぐいと背中からねじりあげた。

二ツの手首をかさねあわせ、用意した縄で縛りあげるのだ。

「あ、あんた、ゆるして！ あたしが悪かった。もうあんたを裏切るような真似はしないから、ゆ、ゆるして！」

その縄のザラザラした感触に、早くもふるえあがり、桃華は哀願した。しかし、ゆたかな胸に、手加減のない縄が、ぎりぎりともわされ、しほりあげられるのだ。

「うううッ……」

と、息がつまった。

過去に、この部屋でおこなわれた数々のリンチを、幾度となく見てきた桃華である。あるときは、ただ傍観しているだけではなく、実際に自分も手を下したこともあるのだ。

その掟が、いまは逆に、自分の身体に加えられようとしているのだった。

「ああッ！」

縄でうしろ手に縛られただけに、もう桃華は、これからおくる責め苦を予測して、気を失いかけた。

「馬鹿。まだ気絶するのは早い」

王竜元の靴先が、その桃華の脇腹を蹴りつけた。

「ひいッ……」

と、うめき、桃華は蛇のように身体をくねらせる。

「縛ったら、どうしましょう？」

金次が、赤く上気した顔で、王竜元をふりかえった。

「天井から吊りさげて、思いきり叩きのめしてやるか——」
こともなげに、王竜元がいった。

「叩いたら、傷が付きませんが……」

金次が、まのぬけたことをいった。

「あたりまえだ。傷だらけにしてやるのだ。どうせ、哲夫の臭いのする牀だ。かまわない」

王竜元が、残忍な眼光でいった。

「あ、あんた、ゆるして、お願い！ 嘘なのよ、哲夫なんか、好きでもなんでもないの。ちよっと浮気してみたかっただけなのよ。こんどこそ、こんどこそ、うまく殺せるわ！」

桃華は、縛られた胸をつきだし、肩をゆすって泣きわめいた。

「うるさい。いまさらいいわけはよせ。お前が哲夫に惚れて、色眼をつかっていたのは、だいふ前から知っていたのだ。だから、おれは哲夫が嫌いになった。男の嫉妬は、女よりもはげしいというぞ。ふふふ……。おれは哲夫のやつを、いつかはなんとか始末をつけなくちやいけない、と思っていた。その時、おれの前に美佐が現われた。おれは美佐が好きになり、哲夫のやつが、さらに邪魔になった……。ふふふ、こういうわけだ。わかったか」

「あ、あんたという人は……」

「うるさい。もうよけいなことはいうな。さあ、金次、やれ！」

王竜元は、きびしい声でいった。

「へいッ」

金次は、うしろ手の桃華の縄尻に、べつの長い縄をつないだ。

木箱の台にのって、その縄を天井の鉤にとおした。手に唾をつけ、両足をひらいて踏んばると、縄尻をぐるぐると掌に巻きつけ、ううむッとばかり引いた。

ずるずる……

と縄に引かれて、床に倒れていた桃華の身体が起きあがった。

「ああッ、痛ッ！……」

背中に縛りあげられた手首が、ぐいッと上にもちあがって、胸に

かかった縄が、キリキリと喰いこんだ。

桃華は、その痛みを軽くしようとして、自分から中腰になる。ずるずる……

さらに腰がのび、膝がまっすぐになった。

「もっと引け。宙吊りにするのだ」

王竜元の命令は、あくまでも非情残忍である。

「へいッ」

金次は、全力をあげて縄をひく。

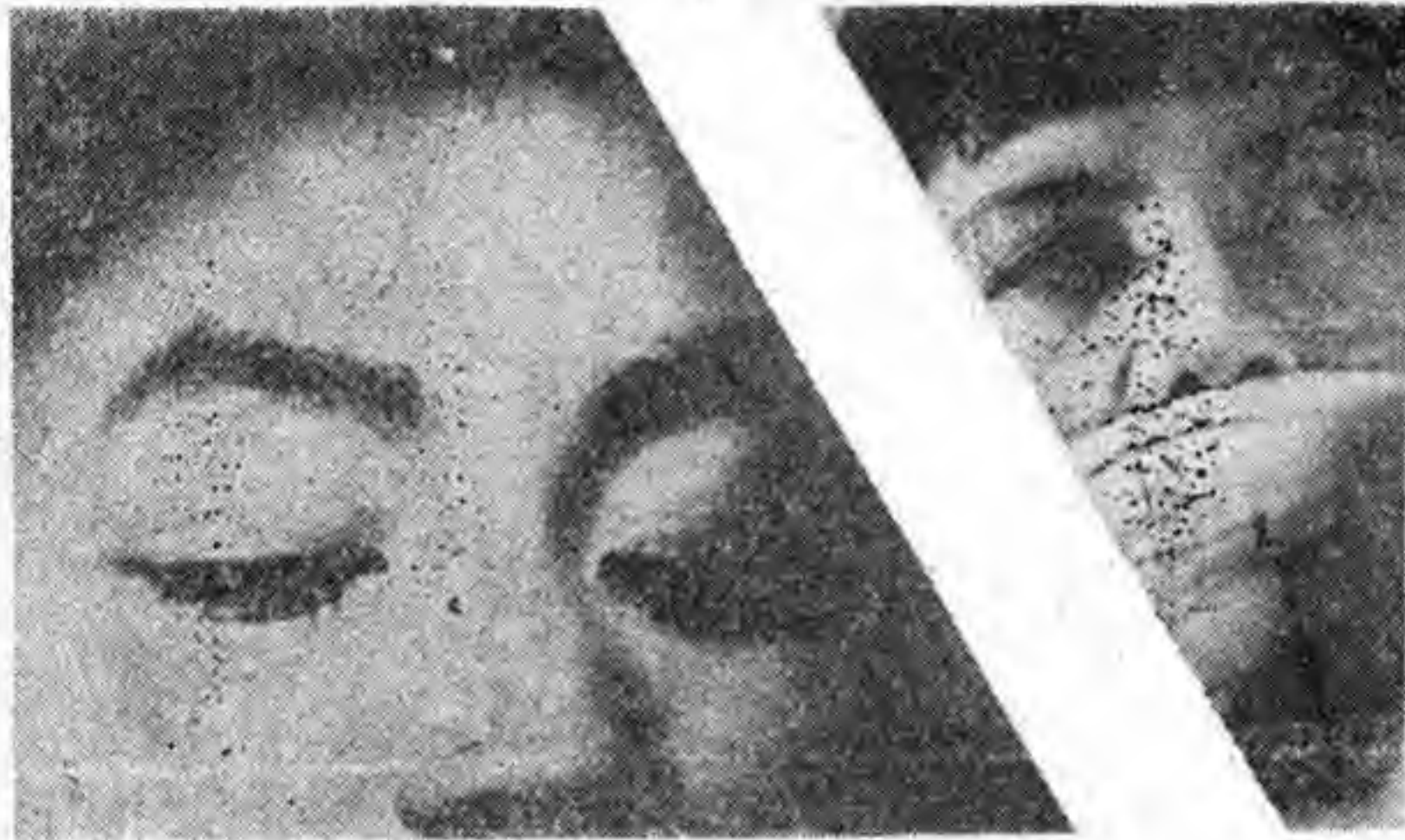
小肥りに肥えた女体は、ずっしりと重いのだ。まっ赤になった金次の顔から、汗の粒がふきだした。

ずるずる……ずるずる……

鋼鉄の鉤に縄がこすれて、異様な音をたてる。ついに、桃華の足さきが、床から離れた。一センチ、五センチ、十センチ……

いくら足の爪さきをのばしても、もう床には届かない。

「ううむッ……」



まさしく、宙吊りであった。ぶらりと吊り下った桃華は、ずっしりした自身の重みに責められる。

きびしい縄目が、更にきびしく柔肌に、ギッチリと喰いこむのだ。王竜元の手には、いつのまにか、長い皮鞭が握られていた。

「この二年のあいだ、さんさん可愛がってもらった恩を、よくも忘れて裏切ったな」

王竜元は、その皮鞭を大きくふりあげて、宙にもだえる桃華の体を、ピシリッと打ちすえた。

「ひいッ……」

悲鳴と同時に、哀れな女体は、ぶるん、と一回転して、電撃を受けたように、はげしくけいれんした。

胸から膝の上あたりまで、黒いナイロン・スリッパにおおわれているが、力まかせに打ちすえた皮鞭は、ゆたかに張りのある皮膚にたちまち一条のむざんなミミズバレを走らせるのだ。

ピシリッ！……

まるで、馬の尻でも打つような、容赦のない鞭さばきである。

「ひいッ——」

獣の吠えるような、すさまじい悲鳴をあげて、桃華は海老のように胴体をピンとのけぞらし、またまるめる。たとえわずかでも苦痛から逃れようとする努力であった。

しかし、宙吊りになっている悲しさに、すぐ、だらりと腰がのび、足がのびて、ぶらさがってしまうのだ。そして、また皮鞭の餌食になる。

ピシリッ……

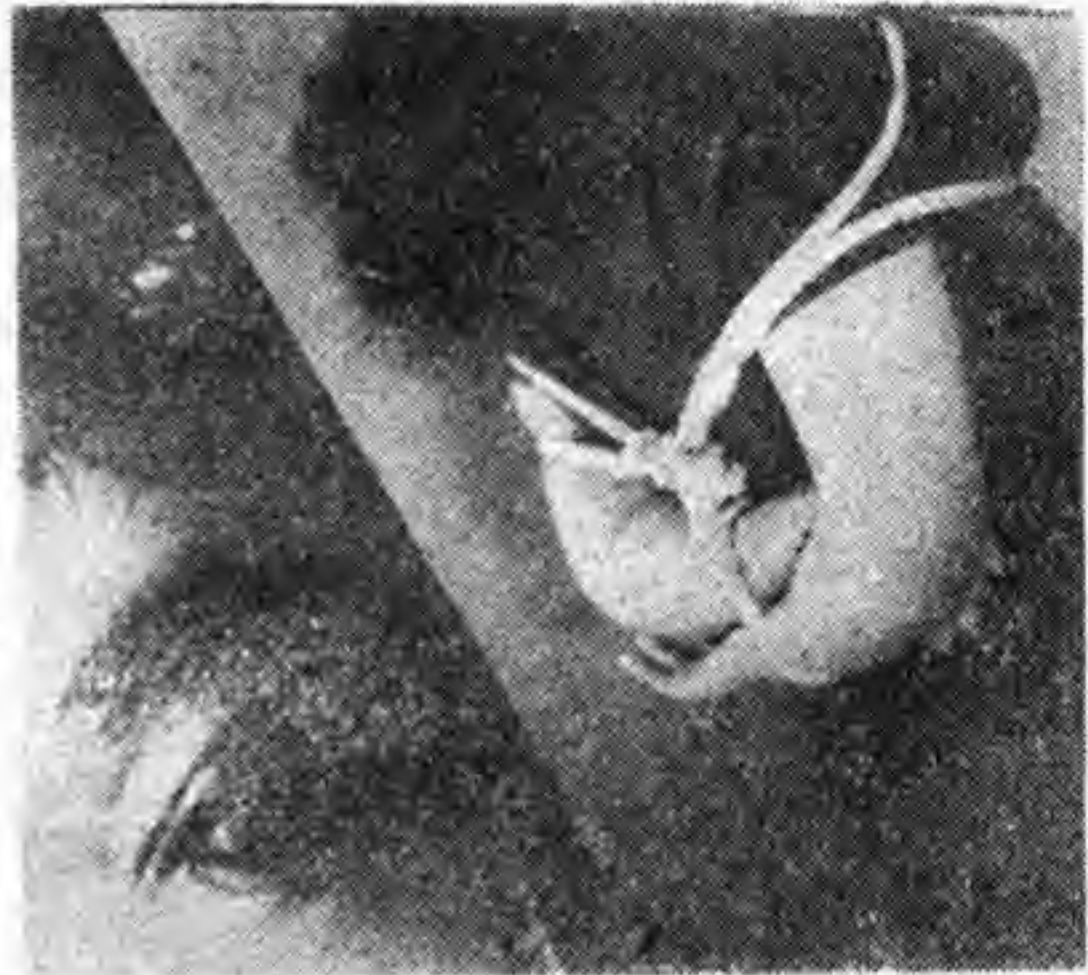
「ひいッ——」

鞭はつづき、スリッパは裂け、うす桃色の肌から、血が流れ始めた。ミミズバレに腫れあがった鞭痕の頂点から、鮮血が滲みでてくるのだ。

凄惨な光景であった。恐るべき悪鬼の所業であった。

はじめは咽喉がひき裂けるばかりに絶叫した悲鳴も、やがては、すすり泣きのような虫の息になっていた。ただ、鞭の鳴るたびに、ぶら下った体が、ひくッ、ひくッとはねかえるようにうごくだけだった。

この部屋の隅の柱に縛りつけられている美佐と真紀子は、このおそろしい私刑の光景を、とても正視することはできず、肉を打つ鞭の音に、肩をふるわせておののくばかりであった。



男の握手

箱根早雲山の、雲海荘ホテル——。その二階の一室であった。

「誰だ！」

三面鏡にむかって、髪に櫛をいれていた北条哲夫が、ドアにむかって、するどい声を発した。

廊下に面したドアが、音もなくゆっくりとあいたのだ。それが、鏡のなかにうつったのである。

つぎの瞬間、哲夫は内ポケットから拳銃をとりだし、いまドアの

むこうから現われようとする人物に狙いをつけた。

「——兄貴、おれだよ」

姿をみせたのは、順吉である。顎のところがった、ほそい顔がニヤリと笑った。ズボンのポケットに両手を突っこんでいる。

「順吉か。どうしてこんなところへきた」

油断のない目くばりで、哲夫はきいた。

順吉は哲夫の弟分。こんどの星島大五郎に対する哲夫の復讐には、はじめから骨身を惜しまず手を貸してくれている、可愛い弟分である。三日前、芝浦下水処理場裏での、大五郎と人質交換のときにも、一緒にくっついてきて、よく働いてくれた。

だが、その順吉も、王竜元の子分——いまの哲夫にとっては、心をゆるせない男であった。

「——哲兄貴。まア、その拳銃の先を、おろしてくれよ。兄貴の腕は百も承知している。そいつがこっちをむいていると、どうも落着かなくていけねえや」

順吉は、うしろ手でドアをしめ、静かな足どりで室内に入る。

「順吉。お前、王竜元の命令で、おれを殺しにきたな？」

掌のなかで拳銃をもてあそびながら、哲夫がいった。

順吉は拳銃さばきがうまい。いつもぶっぱなしたがっている男なのだ。油断はできない。

「実は、そうなんですよ——。ところで、兄貴、マダムの桃華が、竜一様でつかまっちゃいましたぜ。美佐と真紀子さんの縄を切って、もう一步で逃げだせるところだったんだが……」

順吉はポケットからタバコをだし、口にくわえた。

「そうか……」

哲夫は、沈痛な顔になった。

（あの女、本気で美佐と真紀子を助けるつもりだったのか……）
 と思い、それが、やや意外であった。

「そこで……こんどは、あつしに兄貴を殺す命令がくだったというわけなんです……」

ひとごとのように、順吉はいった。

「ふむ……」

その態度が、さすがに哲夫にも不気味だった。

「だけど、ねえ、兄貴。おれもマダムを見習って、王の旦那を裏切ることにしたんだよ」

「ほう……というところ？」

「やり方が、あんまりひどすぎる。兄貴の前だが、そりやたしかに美佐という女は、珍らしいくらい、いい女だ。まるで人形みてえにういういしくって、色気があって、日本女性の代表的美人みてえなもんだ。しかし、美佐は哲兄貴が三年間も思いつめていた女じゃねえか。ボスともあろう人間が、子分の女を横どりするなんて、どうにも話が汚なすぎる。これじゃ星島大五郎とまったく同じやり口じゃねえですかい」

「どうせヤクザだよ、順吉。銀座の暴力団も密輸の麻薬ボスも、どっちにしろヤクザ稼業は人間の屑だ。邪魔になれば仲間だって子分だって、あっさり殺してしまふのさ。ヤクザにはヤクザの仁義——ふん、笑わせやがる。そんなものは権力を握っているボスだけに通用する、御都合主義の世迷言さ……」

哲夫は唇をねじまげて自嘲した。自分もそのヤクザの一人なのだ。「そのとおりだな、まったく。——兄貴、そこで、おれは考えたのよ。王竜元なんて野郎は、とても生かしちやおけねえ……とね」

順吉は、白い虚無的な笑顔を、哲夫にみせた。そのかわいた表情には、嘘でない決意がみえていた。

「王竜元を敵にまわすのは、命がけだぞ」

意外な事なりゆきに、哲夫はあきれた顔でいった。

「おれは、死んでもいいのさ。おれは生れたときから、この世の中

（代理部案内）

△今月の新しい分譲品▽

○ 浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

紅白まんだらんの扱帯が後手の手首に喰い込んで苦痛にゆがむ文代嬢の美貌。身動きもできない捕われの姿態に襲いかかる三〇〇Cの硝子製浣腸器。空しい抵抗をあざ笑うエネマシリンジのゴム球。イルリガートルの嘴管。浣腸が終って便意の苦痛と戦う表情。文代嬢熱演の浣腸責フオート。

○ 浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

浣腸芸術という言葉があるとしたら、浣腸の苦痛に悶える姿態に美しさを発見するという狙いが、それに該当するかも知れない。紐と浣腸器のかもし出す美しきコントラスト。白い肌に妖しくまといつく黒色のゴム管。若い女性の生理に激しい変動を期待するグリセリン溶液。夢の如き浣腸責アツプ。

△ 浣腸責写真の二題について▽

浣腸責に関する以上の二集につきましては、本誌愛読者で浣腸マニアのH・M氏の提供によるアイデアを参考として作成したものであります。ここにアイデア提供のH・M氏に対して感謝の意を表すると共に、大判判印画紙に焼付けた本集二組六枚を贈呈する次第であります。「浣腸責」の写真は復刊以前、今から六年程前に二組程作成したことがあります。その後久しく杜絶していたのを、今回特に絹川嬢の協力の下に実施の運びとなったものであります。マニアの一見をおすすめいたします。

で、いいことをした覚えが一つもねえ。王竜元を殺してしまえば、これから先、せめて一年間ぐらいいは、日本に運ばれてくる麻薬の量が、ぐんと減るだろうよ」

「順吉、お前も変わったやつだな」

紙のように白い順吉の顔をみて、この男は胸を病んでいるのかも知れない、と哲夫は思った。

「おれは、前から兄貴には惚れていたんだよ」

順吉は、きれいな歯をみせて笑った。

哲夫も、はじめて緊張を解いて微笑した。

二人は、どちらからともなく歩み寄って、手を握りあった。

復讐の炎を、いよいよはげしく燃やす男と、妙に虚無的な若いヤ

クザは、グラスにウイスキーを注ぐと、たがいにニヤリと笑いあつて、飲みほすのだった。

(未完)

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

誇高き美貌の中心である鼻に對する責の中、足の指にて鼻をひねり上げ、踵にて鼻を押しひしぐという侮辱のテーマを取り上げました。これは『鼻責』二十数枚の中から選んだ素晴らしいフォトです。(モデル絹川文代)

特高拷問

△破られた

ズロースから▽

大手札型印画紙焼付

三枚一組二五〇円 略号(とく)

椅子の上に坐らせられ足を高々と挙げて八の字に開いて左右に固定された美貌の若い女が、特高の拷問を受けている場面。只僅かに身に残ったズロースさえもズタズタに引き裂かれた哀れな姿。(モデル絹川文代)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円

復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(昭和33年2月号)	△売切▽
復刊第24号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年8月号)	△売切▽
復刊第30号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第31号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年12月号)	定価二百円

復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦唐第二集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第厳重包装の上急送申し上げます。御送金はなるべく現金書留か振替を御利用下さるようお願いいたします。

演技の表情

牧 高 志

私は、まずこの表題である「演技の表情」はこの際いさぎよく「演偽の表情」と改題されようとも文句が、苦情がいえない位、数多くの映画女優、舞台女形、テレビ専属女優の緊縛演技には偽装——偽れる緊縛の盛装が多いような気がしてならない。

多少はよろめき乍らも停止もせず、続稿また続稿の、緊縛映画スナップシリーズが一先ず完了した今日、夥しいフィルムの中から、未発表のものを探し出す楽しみは、また格別だ、机の中をかき廻す序でに、今更改まって分類整理する必要もなさそうだから、今回は、映画館内スナップの余話として、独り静かに閑居して、こんにやく禪問答を試みるのも一興かと愚考、取敢ず8葉の参考印画を作成してみた次第だが、正直な処、私のスナッ

プ技術に関する限り、ムービーの表情芸術の限界は、これが精一杯ギリギリの線なのである。端的にいうと、一切他人の演出にかかわ



新東宝「朱桜判官」 若杉嘉津子

る縛られた女の表情は、かほどまでに扱われ方がぞんざいであり、従って不満が多いことをいいたいのだ。

曾って、私は御多聞に洩れず、あらゆる女性の被縛姿体に喝仰し、絵画写真の類を無数に蒐集したが、その中で残念乍ら悲痛感の現われたものは数える位しかなかった。蒐集の苦勞に反比例して、どれを取上げても生気のない枯れた像であり、責めるあなたも、被縛のわたしも、至極四海波静かに、平穩無事安息感そのものの表情でお茶を濁している。そのさまは宛ら、祭礼の時、女の児が着る着物にただ赤ければ無性に喜ぶのと何ら変らない。

馬鹿は死ななきや直らない。その数二、三百冊を優に超したであろう蒐集の市販雑誌に、絵画と共に綴られた緊縛情景文、筆法にも、実はそろそろ飽きが来たし、このところ物心ともに救われぬ気持ちで一杯である。こうした私なりのスランプな時期に、明らかに不満な男が爆発するであろう処の緊縛スナップフィルムを対象に、見えすいた解説を試みる自体が野暮の骨頂かも知れないが、他方、貴重な棄石にもなるだろうから、頗る以て狂人めくが暫時の間誌上を無断借用しお眼を汚すことを許容願いたい。

新東宝「隠密変化」 若杉嘉津子



先ず、緒言として、たとい強いられた偽装の演技であろうとも、この方面の第一級スターは何んといつても若杉嘉津子（新東宝）であろう。荒削りで体当りの芸熱心は大したもの。同じ縛られて折檻されるならその気持を、持たぬ限り迫力が出ないことも事実だろう。「朱桜判官」で長襦袢一枚のまま、折檻部屋に吊られ、鞭打ちにグウ——とのけぞる瞬間はポーズもよく、文字通り壮絶なものがあつた。

しかし、こういうものか百人が百人、監督と

いう手法の中に由来物惜みをする精神があるものと見えて、一秒間たりともスター諸君の泣きべそをたっぷり見せたことがない。言葉を返せば善良そのものの監督さんが、日本の映画を支配しているのである。彼等は特殊な世界に身を置いてもう云うだろう。

「サド的なヘンタイなことは私達には出来ませんよ。若し演ったとしたら面子が潰れますからね。断って置くが、女を縛るのは脚本にそう書いてあるから演るんです。私には少しでもそんな気持ちはありませんよ。誤解しないで下さいよ」云々……と。

同じ若杉嘉津子でも「隠密変化」の彼女は戸迷った表情の連続であつた。ずり落ちそうな細紐で縛られ、駕籠から曳き出されて形ばかりの責め問答は、フィルム上の浪費で勿体ないと思つたが、肝心の映監督士が

「いや、この位でいいんです。讀められたって、映画の生命は一週間ですからネ。一寸痛そうな顔をしてみて下さい。どうせ都会ならアイスクリーム、田舎なら煎餅をかじり乍ら観られるんですから……」と云つた調子ではどうにもならない。

処が不振の会社を挽回するには女優と云えども真剣に縛らなければ——と入れ替りつ緊縛女優？を出陣させた大映の「紅あざみ」は好感が持てる（ような気がするが）、味なセリフに似合わず、見せそうで見せなかった

新東宝「隠密変化」 若杉嘉津子



思わせぶりの後手姿は心憎い限りである。神詣での帰り途を襲われて、後手にされた青山京子嬢あたり、フリーだけにその内「そんなことでは女を縛ったことにはなりません、こうなされませ……」と進んで映監督先生を逆教育するようになってくれないかしら。

本誌の可憐な撫子が花坂道子嬢だとするならば、さしあたり銀幕のそれは童顔失せやらぬ北沢典子嬢であろう。このお嬢さん（と云つた方がぴったりする）にスクリーンで初め

大映「紅あざみ」 青山京子



てお目にかかったのは「危し伊達62万石」であつたが、素直な性質の持主らしいだけに、恐らくどの映監先生達にも好感を持たれてゐるのじやないかと思われる。小柄の身体を姫御前の衣裳で包み「ハイッ、ここで苦痛に満ちた表情をして下さい」と云われれば安んじてその命令に服すると云う理想的なスター。それだけに後に残るものが湧いて来ない憾みはありそうだ。つまり目下縛られ役修業中に

付、各種の責め折檻型を受付けますと云つた感じだ。

嵐寛記念作品の「影法師捕物帖」でも、散漫ではあつたが頂ける表情が、探せば出て来るのは大変喜ばしい。恐らく肉眼では見逃す処をカメラアイは適確に撮っているのだ。



新東宝「危し伊達六十二万石」

北沢典子

新東宝「影法師捕物帖」

北沢典子



いよいよ、待ってましたッ……の場面が映ると太い柱を背にして、先ずふくら脛のあたりを縛られた裾から、上へと順に撮影機は描いて行き、恐怖に戦のく顔の表情で物を云わせようとするのが映画の常道であるらしい。斯うした場合、うるさ型の観客衆だったら、たるみ切った縄の掛け方に文句を云い云い、お座なりの生ぬるい折檻風景に唾をひっかけ度くなるのじやないだろうか——それ程描写

がいい加減なのである。映画での責めは舞台のそれと違って駒撮りなのだから、秒速24駒の内に深刻な表情を盛った処で、スターは勿論、映監のモラルを疑うナンテことにはならぬ筈だと思う。まして未完成な女優であればある程、真剣に縛ってこそドラマの効果は上ること間違なし。もう一度あの折檻の場を見てもみたくて云う気になれば縛りの諸条件はおよそ満足に近いのだし、その映画は、余人はいざ知らず、マニア居士には観覧料の如何を問わず夢のパラダイスなのである。



新東宝「姐妃のお百」 北沢典子

今でもこんな事があるのかどうか判らないが、昔、某有名スターのアップは右半分とか左半分とかに限られ、泣くにつけ笑うにつけ、正面の表情がオミットされて、不具な横顔で我慢させられたことがあったが、光と関連して顔——ひいては身体全体の演技に美醜があることは事実だ。

実は私がこんな事を発見したのは、近くの新東宝の封切館があるという理由で、折々足を運んだ序でにスナップした北沢典子嬢のプロフィールが、その都度変わっていることからであった。挿入した参考スナップ映画「姐妃のお百」の吊り責の一駒も決して見られた顔ではない。

それともう一つ、それは文字通り演偽の表情が数千駒数の一駒を引伸すことによつて、馬脚を露わすことであつて、つながつてこそ、金魚の糞である所以が判つたし、映画が曲者である根拠も判つた……だからこそ、マンマとその方面のベテラン、東映「新吾十番勝負」の長谷川裕見子扮するお長の縛られの場は誠に要領よく運ばれたのである。

もっとも縛られて可哀いそうに……が先に立って、セリフのやりとりを聴く場合と、判りもしないスクリーンの会話に耳を傾けて、ゼスチュアを後廻わしに観る場合とがあるが映画はすべからずゼスチュアで行く可きであらう。

東映「新吾十番勝負」

長谷川 裕見子



「ウム、腰元が追いつめられた。当て身をくらって倒れる。覆面の連中が失心した腰元をかつぐ……」と来れば、後は十中八、九は後手に縛られて何処かにつながれていることになる。——残念なことにお香の匂いが効き過ぎて、満足に苦悶の表情をせぬうちに斃れたのが東映「蜘蛛の巣屋敷」の腰元だったが、この位な処が現在映画のアクションの限界点ではなからうか。

創作

謎の緊縛フオート

(その三)

久留木 栄



(一) 若い恋人たち

「だんだん全貌がわかってくるね。どうも本当に大それた計画的な犯罪が、背後にかくされているような臭いが濃くなってきた。それも大分尻が割れかけてきたというところだ。中村君、君もいやだろうけど、こんな事件は人の話も大切だが、一応全部を直接手を下して調べてみることにだね。島村巡査や、岡野刑事の調査で梗概——いや殆んどわかっていても知れないが、隣村の太田敏子というのも重要な被害者の一人なんだからその父親のところに上田君と一緒に行って詳しく事情を調べてみたらどうかね。なにしろ特異なケースの事件だし、将来、婦人や少年の保護指導の面に役立つところも多いと思うんだがね……」

「はい。承知しました。」

柏木課長を前にして、年かきの池田巡査部長から、そういわれると、中村美美子は尤もなことだと思った。池田部長はやはり苦勞人だなと思う。これまでの、井上和子と、山崎春江の二人の女性だけの捜査でも、特殊なケースだけに、もういい加減いやな気持ちにされていたのが、この励ましによって、再びフアイトの湧き上るのを覚えるのだった。

「とにかく頑張らしようや」

と、好意以上のものを感じている上田記者に握手されると、どんな嫌なことがあっても

最後まで解明しようと、決心を新たにすることになった。

上田記者と共に、甲斐助六氏の家を訪ねてから六日目のことである。

その太田家訪問を明日に控えて、中村美美子は、今迄に得た知識を改めて反芻しながら床についた。

どうしてそうなったのか分らないが、美美子は大きな池の傍の立木に縛られていた。後に廻されている両手が痛いほどしびれているし、猿ぐつわをされているようでもあり、されていないようでもあるが、とにかくいくら叫んでも声が出ないのだ。目の前の空地を、上田記者や、柏木課長、池田部長などが自分の名を呼んであちこち捜している。美美子が必死に助けを求めるのだが、つい傍まで来ていながら、上田記者達にはどうしても通じないのだ。そして自分の目の前に、何者とも知れぬ黒い影が現れ、手の長い鞭を大きく振りかぶって打とうとする。美美子はその恐ろしさに声をかぎりに絶叫した。

その自分の声でハッと眼がさめた。背中にビッシヨリと汗をかいている。毎日の捜査の内容が、うら若い婦警の神経を昂ぶらせているのだろう。

昨夜、余り考えすぎたから、こんな夢をみたんだわ。弱虫！と美美子は自分を叱って、

手早く用意を済ませ、約束の場所に駆けつけた。そこにはもう、上田記者が待っていた。

「遅いなあ、約束の時間に遅れるなんて、君らしくないよ」

「ごめんなさい。ねぼけたのよ、ゆうべ大変な夢をみちやって」

「……わかった。縛られた夢だろう？ 僕もときどきみるんだ。あれ以来。全く厭になっちゃうよね」

「仕方がないわね」

「うん。仕方がない。……しかし用心はせんといかんなあ。僕は時々考えるんだ。僕の思い過ぎならいいんだが、どうもこれまでの調査では思い過ぎとばかりいえない節がある。これからの捜査次第で、我々にも危険が待っているかも知れないってね」

「おどかさないでよ」

「いや、ホントだ。そこで万一のことを考えて、お互いが、いづどんな場合でも連絡のとれる方法を色々と思案してみたんだ。昔、拇指小僧の童話に、人さらいに連れて行かれるのに、パン屑を落して行くという話があったし、最近の大衆小説では放射能を持つメダルで連絡し合うというのがあった。しかし実際にはそんなにうまく行く筈がない。そこで、どれだけ役に立つかは別問題としても、各自の持物総てに、一目で判る目印しをつけることと位はして置きたいし、お金なんかでも、利

用のし方で連絡も出来るだろう。それにこれだ。拇指小僧のパン屑の代りに、このメダルを落したりまいたりして、合図する位の打合せは必要だと思ふんだ」

そういいながら、敏雄はポケットから一つかみの小さなメダルを掴み出した。

「或いは役に立たないかも知れないが、僕は真剣にこれを沢山買い込んで来たのさ。警察という力強いバックを持ち乍ら、こんな子供だましみたい……と君はわらうかい？ わらってもいいさ。僕は君のことが、たまらなく心配になることがあるんだ。だから……」

「ウウン。ありがとう。私、笑うどころか、貴男のお気持、とっても嬉しいわ。そのメダル、半分頂戴」

と、美美子が眼をキラキラさせながら、敏夫の顔をじっと見詰めて手をさし出した。

一瞬、四つの瞳が、無限の信頼と、こよなき恋情をみせて、宙にからみ合った。いつか二人はしっかりと手を握り合っていた。

(二) 太田敏子の父の話

低いなだらかな峰に囲まれひっそりとした森に小さな鎮守の社、すき返された肥沃な耕土、何もかもが、そんな惨酷な事柄とはおおよそ似合わぬ、平和な風景だった。

訪ねる太田敏子の父、甚作は

「ああ、駐在さんがそういいました。ど

うも遠いところを……」

と、畑仕事を中止して、二人を心良く家へ招き入れた。

方々ツギの当たった野良着姿ながら、部落の実行組合長をしているという甚作の態度は、その娘が行方不明になり、得体の知れない怪しい事件に関係するなどは、とても考えられない程の堂々たる落着きがあった。

「私の家の恥をさらけ出さねばならないのです……」

と、さすがに話にくそうであったが、上田記者の質問には、よどみなく答えた。その話を総合すると……。

太田敏子は、三人の子供の内の末っ子であった。上二人は男で、敏子が五才のとき母をうしなった。以後、男手で育った敏子は、勝気な性格を身につけていったが、反面、非常に思いやりが深く、成長と共に、美人であった母の面影をしのばせる綺麗な娘であったという。そんな敏子が十六才の夏、鎮守の宮の祭りの夜、村の有力者の息子と話していたのが、どういう訳か、二人の中が怪しいという噂が立った。根も葉もないことと始めは聞き流していたが、相手の青年に縁談のあった矢先きでもあり、有力者であるだけに妙に話がかじれて、突然その青年が鉄道自殺をしてしまったので、中傷的なその噂が、単に噂だけに止らなくなってしまった。好奇的な村人の

蔭口は、いよいよ真実味を帯び、実感を伴い、中にはまことしやかな「目撃者」までが現れて、村中の注視が敏子一人に集った感じがあった。

感じやすい年頃の敏子にとって、この又、ギヌは堪え得られぬ程のショックだった。活撥で明朗だったのが一変して、陰気なダンマリ屋となって「死んでしまいたい」と口走り事実、家族の眼を盗んで自殺を計ったことも何回もあった。甚作も手を焼いて、絶えず監視を続け、どうしても一人にして置かねばならぬときには、狂人のように手足を縛りつけておくというような期間が長らく続いた。

そんな噂も、どうやら人の口端にのぼらなくなつた頃、長らく村を離れていたこの土地出身の純平という青年が帰省して来て、敏子に結婚を申し込んで来た。そして敏子は十八の春にこの純平のもとに嫁いで行ったのだった。ところが、幸せを取り戻したかに見えた敏子に、まだ不運はついて廻っていた。ある宣伝社を経営しているというふれ込みの純平が、その実体はヤクザ者であった。それでも、敏子には良い夫で、かなりの財産もあったのだが、嫁いで二年目に仲間とのイザコザの為に刺し殺されてしまった。純平がくだらない人間で、ヤクザ者が絶えず家に出入りする暮らしは、敏子をしてどんな気持ちにさせたのだろうか。夫の死後、心配した甚作の再三のすす

めにも拘らず、その家を出ようとはしなかった。亡夫をしのぶ風情も時に感じられはしたが、それよりも、打続く我身の不運に半ば自棄的になっていたという方が当たっていただろう。

それからの敏子の生活は、打って代って奔放になった。かなりの財産を持つ若き美貌の未亡人。周囲にはヤクザ者の群——。そこに問題の起らない方が不思議で、敏子を巡って狼どもの間で絶えず、小さな傷害事件や小ぜり合いが持ち上ったのも当然かも知れなかった。頭を悩ました甚作は不良青年の一人に多額の金をやって、敏子の行動を知らせて貰っていたが、その報告では眉をひそめるような事柄が多かった。

特に、亡夫の弟分に万吉という男が居つてこの男が、毎夜のように敏子を縛り上げて責めている事実があると聞いて、甚作は驚いて敏子の家に駆けつけた。行ってみると、頭から顔半面にぐるぐる繃帯を巻いた男が臥っており、敏子が甲斐々々しく介抱していたが、その男が万吉であると聞かされて狐につままれたような気になった。昨夜、大喧嘩をしたというのである。それでも甚作は、今迄に得た情報に依つてこんこんと実家へ帰ることをすすめた。敏子は神妙に父の意見を聞いていたが、ホロリと涙を落して「心配ばかりかけて済みません。でも私はもう駄目なんです」

と一言いったきりで、どうしても帰るとはいわなかった。その日から三日目に、無理にでも連れて帰る積りで、甚作が出直してみると、もう敏子はその家には居なかったのだ……。

「それ以後、たった一度二十万円のを添えて、託びの手紙が熱海の消印で来たっきりで行方がわからんです。もう二年を過ぎましたが……」

甚作はそう云って、さびしうにタバコを取り上げた。聞き手の、上田と美美子の二人は、ホッと溜息を洩らして顔を見合せた。——二人が甚作の家を辞したのはもう夕刻であった。

(三) 捜査は進む

翌日、再び捜査会議が秘密裡に開かれた。

席上、三人の被害者に対する調査報告を始めとして、関係ありと思われる人物の身元報告がなされた。安倍幸市、受野万吉、辰こと石綿辰士、等であったが、支那服の女、及び社長と呼ばれる赤ら顔の男については不明であった。

更に、被害者、井上和子の宅にあった和子



のハイキング姿の写真は、端緒となった例の緊縛フオートとくらべて印画紙、現像状況、カメラ等が同一のものと推定されるし、またこの二種のフオートから石綿辰士の指紋が検出されたこと。更に「私の和子さんへ」という鉛筆の走り書きは、麻薬密売容疑の際の石綿の筆跡と同一と鑑定されたことも報告された。

上田記者は眼を輝やかせて制服姿も、りりしい美美子の美しい顔を見てニコツと笑いかけた。美美子も嬉しそうに微笑してこたえた。二人共嬉しいのだ。嫌な思いを押えて調査した苦勞の甲斐があつてもう一息でこの事件の真相がわからうとしている。嬉しいのは当然であろう。

柏木課長が、そんな二人の様子をチラッと見て、池田巡查部長の脇腹をチョイとつづいた。池田部長が合図された方を眺めて、人の良さそうな相好の崩しかたをした。

(四) 二人の誓い

制服を脱いだ美美子は、人が変わったようなしとやかさを持つ乙女である。明るい電燈の下で微笑を湛えている美美子の顔を、敏夫はしげしげと眺めた。

「私の顔に何かついてますか？」

「アッ、イヤ、君が余り綺麗なものだ」

「まあ。駄目よ！ 幾らおだてたって、ここ

の御勘定は貴男もちよ」

「ハイハイ、おごつてくれとは申しません」

二人はクスクス笑った。
そこへウエイトレスが注文の品を運んで来た。

敏夫は昼間の会議の様子で、事件の解決は時間の問題で、それも急転直下に犯人の逮捕をするものだという印象を受けた。そこで、自分が引張り出したような芙美子の労を謝する意味で、食事に誘って来たのだった。

「ご馳走ネ」

芙美子は朗らかに云ってナイフをとり上げた。

「ホントに今度は、僕が余計なことをして、君に嫌な思いをさせたネ」

「そんな事。……お仕事ですもの」

「お陰で僕もいい勉強になった」

「……でも世の中には、色々の人がいるものですね」

「若い女を縛って、叩いたり苛めたりして喜ぶやつ。又、縛って貰って悦ぶ女……フッフ全く正気の沙汰じゃないネ」

「……だけどネ、私つくづく思うのよ。そりやあ、形の上で実際に縄で縛られたがる女の人があるってことは、今度の調査で始めて知って、私もびっくりしたんだけど、女って、精神的には、ある特定の人から愛情でガンジカラムに縛られていたって気持ちが、莫然とだけけど、共通してあるんじゃないかとも思うのよ」

「こりや、オドロキだな」

「ちやかさないでよ」

「で、君にも縛られていたって気持ちがあるの？」

「……フッフ。その代り、私だったら、その特定の人をも、ガンジカラムにしちゃう」

「フーン」

「そうよ、お互いが精神的にしっかり縛り合わされて、初めて本当の愛情というものが通い合うんだと思うわ」

「すると、マゾの女性は全身に精神を現わして愛情を表現している、といえる訳か」

「サア……実際に縛られたいという女の人はどういう心理だか、私には分らないけど……」

「もし君のハズが、精神的だけでは物足りない。形の上でも縛らせろって言い出したら、君は縛らせるかい？」

「……」

「ウン？」

「……いじわる！」

「縛らせるかい？」

「……本当に双方が信頼し合って、愛情の確認さえ出来て居れば、そんなこと問題じゃないと思うわ」

「問題じゃないから縛らせる？」

「……しらない！」

芙美子の豊頬に赤味がさして、両手のナイフとフォークが忙しく動き出した。

「芙美子さん！」

敏夫が低いが強く呼びかけた。

「僕は、君を……」

縛りたい、というとしたが、余り気障な気がしてやめた。ハツとしたように顔をまともに向けた芙美子は、真剣な敏夫の瞳にぶつかって、なぜかしら真赫になった。

これでいいんだ。気持はお互いに通じているんじゃないか。後は事件の完全な解決を待つだけだ。

敏夫はそう心の中で呟いて、ニッコリ笑いかけた。芙美子も羞しげに微笑を返した。

(五) 捜査の転進

それから四、五日経った夕方。警察署の一室で、上田敏夫は柏木課長に詰寄っていた。「どうしてここまで捜査が進んでいながら、検挙に踏み切らないんです！」

「フム、たしかに不思議に思うだろうな。腹も立つだろうよ。犯人とみられるやつを、のさばらしているんだからね。……しかしね、上田君、よく考えてみ給え。たしかに証拠になるものはあるよ。だが、井上和子の場合にしろ、山崎春枝や、太田敏子の場合にしろ、臭いは充分にあっても、犯罪だといえる完全な条件が揃っているかネ？ 和子の場合は疑問としても、他の二人は、君、彼女らが自ら進んでそうさせた、といわれた場合はどうな

るネ? そう答えられても反撥出来ない種類の女達じゃあないか。和子の場合でもいえばいい得る性質のようだ。全く偶然の一致でそんな性質の被害者ばかりだったと云い切れる何かがあるかネ。これが、彼等の常套手段なのか。或いは、これはカモフラージュで、別に大きな事件を背後に持っているのか。この点、全く不明だ。

とに角、あの三人の被害者には共通して、縛られることを好むという異状があった。

その点が、検挙に踏み切れない原因だ。

それにもう一つ原因がある。それはネ、この事件と関係があるとはいいい切れないが、最近、続いて行方不明の女たちがあるらしいのだ。誘拐されたと断定する証拠はまだ現れていないが、赤線の女達が集団的に消えたり、非常に待遇の悪かった女工達が、十人ばかり一緒に逃げ出して、それが、一人として故郷にも帰らず、行方もわからないんだ。他にも夕方散歩に出たまま帰らない娘や、女学生が学校の帰りに行方しれずになっている例もある。

只の家出とは思えないこれらの事件が、こんどの例の事件と関連があるんじゃないかとも思えば、思えないこともなからう?

「とすると、奴らは……」
「もしそうであっても、ホンの雑魚さ。最近警視庁のキャッチした情報では、麻薬との交

換に日本娘が使われているのではないかと考えられる節もあるらしい。事実とすりやあ、これは重大なことだ。

氷山の一角ということもある。たとえ的外れであったとしても、この際、自重する必要もありはしないかねえ。どうだ? 上田君

「よくわかりました。」

「ウム」

「僕にも手伝わせて下さい」

「君は今までの関係もあるが、社の方はどう云うかね。こちらの仕事だぜ、これは……」

「特ダネを追うのは記者の仕事ですよ」

上田記者の胸には、ふつふつと血がたぎっていた。

(六) 目 星

「で、そっちの方の捜査を、これから始めるんですね」

「いや、それはもう始めているよ。現在までの目星は、玉水ホールというパチンコ屋だ。

経営者は女名儀になっている。名儀は違うがその二階の、川の音という喫茶店の経営者、

田中香代なる女と同一人の経営だと思えるんだ。或いは替玉の女が居るかも知れないが、とにかくそのパチンコ屋の女主人というのは

国籍不明なんだ。勿論、日本人じゃあない。地階のバーに至っては全く怪しげな臭いのし

そうな感じだ。このバーも女名儀だが、この

女は、花田エツといって身元は判っている。

ここに目をつけたのは、例の事件が大いに関係があるのだが、花田が昔から辰の情婦であることが判明した。辰も、万吉もこのパチンコ屋の従業員ということになっている。」

「なるほど」

「張り込みの報告では、三日前に五人連れの若い女達が川の音に這入ったまま出て来ないそう。出入口には残らず張っているのだから、出て来ないとすればどこかに消えた訳だ。

更に昨日は三人連れが、辰に案内されて上って行ったが、これも出て来ないそう。僕は

昨夜、妹を連れて、その川の音へそれとなく探りに行って見たが、別に疑い深い節はみられ

なかったんだがネ」

「まるで怪談ですね」

「そう、正しく怪談だ。どうしても、この謎を解いて、何かを掴む必要があるんだ。何かをネ……」

「それが誘拐だとすると、ずい分大掛りな組織と考えられる訳ですね」

「ウム」

「閉じこめられている女達は、あのフोटのように縛られて……」

「……だろうネ、多分。可哀そうに」

そう独り言のように呟いて、むつつりと腕を組む柏木課長の瞳は、不気味な程の斗志を漂わせていた。



○ 其の後御無沙汰致しております小生は毎月奇巧の発刊を楽しみにしている男性マゾです。十二月号の姫馬痴人氏のお便りがのつているのを読んで全く同感です。と同時に新たな同志にめぐり逢えた喜びで胸が一杯で今直ちに同氏のものととんで行つて握手したい気持です。本当に春日ルミ嬢は健在でしょうか、それとも春日嬢に率仕する対象がいなかったためですか。(小生今すぐ飛んで行つて奉仕したい……春日嬢の思う儘に、それが儘に如何なる仕打でも……と思うや切なるものがあります。)

どうか小生の切なる願いを同嬢に察していただいて、奇巧次号発刊号に小生の願ひに対するお答えと将来サド女性としての抱負を御聞かせ下さいませすれば、無上の光栄とするものであります。又、休刊前頃奇巧に度々洋子嬢に対する悦虐体験記をよせられておりました長瀬昭子様より其の後の発表はありませんか。ここで奇巧を通じて長瀬昭子様に特別にお願い致します事は今迄の貴女の対象は洋子という美しい女性でしたが、もう一歩前進されて我々根っからのマゾ男を対象としていただきたいのです。いつても、それをお探しになられるには非常に困難な事だと思ひますので、今迄の洋子嬢に対する悦虐の数々の体験を基盤にされ洋子嬢をマゾ奴隷に置きかえて貴女の思ひのままに命令し、責めさいなむことによつて嗜虐の快楽を味わイメージを今後御発表下さいまして我々マゾ男への被虐の快楽を味わさしていただきとう存じます貴女様が洋子嬢と初めてお知り合ひになられレスリングの遊びから出発されて見事に初期の目的を達成されつづいて第二期の浴場でのあの悦虐を今一度想起して下さいませ。あの挿絵を拝見して洋子嬢

を小生におきかえていただけたらどんなに嬉しい事でしょう。今一人の同志馬場好男氏の「マゾヒズム百景」は毎月天にも昇る心地にて楽しみに愛読させて頂いておられます。特に十月号に寄せられたマゾヒズム百景中の第九景、或るイメージから、は毎晩夜の更けるのも忘れて何度もくり返して読んでいます。それは私の日頃えがいてるイメージと寸分も違わぬものですから読んでいるうちに小生もこの様な素晴らしい女性から責め虐められたらと思うと、とてもたまらない気持ちになります。でも小生は馬場氏に比べると幾分恵まれた境遇に居ると思ひます。それは小生には俗にいうグラマー女性、それもサド傾向の多分にある女性と最近知合になつた事と、少年期の頃、年上の女性より一回と、二三年前のウェイトレスから一回、被虐の経験があることです。この二回の体験記は二カ月前前に投稿し、滝、四馬、杉原三先生に挿画をお願いしたのですが都合が悪くて作成出来ないとの

◎写真特写引受◎
特別に変わった着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下さいれば費用其の他についてお返事いたします。
(返信料同封下さい)

ことで取材していただけませんでした。同志馬場好男氏よ、今後更に熱烈奔放なイメージをドシドシぶつ放されんことを期待してみません。最後に奇巧にお願いしたい事は奇巧今後の発刊号にサド女性、男性マゾを取材した記事なり小説なりイメージなりをドシドシ掲載していただきます様伏して御願ひする次第です。尚、既に奇巧臨時増刊号としてサド特集号限定版が発行されている様ですが何故マゾ特集号は発行されないのですか、我々マゾヒストのため是非ともサド女性対マゾ女性の盛り沢山な内容充実したマゾ特集号限定版を一日も早く発行していただきます様併せてお願い致します。
(米子馬曾漢)
△編集部より▽
春日ルミ女史は健在です。本誌四月号の口絵「緊縛プレイの或る断面」で四頁に亘つて発表しました通り、女性モデルを対象としたものや其の他本誌愛読者の男性モデルを相手としたものも特写依頼の分は極めて多数撮影し、益々の円熟ぶりを発揮

しております。尙マゾ記事については本誌は日本国中で最も理解を示していると思います。毎月必ず掲載しておりますし、又その量に於ても第一番であることを自負しております。他の雑誌を比較さればわかることです。近々、マゾ関係の分譲品を発売いたしますが、申込者が多いようでしたら資料は揃っていますからマゾ特集号も企画したいつもりです。

○早速東様のお目にとめて頂けましてありがとうございます。大層御無沙汰いたしました。お許し下さいませ。ところで入院のために今まで長い間沈黙して居りましたので東様や近藤様などのおなつかしいお名前の方々も、もう姿を消しておいでかと思つて居りました。入院後間もなく私は腹膜炎の再発

のために重態に陥つてしまいました。たが、これは実に残酷な責以上の責であると思ひました。僅かの間に私の向いの室で五人もの若い女性が亡くなりましたが、その呻吟声はどんな責場よりも暗く哀しいものに聞えました。男子病棟の若くて美しい人が(と言つた方が好きですが若い事は事実)世をはかなんで裏山の尼寺の松の枝で首をくくつて亡くなりました。刑期中の人であつたという事です。そのような亡くなり方をした人だから惹かれるのか判りませんが、私は最近、兄の友人が持つて来たテープ・レコーダーで責の場面を聴きました。もつとも此れは劇を録音したものです。何とも言えない胸のしめつけられるような圧迫を感じて実のところ少し蒼くなりました。音で聴くのはどうも苦しい過ぎます。私は青葉さんのフアン

なのでお作品が拝見したいものです。(北原純子)

○

三隅千恵子様、ほんとに失礼致しましたわ。私うっかりしてKK正月号を最近まで読んでいたなかつたのです。から貴女の「長瀬昭子様へ挑戦します」にも御返事すら差上げず申訳もございけません。でも貴女の御投稿を拝見した時には、びっくりも致しましたけれど嬉しくて嬉しくてなりませんでした。わだつて見ず識らずの女性から、腕づくでの挑戦をされたのは貴女が生れて初めてですもの、全く光栄で胸の中がドキドキしています。それに貴女のお嗜みは、不思議な位、私のそれと完全に一致しています。私のね、貴女の御意見通り美人で非力な同性を力づくで捻じ倒し馬乗りに跨つて、ぐいぐい押え込む時の云い様もない快感は経験した者でなくては分りませんわ、でも誰にも知られない様にしないで、はなりませんので不便で仕方がありません。何うしてもっと大びら

絹川文代緊縛姿態新作集

大手札判(9×13) 印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手 略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

女体『切腹風景十二態』

モデル

大塚啓子嬢

略号(せふ)

(9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

女体『浣腸風景十二態』

モデル

大塚啓子嬢

略号(ちふ)

(9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

に行うことが出来ないかしらと残念ですわ、例えば会社やオフィスのお昼休み等にビジネスガール連がバレエボールやピンポンやバドミントンに興じているのと同じ様に、気の合った女性同志がレスリングどつこで取り組み合ひをしても悪いことではないと思ひますのよ。そんなことが出来たら、何んなに楽しいでしょうね、そうなれば私はきつと昼食もそこそこに毎日一人ずつ組み敷いて時間が来るまで絶対に起しはしませんわ、仰向けに押し伏せて首の上にづつじりと跨り相手の顔を太ももの間にはさ

み込んで、じりじりつと肢で喉を絞めながら、二十分でも三十分でも心ゆくまで楽しむのです。友人が数人見かけて立ちどまり「あらあら、×子さん、昭子さんに負かされてるわ」「まあ、矢張り昭子さん、お強いわね」「×子さん、首絞められて苦しそうだわ」等と云い乍ら、面白そうに眺めています。時には男の方も目をとめて「×子さん、がんばって跳ね返すんだよ」「昭子さん、構わないからもっと苦しめておやり」等と勝手な声援を送ったりしながら、ニヤニヤと笑っています。そうなれば私だって随分張り合いがあるでしょうね。勿論毎日バンテイは極く薄い絹製を用い、友人が見ている様な時を見はからって、組み敷いた女性の顔の上にべたっとお尻をのせて馬乗りに跨って口と鼻を呼吸も出来ない様にびったりとふさいでやりますわ。その点、貴女は全く貴重ですわ、でも、私に挑戦なさいますのは些か厚顔しすぎますわね。何故って、私は貴女の「変ないたずら」や読者通信を興味を以て拝見していますけれど、貴女はまだ一度も実際に女性を組み敷いた経験はおありでないのでしょうか。唯、頭の中で空想をめぐ

らして「美しい泰子さんを負かしたら、さぞ素晴らしいこと」と思いになっていた、泰子さんにあんな手紙をお出しになっただけじゃないかしら、如何？図星でしょう？、ですから、貴女が御発表になった挑戦状にしても、貴女が私とお会いになる機会等無いという安心感からあんな思い切った、まるで私が人形か何かのように自由自在に打つの蹴るの、投げ飛ばすの、はては寝技で押え込んで顔の上に跨るのと、得手勝手なことが書けたのではないかと、私は思っていますわ、ですから、貴女の挑戦状通りに本当に二人の争覇戦が行われることにでもなれば、私は決して逃げもかくれも致しませんけれど今度には貴女の方がコソコソ逃げ出す以外に方法がないのではないかしら。だって体格の点では貴女は私より幾分優って居られる様ですが、一度も御経験のない貴女と今までに二十人位は友人を征服して来た百戦錬磨（少し大げさでしょうか）の私とでは、てんで問題になりません。若し万一、私の意見が間違っていると相思召したら論より証拠、KKに主催して頂いて、試合を行いまししょうよ。今更私にわびるのが恥しいと思います

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦慮雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

したら、試合に出て頂きたいもの
ですわ、其の時には絶対に情容赦
は致しません故、後でお怒りにな
らない様先にお願ひしておきます
でも貴女が私に先に挑戦なすった
のですから、それも致し方ありま
せんわね。私はKKの写真班と観
戦者の眼の前で貴女を息の根もと
まる程、ぎゆうぎゆう苦しめて差
上げましょう。其の時に成って、
いくら貴女が泣いて喚いても間に
合いませんわ、私はそれでも貴女
と違つてボクシングの様になぐつ
たり足で蹴るのはあまり好みませ
んから行いませんけれど、柔道や
レスリングの様な寝業が何より大
好きですので徹底的に寝業で争う
ことに致しましょう。貴女は「暴
力娘」つて云う映画御らんになり
ましたかしら？あの中で柔道の万
里昌代さんと、唐手の左京路子さ
んが、キャバレーですさまじい一
騎打ちを演ずるシーンがありまし
たわね。それも寝業になつて太
ももの付け根まであらわにして、
上になり下になり、どたんばたん
もみ合う場面でしたが、私だつて
あんなこと位朝飯前ですよ。そ
うなれば美しい泰子さんの顔をお
尻に下敷く等と散々いやがらせを
なさった貴女が、今度は逆にお顔

を私のお尻に敷きつぶされて息も
たえだえに遂にノビてしまふでし
よう。そんなことをお考えになれ
ば、早く今の中に、あっさりお謝
りになつた方が無難ですわ。貴女
は私などに挑戦なさるよりも、早
く泰子さんを馬乗り組み敷く工
夫をなさつた方が余程ましだと思
います。唯空想ばかりなすつて、
手紙をお出しになるだけでは、貴
女だつてきつと物足りないでしょ
う。でも初めてだつたら恥しいと
か、こわいとかお感じになるでし
ようけれど、丁度高い所から目を
つぶつて飛び下りる様なお気持ちで
一度実験をなされば案外案ずるよ
り生むは易しと云いますから、び
くびくする程のことはありません
のよ。是非近い内に断行なすつて
其の時のお話をうけたまわりたい
ものです。女は腕づくでなら意外
に弱虫なのですから仰向けに捻じ
伏せて首の上にとっしりと跨り顔
をきつちり挟み込んでさえしまえ
ば、もうこつちのものですよ、い
くらじたばたもがかれても絶対に
挑ね反される心配はありません。
でも顔の上にお尻をのせて馬乗り
になるのは或程度相手が抵抗をな
くしてからでないと必死になつて
すり抜けられることがありますの

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第厳重包装の上急送申
し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

で御注意下さいませね。私も女が
女を屈伏させるには、何といつて
も顔の上に跨つてお尻で相手の口
と鼻を思いきり敷きつぶすのが最
良の方法だと思つています。普段
はいくら美人ですと、すましてい
ても、チャカチャカしたおてんば
娘でも、私が一度この方法でやつ
つけさえすれば、全部が全部完全
に征服されて、それから私は頭に
が上らなくなるのですもの、ほん
とに悪い気はしませんわ。私も最

初の内は、そんなあられもないこ
とをするのが恥しくて何うしてや
めようかと随分悩みましたけれど
次々と同じ趣味の友人があること
を知つて、とても心強く、もう今
では女性を組み敷くことをやめよ
うとは思いません。そのために未
だに結婚出来ないでいるのでしよ
うか、あまりのんきすぎてオール
ド・ミスになつてはと、些か心配
もしていますわ、でも、白木近子
様、戸岐貞子様、山田百合枝様、

三木恵子様、それに貴女、心から感謝しております。では、御機嫌よう。さようなら。(長瀬昭子より)

○ 最近の本誌についてペンを取らせて戴きます。最近の本誌の挿絵が口絵以上に素晴らしい出来栄の作品が多く十分楽しめますが、挿絵画家の名前が書いてありませんが、一体どういうわけなのでしょう。うか、大部分の挿絵は滝れい子氏が担当しておられる様ですが、他誌等を見ても挿絵画家の名前は殆んど書いてあるのですからKK誌もその様に出来たら実行して欲しいものです。次に口絵の映画スチールに就いて、一言、小生はあの映画スチールは毎回感心出来ません。やはり写真等は本誌の独壇場であり、それに匹敵する程の映画スチール等は今迄拝見した事がありません。しかし、何等感心するところがないというわけではありませぬ。ということは、そこは何と云っても女優稼業なのです。編集部でも映画スチールに就いては充分気をつけて、あまり不鮮明な写真等は掲載されない様に御願い致します。最近の目次カットは毎

回、楽しめませんが、四月号の目次カットだけはどうも感心出来ません。近藤一氏の毎月の巻頭の「お仕置をめぐる一考察」楽しく読ませて頂いて居りますが、既に二回も連続されたのに上下のカットは毎回同じですが、どういうわけなのでしょう。うか、何とか考慮して変ったカットの掲載を望む次第です。藤木仙治氏の「乳房に火をつけるな」のあの様な挿絵(写真)も面白いのですが、少々不鮮明すぎます。以前に氏の作品、絵物語「お加代源三郎旅日記」が掲載されましたが、あれなど実に素晴らしいものであんな様な絵物語の掲載を希望します。東町三郎氏の本誌二月号に掲載された、創作「妖婦の生贄」葉子の折檻の場面の中、乳房責の描写は今尚忘れられません。思い出した折に二月号を取り出しては読んでおきます。あの様な作品を又書いて発表して貰えないでしょうか。毎月の読者通信を読みますと、浣腸に関する記事の発表の要望が多くあります。限られた誌面で多くの傾向の違った読者の趣向を満足させるというは無理とは思いますが、毎月ではなくともよいのですから、浣腸関係の絵画及び記事の掲載を望む次第です。その他

ニユーモデル未発表緊縛フオート集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みい)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 岩井知子
略号 (みは)

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みほ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みと)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 田原美佐子
略号 (みろ)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みに)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みへ)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みち)

炎関係の記事なども前者と同様にお願い致します。尚臨時増刊号に就いてですが予告期日通りに発行されない場合が良くありますが、遅れれば心配しますので予告期日通りの発行をお願い致します。次に八月号に就いて少々述べさせて頂きます。まず表紙ですが、今月号の表紙は今年に入ってからでは

私の一番気に入ったものです。上品な雰囲気のある表紙でした。それに比較して二月号の表紙はあまりに複雑過ぎて表紙には不向きな様ですね。目次カットは素晴らしく、今後この様なカットをお願い致します。扉カット、裏表紙カットはまあまあでした。五月号に第一回が掲載された「王宮の浣腸室」

第二回を楽しみに待っていました。が予定通り立派な出来栄に感心しました。次回が待たれます。三十三年十月号より連載された牧高志氏の「緊縛映画スナック・シリズ」は最後を飾るにふさわしく鮮明でした。三枚の口絵については、滝氏の作品がよかつたと思えます。残念なのは捕われた城主の娘が顔をこちらに向けていずに俯

伏せていたら一層素晴らしいと思いました。如何でしょうか。「運命の少女」の三葉の挿絵も見応えのあるものでした。「謎の緊縛フオート」その二は前回と挿絵の担当が違ふ様ですね。前回の第一頁の様な素晴らしい挿絵がなくて残念です。愛好者の記録(とやま・かづひこ氏)の「佳き日」を読みあんな目についた氏が羨ましい

新作『血紅使用切腹フオート』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

禪美切腹

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

写真 三態

(ハリツケ) 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

モデル 大塚啓子

限りです。三条卓史氏の作品「嫁供養」は氏ならではの読みごたえのあるものでした。三葉の挿絵もそれぞれ素晴らしい、作画両立の難しさを脱した氏の作品には毎回感服致します。「悦特第二集」を拝見してグラビヤ頁の今迄にない素晴らしい感心致しました。特に「未知の驚き」と題した岩井知子嬢の清楚な美しさは、他の追従を許さぬものがあります。今後の活躍を期待します。少々紙質について言わせて貰いますが、昨年発刊されました「青い魔院」の紙質は本誌その他の増刊号等に比較して悪すぎた様に思います。本誌もこの辺で待望の増頁を、と言いたいところですが、編集部の皆様如何でしょうか?

(横浜一愛読者)

○ どうしても筆をとりたくなったのは、三月号の『赤い着物と白い縄』を読んだためです。私は正直の処今迄奇譚クラブなどという雑誌が毎月発行されていることなど

夢にも知りませんでした。仕事の参考書を安く手に入れたらと神田の古本屋を歩いて居りました時、偶然見馴れぬ御誌を発見し、何気なく手にとつてパラパラとめくつてみて、びっくりしました。一度辺りを見廻して、人気がないのを確かめると、今度は気をおちつけてゆっくり頁をくつてみました。段々はげしくなる動悸が自分でもわかりました。この本だけを買う勇気がないので、そばの古雑誌二冊を上に乗せて、「いくらですか?」と聞いた僕の声は多分相当にウワズつていたことでしょう。家に帰って一人きりになると、第一頁からむさぼる様に読み始めました。そして発見したのです。「赤い着物と白い縄」を!!これこそ僕の求めて居た文章です。これは僕自身の書いた文章ではないかとさえ思われました。小さい時から僕も、男と生れたことが口惜しくあんなに美しく色々な色彩のものを肌につけることの出来る女性を、どんなにか羨ましく感じた

ことでしよう。一度でよいから僕も長襦袢を、お腰を、美くしいお太鼓をしめて匂うばかりにお化粧して、頭の前から爪先まで女性になつてみたい！ そうした願望はもの心つく頃からの僕のたつた一つの憧れでした。ここに僕と同じ趣味の人がいる！ その人と僕とが違ふところは、僕はただ想像しあてがれていただけなのに、この人はそれをもう実行に移している！という点です。ああ何と言ったら僕のこの羨望の感情を現わすこ

とが出来てしよう。編集部の方にお願ひ致します。この人（桜井良美さんという方）と文通したいのです。大阪の人なのか九州の人なのか知りませんが、その人の御迷惑にならないアドレスを伺つて下さい。その人から色々教えて頂きたいのです。カツラのつけ方、お白粉の塗り方など、女の兄弟のいない僕には見当もつきません。同好の士というよりは、先輩として、こまかい色々のことを教えて頂きたいのです。でもこういう

緊縛フォト新作発表

大手札型印画紙 焼付
各組三枚一組 二五〇円

聖壇の裸女 略号(けい)

△モデル 絹川文代△

カーテンの翳 略号(けろ)

△モデル 大塚啓子△

艶姿色模様 略号(けは)

△モデル 絹川文代△

浴場の欲情 略号(けに)

△モデル 大塚啓子△

いけにえ 略号(けほ)

△モデル 絹川文代△

のぞき見 略号(けへ)

△モデル 絹川文代△

開股三番勝負 (その一)

△モデル 大塚啓子△

開股三番勝負 (その二)

△モデル 田原美佐子△

開股三番勝負 (その三)

△モデル 愛川悦子△

開股三番勝負 (その四)

△モデル 絹川文代△

う雑誌の記事は、編集部の方々が、デタラメのペンネームで適当に面白く書き上げるのであって実際の投稿原稿ではないということも聞きました。もしそうでしたら僕は勿論あきらめます。でも写真まで添えてあるのだから、と僕の心は一縷の望みをかけてお便りする次第です。もしこの原稿が実在する人の体験記でしたら、御迷惑でない限りアドレスをお教え頂きたいと存じます。心からお願ひ致します。申添えますが、今は全く奇巧の愛読者となつた僕のために、勝手ですが、どうかもっともっと女装の記事をのせて頂けたらうれしいです。(東京 S・R 生)

花坂道子緊縛フォト集

大中判(13×18) 印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号(はな1) 八枚一組 八〇〇円

○股間縛り集 略号(はな2) 八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛り 略号(はな3) 二枚一組 三〇〇円

○股間縛り 略号(はな4) 二枚一組 三〇〇円

の作品集のうち「鼻ゼメ」に関するものを絹川嬢をモデルにして写真にしてみられたら如何でしょう。恐らく大金を投じてでも惜しくない愛好者が沢山に出てくると思います。鼻ブレイ、緊縛フォトの特別会合があれば出席させてほしいと思つています。どうも最近は何の故か投稿する元気を失うほどモノグサになつてしまいました。

(Y・真鍋生)

男性マゾの一見すべき映画を御紹介します。大映「汜濫」の中の映写時間開始後一時間二十分位の処で、船越英二が四ツ這いで馬に

されて三宅和子がネグリジエ姿で豊満な太股も露わにドッカと跨がり部屋の中を一周半位歩かせるシーンがある。男が途中で「もういいだろう」と言うのを彼女は「ダメダメなまけちやー、さ、ハイシハイシ！」と男の尻を叩きながら乗り廻す。カメラの角度画面の構成など不満はあるけれども、相当タツプリと女性の馬にされる快感を味わえる。その間客客があり中断され客が降り際に直ぐ又男が四ツ這いになり、彼女が、「さ、あと七回よ！」と命令するのだが、画面はその時部屋の外から写しており、彼女が跨る処で写らぬ中にドアが閉ってしまう。残念だが、又、それが余計に私のマゾを空想的に刺激したものである。次に新東宝「暴力娘」柔道初段のグラマ―として有名な万里昌代が活躍する。然し男性相手に投げとばす場面は道場での稽古と最後の活劇シーンだけ、それも彼女が男を組み敷いて寝技に入りグイグイ抑えつけるというような処はなく、ただ男を次々に投げ飛ばすだけなので余り魅力的なものではないし、又相手の空手女性との対決では寝技に入って胴絞めで攻めつけ相手がのがれようともがき、そのまま俯

伏せになるので恰度四ツ這いになった相手に万里が背中に跨った形になる処などあるが、やはり女同志ではそれ程の感激も味えず、そのような場面より、悪党のボスの空手女性が手下の男達に「あの男をつかまえて縛っておしまい、あとでウンと痛い目にあわせてやるから——」と命令するシーン（残念ながら悪党の側が敗退してこの拷問場面は見られぬ（悪党側のスパイとして色事師の男が万里に近寄るが、彼女がそれを見抜いて「あの男を私の足下にひれ伏させてやる」と独語する場面、その独語通りソファアに腰掛けている彼女の前の床に彼が正坐して二度二度両手をつき額を床に擦りつけるまでにして土下座して降伏を誓う場面が素晴らしい。その時彼女が「降伏の誓のしるしを見せなけりやダメよ」と言うので、「あたしの足に接吻しなさい」とか「あたしの馬におなり」とか言うのを期待したのだが、単に逆スパイになることを要求するだけで、その期待は空しかった。土下座する男の眼の前に彼女の脚が美しく写る。序でながら誰か次の映画を見た人はいないだろうか、創造プロの作品で二年近く前、雑誌「プロレス」で

紹介されたので上映されるのを心待ちにしていたのだが、遂に今に至るまで上映されないらしい。題名は確か「真夜の決闘」というようなもの。ギャング団が何かのいきさつで女子プロレス選手の宿舎を襲う。「プロレス」誌上にはプロレスの佐々木嬢が川辺で悪漢に襲われて逆に男を川の中に投げ込んでいる処。室内の乱闘で彼女がギャングの一人の襟元をグイと掴んで壁に押しつけて圧倒している処。更にギャングの首領を佐々木嬢が戸外の取っ組み合いで完全に組み敷き俯伏せの男の背中に彼女

が馬乗りになり跨って捻じ伏せ、而も男の脚を逆取って「さ、降参するか、それとも脚をへし折られたいか」ときめつけるシーン。プロレスの彼女達に散々に痛めつけられ叩きのめされて彼女達の足下に伏して降参するギャング団の連中とこのような幾齣かのシーンが紹介されておったので我々男性マゾにとっては又と得難い嬉しい映画と云って待望していたのでした。何かの関係で御存知の方があれば御紹介頂きたいと奇クとしても御尽力頂きたいと思えます。（横浜 姫馬痴人）

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

- | | | | |
|------|--------|------|-----------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | ES6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 三枚一組 | 二五〇円 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES2 | 全裸悦集 | ES7 | 剥れたスロース |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 四枚一組 | 三〇〇円 | 五枚一組 | 三五〇円 |
| ES3 | 羞 | ES8 | 乙女のすべて |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| 三枚一組 | 二五〇円 | 七枚一組 | 四五〇円 |
| ES4 | 酒宴の弄者 | ES9 | 女学生の縛り |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 須川 令子嬢 |
| 二枚一組 | 二〇〇円 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES5 | 脱がされる娘 | ES10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 五枚一組 | 三五〇円 | 六枚一組 | 四〇〇円 |

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

○ 本年は空梅雨なのか梅雨の最中というのに毎日暑い炎天つづきの日が続きます。皆さまお元気ですか、毎月の普通号は勿論のこと、時折ヒットされる特集号をこよなきものと愛読しております。小生は根っからの縛りマニアにて物心ついた頃より古本屋漁りをして気に入った雑誌や本を集めました。そんな本が書斎一杯になったこともありましたが、小生が応召して戦後帰ってみると疎開や戦後のドサクサに売り払われて見るかげもない有様になっていました。その頃のことを考えてみますと、現在は幸福な時代で居ながらにして勞せずして自分好みの本や雑誌を手に入れることが出来ます。女性の肌の露出されることの多い夏が再び訪れてきましたが、縛り趣味の外に小生の一つの狙いは、若い女性の足に特に関心のあることです。足といっても脛、それもダンサーのようなスラリとした細い脛ではなく、いわゆる大根足と称する太

い足が好きなのです。二十才前後のむっくり肥った逞ましい脛を見ると、思わずぞくぞくとするものです。以前に宝塚二三夫氏が本誌上で女性の足に対しての関心をよく書いておられ、小生と大変よく似た性癖の持主のように見受けましたが、幾分違っているところもあるようです。氏は小生より少し年令的に上の方のようですが、一度話し合ってみたいものだと思います。他にも小生の太い脛に対して強い関心を持つておられる方がおられましたら、誌上にてお呼びかけ下さい。小生自身撮影した相当数の写真も持っておりますのでお見せしたいと思えます。又、号数、題名など失念しましたが、以前の本誌に女性の二の腕に魅せられるというような記事のあったことを記憶します。その後、余りそういつた記事は見受けませんが、実は小生、女性の足の次に腕、それも二の腕が好きなので、縛りの際も専ら二の腕を中心に行っているような次第です。写真撮影に際し

ての面白い話やその他いろいろの体験もありますから一度告白文を書いてみたいのですが、只今仕事の方が忙しいので、いずれ暇になり次第書いてお送りしたいと思えます。(大阪 山川生)

○ 八月号の近藤一氏の「痛感と女性について」を拝見、氏のいわれるように「女の体はみがけば幾らでも輝き、かみしめる程に味が出る……」とございましたが、これは小生が今さら申上げるまでもなく、全くその通りでございます。う。一体、女はしばられる事に依って「美」が作られる……本能的な男女の結びつきでしようが、いつの世代になっても、やはり女は「苦痛を味うもの」と申上げてても決して過言ではありませんまい。や

わらかい女の身体にナワのかけ方苦痛の表情との調和、氏は鋭く指摘されておられ、小生も誠に同感、いやはや、うれしく拝読致しました。この意味に於て、映画「大盗小盗」は小生も見ましたが、牧氏のいわれるように、苦痛表情がなく、しばられる女優が良い女だけに惜しい作品でした。本文の海野繁朗氏の「地獄の美女」シナリオは白雪が捕われて柳沢の屋敷にサングツワを固くかまされて転されておられ、しばられてもだえ苦しむ女の最大のピンチ、男が女を自由に出来るこの時代を、うらやましく思うとともに、今も昔も変りない本能が強く鋭く描かれており、小生大いに満足です。だが、どうも、こういうのは決してラストに助け船が登場、助けてしまう

甲斐仁参案 「涙のダイヤモンド」

略号(なみ)

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

甲斐仁参案 「涙のダイヤモンド」

略号(かん)

大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○伸し責 ○苦悶のコルセット ○浣腸責

のは惜しい。小生は悪趣味かも知れませんが、しばらくは女が幾度も責められるピンチを望みたい、といつも思うのですが、無理かな……。次に「続・運命の少女」も大いに満足です。女が自動車で誘拐され、所も知らない地下室に連れ込まれ、悲しい、女の美、を作ります。シーンに頂きます。これは小生の空想的なサジズムを展覧させるのに恰好の作品で、小生は空想の中では、こういう風に女を捕

えて自由に責め上げてみたい。実際には絶対にすることの出来ない事柄であるだけに、こういった連想をして「自分もしてみたいものだ」という気持ちを小説の上で満足させることが出来るわけです。ラスト藤木仙治氏の「羞恥のワナ」は、前回に次いで、ますます面白味が出て参りました。美佐が捕まり、美しい、女の苦しみを見せられます。次回が待たれてなりません。以上、本文を熟読致して

思うままペンをとりました。口絵写真につきまして一言、絹川文代氏の「縄と紐」は小生好みの姿でないせいもありますが、どうも「ナワのかけ方」が不十分のように思います。誰かが本文中に言っている居られた様に、この人はもっと苦痛の表情が出る人であり、肉体もビカーです。もう少し「ナワのかけ方」を強く厳しくされてはどうでしょう。即ち、ぐるぐると胸一ぱいに乳房の上と下を、ぎっ

ちりとしばって頂くのです。この人はぐるぐる巻がよいと思っております。それと、黒の着物の調和をつけるために、白のズロースを出してほしかった、と存じております。今後とも、このモデル嬢はしっかりとして頂きたいものです。サルグツワは大変感じが出ているのでよろしい。それから前回も「ナワのかけ方」がどうして、どこやどこやしているのでしょうか

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組五十集 大名刺判 (9×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

Y1	全裸荷造縛しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
一組一枚	八〇円	
五組五枚	三〇〇円	
十組十枚	五五〇円	
二十組二十枚	一〇〇〇円	
三十組三十枚	一四〇〇円	
四十組四十枚	一七五〇円	
五十組五十枚	二〇〇〇円	

Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団責裸またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)

Y19	全裸全身裸自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	遅まきヒツパ	(愛川悦子)
Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強列股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)

Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強列第手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハタ力縛り人形	(絹川文代)
Y42	濃艶ハタ力縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台難恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)

か？この人も美貌で肉体もすばらしいのですから、もつと大胆に乳房の上一ぱい四重巻ぐらいにして、ぐるぐる巻にしたらいと思ふのですが……もつとも、これは小生の好みです。首ナワも余り好みません。この点申上げておきます。さて、くだくだと申上げてみましたが、総体的にみまして、クラブも満足感が以前（復刊直後）より増え、誌面も美しくなってきました。今後とも良い誌面を飾られるように切に念じております。（名古屋 岩谷栄二郎）

藤山秀緒さんに——八月号誌上で貴女の文章を拝見して取るものも取り敢えずペンをとりました。実は貴女が男性であると思つていました。それは乗馬ズボンと長靴の他に切腹が必須の要素として必ず含まれていたからです。ところが今月の貴文はその謎を明快に解決してくれました。少くとも私にとっては。私自身は旧号誌上で何度か書いた様に馬化狂です。いやむしろ、長靴愛好者といった方が当たっています。特に私はハイヒールの軟い長靴をはいた背の高い女性に對した時、全く無力であるこ

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

愛川悦子嬢の巻
大手札型（9×13センチ）印画紙焼付

☆ベッド変型縛り（略号1）

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り（略号2）

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り（略号3）

（略号3）

☆全裸縛り（略号4）

五枚一組 三〇〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り（略号5）

五枚一組 三〇〇円

☆股間しばり（略号6）

四枚一組 三〇〇円

とを感じます。通常の乗馬服でさえも美しい女性でさえあれば、私にとつて、それは絶対的な存在となるのです。従つて私は私風に簡単にマゾヒズムと長靴愛好癖をくつつけて考えていました。ところが貴女にとつて長靴は少くとも攻撃的なものでなく、むしろ受身的な存在であることが判りました。私が「異性のはいている」長靴、又は「異性によつてはかれるであろうと予想される」長靴に昂奮するのに反して、貴女は「長靴」をはかされる運命におかれた自身を

感じることによつてマゾヒズムを満足せられる様です。そういわれしてみれば私にも経験があります。私は貴女と同様な被虐的な意味で長靴を愛したことがあります。私は社会的に全裸になり得る唯一の機会「風呂」を利用しました。私は風呂の中へ革の長靴をはいて入りました。その悪習のために長靴（それは昭和十八年頃では貴重品でした）を損うとを恐れて、風呂場に長靴を幾つも並べて悦楽の時をすごしました。又級友と馬場に行つて相互に楽しみました。

そのころ私は特に馬に對して虐待することをおもひました。それは自分自身の性の反転を無意識に行つていたからであると思われまふ。私は美しい女でした。そして、「男である」即ち自分の分身である馬を思いきり虐めました。拍車を使うとき急激に快感が襲ふこともありました。そして、そのころ、自分が「長靴」を義務的にはかねばならない様な職業につきたいと念願しました。再び意識の反転が行われて「長靴」をはかねばならぬこと自体に快感を持つに至りました。この時機の心理によつて私は貴女の心理を理解出来ました。併し、貴女は必ず私の辿つたと同じ途を進むであろうと思ひます。フェチシズムは複雑化と単純化を繰り返えしながら、深奥に入つてゆきます。現在私は理想の女性、たとえばサーカスの女猛獣使をみることによつてのみ十分に満足を得ることが出来ます。私はサーカスの女王のイリナ・ブルジョーモヴァが、空中でライオンに跨るシーンで、完全に悦楽を感じました。現在でも私の唯一の希望は西欧女性の猛獣の代りに場末の見世物小屋で猥々やライオンの皮をかぶつて芸をさせられることです。私は

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

- 一、必ず未発表の自作であること。
 一、枚数に制限はありません。
 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

優作 一篇に付 一万円 若干篇
 秀作 一篇に付 五千元 若干篇
 佳作 一篇に付 二千元 若干篇

告白と手記と体験記

私は御誌が大版からA5版に変わった頃からファンの一入です。俗悪な雑誌の多い中で終始、孤高を保ってこられた貴誌に敬意を表します。既に通刊百号を突破する

近く機会を得れば、必ず我国でこれまでに全く見ることの出来なかつた長靴フェチズム(私の場合はキエロットを含みます。但しジョーパーズは含みません)の集成をしたいと思つています。よけいなことまで書きましたが、私の貴女に対する烈しい共感からです。不悪御諒解下さい。(天泥盛英)

という御誌、この世界の唯一の本格的出版物である御誌を文字通り毎号一頁たりとも見落さなかつた私が、心秘かに不満に思つていた一事、それを五月号にて見事に果してくれた作品が志田氏の「総入歯」の女でした。その後、読者の方より何らかの反響があるものと予期しておりましたが、期待に反して共鳴者はなく、そのまま消えて行つて行くのが余りにも残念なので勇気を振ってペンをとりました。この作品中、女主人公が頭髪を刈りとられるくだりを、読者諸氏は如何にお感じになつたでしょうか

しかし小生は昨年末の尼さんブームに乗じて、うかうかと、こんなことを書くのではありません。小生の、この女性に対する、頭髪剃除の夢は遠く十年以上のものです。尼僧は同意の上で剃髪されるのですから、そこには大して我々のサド的意欲をそそるものはありません。しかし遠くは映画「マノレスコー」から近くは「二十四時間の情事」に至るまで、うら若い女性に対する凌辱の手段としての「丸刈り」は終戦前後の欧州で数多く見られたらしいことは、写真集「ちよつとピンぽけ」や例の「夜と霧」「人工地獄」等々によつて容易にうかがい知ることが出来ます。又、御誌でも極くまれには、この種の記事が出ますのに、それでいて一向に大きく取扱われないのは不思議です。逃走防止のためではなく、あらゆる場合の女性に対する加虐の一面面として、頭髪剃除を小説に責め絵に、そして可能なならばかつら使用の悦虐写真におとり上げ下さい。五月号に限って前記作品友び久留木氏の「コント」第二篇でとり上げられていたこの「女性丸坊主」趣味を、このまま立ち消えにしないで下さい豊かな黒髪に対する郷愁を裏返せ

【G】組 緊縛フオート

判紙付	一枚一組	一五〇円
中画付	五枚五組	六〇〇円
大印焼	十枚十組	一〇〇〇円

G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅澄紀子)
G5	羞感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

ば、この強制的に剃り落された女性の青坊主姿に対する征服感、満足感となるはずです。

(大阪 K・O生)

若い読者の一人です。昨年から読んでいますが近頃とみに面白くなくなりました。いわずと知れた「魔教団」の中断です。僕等のグループで人気のあるのは巻頭の口画と「魔教団」に限られていました。切腹とか浣腸とか禪とかは只頁を埋めているにすぎない。それ等の記事は薄暗い何ともいえない

代理部分護品総目録

新人モデル多数
新しく参加

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

不快なものを感じさせるだけで、そんな記事を読む人々が全読者の何割を占めるのかは知る処ではありませんが、僕の考えでは極く少数ではないかと思えます。しかも投稿する読者の殆んどが、そんな趣味を持っており、他の不特定の多数の読者の気持と取り違えられ、恐れがあるのではないでしょう。か。そういう異質の読者を無視する訳には行きませんから、その要求にも答えるとして「魔教園」の続行。又は同作者の新作を直ちに連載されるとよいと考えます。分量のあるサド小説の二本は絶対欠かさないようにして頂きたい。

(大阪 T・H生)

○八月号は、ここ二三カ月不調気味だった表紙がとっても魅力的なボーズの絵に変わり今年に入ってから4月号の表紙と共に一段と光っておられます。ものうげな少女の表情もたまりませんし柔かいスカートの描き方、焼き捨てたラブレター(?)とにかく久しぶりの佳作でした。滝れい子さん、北原純

子さんの口絵も充実しておられます。本文に入って近藤一氏の「黒井チエの青春」が面白く読ませますし四十二頁の挿絵も悪くないです。何か物足りませんでした。上級生たちの表情が余りにも意地が悪い顔つきであった故でしょう。藤山秀緒氏の「男装女腹切と私」を拝見して早くから母親が亡くなられた苦難の途を歩いて来られた男まさりの努力は人一倍であったことと思えます。某誌にも腹切り談を書いておられますが、そのシャープな才能には目を見はるものがあります。貴方の作品はたしか挿絵に左右されるものがあります。某誌の様に全然挿絵もなしでは物足りないと思えます。次に海野繁朗氏の「地獄の美女」こういった時代物も毎月一篇のみでは物足りません。あと二三編は欲しいものです。とにかく歯切れがよく面白く読ませるコツをつかんでおられます。最後に、桜恵之助氏の「女装願望告白」には全く同感です。自分一人だけではないのだと自信を深めました。

(東 一郎)

編集後記

○毎月一回の発行では物足りないのでも月に三回乃至四回出して欲しいとか、特集号を月一回出せとか、或は倍位に増頁せよとかいう希望をよく受けますが、どうしたものでしょうか。たしかに復刊以来、形式も頁数も変りばえなく四十数号を迎えてしましました。表紙を色刷にしたり派手な編集や宣伝で部数を増すというよなやり方もありそうです。

○固定的な読者を相手にした現在の方針に歯がゆく思われる方も大変多いだろうと思います。然し、と角誤解され易い立場にあるだけ、永続性ある月刊誌として存続してゆくには、現在の地味なゆき方が第一番だと考えますが如何。

○本月号で沼正三氏の家畜人ヤブーについての「中絶お詫びの挨拶」でも言及されておりますが、少々ゆき過ぎ位まで神経質に登載原稿の削除に筆を揮つておりますが、日本全体の精神年齢がもう十一年程成長する迄は御辛抱願わなければならぬかと思えます。

○「中絶お詫びの挨拶」では沼氏から中絶の文字を全部「休載」と変えるようにとの連絡がありました。掲載の本文が校了済になっていたもので、ここにその意のあるところを伝えて訂正しておきます。家畜人ヤブーは、いずれ書き

継ぎ下さるそうですから、それまで楽しみに待っています。

○先日、新世界から千日前の映画館街を歩いた折、軒毎にウインドーをのぞいてみてスチールの縛り場面が案外沢山飾られているのに驚きました。増田義彦氏からの通信では、相当量の「映画緊縛場面」のボジを提供して下さるそうです。誌上でゆくり鑑賞できることと思えます。テレビの時代劇でも時折、はっとするような縛り場面に遭遇することがあります。刃物で胸を刺され口から血を吐いて絶命している場面やピストルで射殺されて空を掴んで悶絶しているシーンなどと比較すると、若い女の縛られシーンの方がいくらか美しいかもしれません。

○西部劇のピストルの射ちあい、日本の時代劇におけるチャランバラ。同じ殺し合でもこの方は、殺伐さは少ないのですが、今はやりの犯罪物や刑事物に於ける殺しの惨酷さはどうでしょう。犯罪手口を模倣されるといふ点からも一考を要する事柄かもしれません。但し殺人の出て来ない犯罪物や刑事物の興味が極度に減殺されるのは仕方のないことでしょう。○交通事故の現場写真を陳列してある窓口に蜷集している若い婦人の多いのは一体どういふ心理によるものでしょうか。怖いけれど見たいという気持は女性心理の複雑さを物語っているのでしょうか。